川物語

川柳塔

川柳塔誌寿古希記念句集

序

一九九四年一月号を以て、川柳塔は誌齢八〇〇号の歴史を迎えた。

そのお祝いの一環として、この度、記念句集『川柳塔』第四号を発刊することになった。洵に御同慶の至りである。

第一句集は『私達』という題で、第二句集は川柳塔と改題してから、十周年を記念して昭和四十九年七月に同人二百五十余人の参加で刊行され、第三句集は川柳塔誌寿還暦記念句集と銘うって、丁度二十周年の昭和五十九年七月、四百六十有余人の参加を得て発刊することが出来た。

この度、路郎語録のもとに、共に研鑽し、共に諷詠に精進した同人・誌友六百六十八人の御参加で以て、第四句集を出版することになった。

第一句集以来、発刊毎に参加者が鰻上りになったことは、誠に欣ばしいことであるが、紙数の関

係上、一人十五句と限定されたことは遺憾ではあるが、句集は体裁より内容であることを銘記し、また各自の豊かなる詩性と独自の個性を発揮されていることを欣ぶものである。

この句集も先の二冊同様、路郎忌の七月発刊となり、先生の霊前にデジケート出来る御縁を深く感銘する次第である。些か無辞を並べて序とする。

平成六年七月

水鶏庵にて

西尾栞

もくじ

序　西尾栞

同人の部……5

一般の部……335

索引……683

あとがき　橘高薫風

八尾市

西尾栞

天平の甍尊し鴟尾浄土

大寺の火点し頃を桜散る

獺祭の片肱枕子規の城

鶏頭の十四五本もあり子規の城

天命を断わって酒中の仙は杜甫の城

弓始め木履の音も春のもの

九月一日の消印がある風の盆

晴れた日の灯台孤高の美しき

文字読まぬ今日一日の不倖せ

歌垣の呼び合う丘の花芒

今年は定年離婚話をもちだそう

野良犬が倉庫の裏をはなれない

潮騒の情け忘れぬ桜貝

赤トンボ村の鍛治屋に音がない

十勇士の一人厠に居るらしい

和歌山市

青枝鉄治

弁解をするから濃ゆくなる疑惑
好きな風受けて風鈴鳴り止まず
左遷地の厚い情けに根を下ろし
腹の底からは笑わぬコメディアン
不正衝くペンは一気に走り出す
反論のチャンスへ動くのど仏
作文に裁かれている父の酒
お隣の無縁さんにも花をあげ
垣根越し煮っころがしが来る絆
数字だけ貰って帰る給料日
家族には見られたくない隠し芸
椅子浅く掛けて切り出す願いごと
一枚のはがき見事な鯛を釣り
へべれけの分まで下戸は払わされ
デッサンのまま少年の恋終わる

米子市

青戸田鶴

茜雲あしたあしたと想うまい
水濁る愚かな事をくり返す
いつになれば無欲になれる雪月花
ひと彩に群れても花は淋しがり
葉桜や宴のあとの身づくろい
緩やかに流れてほしい今の刻
ガラス窓の向うも同じ紙芝居
雑木林の彩私をなごませる
生きている窓だ西陽が射している
首の据わった人形だけに打ちあける
リリアンのほどけるように気がほぐれ
山門についても旅は終らない
終章のノートはやさしさで溢れ
何もかも遠ざかりゆく花いちもんめ
眠っていると亡母が出てくるので眠る

高知県

赤川菊野

幕のない舞台をひとりで舞い続け
一筋に生きる女に火のドラマ

孤の部屋で柩の寝心地など思う
これで好いのかこれでよいのか桜散る

人間をやめたい日あり桜桃忌
ふる里の森に置いてあるロマン

千羽目の鶴に見事に裏切られ
人形に金襴緞子重たかろ

生涯を雑用だけで終わるのか
二十一世紀のぞく眼鏡を丸くふく

ふところ手　男の美学　竜馬像
一人では淋し過ぎます遠花火

ハチキンへ女竜馬の名をもらう
見掛とは別にクールでナイーブで

逆境に立つと闘志のわく女

西宮市

秋元てる

幸せは自分の色で織り続け
木洩れ陽が性に合うのか苔の色
来てほしい老いの役立つ日も偶に
ボケたかと平気で笑う仲のよさ
友達が美人でわたしようもてる
泣き顔は似合わぬ相に生んでくれ
私は天才悲しみの忘れ方
鬼ごっこ鬼の首筋から暮れる
悪役は皆引き受けて長女なり
ほんとうは逃げる気のない街の鳩
贈り主はどなた静かにぼたん雪
勿忘草　藍微塵とは達治の詩
コーヒーは冷えて一人は汽車に乗る
届かない祈りも母の生きる糧
りんごむく一人に競うこともなし

高石市

浅野房子

新しい眼鏡で君を捕まえる
運命のせいにしている罪と罰
草を抜く麦わら帽と陽にとける
愛憎のドラマを終えて眠る墓
二者択一迫られている喉仏
過去は過去　明日へ翔びたい竹とんぼ
パレットで仲良くとける朱と緑
達筆の手紙へ返事出しそびれ
行列の屋台へわけもなく並ぶ
フロントガラス二人の行方知っている
ワイシャツの胸に納めている自信
建てたのは隣　騒音だけ貰う
蛙の子　親より広い海に出る
崖っぷちで踏みとどまっている命
近頃のとしよりは寺参りをしない

米子市　新　正子

わたくしを愛してほしい通せんぼ
二人なら夢のしっぽに手が届く
ひざ枕　妻は太めの方が良い
幸せで指輪抜けなくなりました
おいしくて妻に半分食べ残す
初物の風邪もあなたへ差し上げる
先に死ぬ妻がこの頃いじめます
父ちゃんがいるから強い妻でいる
みそ汁がおいしい妻につながれる
水虫を譲ってくれた好きな人
化けて出る妻がうれしい事を言う
父ちゃんのあばら骨から成る私
半分は僕が作った妻の錆
大切にしようハンコとお父ちゃん
妻は私を私は妻を刻んでいる

富士宮市

渥美弧秀

賀状どさり絆を想う三ヶ日
夕陽浴び孫と歌ったわらべ歌
孫台風去って二人に静かな夜
ＦＭが心に沁みる独り酒
詩とピアノ愛し残り日温める
寝たきりの友が握手を離さない
逆境の友慰めた一行詩
回復へ晩酌がつく生きてるぞ
言い合って又寄り添って夫婦きり
晩年を趣味に炎えてる老夫婦
変化する富士を話題に妻とお茶
諍いの心が溶ける茜富士
寝転ぶと富士の蒼さに吸い込まれ
視野一ぱい富士が離れぬ万歩計
刻も水も流れぬ中の命哉

十和田市　阿部　進

二代目のボスが小粒で頼りない
のんびりとしてる暇ない趣味多彩
二の足を踏んでる中に倖せが逃げ
立ちあがるきっかけくれた師の言葉
両の手に土産いっぱい父帰る
欲しいもの買った積りで小金ため
言いたいこと何んでも言える無位無冠
子にかけたでかい期待がしぼみ出し
巣立たせてやっと心にゆとりでき
精いっぱい生きた証はすわりだこ
かばい合いゆっくりのぼる夫婦坂
先祖との絆たちきる農を捨て
親ばなれした娘が投げる変化球
喋るのに長けて聞く耳持ってない
職場では歓迎しない天下り

泉佐野市

阿萬萬的

僕の血は雑種で妥協癖がある
老骨のネジの弛みを締める妻
金儲けは下手凹凸のない暮し
不器用なばかりに熱が湧いて来ず
過去の道つなげば回り道ばかり
夫婦独楽此頃腰が痛みます
住み馴れて妻にも役がつく団地
弁解はいいよと妻の眼が笑う
残ってた覇気を老妻危なかり
自画自賛を妻が鋭い批評する
物忘れ互いに笑う老夫婦
薬害の本を夫婦で読んで見る
色気ない姿で老妻爪をつむ
だんだんと上手に呆ける妻となり
相性もまあまあで来た五十年

豊中市

安藤寿美子

歴史どう変って来ても初日の出

風変る石はそ知らぬ顔でいる

木枯しは悲しい人の群れに吹く

ストレスをスパイスにして生きてます

露天湯で生国などを名乗り合い

南溟の血汐の色の夕焼け空

マニュアルへ老眼鏡やルーペやと

岩不動　潮の満干にかかわらず

マニアにもコレクターにもなりきれず

紫外線カットの日傘原爆忌

賞罰ナシこころ静かに死ねるだろ

止まってる時計の下で待っている

くらがりで思い出せない合言葉

新刊書こころ豊かな灯をともす

古稀たのし荷物だんだん軽うなる

美禰市　安平次　弘道

残ったのはロボットだった消去法
秒針の早さ余命を考える
未知数に賭けるやっぱり子に賭ける
眼の位置を下げると情にもろくなる
買い言葉　男の意地が安っぽい
見栄少し問わず語りが長くなる
とても腹が立つから聖書読み直す
彩のない風が都会の恥部にふれ
自画自賛　詩人のペンは折れ易し
因果応報　少し届かぬ縄梯子
蟻の列その一匹は僕だろう
正解なしわが人生をよしとする
日々好日　金の話は止し給え
針千本おんなにジョーク通じない
狂い咲き神にシナリオ確かめる

香川県

池内かおり

食べ物の夢ばかり見た飢餓がある
運転をして女房の供をする
ベランダで煙吐いてる男の座
救急車が今立ち去ったらしい気配
文面に他人行儀な娘のかしこ
風上に置けない人の袖も引く
骨抜きにされたか返事に角が無い
酒の燗　夫はとても上手です
味噌汁の匂に起きて来る気配
スイッチを忘れて今朝の飯が無い
ソウメンの束が解けぬに湯がタギル
老木が花いっぱいの意地を見せ
台風の気ママが地図を塗り替える
肩書の歩幅に合わす酒の酔い
番組に合わせてヌルイ湯につかる

和歌山市

池永正雄

鳶職は超高層で日向ぼこ
お目出度い出番となった薬ゆび
引力の小さな世界　砂時計
平凡な日々がいたずらさせたがる
一生をスペアで終る鍵もある
三本の矢の一本が強過ぎる
松茸を焼くので窓をちょっと開け
神様に聞こえますかと砂利を踏む
秋風にそっと自分史めくられる
軍歌集もう青春はかえらない
ゆかた着て城に登れる有難さ
苦いのがよく効くものと思わされ
この国は蟻から見ても甘過ぎる
ライバルも同じ薬を飲んでいる
逃げるよりひる寝選んだ籠の鳥

鳥取県

石尾かつ乃

郷愁を誘うテレビの花便り
桜咲く人の心を知るように
六十歳のスタート若葉マーク貼る
名門の帽子手にしてからのこと
孫の画く未来の町へ連れ出され
平均を出して人並みだと思い
算数が解けて嬉しいランドセル
迎え火を焚いて昭和の傷痛む
ハンカチを洗う昨日のあの涙
失敗談きいて自信が湧きました
寝ころんでも答が出ないから動く
声届くところ子の部屋孫の部屋
手に負えぬ孫が野の花摘んでくる
落葉掃く誰か訪ねる予感する
穏やかな風を待ちます風媒花

下関市　石川侃流洞

敗者復活　聊か年をとり過ぎた
年金の暮らしへ耳が遠くなる
バンザイの背中はみんな隙だらけ
ポケットがあるから耐えている拳
火消壺一気に燃える夢を抱く
蟷螂の斧ふりあげて声の欄
好きだから少しじらして見たくなる
見返してやる気ゆっくり手を洗う
秋灯下妻もルーペで読み耽る
やることはやったと影に言い聞かす
燃える血を入れたら余命もちません
大船に乗ると世情に甘くなる
紙コップ固い話はやめとこう
言いたいこと言うてしもうた寒い風
仕合わせを一家で掬う鍋の湯気

米子市

石垣花子

赤い服買ってジャンプして見るか
欲捨ててからの眼鏡は曇らない
明日から私が門をあける役
女でも吊橋くらいゆすれます
昔　昔　子供育てたことがある
一度でも打たれる釘になって見たい
溺れ死にしない深さで泳いでる
手塩に掛けた此の樹に斧は打ち込めぬ
稜線を越えて一度も文は来ぬ
侮どった風邪に残り火吹き消され
消えかかる火を消すまいとする絆
いい顔は別れの顔と気がつかず
シベリヤの心の傷は持って逝き
花咲けば咲いたで偲び散れば又
割れ鍋のとじ蓋だけが残された

出雲市

石倉芙佐子

菜の花に軽い情けの文がつく
たんぽぽの綿毛も遠く親ばなれ
遠い娘に心通わす花筏
いい人も月も泣かして船が出る
あれは幻螢になって逢いに来る
花芒逆さ睫毛が痛みだす
落ちこぼれの妻に陽炎燃えている
ゆらゆらと本の悪女は糸を吐く
橋いくつ渡れば逢える雪女
阿国舞　昔を今にほうれやほい
女はもう千人針などさしはせぬ
老いぬれば鬼が島でも日向ぼこ
水仙花　妻という名の人を連れ
千里はなれた祭の笛は耳の底
水の鳥火の鳥も飼い生きてゆく

鳥取県

石谷美恵子

花屋から穏やかな顔取り戻す
もう逢えぬひとが砂丘の点になる
熱冷まし効いておんなが巣へもどる
亡母に似た雲が動こうともしない
海の絵に迷わず父の船を描く
苦の種子も蒔いて孝行しています
朝寝して天地の声を聞き洩らす
ほおずきの赤童心にかえらせる
草むしる怒りが少しずつ和む
スマートな頃を信じてもらえない
どの子にも特効薬を母はもつ
あこがれた海に悲しみあり過ぎる
おもちゃ箱外科医呼びたいものが増え
翔べ飛べと子へ七色の風おくる
風待ちの港やさしく船を抱く

竹原市

石原淑子

泪ポロポロ北風さんのいじわる
積む雪やメルヘンの国芋囲い
ひっそりとあなたを待ってる寒椿
落椿ふりかえるくせもうやめた
水仙の静かな熱いメッセージ
運を天に任せたはずの胃の痛み
子離れて夫と私の彩を選る
好きなことといっぱいして欲し夫の靴
順風も逆風も佳し銀婚よ
恋人のような夫婦でいたいのに
折り鶴の翔ぶ日信じて折る少女
ものさしが違いすぎます嫁姑
鏡の中の私好きな日嫌いな日
春風に押されてハードル翔びこえる
手さぐりのまんま人生もう半ば

出雲市

板垣草丘

ご成婚　山から庭へ木を移す
蒸発もせずにドラマ続けます
貰い乳はたちの胸を今思う
花が散りワケギの腰が弱る頃
飛行雲　中州で草を刈りながら
扇風機　仲をとりもつかの如く
パジャマ脱ぐ虫から蝶になる如く
月よりの使者にも秋は肉がつき
通い婚　許したわけでないけれど
遠景の峰に背負った炭俵
大根が二か月がかりであけた穴
加速してわが家を通過してみたり
物いりの怖気をかくすような服
立退いてダムより奥に住むと言う
兄弟の溝にはまった妻同士

弘前市

一戸ツネ

おとぼけがお上手ですね社長秘書
浅漬けの茹子も胡瓜も涼しそう
写経千巻　虚を攻める鞭となる
身辺整理ガラスの埃拭いてみる
雑記帳に愚痴がこぼれて心不全
過労死かな木偶の人形音がない
四季の花にそれぞれ違う花ばさみ
満身創痍追い打ちかける風の章
残るいのちやさしく生きるわらべ唄
紙人形の鼓動を聴いた指の先
世渡りに役立つ嘘をひとつつく
蟹の足の割勘決める蟹の爪
自主性を忘れた老いの妥協癖
孤独から逃げる心の阿弥陀経
火葬場の寒さ重さに明日の風

出雲市

伊藤寿美

身に覚えあって言い訳聞いてやる

平凡な過疎にも青い空がある

さわやかに負けてハンディ口にせず

春うららバスから汽車へ眠り継ぐ

湯の糸が残る乳房の上を這う

雪しきり仏を飾る花買いに

嫁った娘が時々大根抜きに来る

老残や火宅の過去は問うまじく

釣り書きに父の答が拗ねている

ふん切りがつかず助走を繰り返す

追いかけるのはよそう時雨は止むだろう

あっちへと言う方に押す乳母車

一周忌　亡姑のやさしさだけ覚え

趣味で名が知られ男の貌になる

仏壇のバナナを食べてバナナ買う

大阪市　伊藤　武

酒飲みに意外な趣味を聞かされる
追憶はやたらに傷を深くする
バツイチに夫婦の秘訣聞いてみる
縄のれん明治の気骨捨て去られ
合縁奇縁　捨てる恋拾う恋
ダイエット実りの秋に背を向けて
二次会へ約束事はみな忘れ
豊かでも貧しくもなく妻といる
濡れ落葉　大根一本買ってくる
他人は皆兄弟と言ううまい嘘
沈黙は金だと決めた損な人
裏切りを許せるほどに年をとり
銀座八丁大阪うどんここにあり
美味求真　私にうまい酒がよい
一合の酒まで断って命乞う

寝屋川市　稲葉冬葉

ほっと一息つく夜のオモチャ箱
バックミラーに映らなかった三輪車
かあさんが笑うとみんなよく食べる
絹糸の張音は母の意気である
百態を許して明日の繩をなう
石ひとつ軽い命の名を残す
波風はたてぬ仏の灯が揺れる
暑いとき熱いうどんを食う仲間
博多帯おんなに隙が消えている
全力を過信しているバラの棘
死ぬまでにりんごの花を見に行こう
いいのでしょうかこんなに燃えている余生
片耳で聞くたわいない噂です
風花の散りゆくさきは浄土かな
合掌を忘れて戻る辻地蔵

大阪市

稲本凡子

五十年振り素顔のままで逢いにゆく
さよならの余韻　車窓をはなれない
無駄だとは解っていても百度石
小言聞いてる窓へきれいな月が出る
身勝手な理由で自分甘えさす
花束と笑顔をもらう誕生日
嫁がせてその夜亡母の夢をみる
公園の鳩よ　みんな元気かい
押して引くその潮時を待つゆとり
常識を外せば恐いものはない
幸せが逃げないように窓を閉め
わたしの時計よく進む日と遅れる日
ひたすらに走った過去はふり向かぬ
歳月に忘れる事を教えられ
幸せは家族揃った夕ごはん

鳥取県

乾　喜与志

捨てて出た家におふくろ待っていた
二十日だけの兵でシベリアまでの旅
兵隊の時に覚えたボタン付け
叱られて可愛がられて今日がある
愛すればこそ傷つくことも笑むことも
自分史へ愚痴を一杯詩のように
夕焼けて浄土の蜃気楼を見る
お見舞に行って林檎の皮をむく
知恵熱を知らず健康優良児
びくびくするな爺ちゃんが従いてるぞ
老いらくの恋ゆっくりと茶を淹れる
洗剤で地球を汚す綺麗好き
ほど程に惚けるも老いのたしなみか
古い情けの抜けきらぬ温い部屋
父の歩いた世界十里の西東

鳥取県

乾　隆風

年の瀬や眼さきの欲は捨てがたし
人情も算盤ずくとなる浮き世
婆さんもテレビ体操しています
新しい嘘がのし紙貼って来た
晩酌へやさしい嫁の手が伸びる
血圧を忘れてしまう般若湯
欲張りの草がなかなか抜けません
雑草と縁が切れない野の仏
仏の杖にすがってゆっくりと歩く
マンネリへ風は素通りにはしない
来た道を帰ってゆくか紙おしめ
股関節植える地獄をこえて春
逃げ腰になれずコルセットをはめる
灰になるまで水甕は切らされぬ
如何せん死ぬまで雑魚の群れにいる

吹田市

井上照子

飾らない言葉が残るプロポーズ
自己暗示かけて内気を追い払う
賭けごとをせぬ約束でゴールイン
空澄んで門出を祝う歌うたう
夜景よし丘には丘の住み心地
眠られぬ夜楊貴妃になってみる
究極の愛か蟷螂も人の世も
昼寝など夫はきびしい二度の職
痴れるとも妻たらんとす茶を入れる
検診の要注意がまたひとつ
付き添いの私へ温い見舞いくる
フィクションと思わせて欲し別離の夜
肩の荷は全部おろしたぼけられぬ
絵画個展　萎えた心を燃えさせる
中年になって無心で書を習う

豊中市

井上直次

ダンジリの屋根で実りの秋を舞う
床柱背に座らせば笠智衆
晴れた日もたしかにあった長い旅
荷崩れを二人でなおす老いの坂
ライバルの走る靴音乱れない
ブランドを着ても変らぬ影法師
網棚に朝昼晩の顔がある
雪もよし嵯峨野に湯豆腐ある限り
思い出を燃やす煙が離れない
どっちでも良いことだったと気付く朝
欠け皿をつなぐと見える縄文期
もめごとがおさまりました仏様
お見舞いに行けば四季報読んでおり
床の間に飾ってみたいお人柄
方便の嘘です嘘と責めないで

大阪市

井上白峰

幾山河越えても遠い雲の峰
老いてなお背伸びしている影法師
窓際の椅子で刃こぼれ研いでいる
脇役に徹して誇れかすみ草
喉にまで来てる本音が吐き出せず
呑み込んだ反論胸で疼きだす
謙遜の影で野心の血が騒ぐ
自己主張秘めて流れに添っている
流された位置で落ち着く川原石
甘く見た妻が大きな夢を抱く
アクセルを踏めばブレーキ妻がひく
目の高さ変えて妥協の彩を撰る
存在を誇示する老いの咳払い
退屈の蛇口に愚痴がほとばしる
老いてなお路傍の石になりきれず

岡山市

井上柳五郎

友情をとろ火でながく煮つめてる
夏ばての奥眼をさらにおし込ませ
ボケ防ぐ本買ったまま日日多忙
郵便に素通りされたさびしい日
甘い水信じぬ蛍生きのびる
紫の袱紗に重い義理包み
シルバーシート会話まだまだ欲深い
ふるさともかわる校歌もまたかわり
木や草とボソボソ話す歳になり
合掌の指のすき間を洩れる罪
未完の絵夫婦で彩を塗りつづけ
自分史に勲八等を派手に入れ
桜散るまた咲くまでは忘れられ
にが口はお前が言えと夫逃げ
わが影も泥にまみれて続く旅

東大阪市

指宿　千枝子

エベレストあなたと競う山は無し
踊り子を描いてもドガは越せぬだろ
日本にブリッジなどと言う名所
おまわりも雀も居てた二重橋
プラカード持つ人に聞くエビス橋
動物園みんなストレス溜めている
疑心暗鬼のぞいてごらん顕微鏡
花束を持つ人みんな優しそう
花見時　私も負けず化粧する
姿見にドレス中まで見透かされ
添い寝する母は優しい風になり
父に似て手紙一本子は書かず
ふる里へ続く空だよあの青は
仕合せになろうしっかり手をつなぐ
人生の到達点に上下なし

岸和田市

岩佐ダン吉

ありがとうその一言でぬくくなる
地球儀の裏少年が銃を抱き
憲法論議　僕は軍靴の音を聞く
核なくし見つめていたい青い空
日本を救うだなんてよく言うは
せかせかと列島少し病んでいる
人の上に人を作った記事に会う
群衆のひとりとなったさみしい絵
男かるくいつも空気のせいにする
一筋の道を歩いてきたなんて
敵意捨て大きくなれたなと思う
履歴書に根性ありと書いている
ここにきて僕は忍ぶの一字だけ
手に乗った文鳥やはり空を見る
フルマラソンの汗だ金庫に入れておく

箕面市

岩津ようじ

仲良しを内緒にしてるポチと僕
ハッとさすジョーク小学生の孫
ブロイラー囲い出るのは最後の日
いうなれば私地球の居候
古希一人　人畜無害　無為徒食
義理を欠く相談を子が聞いている
おじいちゃんと赤の他人に呼ばれた日
カメラ無情ナツメロの歌手大写し
宮仕えの根性がまだ夢に出る
一合の許可が出たので二合飲む
定年の荷物最後に磨滅印
小春日和も少し生きててもいいな
他生の縁ひっそり隣り合うお墓
小半時バケツと日向ぼこ墓前
みな泣いて惜しんでくれる不幸せ

岡山県

岩道博友

連続漫画に似た人生で年も老い
月優し余生で勤める足に照る
愛情のもつれを直す糸を選る
人生の訂正印が見つからず
信じ合う二人で渡る丸木橋
極楽か地獄か道標付いてない
荒れた日の心痛優しい妻の愛
新しい知恵の輪がある日を迎え
振り向けば過去の足消す霧かかる
年金の独楽も時には脱線す
飾り気を外して小さな鶴を折る
裏街道教える方が先に落ち
堂々と噂打ち消す二本線
主役から降ろされ寒道出て帰る
一言の言葉が希望の灯を点す

鳥取市

岩原喬水

名刺見て最敬礼をやり直す
古傷は引き揚げ船を忘れない
死なれては困る妻だが強過ぎる
薬飲みながら酒とは縁切れぬ
老妻の苦労に二重丸あげる
胃袋に昨夜のつけがまだつかえ
母ちゃんの刻んだ皺に僕が居る
あの世へは先にお逝きと妻が言う
人生に卒業のない坂登る
親の傘そろそろ雨が漏り始め
ネオンつけ百鬼夜行の街にする
頼られて男引算考えぬ
点滴が生きる希望の音で落ち
医者が首ひねれば不安増すばかり
金婚の妻に優しくまだ言えぬ

竹原市

岩本笑子

無位無冠とっても温い道歩く
満月へ草はそよとも動けない
引き止める力はきっと愛だろう
山茶花よ貴方を忘れたいのです
ことさらにゆっくり棘を抜く妻で
菜の花菜の花誰も約束などしない
ちぎれ雲　急がなくてもいいのんよ
こぼれては秋こぼれては萩ひとしずく
キラキラとハンディものともせぬ子等よ
絵にかけぬ愛をもらってくれますか
藤娘　指の先まで娘です
ゆっくりゆっくり忘れるのです除夜の鐘
君の瞳の宇宙信じていいですか
オーイ雲今日は日曜参観日
ピノキオの自由を誤解してないか

和歌山市

岩本美智子

人間が厭で一日海を見る
今日の汚点抜けないままに日が暮れる
持てるものみな失って強くなる
曇天の雲の隙間を探している
柿落葉パレットにない彩を出す
抜いた歯を大事に埋める庭の隅
色鉛筆好きな色から減っていく
チチキトク車の足が遅すぎる
腕相撲ほんとに負けたお父さん
天衣無縫　とても騙せる人でない
いつも留守わたしが嫌いなのかしら
食べ物をつくるマシンとしてわたし
手帳失せ時計の針が狂いだす
墓場まで持っていくことひとつあり
約束の列車を今も追っている

宝塚市

上田佳秋

鬼の面仏の面も脱いで旅
ジャンジャン町昔の俺が歩いてる
少年の絵から未来の響く声
アラジンのランプが亡父の書架にある
手袋を脱いだ握手は貴方だけ
亡父の檄　胸に画鋲でとめてある
ひょっとこの面でこの場は済ませよう
この一杯飲めばきわどい僕になる
拍手する指の隙間は分かるまい
夕陽から許しが出ないまま暮れる
誘わない男の方へ賭けて見る
末席の椅子から軋む音がする
言い訳が面倒くさくて旅に出る
ラストダンス　ハートは家に置いてある
伏兵が何時も隣に来て座る

鳥取県

上田俊路

亡き戦友の挽歌を彼岸花に聞く
折り返しからはみどりの風になる
新緑に染まり人間とり戻す
僕の絵の中であなたが立ち止まる
別れ傘しずくを切って諦める
雑兵はポケットベルで泳がされ
暗号を拾った日から貝になる
盃を黙って乾している野心
礼服の黒は哀歓染めた色
一坪に旬を求めて種を播く
まっすぐに生きて金には縁がない
姿見でおんな後ろの隙も消す
親と子と違う尺度で計ってる
水音の深さへ石が落ちてゆく
それからの男黙って風を読む

豊中市 故

上田登志実

初日記自然のままに生くと書く
生と死の境地にできた情もある
わが家はやっぱり此処だ妻が居る
妻の癖ちょっと隣に行ったまま
義理チョコの代わりと妻のプレゼント
黒牛と赤牛で知る県境（九州の旅 二句）
モッコスと飲んで馬刺しの美味いこと
筆をおき初鴬に耳すます
富有柿味もよろしが名がいいね
そうですね好きも嫌いも女偏
優等生ばかりじゃいやな世になろう
消しゴムは消した文句を知っている
凡俗の悟りか老いの諦めか
ボケたとは言わず達観したと言う
鐘は鳴るいくさ終って鐘が鳴る

大阪市

上田登美子

単細胞メモすることに決めている
同窓会電話相談国なまり
故里の便りはいつもみどり色
老いたれどエンジのセーター心浮く
神からの贈りものだわこの長寿
赤電話　内緒話でトーン下げ
血の絆同じ思いの電話鳴る
そわそわと娘来る日は豆を煮る
心通う阿吽の呼吸母娘仲
幼な日の子等の童謡は靴が鳴る
横文字の孫の年賀に首かしぐ
湯上りの様な肌したきれいな娘
薄化粧孫が紅さす春まつり
色白で七難かくし孫二十才
成人式馬子にも衣装の変り様

和歌山市

牛尾緑良

小銭ですが一年の幸ねがいます
約束があるので明日も生きられる
神様にもらった舌で人を刺す
人間でいたい涙を溜めている
借金のカタの命を大切に
酒の当てぐらいにはなる美辞麗句
煩悩を消す汗だからひたすらに
真実を手元に置いておく安堵
隠してたはずの尻尾を振っている
石仏の丸さを風も叩けない
生きている限りを庇う正誤表
私からあなたへだって愛だから
下手な芝居に妻は拍手をしてくれる
山ほどを語り尽して夫婦かな
五十とや夢を削って生きのびる

熊本市

有働芳仙

菜の花の合唱を行く左遷の荷
水すまし水の不平を撫で回し
雪解けのハミングを聞く蕗の薹
家中の返事が軽い芽出たい日
万全の手を打ち明日の靴磨く
回転椅子回るが首が回らない
五十年貴方の歩幅に疲れ切り
箱庭の孤独へ蟻を歩かせる
澄み切って終うと水の淋しすぎ
易の灯へ恋に疲れた掌をひらき
学力の差では抜けないものがあり
嫁が来て家風の角が円くなり
望郷が大の字になる蓮華草
久し振り嬉し涙を拾う頬
落葉を踏むと馬鹿馬鹿と聞こえる日

北九州市

梅田宣司

三つ指をついて二十歳が見直され
三面鏡いずれも僕は狸だな
袋小路曲れば出合う君と僕
人生双六ころんでばかり五十年
梅を観る話そろそろ飲み仲間
寒行の声凛然と闇を切る
おぼろ月深夜墨絵の由布に寝る
炭坑節山は消えても残ってる
土砂降りの音でてんぷら出来上り
北風に向かうと小さくなる男
よいとこに来たと留守番コップ出し
体調をくずして揺らぐ自立心
長久寺で女仮面をとり替える
ずっしりと構えるばかり能が無い
なるほどなさすが蛙の子は蛙

岡山県

江口有一朗

般若心経読んでも喧嘩ばかりする
地球儀よ何と茶番な小競り合い
分母空分子しがらみの世を生きる
誰か汝を縛すの声に知る自由
生むために死あり命の影を見る
灰皿に煙草ねじ込むある決意
大正の香りも少し持って生き
幸せの道へ思いをどう繋ぐ
一期一会の今日を楽しくする思案
環境に染まらぬ百合の白愛す
いつ何があろうと不思議ない齢
誰が見ようと見まいと庭の隅のバラ
コロリッと逝くなら何時でも悔いはない
こだわらぬ心を空と教えられ
ユーモアの原点　愛と見付けたり

豊中市

江口明光

米どころ運河正しく水を分け
入口に子供は留守と書く魔除け
弁当もお茶も持ち込む母の旅
かくし芸人それぞれの数え唄
神に乞う十指で拝む百度石
来る人が来ないと酒が旨くない
飛び込んだ蛙が浮いてきて睨む
浄土への旅の序列は外したい
手入れする野菜は人を見て育つ
見栄に輪をかけて女は狭く住み
阿波踊り阿呆も揃うと美しい
建てた碑の寄付がぐるりを取り囲み
一円玉しっかり溜めて忘れられ
酸欠の地下で浪人一人寝る
奥の手が効かぬ相手に母が居る

寝屋川市

江口度

防犯レンズ身内の悪は写らない

正論へ眼だけ賛成多数なり

よく見ればぶらぶらしてる蟻も居る

公約をきっちり果す茄子の花

落とし穴　猫が見てても視聴率

七転び八起きは不惑までのこと

根くされと言うこともある子煩悩

カラフルなエプロン豆腐切っただけ

生きざまは狒狒の心臓さえ移植

温泉で天のえくぼを見てる猿

こけしと対話んだんだけわかる

休日が増えたと思う象の鼻

あんパンを手許においた長電話

前進を忘れた靴は光らない

笑いながら気絶しそうな傷見せる

羽曳野市

榎本吐来

灯を消してただそれだけの夫婦なり
記憶力歎く同士の旨い酒
病妻の寝顔が語る男運
悪友がやさしくなってくる痛み
母逝って鏡の奥が深くなる
これからがいざ本番という余生
良妻賢母にまだ止められぬ摘み食い
お月さん　まだまだ男しています
二枚目が三枚目になるいいお酒
夕桜　ちかん特別警戒中
天敵をたんと背負った得意顔
力無い夫と知っている手編み
山寺の此処にもあった百度石
気を変えておかずの味を褒めてみる
番犬の使命に触れた万歩計

鳥取県

江原とみお

天高し善いことをしてみたくなる
風の子だ風が磨いてくれるだろう
星はいつでも綺麗ごとばかり言う
枕の底から早春の陣太鼓
石鹸とタオルを持って酒のみに
救い手のない煙突が立っている
お祈りの向うにいつも陽がしずむ
よく食べる極道を経たお爺さん
山頂を人間くさいままに降り
泥沼を渡り終ってから覗く
弱点を曝そう今日はよい天気
葉ざくらの頃にでてくる裏ばなし
尻もちをついた形でいる独り
振りかざしてから竹光だと気づく
嘘ついて舌を出すのは正行為

枚方市

海老池　洋

万歩計あす咲く花を知っている
大空へ笑顔いっぱい向ける花
合掌の中へもしもをつけ加え
この浜の温み忘れぬ足の裏
海亀の孵化をはげます波の音
継がれきた民話のしみる吊し鍋
法善寺ちょっと拝んで飲み直し
吉祥天の紅にとまった男の目
お日様がのぼる味方の顔をして
公園が島にも見える都市砂漠
蟷螂の斧　蛮勇という勿れ
味方ではないが大目にみてくれる
他人ほめる眼鏡にかえている老後
自分史に書くにがい酒うまい酒
ゆっくりと墨をすってる遺書のこと

鳥取県

太田幸枝

思いきり赤を着てみる春だから
心の化粧までも忘れぬ女です
桐の木はめきめき伸びる嫁かずして
白い肌も嫁ぐ日までは汚さない
巣に帰る鳥は仮面をはずしている
新しい産声たかく窓を開け
菱餅も母の指紋がついている
手加減が解らぬままに子は育ち
頭金を払ってからの一思案
次々に悩みが生まれ惚けられず
泥沼にずるずるのめり込んだ足
柱の角が痒いところを掻いてくれ
陽炎に揺れるわたしと万歩計
ぽっくりと昇天したい寺めぐり
やがて散る花も私も紅を引く

大阪市

大塚節子

菜の花が添えられている雛の膳
亡き人に似たる羅漢にそと触れる
五十年　戦争用語生きている
熱いもの食べて寝てなと春の風邪
遠足が乗りこんで来て陽の匂い
木洩れ日の峠越え来て湯のぬくさ
年順にゆかぬものだと通夜の客
さようならで主婦に戻ったクラス会
ランプの灯ゆらめく影に虫よぎる
ぬくもりも一緒に衣裳へ花衣
三十五度汗みずくなりカレー食う
命ありて今年も鱧食う西瓜くう
餅の名も桜　鶯　母の忌よ
さよならを桜時雨に急かされる
なんでやろ不肖の息子下戸二人

大阪市

大野武太

私の書斎　廊下の片隅に
無宗教　人間不在が恐ろしい
就職はお上が決める世を生きて
病歴と税歴　秤にかけてみる
検算は孫にまかせる申告書
愛犬も扶養家族にしておこか
飽食のはて外米と騒ぎたて
塗料屋の好好爺になりきれず
大将と呼ばれるくらしも板につく
明治談　亡父の年齢ものさしに
主義主張いらぬ近所のおつきあい
群雀　不協和音の渦をたて
妥協していつも貧乏くじをひく
ときどきに阿呆陀羅経を口ずさむ
気取らずに八方破れに生きてます

砂川市

大橋政良

追い風にのり追い風に騙される
結び目を解いていたずら者になる
理想論ほこりかぶって棚にある
中流に汚染をされた妻になる
にぎりめし一つの恩が返せない
満ち潮を見ている欲のない背中
脳味噌の程度に合わす辞書を買う
来世より今日どうしよう仏さま
一坪菜園麦藁帽子買ってくる
少しずつ命が動く木の芽どき
芋粥が吹きこぼれてるインターホン
はじめての役は通行人でした
玄関のブザーを押して来る噂
昼寝する時間があって忙しい
紅鮭の切り身と海の話する

姫路市

大原葉香

ゼムピンが落ちてる矢張り役所だな
顔のない男に似合う労働歌
負けたなと思う耳鳴りばかりする
童謡をうたおよ入日まっ赤だよ
雑草の無策を嗤うてはならぬ
散る花は華麗な過去は語らない
証文のいらない借りが妻にある
振り上げた拳が宙で泣いている
心まで飾ればえくぼこぼれおち
印肉のうすさは謀反かも知れぬ
トランプ切る孫が主役の掘こたつ
直立不動の歌など誰もふり向かぬ
時刻表たまには拗ねることもある
ねたきりの全身できく蟬しぐれ
人間になろうなろうと数珠を持つ

新宮市

大矢十郎

還暦のつもりへいつか古希の春
孫の名で知られ少うし人気者
娘を訪えばいつも掃いてる干している
耐えている嫁で恵みの日を信じ
母さんと呼んで親しい嫁姑
台風の浮気へ秋の夜は長い
六法は曰く因縁など知らず
耳貸さぬ無欲の土地へ術がない
傷物を値切れば無傷があるという
ハイチーズさせて見せには来てくれず
曹長と聞き陽溜りの席ゆずる
慰安婦に手招きされた異国の灯
ＰＫＯ称えて送る唄がない
膺懲の銃まで九条宜わず
立板に水ああ井戸端の妻なるか

和泉市

岡井　やすお

良い師あり良い友と良いお正月
名札見る五十年目の同期会
おふくろの店で落ち合う国訛り
飛び付いてから考える日本人
総論は即決各論には時間
振り上げたこぶし開けば握手出来
学校が休め休めで太る塾
かまぼこのかたきを討ちに来てる鮫
ブレンドのご飯の炊き方垣根越し
おいしさの二分の一は器から
傘寿など威張っておれぬ茶寿が居る
月はもう見るものでなし行くところ
努力とは別に照る人曇る人
しんがりはうしろをむかずともよろし
偲ばれる人になろうと今日も生き

弘前市

岡本花匠

墨痕の玄妙に酔う初硯
思い出し笑いの好きな夫婦鍵
人生だ真逆の坂も越す夫婦
昭和史の真只中に生きた石
苦虫を噛むこともある人生譜
煩悩を捨てて悩みの森を出る
鍼糸ぬかれた蝶が旅にでる
糸切れて凧は自由の風に酔い
野仏のほほえみに修羅遠くする
鬼に誓い仏の腕に拾われる
灌仏の掌の雫にも光る慈悲
正装をとけばピエロの面もおち
雪燈籠市民参加の燈が温い
風花に花便り聞く北の街
炎天に梅干しさらし恙無い

竹原市

岡本清水

朝毎のみそ汁の味今日の幸
生も死も一度しかない贈りもの
嘘の世を真実故の迷い舟
好きですと言うほど女好いてない
必勝の解読本は文字でない
さやかにもいじらしくあり片思い
納得と許す心は別のもの
負け戦理由は山ほどあったとて
苦を世から除けばみんな気が抜ける
見えぬ明日無事を信じている愚か
義理堅く笑い忘れた一途者
好きな花摘みたい心背が足らぬ
寿命とは長くて短いものと知る
理由なし逢う丈でよい好きな人
保証印　金輪際が又一つ

岡山県

荻野鮫虎狼

十二月　芝居は腹を切りたがり

再就職よほど家には居れない身

全額で保険を貰う不倖せ

合鍵を渡して女勝負する

台所扶養控除がやかましい

酒を呑むだけの余生を大事がり

すらすらと本音を喋るのに慌て

口髭が立派に伸びて職が無い

右派と左派欠伸が続いている平和

鈍行の旅蜘蛛の巣を見つけたり

お化粧を落とした顔が居る鏡

案じてるように減ってる靴の底

女房におめでとうを言い忘れ

本当の涙は腹の中へ落ち

実印を捺す友人は無言なり

倉吉市

奥谷弘朗

お帰りと迎える妻がいて足りる
妻という日本一の杖がある
飲む会となると都合はちゃんとつけ
あまりにも良心的で案じられ
価値観を知ってる顔が生きてくる
ことなかれ主義と悟っている余生
死ぬるまで男可愛や見栄を張る
便利さにおぼれて汗を忘れかけ
月給をみな取りあげる内助にて
おしどりの夫婦で我が家平和です
民草は氏神様を信じきり
たゆみなき努力つづけて登る坂
夢のごと二人で登るダイヤ婚
半分は妻の力と信じてる
人間も惜しまれて死ぬ人になれ

西宮市

奥田みつ子

黙々と子の助走路の石拾う

毬一つ　そばに置きたい時もあり

母子像へ平和と題がついている

半跏思惟まねて迷いがとけるなら

十二月　月日に壁があるような

ああ夫婦おんなじ時に胃が痛む

電話口　夫婦喧嘩のあとらしい

寒いからむさぼるように本を読む

果てしなく海に降る雪独りだな

正義派よ　お前に欲しいのは情け

誰よりも好きで嫌いなのが自分

辞書を引くそうかそうかと言いながら

幸せの身にも占うものがある

妻の意見いと小癪なり貴重なり

美しい錯覚でよし男と女

和歌山県

小倉アサ

人間に戻る小さな旅が好き
朱を足して距離を保っている慕情
好きな糸少し長めに切っておく
包まれた情けは橋の袂まで
ささやいてくれる石あり人生譜
独身の強さ弱さを繰り返す
ぼくの道市販テストで決めないで
一次パス親子でたすき締め直す
近道を通してくれぬ石ひとつ
散り際に一度は雨に合う桜
疑ってみれば笑顔のこわいこと
明日の靴揃えられてる負けている
控えめな手足で世間泳いでる
守備位置を変えて綾取り上手くなる
手筈完了ベートーベンに包まれる

高知市

小澤幸泉

病む足に二分遅れの汽車が出る
人生の荒野サフラン咲き乱れ
欲言えばもっと昔の方がよい
ホルモンの若さに老いもみな食べる
酔いの目にただ妻だけが美しい
ワンカップ父の癒えない街で飲む
罪人が多い平和の火を燃やす
生きること騒しきかな五十年
残り火を集めて春を待っている
妻と二人ただペンの音流れ行く
十字架の彩はるかなり罪の河
果てしない旅路に咲いた赤い花
終りないシナリオがある父の靴
金髪も入れて息子の青春を編む
息子二人それぞれに越え父の河

今治市

越智一水

枯れてなどないぞと青い芽黄色い芽
草花のひとつひとつにあるいのち
水飲んでひろしまの日に水を知る
流されて生きる恐さを知り給え
永遠の恋人それは母なるか
母の背を洗えば見せぬとこがあり
世を恨み恨んで母に詫びを言う
修身のような夫婦で笑われる
生き方が下手か風邪さえ長引かす
手を振って歩けば若さとり戻し
妻ありてありがたきかな茶一ぷく
寝返りをうって妻にも言えぬこと
絵を買って心の窓がひとつふえ
雲追って百姓と言う息を抜き
納得のゆかない百姓汗をかき

倉敷市

小野克枝

夕月よむかし恋したのは影絵
骨肉の愛愚かしく美しく
鉛筆の芯のもろさよ母が病み
差し上げる娘へひまわりの髪飾り
家中のピンクさらって嫁に行く
抱えきれない程のなさけよ光る瞳よ
尻取りにつまる六十歳の春
又もとの二人になって生きくらべ
茶番劇続けて夫婦水になる
温室の花で背丈が揃い過ぎ
勤勉が叱られる世となりました
助けたら泳げなくなるのは私
原稿用紙の中で私は砕かれる
火砕流見ている無力なる神よ
戦争を忘れてくれぬ墓がある

堺市

柿花紀美女

通り抜け人と桜の息づかい
巣立つ子のネクタイきつく喉仏
花束を受けて明日へまたファイト
古里の駅は知らない顔ばかり
頭打つ度に男の顔になる
張りかえた白さに亡母の影を見る
わがままな男孤独を持てあまし
円周の外で飲んでる半端者
北からの便りは寒い事ばかり
子等の舟一つ一つが沖へ行く
都合悪い事は大阪弁で逃げ
嬉しい日誰にも挨拶したくなる
運不運点滅の中生き続け
海苔巻きが上手になって娘は嫁ぎ
神様のくれる眠りへ今日を消す

藤井寺市

笠原吸江

人間はまあるくなれば忘れられ
運命を風にまかせば狂い出す
円な瞳　鬼千匹にたじろかず
失意の日雨もとぼけた音で降る
禁酒したそうな入院したそうな
泣かされた分だけ笑顔取り戻す
半分は聞かすつもりのひとり言
黒板のようには消せぬ胸の傷
忘れたい酒が逢いたい酒にする
母の愛入れる袋が見付からぬ
寝た切りへ春夏秋冬窓の景
病む妻のあたりを鬼が見え隠れ
朱の色をまだ追いかける老いの画布
三階に住んで瓢箪植えてみる
墨痕淋漓殺人犯捜査本部

伊丹市

樫谷寿馬

おもろいこと無いかとおもろい顔がいう
雪国へ紅い情けの明太子
銀行の眼鏡で残高確かめる
胃袋を突き刺しそうな蟹料理
タクアンが上手だったと通夜の席
古疵を温め合って柚子湯かな
何時からか妻の手紙の裏を見ず
マジシャンに愛打ち明ける春の馬鹿
中心に私を置く曼陀羅図
一片の疑いはあり薬のむ
さんまを並べ臓器移植を考える
裏切ったやつが散髪をして現れる
まだまだと杖捨て切れず詩の旅
危機感を抱いて夫婦の仲がよい
指よ眼よせめて達者で明日まで

岡山県

嘉数兆代賀

負の美学の中でおんなの櫓が軋む
仮りの世の仮りの絆で浮き沈み
裏目裏目傘をさしてはたたんでは
陽が沈む失うもののきびしさで
おんなひたすら心に耐える森をもつ
忘れたいグラスに秋が深くなる
迷い百夜残像ばかり昏れなずむ
一本松が昔話をしてくれる
祈りつづけて老母には止まぬ耳鳴りよ
胸の炎が次第にうすれゆく挽歌
一人旅　無人駅から雪になる
生涯をつくし通した座りだこ
終章のメロディーに酔う星が降る
回りつづけた独楽は悔いない彩で果つ
命果つ刻一椀の水なりき

八尾市

片上英一

ムンクの絵真似してるのか冷凍魚

狼ではないが月に吠えてみる

酒酌めばいつしか李白　杜甫になる

生きるとは辛いものだな大利根よ

無頼にはなれぬが少し崩れよう

笑い話にするのは少し先になる

だれもかもみな若かった　セピア色

終電車　みな考える人になる

化粧品売場を通り抜けて　夏

何派かは知らぬが君もビール党

山紫水明飛山濃水秋津島

のし紙が張り替えられて三度笠

精霊流しためらう舟も二つ三つ

ガリバーに旅行させたい日本国

噫　地球　ヒトが重荷になってくる

西宮市

門谷たず子

スタートを思えば美味い握りめし
洗濯も恋も陽のある中にする
針千本言わねばならぬ嘘もある
風呂敷を解くと喜劇がこぼれだす
亡母の壺学び足りないことばかり
人赦すことばにふえる笑い皺
消えかかる虹に朱を足す余命表
全景が見える眼鏡に買いかえる
冬のいのちにすこし油をつぎ足して
思いなおせば安定剤が効いてくる
駅いくつ越せばふたりの海に出る
散るのはひとり花の雫をてのひらに
妥協する爪はまあるく切っておく
それぞれの荷が膝にある冬のバス
終章の旅にも妻の時刻表

大阪市

金井文秋

働かせ過ぎを働き過ぎと言う
ショーウインドにやる気を見せる店の顔
男を選ぶ基準としての父がある
浅学非才とホンネで言うておりません
欲のある顔と詐欺師に見抜かれる
カロリーのないのをさがしている平和
歳時記を守った花にある香り
かすみ草君にはブーケ助演賞
三三五五　三三五五と七五三
学歴社会規格人間製造所
パンのみみ鳩にはたよりない堅さ
サボテンにもやさしい刺ときつい刺
どう生きる三百六十五連休
背も腰も曲っていないから強気
鏡でも見せぬ老化を見る写真

出雲市

金村青湖

春そこに古い手紙は焼き捨てる
飲み足らぬ顔と別れて春の辻
旬を摘む指から戻る記憶力
春や春健康ばかり妻が言う
雨女ですといそいそ雨へ出る
久しくは妻から聞かぬ花言葉
いつか逝く淋しがりやの妻残し
川沿いに少し歩いて見る旅情
傘ぬらす雨も旅情の中のもの
言い足らず聞き足らぬまま送る駅
花咲いて散って噂はもう聞かず
山は雪このまま終る絆かも
輪廻とや落葉が冬の手に戻る
里帰り里の言葉になる三日
漁火が没してしばし冬の海

桜井市

河合茂雄

吊り忍　明るい部屋をとり戻す

大原女の声は変らぬ京の四季

亡き母の星も見ている大文字

港から消えた少女の赤い靴

もえつきて君と枯野の土になる

鳴き砂を気にして恋は進まない

蔓枯れて好きなお方を見失う

赤シャツとマドンナその後書いてない

屋根裏の部屋でアンネの見た戦

我が子にはとても優しい鬼子母神

催馬楽の曲で散りたい藤の花

アラジンのランプに祈ること多し

裏側はきっと泣いてる魚拓の目

セクハラの仕返し女は強かろう

ちぎり絵の一つ一つにある絆

堺市

河内天笑

自慢することがだんだん減ってきた
手加減をしてたらツキに見放され
自画像に馬鹿さ加減が見えている
古いジャズ聴いて若さを巻き戻し
傷口を笑いとばしてくれる友
妻よりもうるさい友がひとり居り
観光バス土産屋さんと出来ている
みささぎも廃車の山も昏れかかり
ヴァイキングゆっくり食べたことがない
青空へ監督さんをほうり上げ
玄関の大きな壺を覗きこみ
簡単に相槌打てぬ男だな
葬式も結婚式も同じ靴
にんげんという害虫がいる地球
みなさらけ出していのちを分かち合い

堺市

河内月子

月欠けて満ちてゆっくり生きてます
水うまいとこへ引っ越すことにする
米櫃を覗くとファイト湧いてくる
しまいまで言わんと妻は承知せず
他人にはゴミ　わたしには宝物
小さめの幸を大事にして生きる
困ったら泣きつく膝にされている
バカ力出せる腰です大切に
冷やかな目で人間を見てる猫
痛いとこつかれピエロを演じきる
負けて勝つ主義で白旗など持たぬ
一枚の絵に会いにゆく春の午後
合せ味噌　夫婦の仲もこのように
時々は叫んで自分たしかめる
交替で漕ぐ約束の舟を出す

大阪市

河井庸佑

先生が優しく語るボールペン
上り詰め下りる算段整える
気の強いその性質が邪魔をする
添寝して昨日の続き読まされる
価値観の違い惜しいと思わない
実力を秘めた控えめとは知らず
冷や飯を食べた苦労が生きてくる
最後には抜ける自信の距離を取る
苦労しに行く栄転と腹くくる
幸せな蝶　万国の花に会い
先輩の知恵借りに行く板ばさみ
小細工が自分の首を締めていく
馬鹿になること心得て二度の職
種子はじく知恵神様に授けられ
優勝へ活字が躍る人が舞う

米子市

川上より子

樹が眠る子の背が一センチ伸びる
あわてると何度もおじぎしてしまう
差し上げた毬は弾んでおりますか
蜘蛛の子のはじめての巣に春の雨
殻を脱ぐのに時間のかかる蟬を飼う
この池に海を教えるのは早い
幾人か葬列を見て樹が育つ
蔦が太くなりすぎているわたしの樹
本棚のあくびうっかり見てしまう
道草をしてから来いと彼岸の母
遙かにて内なるものよ子を宿す
春の雨ははが渇かぬように降る
秋灯下　君とわたしの良い角度
夕焼けがきれいかけ落ちの多い村
四捨五入するとくすぐったい歳だ

香川県

川崎ひかり

今日もまたあの日の船を待つ浜辺
追い風に器用に乗れぬ父の凧
今は昔　赤いりんごの丸かじり
全体の三分の二は敵だろう
嘘泣きをしたミヨちゃんにだまされる
校門を出ると風になる子供
子が揃いうれしく回る母の独楽
全開の蛇口で洗う今日の嘘
流された先にあなたがいる港
小さきは小さきままで咲く生命
脇役が光りすぎてはなりません
捨て石の石の重さをかみしめる
働いて働いてまあるくなった老母のせな
ライバルにお守り袋さし上げる
馬鹿になる事も覚えた朝の靴

高槻市　川島諷云児

定年の今日から妻の紐になる
職退いて人間らしい夢を見る
さよならへ振り返るのは未練かも
浮世とや捨てる神あり拾う神
人並みの幸せでよし福寿草
礼智信もう日本の辞書にない
年金で肩を寄せあう欠け茶碗
平凡で良し今日があり明日がある
蛇口からポトポト落ちる妻の愚痴
本棚にまだ捨て切れぬ夢がある
軋む日もあった線路を振り返る
泣き虫の記憶に母の海がある
今日二人明日は一人の流れ雲
余生とは案外骨の折れるもの
百の修羅越えて静かな夫婦の絵

高知市

川竹松風

この人も盛りを過ぎた酒の量
三味の音が雑居ビルからこぼれ落ち
蝶でさえ移り気のする花の彩
ふるさとの空の青さに職がない
眉太く画いてダルマが生きてくる
社の寮でふるさとの無い子が生れ
無位無冠お酒の味を知りつくし
父に似たところを母に叱られる
建て前が本音に変り酔うてくる
太陽に向って花も咲いている
ふるさとは日本ツバメの子が巣立ち
鉢巻をすればその気になってくる
定年のない職業でタコが出来
兄嫁が仮面外した遺産分け
ふってみてこれ下さいといい音色

岡山市

川端柳子

新年の音にしおれた花目覚め

しあわせを歌いつづけて陽は老いず

騒ぐ血が無風地帯を許せない

終わりのない流れを思うじっとみる

みずおちにしぼる雑布溜めて冬

霧の中ロマンは心地よい音色

元旦や蠅一匹のリズミカル

海吠える今日別人の貌をして

某月某日きっとよい芽の出るように

台風の心変わりよアリガトウ

兄ちゃんの女友達皆嫌い

いい友に会えた昨日が暮れのこる

ワープロに春の句ばかり覚えさせ

竹伸びるうれしいことを節として

風が止むたった一度の出来ごとに

仙台市

川村映輝

八十は坂　九十歳の山峻し
卒寿迎え白寿遠きにあると知る
老いの耳　勝手に想像して怒る
遺伝ではないがボケぬ保障がない
悔しさは寝たきりのまま年重ね
万物に君臨して恥多し
北方領土強奪しながら居丈高
鴎の子孫北方領土で待ちあぐみ
鯨より人間軽視のＵＳＡ
米不作　秋刀魚　大漁貧乏す
農民の言い分何時も湿っぽい
言うは易しほどほどというむずかしさ
新幹線真ん中に居て肩が凝り
北の国春一番が待ち遠し
現世よりあの世に友達多くなり

出雲市

岸　桂子

闘病後　砦は少し傾いた
花はしずかに火宅を抜けた蝶を抱く
傍線を引いてこだわり続けている
よみがえる時間を待とう竹の花
愛と言うたった一つに流される
すんなりと花にはなれぬ唐辛子
逃げた魚が今もわたしの胸にいる
たくさんの人に返してゆく情け
平等にいつも叛いている奇数
水のある事でわたしも生きられる
花は散る人は別れをくり返す
水が喉通ると生きた音がする
アルバムに残しただけの淡い縁
不器用に刻む一日に子は育つ
帯の位置孵化には遠い人を抱く

寝屋川市　岸野あやめ

倶会一処　川柳塔の苔の下
父の日の父は梅の実拵ぐばかり
正義漢本当の恋をまだ知らず
不器用で見てられへんと好きになり
そんなこと知らんと紅茶つぎこぼし
曼陀羅に水子観音などは無い
ほとけ様亭主が無理を申します
粗衣粗食　猫が愛想をつかしそう
酉の年サンズイ偏も要りますな
先帝の帽子にヒューマニズムありき
図書館で斜め読みする直木賞
元朝や仕事初めの洩瓶とる
片仮名で書くヒロシマは灼熱に
クラス会美女も才女もただの主婦
美人ではないが声よし愛嬌よし

大阪市

北勝美

合掌の指のすき間に過去がある
背負われて息子見直す肩の幅
ふところの寒さ心で温める
几帳面　飲んだ薬の副作用
上達をしたのか喧嘩しなくなり
正面の女が目立つ砂かむり
欠点が山程あって人間味
赤信号待ってる吹雪の霊柩車
人情に触れて心を温める
札束の厚さと人情裏腹に
白木蓮　妖しいまでに月おぼろ
にぎりめしダブッて見える母の顔
地球儀で日本の国を丸くみる
反動の恐さを知らぬ平和ぼけ
妻老いて思い出たぐる毛糸玉

高知市

北川竹萠

長い旅越えた七山茶がうまい
外面で抜く大根が胡坐くむ
ファイナンス望みの庁舎宙に舞う
刈込期茶の一条を整える
声かけて溶け合うている日のベンチ
散る花の風情に酔うたいける口
樺太は見えず宗谷の凪の海
山門に箍締め直す永平寺
右ひだり忙しく老いる暇がない
合唱はぼけたらあかん老寿会
子ら帰郷結果日付けで西瓜選る
友情がグラスに浮かぶ花心
何方にも言うなと妻は目の手術
福の神怒った顔はまだ見ない
体調のよい寝返りをくり返す

寝屋川市

北田一笑

辞世読み先祖を偲ぶ墓詣り
若葉マーク母玄関の外で待ち
今いらぬだけど邪魔にはならぬ金
つまずいて起きてやっぱり太っ腹
一言が根性作る別れ道
廃車ずらり今日も増えてる道をゆく
調子よい春を迎えた爪の色
発言に気を使いますエージェント
あの事もちゃんと書いてある日記
ポケベルよ便利過ぎます不便です
やじ馬が油そそいで引き上げる
双方で耐えてる積り嫁姑
あちこちで舟こぐ午後の講演会
満堂が酔いしれているこの空気
叙勲にて降って湧いたるフルムーン

松原市

北野久子

音の無い暮しに慣れて花を買う
筆談してくれてパッと若くなる
打てばすぐ響く若さが好きになる
嫁が来てけじめ一本とっておく
黄昏は旅の女を主婦にする
聴えぬが夢の中ではよくきこえ
春眠へせめて水音細くする
聴えたらもっと冗談言えるのに
聴えたら長い電話をするだろう
居てほしい嫁いでほしい娘を眺め
ワンマンで涙にもろいとこに惚れ
聴えないけれどプライド持ちつづけ
難聴のハンディ重すぎておもすぎて
演技とは知らずに夫慌てたり
もう言わぬ愚痴今夜も出てしまい

生駒市

北山悟郎

軍隊で僕のよいとこ全部出し
母出好きあの世に行って還らない
ほとぼりが冷めても心とがってる
娘が幸を僕の頭にふりかける
尽さねば愛のこだまがこたえない
人情と義理にからまれ人生か
男なら命を賭ける修羅に生き
反骨は責任を死より大切に
何時にでも思召しあれ覚悟出来
洗礼を受けて情けの手を拡げ
痛い目を知らず真ん中歩いてる
占いの晩成信じ未だ死ねず
過労死は出世切符を手に果てる
フラスコで万物進化する怖さ
傍杖が一番痛い火傷おう

羽曳野市　吉川寿美

愛は幻するりと逃げた秋の蝶
疑いの晴れない傘の半開き
割箸がきれいに割れて書く卜書
父の樹の高さ見上げてばかりいる
やがて来るやがてを思う梅の種
季が過ぎて花の生命を地に還す
春日遅々ごまめの話まだ続く
悪人はだあれも居ない心太
愛無題　夫婦茶碗の茶渋あと
軽いコントで雑木林をぬけて出る
子離れの出来ない甘口のカレー
風は他人でいつも素知らぬ顔をする
生きて来た道のり思う豆の数
石積んで積んでは風の沙汰を待つ
掌さぐりの森で羽化した春の蝶

豊中市

橘高薫風

あかねさす白鳥宮に初詣
初日かげわが句碑に酒まいらせん
豊頬のひきめかぎはな孫娘
孫抱いて鴬宿梅の気分かな
弟橘媛を恋せし日を覚え
鉛筆の匂いは五十年同じ
馬に乗る姿を今にあこがれる
北国になお北のあり流氷よ
魂で咲き魂で散るさくら
いつまでも力頂く師の手紙
友だちがしみじみ光る歳となり
老いてしずけし淫の字も姦の字も
蹈鞴踏む阿形吽形人間座
鱗雲一枚こぼれ亡母の窓
雪月花日本の味は足るを知り

香川県

木村あきら

適当に曲がって屏風立って居り
考えて考え抜いて馬鹿になる
地球にもやがては黒い雪が降る
壁越しの話は聞かぬ事にする
ダルマさん両目入れるとソリ返る
肩書にスリ寄ってくる花名刺
なあんにも知らんなあと辞書笑い
兵馬俑　地下の伏兵あなどれず
孫だけはせめて味方にして置こう
船頭が二人で舟は山を行く
ジリジリと妻が外堀埋めてくる
一銭五厘の命傘寿へ永らえる
尾を捨てて逃げたトカゲが笑ってる
地球儀が地獄へ向けて二歩三歩
善光寺　極楽行の切符売る

神戸市

木村貴代子

流れゆく重い歴史の中の我
砂時計見えて減りゆく持ち時間
魂の自由を売って何を得る
涙ふくハンカチ貸して手を貸さず
指切りよ嘘はつきたくないものを
千羽鶴　重き祈りに飛び立てず
胸に立つトゲ小さくも取りにくい
新しい恋でふたする胸の傷
親友が悪友となる親の口
父母のいさかう時は石になる
片思いそれでもバラは赤く咲く
アルバムに笑っているよあの頃が
我に似し子はいとおしく腹立たし
お互いに一つ叩いて仲なおり
れんげ畑　昔のままの女の子

和歌山市

木本朱夏

おもいきり顔を洗ってあれは　夢
美しい嘘と知りつつ酔うている
猫が好き　中途半端な男より
謎解きの下手なおとこを道連れに
あまい微熱つづく恋愛中毒症
私という川を渡った男たち
髪を切るおとこひとりを斬るために
仮縫いのままで終った恋いくつ
恋終る　りんごに歯型つけたまま
自画像に淋しい嘘を描き添える
まだ橋のかからぬ川が胸にある
背負わねばならぬ荷物がそこにある
時雨きて身を疵うものなにもなし
もう誰も待ってはいない橋の上
いまここにいるわたしとは誰だろう

貝塚市

行天千代

占い師　金運有りと世辞を言い
団地の灯順々に点き夜が来る
嫁もろて親は一人でほっとかれ
出嫌いも自分で行かねば足りぬ用
年下の御主人友の厚化粧
食べに行く娘と待ち合わす難波駅
老人会　先輩が座る指定席
老人会　手押車が二つ三つ
外科の先生　苗字のルーツ聞きたがり
補聴器を外せば音の無い世界
果てしなく何時の日終る苦労坂
次の世もつないで置きたい紅の糸
台風も近畿良いとこ避けて行き
笑ってる場合じゃないよギックリ腰
老い一人　愛妻号が大きすぎ

香川県

工藤吟笑

戦地への妻の手紙を持ちつづけ
山裾の家が霞の中に浮き
新人類　出雲に頼らず結びつき
丸腰で話しに来れば断れず
余命など考えなしに種を蒔く
抱いて泣く残留孤児の姉妹
鳶が鷹生んで三代目に潰れ
公約も当選すればソレッキリ
コレクション祖父が集めて孫が売り
夜の道　心を読まれそうな月
こぼれ種だけが勢いよく育ち
西の風吹くな夫はまだやれぬ
下心あるのか二三度酌ぎにくる
高砂の謡に合わす裾さばき
飽食の箸がウロウロして困る

青森市

工藤甲吉

ひらひらと振る手は雪のようだった
雪国の人あきらめて雪の下
きしめんをふうふう吹いて春を待ち
わけもなく北という文字泣けてくる
青蚊帳の中に芙蓉の白い花
わびしさはたった一つの枕かな
おもんみれば一行だけの我れである
呆然と立ち一本の棒となる
人生はよいしょこらしょにどっこいしょ
仏さまをおいしい水で喜ばせ
亡母に似るお地蔵さんを背負いたし
トンネルを出ると青春過ぎていた
腕組みをして野次馬の中にいる
蟹の泡うふうふうふと笑ってる
目の上のたん瘤となる防衛費

唐津市

久保正剣

喜びの絵には惜しまず押すチューブ
玉手箱開けて再会諦める
自愛かな哀しいまでの身の火照り
水色のワルツに今も酔える幸
人妻とチークを踊る禁猟区
上申書で済む程妻は甘くない
握り飯割って広がる草千里
内容証明春夏秋冬無愛想
銃痕を曝すと菊の紋が浮く
傷口の奥に本当の傷がある
なんてこと番犬までも盗まれる
花冷えの夜に罪あり火のほたる
パンプスで逢う平成のシンデレラ
殿様がノーだと言えばノーなんだ
ロマンには遠い真昼の寿司の味

出雲市

久谷まこと

歳月は人待たずして人送る
履き慣れた靴でノルマを消化する
本心も後の一つは伏せておく
我が家には高嶺の花のコマーシャル
身の程を弁えている錆びた釘
これからが本音を聞かす咳払い
春風に心の窓を締め忘れ
よろこびもまだ半ばなりマタニティー
おおっぴらに今日は許せるチョコレート
一日の長さを計る大あくび
健康のバロメーターの爪を染め
熱弁が敵も味方も頷かせ
いたわりの言葉善人らしくする
一寸の虫が反逆して困る
燃えつきて養老院の車椅子

平田市　久家代仕男

悔いすべて消えさるときが浄土かも
尤もなはなしに犬も座りこみ
尺取虫の歩き疲れて枝になり
人を見る眼鏡いくつも持っている
里芋にベト ドクちゃんの多いこと
ロボットよお前に草鞋編めまいて
浪費癖いつも蛇口が漏れている
ニアミスの一つ二つは我が家にも
二十年妻と旅したことがない
鮫鰊の狡さも備え管理職
鰻屋の前で一度は立ちどまる
大根を洗うに丁度いい流れ
台風はよっぽど日本好きらしい
口吻に何もなければよいのだが
朝の凍て豆腐屋の湯気ことさらに

吹田市

栗谷春子

春の野辺　都わすれと道忘れ

ひもすがら頬杖ついた雲博士

名人のひとりよがりに冷える朝

夜が明ける夢のかけらもつかまずに

うろこ雲ゆっくりとけて何になる

木枯しに美味しいパンを抱えてる

散歩みちひとり行くから桐が散る

寝太郎がまだ起きて来ぬ昼の月

世のことはしきたり通り致しおり

わが世には水引というけじめあり

鏡からうける訓えは手きびしい

雲走るその時豹のかまえして

起きあがり小法師がだいぶしんどそう

それがしもおぬしも一献月の下

どうすればお気に入るやら夕しぐれ

尼崎市　黒川紫香

売られ行く牛へ少年草をやる
王様がひとりで菓子を食べている
紙屑をいっぱい溜めて詩人とか
山小屋で聞く雷は物凄い
東京の話　少年聞きたがる
明日またおんなじ事を言うだろう
たこ焼を焼く手で世間話など
燃える火が家の方角だから走る
暗闇になったらべかこしてやろう
ぞんざいな口でなんでもしてくれる
鯉に麩をあげる優しい顔をして
二階から父の機嫌を見に降りる
生きるため高層ビルの窓を拭く
転任を惜しんでくれる好敵手
いい朝だ新幹線が動いてる

堺市　黒田真砂

郵便受け何度ものぞく佳い知らせ
深追いの傷は自分でなめておく
出過ぎた杭になるなと亡母の声がする
意味不明　孫の手紙のアイウエオ
苦情だけ言ってさっさと姑帰り
子が巣立ち妻が静かに爆発し
億の記事見る度腹の立つ溜息
返答次第で鬼にも邪にもなる女
少し進む時計が過去を知っている
老いてなお夢見つづけるカンナの朱
生き抜いて明治の父にある気骨
留守しても春には芽吹く庭の花
コップには嘘は通じぬ透明度
失恋の心を風が通り抜け
赤い糸探しあぐねて居る息子

芦屋市　黒田能子

二人っきり小さくなった朝の音
寄りそって一つの傘にあるドラマ
一つずつ飾りはずしていくも年
ルール無視　階段一つ踏み外す
小さき命　家中の灯がともる
産声にメリーゴーランド回り出す
面取りをした新婚のシチュー鍋
一心同体　別々の夢を見る
寄りそった時計は同じ時刻む
若い気でいるのに齢を書かされる
一つずつ苺を潰してる思案
疲れたらアメ玉一つほおりこむ
青い鳥やがて手中の珠となる
お隣と今日は一度も会ってない
産声も交じりほのぼの年が明け

松原市

小池しげお

ふる里の山父になり母になり
散るときは等身大の絵を残す
平家納経もみじ饅頭まだ温し
檄文の凄さを李白から貰う
体験は背なの丸さに仕舞てある
七分袖　母は働き者でした
乃木さんのような守衛が居る御陵
書道展の出口で高い筆が売れ
返事来てないが酒だけ買うておく
春の雪　絵になりたくてなりたくて
死ぬとまで思うて居ったならご免
新米が届いたらしい寺の鐘
フルムーン妻から腕を組みにくる
その辺で買うて来たのに喜ばれ
鉛筆でカラの頭を掻いている

大阪市

小出智子

押し入れの隅のすみまで五月晴れ
生きるとは水を汚してばかりいる
葉書一枚師弟愛にはかわりなし
手紙より電話　でんわより手紙
笠智衆みたいな親父さんだった
眼に悪いとこもきっちり読んでおく
後ろ姿がわからないのを幸いに
教えられたように斜めに傘を差す
カナリヤを埋めたとこにも家が建ち
節くれた指だ　母にそっくりだ
砂丘から砂を失敬して帰る
隣の席の赤ちゃんとすぐ仲好しに
伯母さんが来る漬物のつかりごろ
春の一日洗濯をして終る
ぼそぼそと私の恥を書くペンよ

鳥取県

幸家単車

可愛い娘蕾のままで居て欲しい
ぬくぬくと生活せる夢を組立てる
野良犬よ僕とお前は同志だよ
ある日ふとヤゴがトンボに化けていた
影武者の意地身代りのままで果て
川の流れは村の掟を忘れない
墨絵から赤い炎が見えて来る
うれしくて笑い袋が空になる
行こか戻ろかいっそ此のまま逃げようか
故郷の四季を音符に踊らせる
おだやかな菩薩の貌にすくわれる
夢を追う少女の瞳澄んでいる
鍬だこが老母の苦労を物語る
牙むいて入道雲が追って来る
苦労した涙真珠色に冴え

出雲市

小白金　房子

牛飼いで生きる夜明けの靴をはく
売られ行く子牛に呑ます今日の乳
牛の目に家族信じた安堵感
手ばなした子牛ちらつく市帰り
牛の目も娘の目もやさしい秋の天
種を蒔く春の日和に匂う土
耳飾り農婦に縁のないくらし
流行に遠い野良着の母が好き
旅仕度小さな嘘を子に残す
月見草咲いて誰待つ雨の音
長いもを掘って手尺当てて見る
衣装箱　女心を折りたたむ
口論もやって夫婦年を積む
野地蔵へ片手拝みの野良帰り
人許す心やさしい風に会う

和歌山県

児島与呂志

下駄ばきの響き田舎の朝を知る
せめてもの人生妻と支え合う
根来坂　春の芽少し見付けて来
記憶から遠くの糸をたぐり寄せ
鯉のぼり自由に風をはらむ庭
一枚の訃報気になるおろかなり
鈴の音させて女の京訛り
この坂を越す汗頼る杖を借り
うんうんとうなずく数が多くなり
妻の言う通りにしててつつがなし
背を伸ばす吐息を知っている鏡
朝めしのうまい匂と妻の味
雑草は耐えるに慣れて春を待ち
セーターを一枚脱がせる妻が居る
気まぐれな風になついて春になる

竹原市

小島蘭幸

恋人の前でワントライを決める
鉛筆一本あれば私の文学よ
ひざまずいてあなたの視野の中にいる
象を見ているあなたを思い出している
千頭の馬走らせる場所がない
羊の瞳の中の炎を見ましたか
白の世界の鶴の夫婦を見習わん
蟋蟀が僕のこころの中で鳴く
子に負けるもの多くあり誇りとす
追突をしたのは神様だった
体力がないので笑わないのです
和のてっぺんでいつもにこにこしていよう
テンカウントが耳にあるなりやすらかなり
縁側にあるのは古い月日だな
樹も僕も老いぼれてから面白い

鳥取市

小谷美ッ千

漁火や骨の髄まで君がすき
泣き虫になってしまった花のした
恋人よ私だけをすきになれ
大好きな男から届かない手紙
膝抱いて孤独に耐える靄月夜
目の端に膝抱きしめた君がいる
すきだよと言ったあなたをもっと好き
くちづけをいつも許してしまうなり
俺だけを好きかと何度言わせたか
恋人の深い溜息ききもらす
愛されて愛して花のおぼろなり
限りなき優しい男に嫉妬せり
恋人の子を産むことは幻に
吉報をあなたの腕の中で聞く
そして秋　貴男おひとりしかみえぬ

出雲市

小玉満江

宇宙から招待される夢がある
夕凪の海は無口になって行く
新しい家から犬の声がする
夜が明けて今日もきれいに咲くつもり
日展の名残り夕陽の沈む湖
深夜バスあかり拾って捨てて行く
一言がまだ胸にありねじれ花
ユーモアで暗い話を裏返す
割りかんの締めが手間どる女旅
負け惜しみ降圧剤を噛み砕く
辛抱の人の言葉は胸を打つ
真直ぐに歩いて拾うものがない
愚かさを悟り少女は巣に戻り
相談にのって一緒に泣きました
チャリティーのラストを飾る舞扇

米子市

小西雄々

名曲を保育器で聞きあくびする
税務署は弱音を吐かぬ妻が行く
母の忌を待ってたように花だより
福を呼ぶ陰の努力を見てくれず
桃源郷へ来てから特技芽が出ない
コーヒーとパンでエンジンかける朝
逆噴射できない妻を見守ろう
嘘一つ背負う十字架おもすぎる
葬儀屋の商才習う価値がある
続編は騒ぐ血のあるうちに書く
人間が怖いだまして金を取る
弥陀の声聞きたく窓を開けて待つ
逢うてきた赤いネクタイから余韻
冗談へ心電図まで乱される
茄子漬けの紫　亡母の三回忌

豊中市

小林一夫

そういえばしばらく虹を見ていない
青天白日　猫には猫の影法師
サヨナラの替わりに白い花もらう
美しいまま標本になっている
毒虫になりたし君を殺したし
鳥籠の中で生まれて死にました
抱擁へことさら淡き昼の月
光さしけり小さきものの足跡に
君はうつむきオート・フォーカス焦点ずれる
泣きたくて泣きたくて怒っている
死を照らす蛍光灯の下に座し
嘔きたるものがかなしく流る
空あかるくてつくづく淋し
母の弾くピアノほろほろ皿のひび
こっそりと明日ふたりで消えようか

大阪市

小林トメ子

一回だけの代筆から逃げられず
宝石に縁遠いけど値札見る
契約がほしさに苦い酒も飲む
通帳がじわ〳〵目減り落着かず
侮った雷おこり落ちて来た
台風も紀州の港こいしがり
ウインドを横目でながめ背を伸ばす
遺言を書かせた後妻先に逝く
泣き虫を上手に演技する女
凄い風手抜きの仕事気にかかり
蚊一匹待ってたように足をかむ
ライバルが欠席と知りお近づき
妻が留守静かで長い一日だ
口紅を拭き消したのに妻の勘
攻めるにも逃げ道一つおいてやり

鳥取市

小林由多香

ふる里へ錦を飾る切符買う
反省の酒が静かにきいてくる
人様の休みがとても忙しい
約束を破った指の爪をつむ
よろこびの鼓動へわたし見失う
どんぐりの仲間争うこともない
神様にもらった出合い妻が居る
大き目の礫を少女からくらう
砦にはやさしさなどは持ち込めぬ
古着屋へ天女の衣買いに行く
裸から出発風邪もひきました
気晴らしに三万円の蟹食おか
七転びそんなに転んではおれぬ
ふる里の空気はうまいなと思う
受賞した名残りがつづく春の宴

五所川原市　斉藤　劦

人間が好きで教師をしています
画用紙にチューリップ咲く新学期
悪い子はどこにもいない松の芯
先輩の自叙伝があり古本屋
石人形作るも丸い石がよい
この街の未来鍵屋が欠伸する
表裏一体落ち葉の温かし
子牛売る話はよそう子の寝顔
りんご剝く棟方志功の画のように
高校は舞の海関出たところ
同窓に宮澤賢治がいる名簿
体験をしてる賢治の寒い夏
皆無作みんな無口のままで刈る
実らない稲教材に貰われる
千本を伐り一本の植樹祭

富山市

酒井輝

母の鞭はがきの表まで続き
半世紀稼いだ右の手が長い
美化されずとも靖国の神は神
飛天舞う壁に明日香の声を聞く
飢餓の国濁った水に列ができ
停止した盲導犬にある気品
喜寿の身が新語辞典でまだ育つ
年寄りがその年上に席を空け
寝たきりの母だが共に生きる幸
仏壇の幸を裏から見る仏
町内に住む叙勲者はあんな奴
人工の震度笑って這い回り
まだ使えますと書いとく廃棄物
腐ってる川面で月が呼び止める
一億の胸に一億過去の町

島根県

榊原秀子

思わない人に出合った春の駅
同行二人札所巡りに山の藤
偏見か色の眼鏡を嫌いぬく
鉛筆をゆっくり削ることが好き
二人いて一人と思う流れ雲
私がわたしに負けた自己嫌悪
一日中だまっていたい畠打つ
柔らかいたちのリンゴの名を忘れ
ときどきは姑のめがねを拝借す
よく書けるペンだ嬉しくなってくる
霜の朝何かが逃げてゆくような
風花が髪にまつわる別れみち
もう治す気もないものの好き嫌い
ついついと叱咤激励してしまう
忘れ上手になっても無事な日日がある

和歌山市

桜井千秀

一呼吸おいて暗示の的しぼる
ジャンケンポン　グー出す癖が直らない
好奇心疑わしきは捨ておけず
叩いたら埃が出ます何方でも
モノモライ治してくれた黄楊の櫛
時々は凄んで見せる影法師
残照へわたし一人の置き処
ストレスが満タン窓を開け放つ
分析をしすぎて愛に飢えている
種あかししてからお見せする手品
妹も老いたと思う里の道
ああ図星しどろもどろになる答え
スランプを脱出したい紅を引く
矢尽きたことは外野へ洩らせない
乱気流　真っ只中で振る小旗

島根県

佐々木　鳳笙

独生独死　独去独来　茜雲

咲くことも無常　阿難よ舎利弗よ

人間の弱さ四号室がない

損得の竿さす沼に底がない

七転び八転びもある夢芝居

愛などと裏表紙には書いてない

癌告知　戸惑う葦になって揺れ

さよならを何度する気でいる喪服

任せ切る安らぎ貰う人生譜

末席の青年が持つ歎異抄

終着が始発となった父の駅（父還浄）

宿業の重さに泣いて親鸞忌

弥陀の掌で飽くなき貪瞋痴

如是我聞　父の遺した道を行く

二河白道　執着の荷を置いて行く

弘前市

佐治千加子

春の芽をはや抱きしめて抱きしめて
縄文の女の意志をもつ素足
天へ向き希望が背伸びする蕾
湯けむりに馬沈黙の四肢で立つ
山の湯に亡母の乳房を抱いている
逝く春や水を飲んでも悔い深し
ふるさとの川でひたすら鮭となる
プラットホームさみしい魚の顔ばかり
新鮮な裏切りをする長い髪
約束をしてよしてよと檻の猿
森に行き森の言葉にかこまれる
いさぎよく月に告白して寝よう
天晴れて千体仏となる樹氷
愛しさは水方円に沿う如く
生ききってぎんぎんぎらぎら陽が沈む

米子市

澤田千春

雲が動く忘れものでもしたように
頬杖の前を走ってゆく月日
旗の波　兄をさらって行ったきり
友の書く便りに花が咲いている
樅の木は深い根っこで生きのびた
赤いばら私を刺してうす笑い
木の葉さえいたわり合って生きている
人生の裏を見てきた土踏まず
長持の底から亡母が飛び出した
すばらしい話をつつむ白い紙
ブランコを漕ぐ新しい町見えるかも
神様はみんなご存知舞台裏
杭を打つ音が響いて眠られぬ
霧の峰　仏の列はどのあたり
さよならをしてからきっと振りかえる

京都市

山海友熙

椅子一つ守る無口な父を恋う
無理な力を抜けば遠くが見えてくる
赦す薔薇赦される薔薇鉢分ける
翔ぶちから蓄めて女は時を待つ
筍の一尺伸びて生き残る
情もろく生きて六十路の初鏡
盲人のこころをしかと指で追う
台風が来ると夫婦の気が揃う
夫病む春待つ心通わせて
肩の凝り癒してくれるもの想い
片方の耳だけ無理を聞かせとく
じゅうたんの端に夫の気儘聞く
やわらかく御飯の盛ってある好意
手を洗う流れぬものが一つある
車からの声陽炎の彩となる

箕面市

椎江清芳

海女潜る真珠の海に降る小雨

居酒屋の隅に落として来た影絵

うどん屋の返事は湯気を越えて来る

口紅も薄く婦警は街に出る

背を向けた島の土にはなれぬ骨

娘の嘘を見抜いた母の目が笑う

ダム出来て桃が流れて来ない川

握り飯未来もきっとあるだろう

花束を投げると海の喪があける

働いている楽しさに齢はない

晩酌で働き蜂を飼い慣らす

陽焼けした掌からこぼれる土の唄

水涸れた川にも四季の詩がある

道ならぬ恋の灯を消す通り雨

四次元の彼方は亡母の幻か

羽曳野市

塩満敏

黒松が留守の間に赤松に
留守電にアイラブユーと入れておく
信濃路に悲しい口笛まだ残り
洋ランを主役に見せてかすみ草
うかうかと安心できぬ福祉国
凡夫婦安近短の旅に出る
求愛の文や訃報も来るポスト
金さんや銀さんめざし母米寿
子や孫に召集令状来ぬように
日本の端でどっこい生きている
ありがたい式でどなたもほめ殺し
しのび寄る軍靴におびえる鳩の国
アメリカとぼつぼつ離縁しませんか
年金に税金かける軍鶏の国
一票で必ず仇取ってやる

寝屋川市　柴田英壬子

陽が昇る罪の轍を徐々に消し
問題は贈った花の花言葉
称讃はいらないゴールまで走る
樹の精が舞う春浅き陽の中で
両の手にはさむ女の暮し向き
虹を見てパワーが湧いて来た迷路
言い訳につまって山椒噛んでいる
輸入米やがて瑞穂も死語だろう
ゲームには弱い系図を背負うている
寓とある表札京の雨やどり
しあわせな余生を測る銀のさじ
冬の陽が障子に映えている至福
息抜きのはずの手習い重くなり
独り居の風邪を見守る魔法瓶
新しい郵便受けに来た手紙

岸和田市

島崎冨志子

ついて来そうだから過去を振り向かず
娘に重荷課してる夢とは思ってず
気の弱さ仏の面をつけたがる
客のように招かれてゆく娘の新居
子育てが終った肩に孫がくる
ほろ酔うてお国訛りがこぼれだす
誉めているちょっぴり妬み持ちながら
なまけ心へ弁解ばかり貯まりだす
少うしは若く見せたい彩を着る
バイバイの孫ありったけの手をのばす
大阪弁やんわり的を突いてくる
計算に強いが余命など読めず
図太くも　もろくもなって年をとる
ボチボチとメッキがはげて夫婦です
あせらずに余白きれいな色に塗る

大阪市

清水絹子

真夜中の児の咳一つ顔のぞく

身の丈も親を越えては叱られず

灯ある家の温さよ旅帰り

赤飯炊くなにもないけどおついたち

別れたらあかんと松葉枯れて落ち

十キロの米は孫ほど軽くなし

冷房に切りかえデパート年の暮れ

快気内祝一件落着十二月

姑の忌も母の忌もくる如月よ

乗ってみてなんとゆっくり救急車

お早ようお帰り亡姑の声して送りだす

一人居にハイハイハイと家事雑多

素うどんを食べて暖簾の名をおぼえ

桐箪笥のしみはおんなの夢のあと

来て食べて寝る子に父の影はなく

大阪市

清水利武

離れても深い絆のラブコール
神経の鈍い男で片思い
子育ての甘さ警察から電話
尻軽な女は口もよく動く
嬉しさを隠し切れないランドセル
世の中は金で済む事済まぬ事
火傷する恋に憧れ旅に出る
好奇心何処か似ている俺あいつ
価値観の違いが喧嘩の種になる
金もあり暇もあるのに寝老人
健康という仕合せをただで買え
人間の心に潜む善と悪
医者に手を握られている不仕合せ
金の成る木たくさんほしい年の暮れ
手拭をねじりおはこの芸が出る

松山市

白石春嶺

かみそりを持てば無口になる床屋
地球儀のここが燃えてる飢えている
まな板を尾ひれが叩く生け作り
貰う日もあろう差し出す献血車
猿山のルールはボスの一睨み
さっそうと親をせびりに来る新車
片隅にいる正論を数で斬る
すばらしい眺めガイドの手に乗せる
どちらにも付かぬ女神で引き分ける
泳ぐのが下手で冷やめし組にいる
いい医者と信じてくすり効いてくる
踏ん切りがつけば迷ったのが不思議
捨てに来た子猫を連れて帰る雨
暑かろう水子地蔵の飴が溶け
裏町を夜は表にするネオン

米子市

白根ふみ

太陽が必ず明日にしてくれる
臘梅と深い約束して　春に

老母が語ると一番まるい輪になって
目覚しが女神になると眠りだす

生きざまを残せるように墨をする
錯覚を笑えぬ独り身のくらし

雑念がひろがる雑木ばやしの中
あいまいな風を抜けでてレモン噛む

えのぐ筆ひとりの隙間ぬりつぶす
壺を焼く奥が深くてとどかない

きのうより遠くへ飛んだ笑顔たち
紙ふうせん糊の接ぎめを信じきる

風きった昔の服が捨てられぬ
スマートに歩くと蝶がついてくる

朝食を抜かすと今日が狂いだす

香川県

新川マサヱ

花吹雪川一パイの絵巻物
夕立に一息入れた庭の青
満月が部屋の中まで呼びに来る
酔さます風がほしくて輪をぬける
遠回りしてみて欲が少し出る
霜に逢うまではステキな色でした
落ちそうな煙草の灰をそっとすけ
病む人にせめて一日の春よ来い
蒔いた種刈り取るために流す汗
運まかせブレーキのない坂走る
本当に嘘でもよいのあの笑顔
冴え渡る月が道づれしてくれる
荒波を越えて二人の掌が温い
歯車が朝の笑顔で動き出す
底抜けに明るい顔で輪をつくる

鳥取県

新家完司

さくら咲く今は死にたくない季節
遊ぶのが好きなともだちばかり来る
節度ある恋をしようと思うかな
さわってはいけない人とお茶を飲む
何かして上げたいけれど人の妻
海鳴りよ人は激しく老いて行く
傷のあるリンゴのほうがいい匂い
あたたかい息をしている木の玩具
目の前の人とかなしいほどの距離
いっしんにうごくめしくうひとのあご
無実です証拠なんかはないけれど
傷ついていないふりなら慣れている
この世とは冷たい雨の降るところ
死にたいというともだちに会いに行く
鯉のぼりまたこの国が好きになる

米子市

菅井　とも子

母の砦を受話器ひとつで守っている
響き合いながら二人で生きて来た
端役だが私も劇の中に居る
すきあれば煙出したい玉手箱
幸せが逃げないように見張っている
門限に窓が大きく開けてある
乾きすぎた壺がだんだん喋り出す
大声を出したくなると旗を振る
何時来ても里の時計は止っている
首実験するまで返事延ばしとく
もう一度道順変えて旅したい
かくれんぼ　この儘石になりそうで
向う岸の花の紅にはかなわない
次に割る茶碗はちゃんと決めてある
願わくば一足あとの渡し舟

鳥取県

鈴木公弘

寝袋の中で見ている山がある
奥の間をまだ無視できぬ咳払い
米櫃を担いで走る日がつづく
体温の差が知りたくて電話する
悪性か否か経過を観るという
和を結ぶ紐に抜かりはなかったか
父と書く字の大きさを考える
家柄を包んだ地図が破れない
切り株のどれにも深い訳がある
生き残る塩の加減がむずかしい
先送りするには丁度よい　あした
明日が来る筈だと思い込んでいる
気付かれるまでは秘密にしておこう
玄関を開けていくさの始まりだ
再びのない風景を生きている

大阪市

鈴木節子

七夕にまだ願いごと二つ三つ
よく眠る五臓六腑はまだ確か
よろこんでまだ踏台になれるなら
人恋し記憶ばかりを継ぎ合す
春うらら セーターの色選っている
カーテンが風にゆれてる気のゆるみ
ためらった愛が記憶の底にある
物差しをいくつも持っている同居
桐箱に未練ばかりが詰めてある
ゆかた縫う遠い記憶を辿りつつ
ボタン一つ取れたぐらいの人が好き
誤解がとけて俎の音リズミカル
ひとり暮しいつでもお湯が沸いている
亡母の歳目安に生きる土踏まず
一人住いに蘭の花ほころびぬ

尼崎市

住谷石舟

坂道で子に手は貸さぬ父である
溜め息をつくにも男場所を選り
他人さまが儲かる話聞いて飲み
きっちりと昼棟梁の腹時計
歓心を買う空振りが多すぎる
辞令一枚定年までの流転かな
手抜きなど血液型が許さない
子のための枕木でよし凡夫婦
リンゴの唄から出直しをした焦土
粗大ゴミのままでは惜しい知恵袋
駄菓子屋のばあちゃんに孫顔が利く
筮竹がわたしの節目かき回す
老いひとりまだ風鈴を軒に吊り
肩書をはずすと耳がよく聞こえ
俺と言う貧乏籤を引いた妻

西宮市　瀬尾　六郎太

輪になれば楽しや苦しさ数珠つなぎ
家出れば家忘るるがモットーで
男　女　あわやの均衡素敵だな
車掃き買って間もない間だけ
車　人　立場変われば邪魔になり
お互いに元気なうちにフルムーン
老い二人どちら先やろジャンケンポン
うっとうしい顔して席を詰めてくれ
混んでても座席に荷物知らぬ顔
針供養千人針も忘れまじ
エイズ病シルクロード経ずに来て
苦心作ほどには誰も褒めもせず
仕事場の父ちゃんペコペコ可哀相
洗濯に出した途端に入用で
出る前が楽しゴルフのスコアよみ

吹田市　瀬戸まさよ

人生の舞台へ響く二十歳の柝
秋風は若さと老いを吹きわける
木々匂う立ち止まり立ち止まり行く
公園の昼カリヨンがひとり鳴る
赤ちゃんに見つめられてるエレベーター
軽小に憧れ果てはプチトマト
子供とて一人格者わが家風
名人は石から慈悲を彫りおこす
毎日の無事ありがたく満ち足りず
受験期の戦友母と子の夜食
家族から責められている父の咳
猿回しいて猿がいる政治ああ
大奥の片鱗もある職場です
過労死という人柱今も尚
死を想う生きていく意味なお想う

黒石市

相馬一花

アオムシのように野菜を食わされる
悪妻と人に言うほど惚れている
子が二人これが私の遺産です
夫には大きい面で素顔見せ
ここからは酒の力を借りて言う
混浴を出ると社長の顔になる
三次会帰りのマッチ堰に捨て
条件を切り出す前の咳払い
スタミナがあるから嘘がまだつける
釣り合わぬ二人が並ぶ披露宴
特売日妻が勇者に見えてくる
マドンナのように磨いて売るリンゴ
裸婦像を鑑賞できぬ女流展
老眼鏡外すとみんな美女ばかり
露天風呂　月に背中を流させる

静岡県

薗田獏沓

瑞穂の国ひと夏冷えて米騒動
五目飯お代り要らぬ齢になり
退院前看護婦さんにほっとかれ
山の駅紅葉の中の発車ベル
「力より金や」と言うた老議員
豊作が夢に終って夕日映え
ちょっといい女だ意地悪してみたい
掃き溜めに鶴と言われた女も老い
木枯らしに夫婦の杖が立ちすくむ
コシヒカリたらふく食うてはばからず
胎内へ沢庵を噛む音聞かす
お米屋の奥から出てくる内地米
おじいちゃんそろそろ襟巻仕舞おうか
花冷えに又着ぶくれに逆戻り
腰軽くハイハイハイと新社員

出雲市

園山多賀子

ちぎれ雲有縁の絆絶ち切れぬ
告白の出来ぬ未知数だってある
綺麗事並べて空に嗤われる
夫よりも先に死ねないそれも愛
掘り下げた話はしない遠花火
名案が浮かばぬロダン蹲る
女偏意地を晒してもめている
ミニトマト鄙びた愛を意識する
鈍行で駅名拾う旅が好き
話題から外されていく蝸牛
粉雪が舞うと艶めく雪女
諦観の余生流れに沿うて生き
さわやかな笑顔善人だと思う
贅肉がとれて心が見えてくる
混み入った話は花が咲いてから

八尾市

高杉鬼遊

親がいて子がいてぬくい灯が点り
梅雨しとどお地蔵さんに笠がない
お隣の顔を見てから席につく
別荘があるわけでなし夏休み
でぼちんへ唾つけておく好きなひと
働いている蟻を見る甲斐性なし
きび団子ほしいが恐い鬼が島
灯を消して隠すものなき花の闇
水争いの村を結んで虹が立つ
矢の思い弓の想いに的がゆれ
紙風船みんな貧しい友ばかり
たった一人のあなたと歩く向い風
風葬のわたしを待っている鴉
水葬のあなたを待っている魚

八尾市

高杉千歩

さくら咲く放浪癖はまだやまず
人間が好きで丸い風と住む
すべってころんで余生に弾む手毬うた
爪に灯をともし優雅に生きてます
森いくつぬけたか木馬の眼が笑う
冥府にもともだちの輪がふえてくる
嫁は娘でないと聞かせる愛の距離
絵三昧　世事にはうといいろは唄
片方の耳で世間とおつきあい
北向地蔵さんと話がはずむ彼岸花
夫婦絵図　妻はいつでも釦つけ
凭れ癖ついてしまったかすみ草
仲よしのままで夫婦をしています
風に消え風に生れてみな他人
許さねばこの幸せに逃げられる

岸和田市

高須賀　金太

大阪の鬼門に住んでようこける
死んだふりして風が押すのを待っている
アフリカのパワーは大地のリズムだな
いい勝負おれもおまえも頑固だな
星一つ選んだ道に悔いはない
銭もうけ誰が教えてくれますか
市電の頃は堺に風車まだあった
名前負けしたのか悦上がらない
大臣という名そんなに欲しいのか
花の種チャンスはきっとやって来る
母ちゃんの口にはとても敵わない
山頭火ぼくも放浪したくなり
おだやかになったな歳を食ったかな
心から君はにんげん愛せるか
乾杯は人間できてからにする

堺市　高橋千万子

よろめいた乳房と知らず子が求め
真実の恋を童話にする大人
真実を語れぬ女と深い仲
片思い世間話をして別れ
さしかける傘に心も添うて行き
家族だけ知ってるガンの日向ぼこ
肩書を並べ度胸の足しにする
寸借詐欺の手みやげおいしかった事
余白残してあなたの意見待ってます
うら表上下左右を紙にきく
しわくちゃは恥と風船自爆する
居直って女ケラケラ笑い出す
さじ投げた医者にうなずく今日が来た
余命いくばく時間はおれの宝もの
タンポポを吹いて老後を任せよう

豊中市

滝北博史

ちちろ虫階下に妻という他人
妻だからたまに夫を叱ります
戦争はまだ残ってるぼくの耳
狩るか狩られるか都会は森だから
仲人の上司夫妻が別居中
ゆっくりと別れ話は進めます
台風も大空襲も耐えた母
対岸はアメリカだけでない日本
除夜の鐘恋はいつでも片思い
好きな女ぼくのうしろにいる写真
占いは吉と出たけど不倫です
一日中　話相手のない不幸
お互いの影はとっくに仲直り
サイ銭は妻と一緒でございます
新しいメガネをかけて古稀の春

唐津市

田口虹汀

母の日の花は外国生れなり
日本の花で埋めたい父の日よ
華も葉も根も役立てて蓮は生き
おいおいと古稀まで妻を呼びつづけ
糟糠の妻が隣で欠伸する
大学へ五人も出した靴の私語
母の字で男結びの荷が届く
気紛れな秋の女の乗馬服
いい加減呆けているのに呆け防止
傘寿猶僕は我が家の避雷針
傘寿まで届く梯子を買うておく
七人の敵より怖い子供の目
玉手箱の中に欠伸が詰めてある
煩悩が描く五欲の地獄絵図
お別れの釘はしずかに石で打ち

町田市

竹内紫錆

富士下山　孫のいる街見えてくる

タイムカード父の日からのネクタイで

筆者筆者とわれながら肩が凝り

気の合った六十路　双曲線に似て

青芝に帽子がかっこよく落ちる

干支の絵をかく人も定年

女性課長の窓近き髪

方向音痴にともる新宿

辞書を教わるのも大恩義

喜寿をめざして胃カメラに慣れ

沈澱の色から化学技師の道

告別の写真いきいきベレー帽

賞品の扇子は若手棋士の筆

十年日記　関節はみな鍛えねば

万歩計よどうだ異国の大通り

出雲市

竹　治　ちかし

戦など知らない指で鶴を折る
明日も晴れだろう妻子の良い寝息
一畳を塞ぎ親父の良い寝顔
親の樹を越えても親の庭で咲き
父の眼がやさしくなって娘を語り
子の蕾咲かせて細る母の幹
可愛い名付けた娘の反抗期
親に似た顔で子供の自己主張
妻だから言える言葉が胸を刺し
冬の色染まって過疎は語らない
間違いを許して里の山枯れる
小さくも花実を付けて義理果す
尾を振れば済むに一声吠えた悔い
膝に乗る猫で時々爪を出す
常識の違いが若さかも知れぬ

鳥取市

武田帆雀

出来心思わぬ鯛を釣りあげる
露天風呂　社長も同じ臍がある
嘘混ぜて書く営業日誌草臥れる
朝食に昨夜の芸は醒めている
パチンコと鰻を喰った戻り税
着古した背広に轍が染みている
反対に精一杯の咳をする
これからが厳しい喪主のほつれ髪
負け犬の首でよければ差しあげる
団体のバスでゆっくり拝めない
ばたばたと働く父が鎌を研ぐ
優雅さを堪能させて菊が散る
預金してさわやかに開く自動ドア
赴任地に慣れておいしい店を知る
大粒の涙に演技賞出そう

米子市

田中亜弥

美しい耳だやっぱり仏だな
笑いころげて若さ一つを取りもどす
銀河鉄道の駅を探しにいったまま
振れば出る小槌ないしょで持っている
夫と会うひととき魔女になりきろう
林檎一つで象とかけひきしています
荒行の息がいまだに山にある
旅ぐせがついてしまったおばあさん
三日月よ未完のままの美しさ
門の外豆を拾いに鬼がくる
わたし生き生き今日も献血して帰る
母の砦に大きいコタツしてあげる
男いろいろ丈夫な夫で恙無し
時ならぬ螢が冬の天にいる
ヤジロベエが動いて僕を眠らせぬ

尼崎市

田中　薫

てのひらにフーガはじまる森の五月
てのひらに童話転がるかなしい嘘
てのひらの石のひとつは愚かなジョーク
ある日みにくしと思うぼくのてのひら
ひと恋えばしきりに渇く秋のてのひら
てのひらになじむ貧しき石のかたち
ゼニ貰うかたちにひらくぼくのてのひら
人憎むかなしさてのひらに　月光を落とす
おんなの掌　遠くで硝子割れている
おんなの掌　ぼくのいのちがはらはらこぼれ
てのひらを抜けるひと握りの時間
てのひらは枯野か　雪降り雪降り
てのひらの石が冷たくて　たばこまみれ
てのひらにこの世の闇が踞る
地獄の太鼓鳴りやまずてのひらのゴッホ

京都府

田中笑風

十人の老友どこか病んでいる
少しだけ阿呆になって忙しい
旨いもの食べてるときの幸せよ
先生も家で裸になっている
灰皿は止そうよ花が活けてある
力仕事あいにく妻は不在です
かごの鳥　紙鉄砲で落ちました
人生はこれから薬飲みながら
信仰の差でご利益がまだ来ない
楽しくてきれいな職が見つからず
目が笑っていたから少し気を許す
胸張って歩けと影が言ってます
カニ料理　仲居は腕の見せどころ
だし抜けにネジを巻かれた鳩時計
禁煙の駅で女が吸っている

豊中市

田中正坊

どのペンにかえてもやはり僕の文字
義人とは一字違いのわたしの名
来年も生きるつもりの花の種
一日に法事が二つ　花吹雪
女郎花やわいおとこが多すぎる
ほどほどに炎える余生の篝火花
一の矢を放ちながらもまだ迷い
幸せはじっくりがよし豆を煮る
さかさまに読めば聖書が面白い
古希の希は稀にはあらず希望の希
起承転結　七言絶句　唐詩選
兵馬俑　男はみんな戦好き
燕雀でよし鴻鵠をうらやまず
板塀のビラが濡れてる尋ね犬
桃の花　孫が十五になりました

和歌山市

田中輝子

淡く濃く生きておんなの七変化
来る人ごとのお世辞をきいて開くバラ
悲しみの深さではなせない帽子
自画像の真ん中にある桜の木
夏草といくさの話などしよう
霧の向こうにおいてきたのは星月夜
華やかさの中にぽつんと水溜り
どうしても一足す一が解けぬ日よ
目頭から時々あふれでる景色
愛憎の果て生玉子茹で玉子
晴天の空よ真剣勝負など
青梅のひとつひとつにある宴
誕生日ごとに光ってくる呼吸
夜が明けて行進曲が鳴り響く
育てられた恩を返しにいく迷路

羽曳野市

田中透太

チンドン屋の後に従いていく春の街
握る手も握られる手も温かい
昔から寺町に咲く百日紅
織田作の口縄坂も秋のいろ
古寺巡礼露伴の塔も冬景色
どこまでも流されてゆく騙し舟
もう一度風が吹いたら鬼になる
背信の男を責める薔薇の棘
行き先も告げず来たのは神の森
順番に咲かぬ花にも水をやり
奔流になって一気に勝負する
無念だと亡父のノートに書いてある
晩学の父のノートに自負がある
青年の樹にたっぷりと水をやる
回り道した分春を楽しもう

岸和田市

田中文時

ランドセルいじめられるないじめるな

気楽にと言って貸したら返さない

チャイム押す指がためらう午前様

解放感人は左遷と言うけれど

信号は赤でも臨機応変に

立ち呑みは出来ない今日は歯の治療

毒五十薬五十の酒愛す

初孫が始めて聞いた除夜の鐘

初孫を甘やかすなと娘の賀状

セットした妻へ用意の褒め言葉

新聞を目で追い耳は妻に貸し

人妻にゃとても優しい夫です

倦怠期後家とやもめのような夜

ひと桁生まれ親に従い子にまでも

白紙には戻せぬ過去の親不幸

和歌山市

田中みね

這えば立て立てば頭の切れる子に
予防線張って魅惑の人と飲む
動かせぬ現実として人の逝く
死の灰を降らせた空が青すぎる
今に見ろ雑魚の叫びが聞こえるか
ためらわず未知の世界へ翔ぶ二十歳
見て楽し買って楽しい孫の物
罪いくつ女の性を知る鏡
火の鳥となってルージュが赤すぎる
好きだった頃のあなたは光ってた
倖せを呼んで最後の娘が嫁ぐ
大事な話　貴方テレビを消しなはれ
一番の味方は妻と信じたい
火の玉を抱いて明日の虹を追う
役終えて燃える夕陽に包まれる

倉敷市

田辺灸六

出た釘と知ったら潔く打たれ
寒くなったなと肩書のない名刺
運鈍根亀の歩幅は変えないぞ
軽くても身動きさせぬ落し蓋
愛情を小出しにくれる樹の温み
子育ての苦労は言わぬ母の川
温度差を部屋に持ち込む見舞客
見舞われるより見舞う身の有難さ
元気だと言われるほどの医者通い
親馬鹿の愚痴につまずくのも絆
受け容れてくれぬ他人の面構え
あきらめがついた余生の夫婦旅
年金に礼を言いたい花の旅
老夫婦楷書のような日を送り
一隅を照らし安楽死を願う

松原市 故

谷垣史好

小説の女恋しや江戸恋し
ナマケモノという動物がおり安心す
烏かあーお前は無責任野党
新聞を半年読まず飢えもせず
地球揺すると難民がこぼれ落ち
モツ鍋がはやる衆愚と言う勿れ
蕎麦食えばそこに池波正太郎
猫か女か真夜中に泣いてるよ
個性とは五色あんパンぐらいの差
尿はつめたしおしっこはあたたかし
なつかしい見舞い明石の焼あなご
蟬三日蛍二十日の尊厳死
まんじゅうをモグモグかくて老いゆくか
死に急ぐことはないが誰かが呼んでいる
あの世から密書が届く出かけねば

鳥取県

谷口次男

父の日も頭の中はカネのこと
あの神社　貧乏神と泡の神
悪魔やら核実験やらある戸籍
吉宗の爪の垢でも飲んでみろ
ただ酒を飲ませてからの実はなあ
汚すまい地球にスペアありません
石油から生命を産むかバイオテク
天高し隣のことは気にすまい
バーゲンに大臣のイス売ってある
微かだが人の声するダムの底
肝臓の修理を終えてビヤガーデン
天国も満員らしいと風がいう
安心と油断はとっても仲がええ
岩よりも固い決意というラッパ
騙されて総理大臣になっただけ

松山市

谷　真風

男なり平気な顔をして居よう
誕生日せめて病衣の衣替え
くだらない事はおぼえている頭
そら豆むくかろんかろんと音楽し
おしゃべり菩薩人を楽しくしてくれる
まず空を見る癖がある僕の朝
どくだみの白い十字に咲く日陰
たばこ一服　女苦労をまぎらわす
悟ったかもう弱ったか腹立てぬ
よく光る山ふところの小さい灯
老友と生きくらべかな年賀状
言いたい事言ってしまったのど仏
総入れ歯人の情けを噛みしめる
放っておかれたくない立ち入られたくもない
燃えないように焦げないようにしぶ団扇

松原市

玉置重人

そもそもの謎は私がここにいる
イントロににぶい男でよく食べる
車間距離きっちり守る倦怠期
ときどきは遅れる時計欲しくなる
帽子掛け今日は妥協をせぬつもり
スロースロースロー勘忍袋縫うている
よく染まる色を悪友持ってくる
アクセルを踏まねば萎えてくる男
外股で歩いています均等法
カラフルな薬器用に飲み分ける
美しい顔だ全力出している
焼肉の煙が抜けぬガード下
マンガ読むセビロの顔を見てしまう
怠けたらあかんと庭の草が伸び
引き際の美学をいつも考える

和歌山市

玉置当代

春風に誘われスキップしたくなる
雑魚なりの頭で泳ぐこと覚え
頂上を目指して歩む亀である
亡き姑がまた懐かしい盆供養
助け舟出さねば沈む友がいる
ひび割れた茶碗元には戻らない
もう抱いた夢をみている岩田帯
飾りっ気ないので友が来てくれる
優柔不断わたしの彩が消えてゆく
茜雲　さあこれからが正念場
今わたしガラスの靴を履いている
大空を憧れているあひるの子
ほとぼりが冷めたら電話してみよう
真っ当に生きて悔いなく見る夕日
この辺で翔んでみようか赤い靴

鳥取県

田村きみ子

ふしくれの指でひとりの鍋洗う
寝て見れば風邪も大病だと思う
ユーモアの中で野心をちらつかせ
女らしさ秘めたやなぎが手で折れぬ
ふたたびの四季に出合ってある思い
水溜り飛ぶと何かを忘れている
風よ雲よきれいなバラが咲きました
時の流れに盲目となる愛がある
父が笑うと眉が可愛くなりました
スラスラと忍と言う字がまだ書けぬ
チャレンジにまだまだファイト持っている
甲虫　神の怒りが聞こえますか
般若心経ひま惜しまない日が続く
愛と言う胸の鼓動は何だろう
私の心に耳を立てて見る

広島県

田村新造

望郷に泣いた寒夜の北斗星（雪のシベリア）
明日もまた生かせと祈る北斗星
捕虜という呼び名悲しい北の果て
死体積む手付きも慣れて捕虜哀し
隣ではもう死んだのか動かない
生き地獄死ぬのを待って剝ぐ肌着
ダモイ東京友が越されぬ長い冬
ハシゴかけ屍に屍積む無残
日暮れなおノルマ届かず雪やまず
半分が逝き捕虜の部屋広くなり
ラーゲリの夢銀シャリのてんこ盛り
アンペラを敷いてさむざむ捕虜の部屋
シベリアの捕虜になかった神ほとけ
人の死を見飽きてやっと春の雪
まだ生きていたアムールの水ぬるむ

和歌山市

垂井千寿子

花を画く花の心を探りつつ
望郷の風に乗ってる祭り笛
少年の大志を持たぬ世が怖い
子へつなぐ地球へ捨てる物を選る
ままごとの客両親の縮図かも
弱点はまだ見せられぬ影法師
見え過ぎる眼鏡で友が減ってくる
真夜中の秒針凍てた心抱く
思い出の傷空白のページから
夫逝って優しい子等の傘の下
割り切ってピエロになった身の軽さ
身を守る刺ですバラの定めです
今昔の慕心変らぬ近松忌
残照に明日の決心促され
理想一杯持って長生きするつもり

姫路市

丁坪　サワ子

終水を頼む嫁です宝です
老父逝きて母の居場所が揺れてくる
生き過ぎか未だこれからと七十五
死花を咲かす季節を見失う
ひとりよがりの席に画鋲が落ちていた
敬老日　長寿を褒める他人さま
底に棲む女が火花を嫁姑
お隣から見れば我が家も赤い花
おんぶに抱っこ嫁に預けている余生
逝く日まで元気と希う仏間の灯
自分史に出遇った人の数偲ぶ
若い日の涙も交ざる万華鏡
灼熱の余情を偲ぶ女郎花
きしむ輪へ孫が一滴潤滑油
やり残し多くて渡れぬ向う岸

今治市

月原宵明

飢えること知ってて節が枉げられず
頂点のやがては亡ぶ影を持つ
お茶漬の味で夫婦の長つづき
菜畑に染まった蝶は抜け出せぬ
セールスの悲哀すとんと陽が落ちる
体調は万全くしゃみ三つ出る
光らない靴が明日へ向いている
早春の渚で笑う土踏まず
洗濯機恨みつらみを渦へ捨て
耳は紅塗らぬかわりに何か吊る
夏の陣遂にカンナは討死にす
犬さえも青に変ると待っている
茹で蛸の自慢のポーズ鉤に吊る
正論を吐いて淋しく輪から去る
のど笛を見せて笑って後がない

五所川原市

對馬一閃

嘘のない家族で円い火を囲み
少年の夢は素敵な雲に乗る
虹掴むまでを歩けるだけ歩く
鷹の子を産んで孤独な鳶になる
母の樹のある方へゆくわかれ道
いい答え欲しくて父の樹に登る
百万の敵をも辞さぬ眼が光り
標的にされて男の貌が冴え
善人を演じて悪に戻れない
退き際を計る明日の風を読む
愚痴ぽろり老いの孤独を加速させ
満ち足りてこけし居眠りばかりする
子に残す地図に花道消しておく
妻と来て心が和む湯音きく
少しずつ身辺整理して老いる

豊中市

辻川慶子

白いページにときめきがあり初日記
それなりの手帳に明日のスケジュール
春風が心やさしくしてくれる
理想とはすこうし違う人と添い
ナイターに釘づけされて何もせず
函館の雨もまたよし修道院
気がかりは同窓会に見えぬ顔
老夫婦言わず語らず仲直り
夏の浜　夕暮れが好き雲が好き
信号を何度見送る立ち話
モンタンの枯葉ながれる珈琲店
天国へ召される母の顔やさし
間違いの電話切らずにお話を
木犀の香に振りむけばいい月夜
春夏秋冬ときめきがあり菊活ける

高槻市

辻　白渓子

肩組んで歩けば怖いものがない
湯豆腐の湯気の向こうは他人です
座布団の前列空いているお通夜
顔合うとすぐ反対の事を言う
法律に触れぬ程度の野心抱く
はっきりと酔うた姿が影に出る
慰める言葉も肩に手を触れる
他人ならとっくに別れている喧嘩
心から感謝が言葉だけで足る
前掛けで客に接している本家
脱いでまたスター人気をとり戻す
温泉の効目男に縁がない
悪友が一緒だったと庇うてくれ
改めて無理を頼みに来た土産
羅漢さま泣き出しそうな顔もいる

唐津市

筒井朴竜

一徹な親父清貧貫きぬ
日本一気高く止まる尾長鶏
三文の功徳早起き鶏を飼う
四海波　新夫新婦の帆掛け舟
五倫の書　紐解く極意　二刀流
六地蔵　百万遍に耳を貸し
七人の敵は身内へ潜り込み
蜂が来て蝶と乱舞す花の蜜
苦労甲斐在りて上棟マイホーム
渋滞車　尻目ジョギング老い達者
鯰五郎を追う潟櫂の釣り天狗
七山の観音滝で開眼す
八百萬神も磯釣り神集島（かしわじま）
古唐津で妻と粗茶酌む琴の春
唐三彩　目で撫で回す抹茶碗

松江市

恒松叮紅

初日の出　出産率が減る話
大正とそりが合わない青リンゴ
男世帯で糸が縺れてばかりいる
神様の火を大切にする出雲
愛たしか湯のみが二つ置いてある
大根めしの話お互い年をとり
ふた言目には晩酌のせいにする
お節介の癖が治らぬ総入れ歯
平成の畑で軍手生きている
畦道も野良着も老いて柿たわわ
親ゆずりの眉善人の中にいる
正直な夫婦でいつも残がない
酒一合やたら電話がしたくなる
美しく老いるつもりの背が曲がり
難しい言葉は要らぬ缶ビール

箕面市

坪田紅葉

長生きの家に平和の菊が咲く
遠い日の話に花が法事の膳
連休に振り回されてる親の顔
誕生日うれしくないとは言いにくい
この人も一人ぐらしかよくしゃべる
湯の中で話がはずむ里なまり
昨日会い今日は別れる旅の友
箱入りで育った娘に夢がない
伝統をまもりつづけた門がまえ
気配りが過ぎて自分を見失ない
足腰の弱さのカバー口がする
痩せたいと思う時にはやせられず
春うらうらあくびがうつるバスの席
湯の里のほのかな香り桜散る
箸紙に老舗の誇り生きている

鳥取県

津村八重子

バラ色に眠れよ愛の子守歌
やがて咲く命つぼみは手折るまい
墨つぼに父の指紋を見のがさぬ
あなどらず気負わず直い道すすむ
雑草の中でみつけた赤い花
老いせまる日びはかぞえぬ事にする
あの宿の思い出残る露天風呂
夕陽ゆらゆら今日一日の鍬洗う
ふっくらと佗助春の庭に笑む
岸辺から幼い記憶よみがえる
風の詩勿忘草もきいていた
壁にそう私の小さい影がある
浜なすも白兎の空の月に笑む
徳つんだ亡父の足跡消されない
マフラーもおしゃれに巻いたかわいい娘

大阪市

津守柳伸

謙虚さがあれば変っていた事情
器から褒めて出方を考える
種火チロチロＯＮに出来ずにいる輩
それなりに現実的で浪費家で
しあわせな居職女の鼻柱
軌道から逸れ諦めが先に立つ
明日あるを約束させる茜雲
針千本　女の園の花嵐
風花の私語と漁港のカニグルメ
一病息災　破目をはずせるはずがない
心掛け次第で丸い風に遇う
また少しかしこくさせる申告期
お年玉届けにまわる淋しがり
生き甲斐のひとつ晴れ着が出来上がる
ふろふきの好きなヤングは貴重品

大阪市

寺井東雲

青春は七ツ釦に奪われる

わたくしはわたしの好きなときに咲く

いざこざもきっちり測り皆平和

百歳になっても怖い夢を見る

宝石も気高さも乗る体重計

八党連合すったもんだで割れてくる

祖母しっかりぼんやり出来ぬ事になり

大きな口　鬼を負かした丸かじり

出会うたび名前聞いてるクラス会

栄養を取るなと医者に叱られる

運転に無免許の妻やかましい

交代で留守には出来ぬおばあさん

美容院犬の気持もわかります

わがままに食べて薬を飲んでいる

米袋積んで満腹感覚え

米子市

寺沢みど里

音のない駅で夜明けを待っている
運ばれた位置にたんぽぽ住み着いた
増水の川に背中は見せられぬ
ひび割れた皿といのちの話する
点滴に似た水音に眠れない
今日もまた祈り忘れた眠り猫
スプーンの中に真っ逆さまの私の絵
散りぎわの花の叫びを聞き洩らす
日記書くための机を磨いてる
裏表おなじ焼目をつけておく
野に咲いて許すことばに慣れて来た
黒塗りの椀にゆずれぬ位置がある
移す日が来たら予告をしてほしい
母の来た道を辿って苦しくなる
言い遺すことを笑いの中で言う

岸和田市

寺田甚一

感謝もし愚痴もこぼして恙無く
素顔では言えぬ話を酒にさせ
右派と左派ハト派タカ派がいて平和
牛歩よりましと渋滞あきらめる
勲章をつけて他人の顔になる
もったいないと溜めて押入パンクさせ
異議なしを言う会合に狩り出され
大器晩成　花を咲かせぬまま終る
お見舞に絵本を読んで孫帰る
七人の敵の一人に妻がいる
口下手が心ゆさぶる手紙書き
気休めの言葉もあてにする弱気
終の住処　所詮ローンに明け暮れる
何よりの土産元気な孫の顔
母の日は豪華　父の日ささやかに

奈良市

天正千梢

手を抜けば納得出来ない性格で
企みは撒餌を上手に食べている
正直者だろうはだしで歩いてる
はじらいの美学七十のうす化粧
ゴルバチョフくるみ割る歯を持ち合せ
黒豆おいしく煮えて嫁の座はたしか
敵に塩送る度量を見込まれる
必要経費芸術家の浪費
切れ味の悪い刀をもてあまし
そう言えば距離のとり方下手でした
袖の下もらった夜はねむられず
相手より早く刀を抜く男
草抜く身億のお金はよその事
馴れる事を許してくれない大自然
七十年ひとさまの明りで歩いて来

広島県

藤解静風

菜の花が咲く頃夫婦だけになる
夾竹桃咲く八月の六日朝
そして秋　月へ河童は涙する
折鶴は祈るかたちで跪く
置薬と妻には何時も世話になる
イエローカード妻がときどきちらつかす
家に妻　花屋に花のあるように
生きるっていいな米寿へ二十年
竹の街から春の招待状が来る
献血へ無用の老いを蚊がねらう
火柱をいまも持ってる父の塔
走り書き有無を言わせぬ右あがり
咲くサクラ散りゆくサクラ塾笑う
幸か不幸か舶来米を食べさされ
今にして想えば回り道したような

兵庫県

遠山可住

節分へ易者が一つ齢をとり
いいはなしお針が出来ることも添え
青春を刻むすばらしい未知だ
疑問ふとりんごが一つ落ちてから
帯の下で古い女を継いでいる
いつからか止り木持っている夫婦
街の子ようちに柚子湯が沸いている
ふるさとを出てから月は笑わない
ふるさとの門はいつでも開けてある
還らない戦友へ岬の風が哭く
騙してもだましても自然笑ろている
定年のめしはゆっくり噛むとする
母ひとり流れて来ない桃を待つ
柿の色さらりと秋は芸術家
首までの深さで泳ぐことにする

竹原市

時広一路

競い合わなくても花よ綺麗だよ
花満開　何も描き足すものはない
咲いた花みんな笑顔を持っている
白い紙　白い絵具も要るという
空振りをしても自信は崩さない
もう一枚　舌が無いからよく乾き
流されてみると気楽に今日が済み
別人となる石段を降りてくる
踏み切れぬままに助走はまだ続く
神様で無いから迷うことにする
直ぐ妥協するから森を出られない
背を丸くすまいよ影も真似るから
雲一つないから冬の絵にならぬ
真贋は言わぬ私の好きな軸
留守番の電話へ小言いうておく

京都市

都倉求芽

鬼も蛇もみんな出といで春ですよ
散る花へ誘われて鳴る鐘ひとつ
正直な花は花屋には並ばない
「ひまわり」が地球を画布に雲自在
一つや二つはゲリラもいそうな千羽鶴
ひとりずつ三人が遊ぶ団地の子
浮いているようには見せぬ雲の峰
神の意のとおりに赤い実は赤に
ひらがなの丸みが温い旅だより
そう言えば妻に頼まれて…おりました
わが家では滅多に茶碗割れませぬ
年順でこぼれる水になっておく
針葉樹の痛さが年々落ちてくる
楢山への地図継ぎ足して継ぎたして
この中にまだ母がいる小引出し

出雲市

富田蘭水

ふるさとでしっとり濡らす雨にあう
今年こそなんて日本語美しい
ぼけまいぞ言ったその日に罪一つ
織姫にすまない妻を持つ平和
さりげなく指のダイヤが物を言う
独り旅いつも心に君といる
真実を曲げぬ男と見直され
心まで売りはせんぞと独り酒
挨拶を育てています町づくり
道草をしてストレスを封じこめ
お花見に浮かれた間善人に
この好意渡ると橋が崩れそう
癖のある靴をちびらせまた逢いに
酒断ってまだまだ生きる青写真
よいしらせ来るまで靴を磨いてる

鳥取県

土橋螢

走らねば今日が明日になってゆく
一番好きな男とは女とは
赦そうか抱こうかそっと叱ろうか
愛は地に満ちて草にも花が咲く
そうですかあんたのお父さんですか
幸せに過ぎるもったいないですね
三歳の孫に教わることがある
家族五人が食う米は確保した
一粒万倍　種籾の自尊心
正解はひとつ麦飯食べている
特攻の五十回忌の盆がくる
なぜだろううれし涙が止まらない
木から樹になる年輪をもうひとつ
今日もまた極楽を探して歩く
菩薩から貰った知恵が出てこない

鳥取県

土橋睦子

愛という合流点で火を吹いた
交流の群にいるので忙しい
マラソンの曲り角から落伍する
思い切り泣いて私が見えてくる
入学金準備したのにサクラチル
愉快だな音痴が愛の歌唄う
焦点がぼやけた道を引き返す
永住の地と決めている座り胼胝
寝て起きるこの幸せがありがたい
踏まれても　女の意地は潰れない
赤い糸もつれたままの他人の妻
台風の目にも出会った渡り鳥
幼虫も変身したい旬となる
死ぬるまで頑固一徹だった父
美しい花を咲かせる種を蒔く

鳥取県

土橋はるお

次の世の飯を心配して死ぬる
人間になるまで山を下りられぬ
名水をごくんと喉の仏さま
神主さんといつも仏の話する
休肝日妻が忘れていたらしい
米粒がひっかかっているパンの耳
寄せ鍋だ肩の力を抜きなはれ
田の中に発破で取れぬ石がある
矢印が大きな嘘をついていた
D51よりも親父は黒い煙を吐く
山のてっぺんで転がす石を持ちあげる
百姓の日記に雨の日が続く
焼酎党の総裁がつとまらぬ
嫁さんをもろたら宝物にする
末席に以下同文が来て座る

米子市

中井ゆき

好きですと書けずに花の切手はる
ブランコを天まで漕いで逢いにゆく
ガラス玉の中の私泣いている
はこべ摘む母の想いでやわらかい
雪柳だれかかくしていませんか
稜線があるからみんな越えてゆき
あめ三日　言葉を忘れそうになる
煩悩を一つずつ消し蓮ひらく
真実を言えばこわれる音がする
蜩に何もなかった夏が逝く
十三夜　一葉に逢う月がない
忘却の川が火となるまんじゅしゃげ
千匹の虫が私の為になく
溺れぬようわら一本をはなさない
銀シャリに別れ話は出来ませぬ

藤井寺市

中島志洋

寄り添うて歩いただけの初デート
近道を行けば別れが早くなる
無礼講素直に聞いた勇み足
色褪せたのれんに秘めた繁盛記
毒舌をやんわり包む京訛り
包丁が欠伸している妻の留守
立ち読みの続き昨日の本がない
図書館で昼寝している不眠症
深々と頭を下げている野心
寅さんが下りてきそうな無人駅
おたやんの面を取っても同じ顔
澄んだ目に出掛けた嘘を引っ込める
金で済む話が金で揉めている
もう一押しすればよかった月の道
球場を去る敗戦の重い靴

宝塚市

中田純次

お水取り火の粉の仏降ってくる
戦場に捨てた命で歩いてる
蛍雪の夜夜母上は優しかり
余生とはありがたきもの天の恩
転勤をともに旅した鍋と釜
老化する五官の中で肥える舌
通信簿うまい褒め方子にやる気
城めぐり孫らに語る白虎隊
蒲焼きの匂　暖簾をくぐらせる
百貨店　酒の売場の銘に酔う
スーパーに外車乗りつけ葱大根
拘置所はゼネコンブームで増築中
目に仏　耳に教えを聴くが趣味
病院で死なないことに決めている
西行のように死にたい桜の下で

姫路市

中塚遊峰

召され散る比島の土を息子が訪ね
大物でないが亡夫に見せたい息子
嫁とらぬ息子に愚痴こぼし悔ゆる夜半
無我夢中突走ってた寡婦街道
今さらに懺悔に明ける人の道
何役もこなした余生　句に出合い
一生を路傍の石と心決め
流れ矢を受けて支えにした昔
銀婚も金婚も無い靴を履く
煩悩のからを脱ぎたいかたつむり
忍耐の二字でおさえた肚の虫
飲み込んだ言葉に欲しい消化剤
目をつむる事にも馴れて寡婦も古希
同病の励まし明日へ生きる糧
押す人の情けが動く車椅子

堺市

中野欅子

七十になってもうれし旅前夜
はんなりと吾うす紫に実りたし
勇気湧く東尋坊の濤しぶき
食べるより食べてる顔が美味しそう
留守電話一人芝居で間がわるし
子守歌小さいあくびと大あくび
リンゴ食む音さわやかに孫二人
絵ばかりの孫の手紙に絵で返事
夜食作り子から孫へと世は移る
孫の眉動いて祖父の影を見た
手文庫に祖母の匂のそろかしこ
鐘の音鳴り鎮むまで亡夫と居る
七つ星　柄杓で亡き子掬てほし
逆縁へ悟りも遠く香を燻く
黄昏て佳人のごとき塔の影

鳥取県

中原汲香

袋から出てくるものが予期できぬ
大中小の袋を待機させている
少年として対峙する夢の中
実も蓋もないまま一人暮しする
おこがましい助けるなどという台詞
かき揚げの中で親しい声を聞く
とても素適な今であるから笑顔する
嘘のない仏と汽車と子供たち
ひとと組むことがなかなかむずかしい
掌の中にあるのに探し続けている
いま通り過ぎた時間は仕方ない
刺されてもまだ憎めない花の棘
民の息吹は底から這い上がってくる
わたくしの歴史よ傘寿までとどく
連れだって笑ってくれるから味方

鳥取県

中原諷人

人の眼に丘であったと視えてくれる
生きたいと告げている売り声がはずむ
あの実が欲しや高い処に熟れている
少年に郷は狭いのかもしれぬ
海あおく裏動脈をふるさとに
いっきに喋り喉の痺れを地にかえす
どのようにしても数えておく夜だ
みぞおちに残響してる生命びろい
聞き採ってあげねば無駄な声になる
母という樹液を涸らしてはいない
一番重い水嚢だいて生きている
この宵の声もいのちを惜しむなり
いのち在りフルーツの樹にぶらさがる
おたがいの慰問袋が笑い合う
疑わぬことよ宝がたんとある

鳥取県

中原みさ子

花いかだ落ち着く先は羅漢の掌
したたかに生きてふたつの貌をもつ
女坂ころんで見せる時もある
ビックリ箱に私の影を入れておく
仮面はずして故里へ逢いに行く
少年の影を踏んでる女のこ
人間の欲が榊にぶら下がり
ヒュールルルひとりよがりの風になる
登りつめて虚しいものにしてしまう
真実を見失ってる深い森
動脈のはちきれそうなひとに逢う
投げられた言葉を深く噛み砕く
妥協する足下ばかり狂わせて
不覚にも少年の瞳にうろたえる
闇からの誘いへ眠り姫になる

奈良県

中原比呂志

おみくじを引いて覚悟が揺れており
目覚しがひとりやる気で鳴り止まず
天職と割り切るまでの長い坂
心ブラは覗いて喋って歩くだけ
青信号待てぬ大阪いそがしい
改札機はさんでおじぎまだ続き
気動車になろう男の連結器
券売機売上げ伸ばす五月晴れ
如意棒できれいにしたいとこだらけ
重い荷をまず受けとめた大臼歯
激安のチラシへ女迷わない
ちょっとだけ折れると丸い輪が動き
住む家を三つに分けろという遺産
額縁に似合うポーズを考える
真っすぐに歩いて瞳汚すまい

弘前市

中山雅城

今宵また天女に会えぬ露天風呂
津軽弁　平和の塔にも置いて来る
無欠席　母の煽てに乗っている
満腹の味を頬張る母の乳
魅力ない魚は岸に寄ってくる
空砲に乗せられている鯉幟
臍の緒に母と子だけの秘話がある
日本史の夏に消えないキノコ雲
全くもうどうしょうもないおじいさん
闘犬場　人の匂を嗅いでいる
ふくよかな胸を揃える志功展
和尚でも君で呼ばれるクラス会
土笛で千里の風の音を聞く
台風の目の真ん中で爪を研ぐ
体操が甲で喜ぶははでした

熊本市

永田俊子

鶴の瞑想或は人より深からん
セーターの編目からぬけてゆく若さ
愛に迷うシャンパングラスの細い脚
余暇知らぬ父の軍手のひとり言
ふるさとの山へ無冠の父詫びる
男です絵になりたくて樹に上る
酒に逃げ酒に甘えているピエロ
そろばんに合わぬ律気が捨てられず
よその時計が鳴っているよその幸せ
母の色に染まって母には及ばない
ロボットのひとつ覚えが侮れず
御仏の視線の先の蟻地獄
ためらわず行かねば私の日が暮れる
うゐのおくやま越えて来ました座りだこ
ああ余生つるべ落しに日が暮れる

松江市

柳楽鶴丸

蛙のジャンプは昔と変らない
畠の緑と違うホーレン草
性と生大切に生きている余生
生活美人に安心しています
名曲をきくとおんぼらとなって来る
ホールインワン蝶もびっくりして乱舞
宿帳の嘘は時効になりません
女が打つと女の音で鳴る太鼓
草も木も芽ぶいて来ました私も
中国の歴史が静かに語りかけ
一杯ほしくなった鉛色の空
中国の猫もニャーオと鳴いていた
雑草です美辞麗句は知りません
胸張ってズーズー弁で旅をする
心臓をブスリやさしい女文字

香川県

成重放任

袖の下　昔も今もお役人

道草をするすべもない塾通い

戸惑うていらぬことまで気を配り

挨拶をするまで酔えぬ披露宴

来客に付き合うコーヒー五六杯

夜明けまであの事ばかり気に掛り

来てほしい来れば帰ってほしい孫

転んでもただで起きない奴もいる

一杯の水が心を落ち着かせ

もう一寸馬鹿でよかった女房どの

カアチャンを避けて通ろう低気圧

ママだって週休二日はほしいのよ

戸が開かぬ隣の老婆へ声をかけ

四時と言う会合　四時に家を出る

頼みごと断る役は妻の役

鳥取県

西川和子

巣立たせて夫婦の絆より直す
群にいて短い足がもどかしい
人生を紙一枚に縛られる
目を向けて欲しい大きな嘘を言う
腕白の靴のサイズが親を越す
鈍行に乗り追い越されおいこされ
行く道にあった深ぁい水溜り
臆病な舟が岸から離れない
丸い味へ今日の厨は凪いでいる
血を流すことも覚悟のボランティア
割り切れぬとこが古いと笑われる
一声をかけ合う温い擦れ違い
動脈がいつも渋滞して困る
満ち足りて深い眠りに誘われる
還暦を老母が心配してくれる

西宮市

西口いわ忘

女心　僅かな嘘にくすぐられ
揚げ花火の中にわたしを潜ませる
少年は母を美人に画きたがる
バッジ一つと男の首がつながれる
パッチワーク恋のかけらを継ぐように
秘密一つ守り続けていて悪女
得意満面小さな嘘も混ぜながら
さるすべり父の病を思い出し
酒とろり時はとまっているのなり
いい話してくれそうな客が来る
雑踏の中で別れが言いやすし
女の髪にいくつドラマがうずもれる
なんらかの皮を着ている浮世なり
空の青選び抜かれた駿馬たち
すこし遠くへ行ってみたくてバスにのる

大阪市

西田柳宏子

親一人子一人という縄電車
強がりを言うても匂うサロンパス
父と子の対話焚火に芋が焼け
五百羅漢　痛さこらえる顔に逢う
親の目を盗むスリルを嬉しがり
知ってても騙され上手な老母で居る
愛すべき酒呑童子ですぐ眠る
口ほどに物言うた目も年をとり
逆境に笑顔絶やさぬのも内助
妻が居るだけで安らぐ酒の味
切口上どうやら今日は妻の乱
だんだんと歯に衣着せぬ妻の年
たくさんもないがと温いお裾分け
もうとまだそこから始まる泣き笑い
創始者のカレンダー休日などはない

大阪市

西出楓楽

雑兵でおえる立派な土踏まず

やはりあなたも友達ごっこしてますね

からだの中を風が吹く日は鍋みがく

ときにわが甲羅のサイズ間違える

大根の白さが怖くなってくる

人妻として心得る川の幅

だまし舟海の広さをまだ知らぬ

旅三日　見えないものが見えてくる

不覚にも道でおぼれたことがある

花が散るそろそろ自分みつけねば

敵はまだすらすら針に糸通す

紋切り型の手紙の余白から冬に

いつか飛ぶ鳥をこころの中で飼う

ざるで水何度掬えば許される

ていねいに苺をつぶす無の時間

鳥取市

西原艶子

歯を白く磨いて好きな歌うたう
まごころを送るまごころまた届く
じゃんけんぽん負けて愉快な鬼になる
十指みな子の傍らへ置いて母
人間の渇き知ってるのど仏
飾り皿　喜びの日は遠くなり
ふるさとの夢にはいつも母がいる
貧しさの中からくじの夢を買う
ほつれてはならぬ絆だ深く縫う
遠花火これでいいのだなと思う
ふるさとの松ぼっくりに詩がある
貧しさのぎりぎりにいて本を買う
貫くと決めた女のすわりだこ
酒臭い男に太い骨がある
ひたすらに耐えて器が欠けてくる

島根県

西村早苗

迷いまだ雨のポストのあたりまで
非常口確かめためらうなどはせぬ
耳なりがふと止んだのは風のせい
この想いすらすらと書く酔い心地
食べなけりゃ私が食べるメンタイコ
糸電話とっても明るい声で待ち
絵馬堂に亡父が悲願をしたまんま
誘われて誘ってあじさい寺は雨
ことことと春の匂の中で煮え
悠々自適とはいかないが生きている
すき間風こととことと豆が煮え
少うし狂った秋の桜を見においで
春陽気ひとときを酔う絵画展
自転車がポツンとあれはおやじのだ
寂しくて冬咲く花をまた買うて

鳥取市

西村黙光

父ちゃんがおむつ替えてる素敵な絵
校庭にノーベル賞の種を蒔く
風土記のシナリオ変えたキノコ雲
飽食の向うに飢餓の児らが住む
訛っても黒は白とは聞こえない
内緒ごとしたと夜中に胃がぐずる
銃口へひるまぬペンの逞しさ
涼しさを星と分け合う大ジョッキ
躾する親のしつけが出来てない
長寿法いつも笑顔を絶やさない
重箱の隅をつついて溝を掘る
補聴器のせいか聞こえぬ神の声
惚れたとは言わず合鍵渡される
沢庵をかじる歯応えたまらない
赤恥を掻く気になって若返り

岡山県

二宗吟平

金幣の風有り難しご縁日
この証書世界のためになれる幸
訪問販売人情ずくめで置いて去に
東京の客連れ横断道試乗
座布団をもらい米寿がぴんとこぬ
文化財とは恥ずかしい山車が荒れ
えらかったなあ頑張ったなあいのちの絵
八分咲き風なき風にさそわれる
遺言を書いて身軽に生きている
デーサービスまず血圧で安堵させ
参拝と遊び同席バスの旅
にんまりと笑う余裕がまだ出来ぬ
呼び水の拍手に乗って持つマイク
半世紀前を忘れて使い捨て
子や孫のような選者の没を食い

唐津市

仁部四郎

紳士です振舞酒に酔いはせぬ
皆勤の賞を小声で妻に告げ
挨拶の声が太いは芸のうち
後任へ苦労話のダンピング
つい便利だからお酒を消しゴムに
制服を脱いでもカゼをひかぬよう
黒白をすぐつけたがり罠に落ち
芸のない猿だが遅刻せずに来る
安かったからよと妻の青い靴
銀婚の日です水玉ワンピース
いつの世も飽食なぜか罪であり
兵隊はイヤです税はガンバリます
いつまでも終らぬぬり絵世界地図
再びはキグチコヘイに塗らぬスミ
魔女狩りに使ってならぬ菊の花

米子市

野坂なみ

朝の陽へまず濡れ傘をひろげよう
いきものの命いただき飯となる
ときどきは私の換気扇まわす
谷に生まれて谷の紅葉になりきろう
仏壇の前の胃がうすくなる
髪二本　秋の畳に落ちている
川を濁しまだまだ汚し生きのびる
父の傘　そのまま山の樹になった
縁の下でそのまま生きる母の石
約束へ　その日桜になっている
いつでもお詣り鍵のないお寺
そこまでは自分の足で歩きたい
夕日には今日の砂絵を見てもらう
あかね雲　もしもの時はよろしくね
星たちよ　今日の命をありがとう

倉敷市

野田素身郎

妻も娘も毛皮の前で立ち止まり

粥ひとつにも病院の味妻の味

似合わないと思うが買うのはお客様

転轍機ここから先は赤字線

顧みて忸怩たるものあり定年

主治医転勤　治癒せぬ僕を置いたまま

頼りがいある看護婦の太い尻

ごきぶりへ妻は闘志を掻き立てる

負けても負けても僕は阪神タイガース

もの静かに観光シスターご一行

義理で来て出口に近い席を占め

働き者だった母の忌勤労感謝の日

化石燃料いずれは尽きる時がくる

数ミリの段差につまずく後遺症

花鋏携え黄泉に旅立ちぬ（定女義姉）

今治市

野村京子

泣きに来た海が他人の顔をする
追伸がずっしり重いしだれ梅
逆縁を思う紋白蝶がとぶ
ひょっとこの面を被って出遅れる
標的へ矢をためらわぬのも女
ひきかえすにはあまりに遠い道しるべ
速達にします返事ほしいから
咲き切って花の一途が地に還る
ラストダンス絵になるはずの靴がぬげ
切り札がなくて善人寝るとする
私の話聞いてきいてと水中花
仏さまに許してもらう花を買う
母の手に悔いを溜めてる返し針
待つ恋で女の画布は白いまま
雪しきり誰も無口な冬の駅

川西市

野村静雄

友達が居るから医者へ行ってくる

全山を樹氷に神の荒き息

花の咲く時もあろうと一人酌む

神様も書けぬ九回裏がある

病室へリンゴを剝きに来てくれる

人を見る目のない中に好きになり

孝行をして孝行をされず老い

持ち味を生かしていつも三枚目

これまでは努力でこれる中位

不覚にも夫婦げんかを妻に勝ち

文楽へ行くご夫婦と立ち話

駅裏の屋台で仕上げして帰る

十二月八日は知らずクリスマス

美しいだけで罪だと気付かない

じわりじわり毒が回って行く地球

和歌山市

野村太茂津

心激しく躍る感動あるうちに
逃亡記　今は楽しいことばかり

ハムレット型かも知れぬ旅途中
期することあって気にせぬちぎれ雲

かく生きた本音を曝す陽に晒す
どしゃ降りの人生だった傘乾く

先の先読めて鯉口切ってある
堪忍袋が時折裂けそうになる

和を保つために恕した肚の底
細い手が外濠埋めに忍び寄る

幕切れの短い台詞秘めてある
ジグザグに生きて煌くもの一つ

矯めつ眇めつ古い言葉を捨て惜しむ
空即是色　傘寿の彩は決めてある

口惜しいが今日も魂売り尽す

奈良県

長谷川　春蘭

息災に夫婦老いゆく福寿草
親しさも折目正しく書く年賀
余生なお句の杖しかと握りしめ
枝豆のざるに仲良し小よしの手
凍てどけの径たしかむ老いの杖
残寒に耐ゆる八十路の膝がしら
健やかに余生大事と冬至粥
ガムに似た味は何時しか無い夫婦
忘却という幸せもあり日向ぼこ
母が居るただそれだけの子の帰省
秋の雲縹渺として街遠し
蕗味噌の小皿の中にある故郷
理由無き憎しみ湧きぬ夜の蜘蛛
むっとして出て蜘蛛の巣にひっかかる
指切りをことのはずみでしてしまう

弘前市

波多野　五楽庵

折鶴の小さな海の津波かな
空を見てごらん疼みがなえてくる
涙もろくて涙もろくて人ぎらい
ああ我も抑えのきかぬ炎なり
恐山いのちの風が来て遊ぶ
目を閉じて風の詭弁に聞き惚れる
朴訥で人にお辞儀をしてばかり
耳鳴りもホトケの慈悲と思うなり
宗達か世阿弥か月の花びらか
寝そびれて与謝野晶子の歌に泣く
お話はやめて氷がとけるから
にらめっこよそうよ愛があるじゃない
そして花火の音が静かになってゆく
花咲けば一目おめもじ申したく
誘惑のうまいレモンを噛んでいる

鳥取県

羽津川　公乃

胸襟を開いて青い空を抱く
真実を一つ大事にコピーする
吐く息が白い善人だと思う
七難のある顔だから親しまれ
君が代も日の丸も好き御飯好き
実直な父からの血を持て余す
宿命のライバル実は姉でした
夫より歩幅の広くなる不安
帰巣性信じ息子を送りだす
誇り高き人と衝突ばかりする
自立した顔に孤独は覗かせぬ
ロボットに義理人情も教え込む
水澄んで昨日の罪が浮き上がる
暖流に流されてゆく期待感
爪まるく切って泰然自若たり

枚方市　八田　敏

古希の身になお蘇る兵の歌
約束をして来た孫の澄んだ目と
誘い合う悪友もなし二度の職
社友会かつての鬼は好々爺
酔眼でタクシーの釣り確かめる
飼犬のあくびがうつる長い雨
その日から婿殿　紐に繋がれる
この味で我慢してるか婿殿は
引っ越しへ声だけかけて知らぬ顔
達筆の手紙　返事は電話する
パンはみな代用食と言った父
老いふたり野菜ばかりの冷蔵庫
妻という味方に時々攻められる
子も孫もひ孫も女で婆達者
川柳で今日の日記を締めくくる

岡山県

濱野奇童

残り火を掻き立てにくる南風
窓際にいて故郷の青を恋う
刃こぼれの鈍刀を研ぐ抵抗さ
見栄はもう止せと年金証書くる
蟻よアリ働く時代過ぎたとさ
みんなして主役を乗せた泥の舟
お通夜へ　はしゃぐ九官鳥がいる
月下美人　今ひとときを炎えつくす
まだ奥があるぞと鐘乳洞の水
小さな嘘一つを攻める夜の雨
一人居の老母がまだ吹く火吹竹
束ね髪　亡夫の力　母が持つ
続編へ確かに刻む母の唄
追い越してからは一人の道を行く
万歩計　白寿の夢を見て歩く

唐津市

浜本義美

恍惚の亡母を叱った罪いくつ
個室からふるさとが見え浄土みえ
褌を白旗にして生き伸びる
閉山の挽歌フェリーが島を発つ
玄海の潮噴きこぼれサザエ焼け
万緑のふるさと削りまたけずり
残されしいのちひと日を大事がり
手を繋ぐことを覚えた園児たち
痩せるだけ痩せても生きる薬漬け
退院の日から頑固がまた戻り
許されて一本燗ける病み上がり
錠剤の一色増えて粥を炊く
来年はクビかも知れぬ案山子たち
橋架けて島へレジャーが攻めてくる
主義主張越え「君ヶ代」の空仰ぐ

唐津市

浜本ちよ

定年という安心は母に無い
影ぼうしお前はシャンとして歩け
世に男あるうち減量続くだろ
見なれたる景色見直す雪の朝
伸びやかな草書にも似るプロの唄
賛成にばかり手を上げ下級武士
二次会で理性の鎧ずり落ちる
感情で女　道理に立ち向かう
ストライクゾーン広げて良い夫婦
四季の花咲かせ豊かな人が住む
冷え切った麦茶があって熱いお茶
カラオケに金釘流が引き出され
したたかな女　男を赦してる
涙する間もなく祭壇霊柩車
庶民です既製の服がピタリ合う

米子市

林　荒介

ふる里に川幅があり立ち止まる
響いて風　森は自分を語らない
面裏のちちの鋳型はまだ元気
桜並木が消えた或る日の記憶
法螺貝は奥へ奥へと導いた
水脈を探して崖に突き当たる
友達の日記の隅に雨宿り
足元は決して見えぬ遠眼鏡
わたくしを現像する私の時間
やっかいなものを笑顔に閉じ込める
騒がしすぎるのは金魚の尾鰭
猫はもう帰って来ない焚火跡
どの杭も朽ち果ててゆく夕日
指先に遊ばせる人さまのこころ
通過駅は幻　蝶の羽化はじまる

米子市

林　瑞枝

城跡に今のわたしを見て貰う
やおよろずの神を味方に生きてきた
にんげん閑居して頭上から寒い
ときどきは夢の鞍替えして遊ぶ
旅をして聖書が少うしだけ解ける
夕焼けを背負う女の二十五時
わたくしの火宅を守る姫の森
巻紙にすらすら仮名の巧い公家
ふるさとの橋で投身くりかえす
貴方との恋も燐寸も一度きり
雪洞はおんなを優しくしてくれる
俎板を叩いて愚痴は千切りに
火の粉少し被って友だちと別れ
レモン浮く人間くさい水を飲む
感情を抑え優しくなる右脳

西宮市　林　はつ絵

エトランゼ前もうしろも風が吹く
白薔薇の孤独へ猫の子がじゃれる
扉を開けて星までとどく息をする
塞翁が馬と左遷の月を見る
三段論法でわたしを攻めてくださるな
遠会釈　もみじ一枚舞い落ちる
反省の一人称に書き直す
落ち着けば宿命と言うことばあり
米びつを充たして忘れものをする
仲なおり　パッと電気が点きました
親友とときどき道を確かめる
それぞれのやり方ですと蟹が言う
仁王さまほど美しい怒りもつ
ぶらんこ揺れて目の奥の砂時計
致死量を互いに分けて持つ味方

鳥取県

林　露杖

芹粥のみどりに新春の彩が浮く
風紋の至芸　砂丘は生きている
浜木綿の滴となりて月の恋
吾が肩も花野の涯も月に濡れ
鳳仙花　夢の弾けた音でとび
知らぬ道とおれば知らぬ花に逢い
余生図の道標記す文字がない
何くそと思う出鼻を労られ
大根がほどよく煮えた膳につく
どっちゃでもええが湯豆腐　冷奴
次の世はお前の好きにしていいぞ
死神が覗き舌打ちして去ぬる
忘れもの取りに戻って忘れ物
欲捨てた日から世間が広くみえ
土があるだから植えとく柿の苗

廿日市市

林野甦光

軒樋をくすぐる雨のななかまど
喝采の坩堝でねじを締め忘れ
生き字引にされて担任誣いられる
ウエストのくびれもけだし秋に入る
ラストシーンのとこで眼福したと言う
二者択一の演技一生繰返す
残り火の眠気をさます春の雪
頷いて後ろめたさもある妥協
手を合わす　とにかく今は真人間
一言を拾い集める秋落ち葉
ピエロが寄ってこけら落しのテープ切る
恋人が吐く溜息を持てあます
老いを楯に定職持ってない惰眠
時に女は美しい罠縫い上げる
梅雨明けてはしりに出合う茄子の艶

岸和田市

原　さよ子

ちっぽけな善意大きな輪を作る
花を置くただそれだけで春の部屋
金持ちの顔で宝石展示会
二つなら安いと無駄を買うてくる
どうでもよいつまらぬ事を覚えてる
墨の香へ心満たして小半日
ヨチヨチの孫に合わせた鳩の足
忘れることで救われている嫁姑
声だけは若いと音痴賞められる
うっかりの日々多くなり老い進む
ささやかな楽しみ夫と小さい旅
金出してそれが甘いと叱られる
ぼろぼろの辞書は私の知恵袋
忙しいそれが励みの老いの日々
余生なお心に虹を忘れない

尼崎市

春城　武庫坊

黄塵萬丈　騎馬民族の幻か
森を抜けると風は無色になって吹く
詩の一行に背中を強く叩かれる
千本の菊を束ねて神を呼ぶ
青春も戦野も夢幻昭和消ゆ
道草をした人間で幅がある
父の死角に母のなさけが置いてある
陽のあたる場所は避けてる兵の墓
妻にだけ聞こえる鈴を振っている
若者に妥協して鳴る銀の打楽器
満員電車の鼻先にある葬儀社広告
古い映画の話が好きな港の灯
泳ぎ疲れてプールの底がやわらかい
皆既月蝕　鬼は素足で迷うてる
金婚や全てを許す貌になる

尼崎市

春城年代

寺町界隈　涅槃の風が光り合う
視力ぼうとリラが匂うて来るあたり
妻の乱　五月の闇にまぎれ込む
遊時間とやローヒール履きながら
翔べないとわが身のたけを知っている
少年の靴の大きな存在感
てんてこ舞の蟻を嘲ってはならぬ
気前よい人に傾く老い哀し
軒下に薬草吊し病んでいる
四季咲きの薔薇おろそかに秋に入る
花野ゆく愛と憎しみ限りなし
確かなものは何ひとつない阿鼻叫喚
舞いたまる枯葉そこもと倶会一処
ご面倒ばかりかけます生きるとは
黄昏は静かな湖を見ていよう

鳥取市

春木圭一郎

大空へわれらの塔がそびえ立つ
初日の出　敵味方なく年が明け
ごった煮の連立鍋がもめている
油断した与党へ春の嵐吹く
談合で損する役も決めてある
牢獄にむなしく天の声ひびく
外圧に日本の咳がとまらない
罪消えるわけではないがお経よむ
饒舌な紅いくちびる捨ててきた
旅空が自分の姿映し出す
平和憲法ここ一番はゆずれない
正論を吐いてほれぼれする顔だ
実力をはかる間合いをつめている
誠実を貫き吾は自由なり
相打ちは覚悟　最後に俺は立つ

横浜市　菱田満秋

ためらっている身へ自動ドア開く
ビールスが人間様をてこずらせ
申告の要らぬ所得もさびしけれ
耳打ちへ正直者が紅くなり
救急車つぎつぎ眠れぬ夜を襲い
ガンという噂を追って訃報くる
モビールが動き始めた夜の冷え
アパートに男が一人いる寒さ
スカートの脚を組まれた眼のやりば
美味いのか行列してる尻で訊く
再会は約さずに行く友も老い
貸す金がない友情を疑われ
起きている時間を人生だと思い
長生きのできん体で遊ばない
撫順市で生まれ撫子の花が好き

姫路市

人見翠記

立春大吉　障子にうつる梅の枝
おれに似ずおれに似ぬ子に助けられ
春眠は永眠につづく道かしら
雪しんしん師の逝く道は白い道
喜寿祝　大空翔けるパスポート
七十七なお矍鑠として学徒なり
核心に触れぬ間に話奪われる
ライバルが向って来ぬので手が出せぬ
人を愛せば苦しみを花を愛せば慰めを
詩は心こころ深き詩は心打つ
恐怖心　無病息災と同居する
見るもよし見ざるもよしと我は咲く
惚け防止インプット　アウトプットを繰り返す
自画像は心美人と言われたし
好奇心ただそれだけで老い知らず

宇部市

平田実男

能力のないのが爪を出したがり
調子よい時は大きく見える的
仕合わせは孫と入った湯が溢れ
トビがトビ育てて恙無い我が家
広告に添えて新聞配られる
抱き癖は反対してた姑がつけ
使い捨てなじる割箸たちの私語
見ない振りして逃げました自己嫌悪
還暦のまだ登らねばならぬ坂
地下足袋を履くと喜ぶ土ふまず
自分より娘の句が抜けたのが嬉し
楢山となる病院がまたも建ち
拝まれて貸して拝んで貰って来
嫁とまだ張り合う妻にある若さ
四十年まだ命ある句が出来ず

寝屋川市

平松かすみ

アドバルーン揚げたい程のよい電話
満ち足りて今日もバンザイして寝てる
珍しく賽銭上げる気にさせる
イヤホーンで聴いているのはなんだろう
すげ変えの首なら美人のにしよう
おでんぐつぐつ夕刊読み終り
ジャンケンポンで和食に決めました
万歩計つけたその日はこまめなり
お礼です　一番のりに献血車
絵日記の雲はいつでも母と子で
掃除機の掃除が出来た定休日
激励は無用うつろな二度童子
握手しただけでこぼれる噂かな
風船のしわがとっても気にかかり
この月を眺め飢えてる人が居る

柳井市

弘津柳慶

まぼろしの色で虹は消えて行き
荒波を耐えて巌頭の松強し
ガスが出て付添いホッと安堵する
猫抱いた女　男をよせつけず
初恋の彼女も今は独り者
女強く男へエプロン掛けさせる
出世頭となって陰口たたかれる
アルバムに妻との過去が蘇る
こたつからカアチャン電話鳴ってるよ
一人へり二人へりして同窓会
強い事言っても所詮女なり
ボケ老人それから家庭狂いだし
男って女の言葉に弱いのネ
寂しさを隠して笑顔で嫁がせる
大正子教育勅語が空で言え

和歌山市

福井桂香

しあわせの桜はらはら女文字
書き終えて蘭のにおいの恋しかり
尽日を花に埋もれて暮らしたし
ふくよかな女となりし八重桜
くずされる髪を束ねて逢いにゆく
みだれ髪こころ一つをもて余す
紙風船やはりあなたの手に落ちる
目の鱗みたいに外すコンタクト
政治改革　あじさいのくび重し
いやいやをしながらりんご熟れてくる
上様と呼んでおきます領収書
冷奴きょうもお相手つかまつる
日本が変わる胎動ききながら
川幅を少しひろげる旅に出る
風景に祈る姿を描き足そう

岸和田市

福浦勝晴

戦国の武将はなべてエゴイスト
伝統は崩れアバンギャルドに乗っ取られ
オッチャンと呼ばれて傘寿悪びれず
ダイヤ買う話なかなか纏まらず
サイレンが師走の街を突っ走る
開店の花輪に星の雫する
ガン末期そっと励ます肩を撫で
スマートでハンサムよその旦那さん
銀河から星の王子が降りてくる
文学のぶの字も知らぬ妻勁し
自分から惚けたぼけたと惚けもせず
ケラケラと笑えばすこし気も晴れる
ガマロがなげしの上に置いてある
金策に走る途上で犬さかる
山荒れる樹騒ぐのんびり明け鴉

和歌山市

福本英子

祈ることばかりが続く小銭入れ
仲直りこんな綺麗な陽が沈む
騙されてあげよう月が美しい
どの彩を足しても虹が落着かぬ
遅く生まれて母の女を見ず終い
川の幅やがてこの娘も跳ぶだろう
喪が続くぷつりぷつりと切れる線
双方の愚痴へ筍伸びている
お隣が背伸びするからうちもする
念入れてゆっくり棘を抜いている
耳裏に楽しいことを溜めている
秋を掃くまだふんぎりのつかぬまま
迷わないように亡夫へ灯を点す
シャガの花踏まねば沢に降りられず
蝸牛　嵯峨野の雨は深情け

藤井寺市

福元みのる

古書高く古本安し秋の空

大学は遊ぶところと見つけたり

整形の鼻が自慢をして困る

笑いたい時もあろうに獣達

逃がそうと誘うが　やもり思案する

刑事から見るとスリにも隙があり

こうなると医者の妻さえ百度石

覗いたら穴の向うに眼があった

前歯四本抜いてハハハと笑いたり

二次会を逃げたら三次会で会い

疑ってますなと易者ようあてた

株下がり僧侶読経がつまりがち

政治改革　質を変えずに量変える

百点が宙を飛んでるランドセル

八面玲瓏そんな政治家迎えたい

堺市　藤井　一二三

いきさつを包んで花は地に還る
公園のベンチで利下げ話など
叩いたろか大阪弁は絵にならず
夢二描く人妻の絵は猫を抱き
くどいほど理由を書いて欠席す
フリーターをして履歴書に書ききれず
史跡調査　卑弥呼の祈る声を聞く
蠟燭が消えて無力が見えてくる
泳ぎ疲れて髪の毛を染める
野暮なようですがと歳を聞き直し
幸うすい涙でマンガ描いている
妻の掌の上ですべてを読まれてた
人生の幕を貸衣裳で開ける
寝返りと言う矢がうしろから刺さる
空白にしとく戦の日の履歴

茨木市

藤井正雄

目印にされたポストは凛と立ち
吾が青春少年倶楽部にあった夢
草の根に励まされてる耐えている
またとない体験でしたありがとう
津軽三味線リズム厳しい冬の海
塾がある一泊だけで帰る孫
帆船が器用に入る瓶の中
情熱も一息したい朱と緑
回転は鈍いが嘘は言わぬ人
そのままで嫁にこないかプロポーズ
古里の市役所　都会的に建つ
パンよりも愛を論じた若かった
ハンカチの折目に妻がいてくれる
歯医者へはもといた会社の近くまで
島育ちらしからぬ手で酒を注ぐ

島根県

藤井明朗

四十五周年感謝むらくも詩の宴
祝盃はむらさきの彩　春の詩
健康の理由聞かれる歳になる
口癖の多忙続いている傘寿
生涯教育老いの勉強見せておく
回り道した人生に徳を積む
趣味の友みんないい顔　敬老日
自然の猛威に涙のむ奥尻島
冬登山嵐をはらむ白い牙
花に酔うひととき明日を考えず
風が出たらし庭木しゃべり出す
人生に善意の種をまいておく
仏さま貧乏性が似て来ます
気象異変　人間の驕り戒める
路郎師の弟子幸せな賞を受く（八〇〇号記念）

大阪市　藤田頂留子

すべらせたそのひと言が火に油
もう済んだ事や忘れて上げましょう
何も彼も許してくれる広い海
かがり火に女の夢が多すぎる
道真を今もしたってひらく梅
知恵袋よくよく見れば虫だらけ
放したら無口になった鍵の鈴
豊かさの陰で自然が泣きしずむ
国産みの現代版か新空港
なあ鏡世辞を言う気になれないか
淋しさに銀河鉄道の切符買う
十本の指十本の夢を抱く
生涯に喜怒哀楽の駅いくつ
熟練の魂を焼く柿の色
信号が赤から青になる喜劇

吹田市

藤村〆女

つぶやけば心の届く星である
子の夢の序曲矢車風に鳴り
宵宮の背で眠る子の風車
子に生きたそれだけで母心満つ
予報どうあろうと母は傘を持ち
女には過ぎた気骨を惜しがられ
母の勲章　拍手が一つ鳴り止まぬ
喝采のない善人のちびた靴
喝采の未練が耳の底にある
逝く娘への素顔へ紅を少しさし
墓を去る時もう一度亡娘と語る
話し足りない後ろ姿に夕焼ける
うぐいすが迎えてくれた花手桶
美しい夕陽がやがて誤解とく
松風に父の挽歌を遠く聞く

松江市

舟木与根一

初鏡おまえの皺はきれいだよ
砂文字の上で蟹も思案する
幸福の切符は小さな駅で売り
堪忍袋には母の血が流れ
てにをはに少うしボケが出はじめる
花束と一人娘を引き替えに
補聴器でもとの頑固をとり戻し
絵にはなる女でお嫁にはなれぬ
武者凧と思い込んでる奴凧
村捨てた訳は山茶花聞いてない
甲虫ペットのつもりなどは無し
刈跡に残って案山子国憂う
結局は金で買うてただるまの目
念のため少し後から河豚を食う
花咲かすことも大根知っており

岸和田市

古野ひで

喜寿迎えこの元旦に思うこと
秋深み月に心を盗まれる
手術日へ心の揺れをもてあまし
マイペース通して少し義理を欠き
絵葉書の紅葉が誘う旅心
亡夫の忌　黄菊白菊　真っ盛り
誠心誠意ナースの心あったかい
人の世の情けありあり十二月
罪のない嘘を丸めた褒め言葉
夢でしか逢えない人は雲の果て
世の流れ置いてけぼりをくった老い
天地の恵みがめぐる花暦
老姉妹あえば苦労の亡母のこと
たそがれの光映して海も昏れ
逆縁のお通夜に言葉見失い

竹原市

古谷節夫

0歳の笑顔　神から授けられ
単身へ広い公舎と庭がある
休肝日のローテーションが狂いがち
長い目で見れば似合いの夫婦かも
マウンドにもう上がられぬ五十肩
落ち椿老後のことをふと思い
コーヒータイムへ割り込んで来る消費税
愛犬が残していったページ繰る
誕生日　長女がくれたミニボトル
折り返し点　妻が二三歩リードする
読経するひとりぼっちになりたくて
裁判に勝って神には許されず
降る雪へ役者のように旅に出る
退職へ誰にも言わぬ誇り持つ
桜咲く四十年はあっと過ぎ

岸和田市

芳地狸村

決断の時は黙って弓を取る
美女がのむ酒はきれいな彩がある
公約を冷めた目で見る紙コップ
人の和を大事にしてる三代目
天守へのお城の道はさくら彩
山門をくぐる心に経がある
代理でもいいから出たい花舞台
もう一度確かめて押す保証印
あやまれば許す気でいる父の眉
嘘のない男の顔は美しい
寝ころんでうまい話を待っている
遠くから見てもきれいな春舞台
新しい花芽は明日を信じてる
火の彩に心血注ぐ登り窯
まっすぐに掟を守る太い眉

和歌山市

細川稚代

ふっ切れて小豆ことこと煮ています
女から女へ届く雛あられ
幸せを摑む外堀埋めてある
よよと泣く女を期待する男
ジェラシーを愛の証と思うまい
無防備に見えて要をにぎってる
やさしさが過ぎて花が枯れました
のうのうとうちの金魚は肥満体
雲たれて未だ手の内は話せない
乗り継いでついで菩薩に会いにゆく
墓石拭く亡母のからだを拭くように
語り部が減っていくさが遠くなる
腹割って話せる故郷の空の色
すぐあきるおもちゃばっかり与えてる
憧れの方とカレーを食べてます

島根県

堀江正朗

白い杖僕を置き去りにはしない
陽のぬくみ妻のぬくみだなと感じ
少年の日よ見えた日よ桜咲く
雨しきり緑に染まる音だろう
一歩ずつ今を光にして暮らす
見えた日を点滅させるのは軍歌
ことさらに酒ことさらに誕生日
僕だって灯をつけて妻を待つ
真直ぐに歩け歩けと白い杖
南天の赤を忘れた雪しきり
手の届く広さに悔いが多すぎる
さやさやと茶筅は雪の降る音か
忘れない文字てのひらに妻と書く
幸せがたくさんあって独り言
合掌に弱い心を裁かれる

島根県

堀江芳子

耳鳴りの中から掬う春の音

ご飯粒　夫のを拾うありがたさ

ほろほろと心とけゆく春の酒

恋人の如く生きてく夫婦箸

竹を踏む竹に笑われまいとして

辛棘な言葉じわじわ温うなり

方丈さまと笑い話でお茶よばれ

指先も不満知ってる動きよう

蛍光灯かえて欄間を眺めてる

真夜中に突然うたいだす点字

わがままを済まぬすまぬと酔うたふり

疼いてる辛さは生きる素晴らしさ

親の歳忘れたふりの親思い

一合へ夫は白黒ない斟

なにをしていても心経離れない

寝屋川市

堀江光子

ふと我に返る刹那を秋の風
清貧は口にせぬもの風涼し
灯火のともる静かさ秋の灯は
背負うもの人それぞれのうしろ影
その昔夕餉の顔は揃うたに
ひとりより二人が寂し別れの日
さい果てのぬかるみに灯のにじむ町
聞き役の方が一枚上らしい
偽ダイヤ輝きたくて光りすぎ
美しい炎の果ての軽い灰
幸せを人と比べずクリスマス
杉並木　一本ずつの天を持ち
実るもの陽のしたたりの丸味持ち
六十になって童話を書きはじめ
紫陽花の花の雫に色はなく

和歌山市

堀端三男

言葉より確かな返事瞳でもらう

恍惚の老母の笑顔にさからえぬ

哀しみの極限来れば笑うかも

斬り込みは鋭いけれど竹光だ

目に見えぬ支えいくつも受けている

上げ潮に乗った男が敵に居る

原爆の凄さを語る義務がある

捨て上手に姑もだんだんならされる

夕陽さす丘から明日の夢もらう

水たまり雲の動きが速くなる

旅人にとてもやさしい道祖神

迎え傘夫の定年近くなる

戻るのを待ってたように妻が出る

免許ほやほやだあれも乗りに来てくれぬ

定位置に母居るだけで輪が和む

茨木市

堀　良江

ふるさとへ戻れぬ街のゆりかもめ
塔が見え鐘が聞こえて目ざす寺
幼児をあやすごとくに粥の匙
心配が母を祈りへかりたてる
飢えた子に澄んだ瞳を返さねば
忽然とファイトが湧いてきたピンチ
くちなしの咲く高台に友見舞う
街角の別れ映画を見るように
影法師　心配ごとがばれそうな
ライバルの笑顔にまたも挑まれる
藤のはな母はいつでもあらわれる
秋風に吹かれて蝶は透きとおる
お土産はこちらバスごと運ばれる
床柱なんてどこにもない二次会
クリスマスまで延ばされる誕生日

倉敷市　本田恵二朗

日本髪の亡母の写真の色あせて
夢に来る亡母は丸髷結うている
石仏のほお笑み温し里の道
散り敷いた落葉落葉に迎えられ
どの枝も剪るのが惜しい花鋏
静と動ほどよく使い分けて生き
星一つなにが不満か自滅する
幸せは花と心が通い合い
艶ぶきんの役を互いに勤め合い
見て見ない振りをするのも芸の内
長のつく肩書三つ使い分け
久方の展墓へ山並笑みかける
裏表使い分けれる顔を持ち
定説をこわしこわして学進む
幸福を等分し合い共白髪

大阪市

本間満津子

欲の有るうちは残っている若さ
願い事無ければ命空しかろ
感謝する心に替える品が無い
一言の重さゆっくり言葉撰る
美しく勝つべし強いだけでなく
普通の日普通に過ぎて結構な
春楽しごはんにヒスイ散りばめて
ゆるぎなし素手で築いた己が城
簡単な言葉で通じ合うふたり
勤労賞　深い眠りを与えられ
雑音の中で一つの声選ぶ
ときを経てみれば傷痕さえいとし
呑み込みが早うておきる消化不良
針千本呑むともつかねばならぬ嘘
いのちいっぱい抱いて時待つ黒い土

大和郡山市

坊農柳弘

体形に惚れた妻です共白髪
大切な人と言われて早や六十路
精いっぱい咲いて零れて彼岸花
寒行の気高さ雪の永平寺
飼い犬に噛まれる程の地位も無く
正論をねじる議会の多数決
内訳はいらん今宵は割り勘だ
チャンスには滅法強い友に賭け
ブレンド米やんわり旨く炊けるかな
米輸入減反政策無責任
吹き抜きの天井　家柄語り継ぐ
軒先に番傘干してる秘湯宿
占い師　人の心を玩ぶ
許す気になったその夜の差し向い
煩悩を洗うひらたい写経堂

鳥取市

前田一枝

幸せを食べる今宵も夫婦箸
手加減で甘い味出す妻となる
手を取って登る坂なら苦にならず
生長の早さ背丈も親を越し
妻と娘が春のピースを変えて着る
こうなればあなたまかせに流れます
初恋の人と笑える齢で会い
みかんむく手もと可愛さ嫁にする
取る齢に足ぶみさせて見たくなる
母が子にゆずるうれしい片えくぼ
玉手箱そろそろ開けて見たくなる
しわの数ほど穏やかになりきれず
俄か雨自動ドアがいらっしゃい
やき餅もこんがり焼けば味が良い
旅帰り日めくり今日にはがしとく

呉市

槙田英詩

鰯雲　明日は京都の梅を見に
疲れたと夏の帽子が大の字に
晩秋の山も老婆も物静か
水甕がときめきながら満ちてくる
広い海が見たくて今日も本を読む
楢山への道に情けの月明り
あと幾度の四季か失うものばかり
酸欠の街しずくする星もなく
昼の月ムードがないと言われても
石を積むいつ召されてもいいように
出発進行　白い御飯が炊きあがる
地に足がつき人形が八百屋まで
コーヒーに誘われビール呑んでます
白髪染めもいいがどうする顔の皺
誰かさんに三日逢わねばさみしいね

弘前市

蒔苗果林

毎日が千載一遇おはようさん
バラ組の恋人も来るひな祭
大学におたまじゃくしのまんまの子
熟れ初めのりんご　わが娘の顔してる
お話も重さで夫とふりわける
雨垂れの雫のようなサラリーマン
男の火燃やせば妻がふいご吹く
親切な小母さんでよい生みの母
種籾はやんちゃな子等のよう寝かす
盆の窪のとげとげしさよ昼寝しょう
まだ無言大きい我慢袋です
洋服の裏働いた父の地図
ありがたいこと山ほどの誕生日
子育ての今が最中はとぽっぽ
おいらくの私の丘は花ざかり

米子市

政岡日枝子

にぎり飯　流れが変わるかも知れぬ
ざわざわと桜一瞬祭り一瞬
落ちる時間を知っている風船のふくらみ
桜の樹から酒の招待状が来る
こわれそうな時間をさくら貝でつなぐ
時計はいつもお寺の鐘とくいちがう
深い闇　誰が桜に化けたのか
骨は百態　水に晒され野に晒され
空は脆くて桜に詫びてばかりいる
主婦を陽に干せばしたたり落ちる錆
桜咲くまでひとつの嘘をたたみ込む
主婦終えて泥人形は泥に還った
己の中の錆をじっくり見つめよう
夜はしらじら神の金縛りも緩む
はぐれ雲きっと孝行しに帰る

大阪市

桝本蕗児

露天風呂　月に乳房を盗まれる
よく御覧コアラの顔が悲しそう
光る海　造船所から音がせぬ
妻が風邪　俺はなんにもしてやれぬ
植木棚　通天閣が屋根越しに
鬼の手が温かいからぞっとする
妻が最高邪魔くさいからそうしとく
雨蛙お前を描く青がない
旅先でボタンがちぎれそうになる
汗の染み父の帽子が捨てられぬ
残暑の日切手なめに貼って出す
観覧車人を想うによい所
銀行へアサヒグラフを読みに行く
大人にもお伽噺をしてあげる
文庫本すこし傷んで旅終る

大阪市

町田達子

雪の日の美観日本の中国へ
ユーモラスな布袋が好きで逢いにゆく
世の変り三猿よりも二猿なら
散歩道　犬も見ている花吹雪
ペーソスもコントもあって世の峠
時どきは葦も押してる横車
寡黙でよいモナリザの微笑なら
世の中が変ったクッキー焼く男
どんぐりの愚痴は聞かない耳の芯
美しい落暉が過去を呼び戻す
一役を豆炭七輪森の保護（アフリカ）
気の付いた時に言葉の貯蓄など
切られてもきられても咲く夾竹桃
裸婦像が威張る美術の秋飾る
溜息の坩堝の中の貴石画展（吐田公一個展）

有田市

松井かなめ

火ふき竹　亡母のしぐさが目に浮かぶ

色即是空　苦手なことにラップかけ

船降りて子供相手の駄菓子売る

経験が浅いが見込ある気骨

悔んでも浪費は浪費　水の泡

座ぶとんを数えて幹事落着かず

夫のひと言とても時効にしてやれぬ

同居して息子養子にやったよな

とんちんかんな話に合わす呆け見舞

脛の古傷えぐり出すよな友が来る

頭下げたら世間の風が上を越す

お地蔵さんどんな願いもきき上手

武骨の人小節のきいた喉の冴え

兎小屋なれど帰心が矢の如し

他人より冷たい事を言う子供

大阪市

松尾柳右子

有線の流れる中で歯を抜かれ
花びらは踏まずに犬も弾んでる
北斎も描けぬ演習富士裾野
イヤリングゆれて太陽一人じめ
煩悩をしばし浮かばせ春の海
兄ちゃんのいつでも進む腹時計
シンデレラには今更なれぬネギ刻む
バスツアー弾んで車窓は銀世界
鯉のぼり空気の浄化たのみます
ルンルンになって噂の中に居る
最上川　芭蕉も乗った雪見舟
子離れをしたはず電話かけてみる
核等は知らぬのみ取る猿夫婦
暴言を浴び少年に湧く大志
厳格な父の涙に嫁ぎゆく

京都市

松川杜的

太陽がいっぱいレコードが回る
欠け皿でよし野仏に花がある
生かされて祈りの時が多くなる
淋しくて鏡の前で笑ろてみる
最終の出番は妻と決めてある
曲り角　蟻もやっぱり考える
悲しいことです賽銭箱に鍵が要る
色即是空　枝豆と缶ビール
多情仏心コスモスがゆれている
残り福信じて朝の米を研ぐ
子に残す一枚の絵がまだ画けず
哲学の道で追伸考える
輝くものに母の日の母の背な
裏がえす度にたこ焼き丸くなる
それ以上言わぬ夫婦で仲がよい

京都市

松川芳子

躓いて一つ覚えた処世術
コーヒーの味も心の浮き沈み
試着室　鏡は何時も味方する
底辺の広さに和む風がある
体温計今日の予定を狂わせる
持ち駒を無くした母の黙秘権
納得がゆくまでブランコ漕いでみる
髪型を変えて女に年齢はなし
消しゴムが知ってた僕のカンニング
身だしなみ程度は夫目をつむり
親切が無になるほどの礼をされ
世代交替　法事の席が若返る
それぞれの視野で見付ける青い鳥
父ちゃんの帽子に鳩を期待する
昨日より今日の生命が重くなる

鳥取県

松下たつみ

この仕事奪えば母の灯が消える
職持たぬうしろ姿は隙だらけ
毒草の匂えば匂うほど孤独
石垣のチームワークは本物だ
世の中が少し分かって拗ねている
丸いっぱい書いて仲間にしてもらう
光らない釘が一番きいている
いやだとは一度も言わぬなで仏
温室の中の評論家が吠える
かくれんぼ母は尻尾を隠さない
満ち足りて意欲がひとつずつ消える
もう一度迎えに来たらついてゆく
空想をいっぱい持って白が好き
矢面に老人立てるとは卑怯
すばらしい出合い女系の鯉のぼり

大阪市　故

松　永　すすむ

のびちぢみしながら生きて来た夫婦
焼鳥屋煙も匂も味のうち
夕やけの彩になじまぬ鳥一羽
なびく気はないのに風が吹いてくる
似てきたよおふくろの味嫁の味
ひいばあは女四書読む人だった
病癒え元旦の朝屠蘇の味
白魚のちいさい黒の目が悲し
一大事　尺取虫が駆けている
一城の主顔して猫が居る
風格のある猫だった緑の目
沈丁花　路地ぬけるとき匂する
裏切らぬ酒を無上の友として
邯鄲の枕で一夜寝てみたい
群れ雁の内に一羽の奴雁あり

富田林市

松本今日子

良心をかくす背中で返事する
反逆の旗も立ってる誕生日
私にも明日があってむくリンゴ
中年の背中無断でみつめられ
つぶしてる女一人で住んだ家
泣き言を言わぬ男に賭けている
許される罪のある世が生臭い
灯消す一つの迷い切るために
少しずつ夢を探している暮し
大波小波やっと自分が見えてくる
人を恋うこんな姿のままで恋う
花嫁の幼い頃を知っている
年々歳々実っていく私の花
真実を語らぬ猫を飼っている
身勝手な願い衰えないように

川西市

松本ただし

とんびの子　鷹になれよと肩車
端折れた切札捨てる風の街
本当の土の香野良犬だけが知る
D51の煙公害とは言わぬ
終章の余白落書き用と決め
割り切れぬ円周率で回る都会
上げ底のことばに弱い単細胞
勲章をもらうと死んだ友がいる
味覚より視覚に痛い活き造り
満足も不平も忘れた吹き溜り
灰色の噴水となる夏のビル
別姓で連帯感がそっぽ向く
ライオンと人間どっちが野性かな
すねているSサイズほどの肝っ玉
善人の心で走るローカル線

笠岡市

松本忠三

適当に妻が鼾をかいており
かといって反旗かかげる気になれず

通勤の距離短くて妻の視野
バス停で年寄りだけが待っている

ゆさぶりへ浮いてきたのは雑魚ばかり
出る杭になって打たれてやるもよし

五体満足とんちんかんの母でよし
神様でないから何とも言えません

年寄りの冷水言わせておきましょう
法要に歌まで出ぬが酒は出る

しんがりのデモが余所見をして歩き
出来心なんて心があるかしら

三度目の正直からも見放され
どっちみち白でなければ黒であり

金貯めてどうするのかとうるさくて

島根県

松本文子

人に生れて祈る言葉を与えられ
北斗星　老母のことしか考えぬ
駄目になりそう電気毛布の暖かさ
あんなことこんなことなどもう時効
どうでもよいことだが風船の行方
被ったり脱いだり母が嬉しがる
似たような過去で小鳥を飼っている
黄昏の長い廊下が胸にある
乗る人あり降りる人あり病院前
妻らしい言葉をひとつずつ忘れ
ひとりにも慣れて湯呑の暖かさ
人想う夜行列車の屋根の雪
巡る季節を老母と確かめあっている
闇が怖いともう思わなくなった
掌の中に残ったものを見つづける

宝塚市

丸山よし津

三代の和音奏でるぬくい部屋
薔薇よりも寄り添う霞草が好き
夫婦とは差し引き零になる絆
自己主張持たず倒れ行くドミノ
さんりんぼう駐車違反の金払う
計量器使うと狂うプロの勘
花火師の苦労は闇の空に咲く
泡沫の中で努力は惜しまない
片意地なビルの谷間の瓦屋根
夕凪やそれぞれに書く感謝状
やり過ごす雨紅茶のうまい店
塗り立てと書いてあるから触れてみる
繕いが下手で北風もろに受け
気付かれぬよう重荷へ手を添える
花鋏　老母に豊かな時がある

倉敷市

水粉千翁

一碗に晴天の茶の心知る
春の雨　花一輪の行方かな
妻にさしかけてもろうて傘寿とか
金婚の屏風にゆらぐ瀬戸の橋
手を洗う失うもののないように
夫婦とはある日を風の音がしみ
わがいのちじっと見つめてお茶がしむ
大道無門　人間罷り通るべし
哀歓を分けて失うものがない
旅人の背中へせめて涙拭く
この道の遠きを愛すべし素足
山葵どの　さかな冥利に尽きまする
花道のまだ途切れないつもり坂
日本の横顔　帛紗捌かれる
望郷の涙は西陽から流れ

米子市

光井玲子

吾亦紅どうしていつも口つぐむ
疵口の一つと花の下あるく
息とめて木犀の告白を聞く
口紅を塗れば息切れかくせそう
まだ母が打てば響いてくれている
ぶつかろう壁は答えをくれるから
雑炊がおいしいふっと振り返る
ふりむけば生きた暦がいとおしい
さぼる事知らぬ振り子が気にかかる
嫁った娘と我慢話が食い違う
この帯もやっとわたしに打ち解ける
父老いてどっと崩れる防波堤
焼くものは焼いたが何故かうつろなり
今過ぎる時間にはっと追いすがる
霧の中の刻が大切だと思う

松山市

宮尾みのり

白い襟の少女を夢の中に持つ
しあわせな振りがかなしいほど出来る
完全無欠　横で眠たくなってくる
肩の力を抜けと昼寝の猫が言う
打って出る風を探している未完
セピア色の真ん中あたりナルシスト
王様は裸と言うてから波紋
長男に生れ子守りをした記憶
聴いたよな聴かないような母の過去
ゆっくりと歩けば風が見えてくる
自己犠牲かもね自己満足かもね
土に生きる人のしぶとさおおらかさ
時どきは夫婦人の字立て直す
地に落ちて松ぼっくりにある自由
方丈で生きれば捨てるものばかり

奈良市

宮口笛生

身にしみて四　五日酒を断っただけ

駅前の広場に居付くラーメン屋

悠々自適たまには風邪も引くけれど

死んだらしまい精進あげをして帰る

酒少し入って勘が冴えてくる

死ぬ時を考えるのも面白い

無住寺も賽銭箱は置いてある

鼻の汗一か八かの勝負する

だんだんと酒強くなる怖くなる

貧乏神と二人三脚しています

蟹一匹下手な食べ方してる旅

高い酒のんでいるんだ顔の艶

まぐれ当りというまぐれにも当らない

どんどんと家建って行く売れて行く

天罰と休耕田が言うている

豊中市

三宅つえ子

運命を愛して日がな蟬の唄
春のどか犬も見ている紙芝居
行く先を持たぬ鳩なら手のひらに
ガラス器に夢が広がるサクランボ
幸せな話に耳を遊ばせる
潮引いて孤独な貝のひとり言
向日葵に生きる勇気を貰う朝
ひと夏の記憶に揺れる原爆忌
ふと父の呼ぶ声がして菊花展
秋霖に柿の実ひとつずつ消えて
母の忌に降る雪なれば手のひらに
ぬれ縁に凭れかかって亡父の杖
抱く石の大きさに泣く老いた松
手を伸ばす触れるもののない闇に向け
ひとり身の日を考える車椅子

海南市

三宅保州

手応えのある毎日を過ごしたい
生涯を貫く旗は降ろさない
一徹に生きて無色の旗を振る
腰のものあれば抜きたいときもある
背伸びしてみても天まで届かない
無駄な日は一日もないカレンダー
明鏡止水そして燃えたいなと思う
暇になることが一番恐ろしい
面白くないのに笑う芸がある
自慢せぬことが私の自慢です
日に一度腹の底から笑いたい
添い遂げるつもりで喧嘩しています
なんやかや言うても帰る家がある
虚心胆懐生きるパンさえあればよい
ありがとうあとは白紙のままの遺書

八尾市

宮崎シマ子

僧の嘘アミダ様まで聞き惚れる
水道全開　嫁の言葉を流しとく
じいちゃんに勝つばあちゃんが嫁に負け
力などない母さんにみながつき
蚊も蠅も一人ぐらしの友である
血の動く音が伝わる背中の子
七五三晴れ着に家紋背負わされ
うすうすは父から出てる金と知る
さくらさくら今年も皆に逢えました
春一番　山の命が動き出す
新酒の香　肌につつんで杜氏帰る
遠雷がひびく逃げ場のない野菊
針箱の秘密覗くと針が刺す
見合写真　炬燵の人がみなのぞく
雨が降る貴方肩でももみましょうか

八尾市

宮西弥生

金持ちでなくてよかった姉妹
上役の机に並ぶ旅土産
年の差なんか言うまい法善寺
水芭蕉　今日の幸福有難う
自由が欲しい自由が欲しい定期券
ベランダの一鉢ずつに秋が来る
海外で新春します夏の服
どん底も八起きも知っているダイヤ
一枚の辞令もろうて酔いつぶれ
四分六で姉はプライドゆずらない
新しい明日をくれる古都の鐘
ビル一つ建って街の詩消える
包丁のないくらしときいてする寒気
つながりトンボゆっくりゆっくり秋になる
人の輪の外が好きになってくる

貝塚市

宮園射月芳

芸がないのでサラリーマンをしています
歯車の朝が始まる出勤簿
嬉しくてやがて悲しい給料日
我慢我慢　俺は養わねばならぬ
何食わぬ顔で喜劇を続けよう
人事課の部屋から動く春の首
抜擢の椅子ストレスが胃に溜る
止まり木の男は帰宅恐怖症
世渡りは時にサタンの手を握る
ライバルのひとりにだけは負けられぬ
地獄絵の中で男は出世する
忙しい時間を趣味に空けておく
窓際で謎がわからぬふりをする
この世をば流されながら揺れながら
定年後故郷の海に抱かれよう

岸和田市

三輪通彦

都会にも過疎あり老いの佗住い
浪人と呼べば優雅な失業者
求人欄読んでも歳が邪魔をする
等級が消えて多彩なお酒の名
飽食で野性の消えた犬や猫
野心など持たぬ同士で続く仲
但し書きつけて逃げ道あけておく
顔のない鬼が棲んでる借用書
政治家に学ぶ詭弁のテクニック
小説の中で不倫が美化される
肩書きがなくても父の持つ重み
耐えることばかりで亡母の半世紀
主婦の眼になって娘も値踏みする
里帰り母娘の会話よく弾む
老化の兆し妻にも見えた物忘れ

弘前市

村田善保

雪しんしん　昔ばなしがしたくなる
振り向けばだあれも居ない縄電車
虚と実の狭間にあった置き手紙
一期一会　人の流れを温める
メビウスの輪を手繰りつつ共白髪
年輪を刻むと愛も深くなる
胎動の海がキラキラ満ちてくる
胎動に絆の重み噛みしめる
脈をとる手から心に触れてみる
赤旗も白旗もない蟻の列
会者定離いつかは割れる鏡拭く
表彰も栄転もない駄馬の汗
花切手貼って女の果し状
満ち足りた歩幅で美術館を出る
終章を書けぬ島々北に在り

大阪府

籾山　隆

酒とろりおとこのロマン歩みだす
美しきべからずの花手折りたし
早瀬から流れは淵へ移る恋
キリストに叱られそうな夢を見る
遠吠えの男に投げる無精卵
公園のベンチにロダン作の人
つちのこの懸賞金を追っている
写経した筆と一緒に洗う罪
平凡になすびが生って恙無し
金婚の妻に似つかう功一級
アルバムの中の自分に好き嫌い
わたしから話題の枯れてゆく寒さ
手のかかる孫去んでほし居てもほし
大あぐら仏のように孫を置き
青いベレーに着けてはならぬ鉄カブト

吹田市　茂見よ志子

プレゼント　ピンクの紐の花結び
強いのが財布にぎっている夫婦
吉報を待つ身に雑音入れてくる
うっかりと方向音痴のあとにつく
上げ底の箱につめてる人生譜
不揃いもうまく風呂敷包み込む
すぎた遠慮に水くさいなと思う
預かった孫に宿題ついてくる
母だから言ってやらねば諭さねば
母さんの時計で家族動かされ
はしり雨しばし待つ間の市場籠
乾杯へ前途の暗いのも交じり
赤裸々に書いて歳月いとしかり
幸せの次元で話くい違い
刻まれて石は命を吹き込まれ

竹原市

森井菁居

ひとり来て海岸線が他人めく
まだ上のランクがあって爪を研ぐ
夫婦相和すと子供がついて来る
礼儀作法のひとつなりけりペンを執る
惑うことなし銀婚の夫婦独楽
進学の子よ頑張れや先に寝る
反抗期母のタクトが気に入らぬ
喪主としていとしおらしくしおらしく
好き合うて親の出番が無いのなり
幸福駅行の切符を親も買う
五十路とや丸味がついた影法師
保険屋でいいさ誇りを持っている
オホーツクへ続くか直線ハイウエー
お互いに罪ほろぼしの夫婦旅
三人の子が三様で愉しいね

守口市

森川まさお

ふるさとへ行きも帰りも荷が重い
連絡船みんな同方向を見る
坂の町上の方から灯が消える
花の咲く丘へ測量やってくる
遠い道まっすぐ行けば寺がある
ゆとりある川は静かに流れ去り
ボタン一つ外して橋の上にいる
船の着く波打際が騒ぎだす
深呼吸動きはじめる港町
みな留守で氷枕が干してある
無縁塚　重なり合って桜散る
竹の葉が揺れて石仏丸くなる
藁塚は春というのに冷えている
手掛りがないのでまっすぐ伸びる草
一本道で轍のあとが消えている

東大阪市

森下愛論

米になり酒になりして揺れる稲
感情があるから夕陽美しい
散るために咲いたと思う花吹雪
人の和に涙もろくもなるも齢
棚ボタを待ってる私鬼笑う
美しい罠にはまりにネオン街
翔ぶ老いにブレーキ掛ける脈の音
翔んでいる老いに世間は粗大ゴミ
喜寿傘寿エンマの予約まだ早い
ドック入り齢でんなあに腹が立ち
幾世紀　昔話を知る地蔵
風はしゃぐ　みの虫の揺れもまた
老鹿の動かず雪の東大寺
帰ったか月も仁王を覗き込み
仁王像見上げて恐れ入りました

広島市　森田文

窓を打つ風が落ち葉を走らせる
花市に花が溢れて寒の入り
立春や橋の向こうで花が咲く
蝶に似て児に似てすみれ咲き揃う
雛まつり雛よりかわい児の笑顔
幼児と語る頷くことばかり
神々と遊んだ夢は森の中
陽性で風の誘いが絶え間ない
うれしくてちょっと乾杯したくなり
はまなすが咲いて浜辺は夏の顔
花開き花散る月が欠けてゆく
幻想の中で舞ってるのはわたし
母ありて火よりも温し風の中
慎ましく夢を抱いてる枇杷の花
ふる里を描けば群青使い切る

米子市

茂理高代

青柿が帰る子待たず落ちてゆく
貧しいが山茶花赤い灯をともす
火消壺　苦労話は吐き出せよ
後ずさりするから恐くなって来る
許し乞う鐘はいくつ叩けばいい
鋏では切れぬ絆に耐えている
ひたひたの水では豆は妥協せぬ
ジャンプする己の丈の高さ程
人恋し詩を詠んでは破ってる
親だから黙って積る深い雪
同じ泣くなら嬉し涙にしてほしい
こつこつと登れば何時か塔に出る
一つ知り三つ忘れる歯がゆさよ
ふる里の山が炎えると帰りたい
ワッハッハ小指の話出るお年

鳥取市　森田熊生

父と子の対話　塩辛なめながら
頑固でもいいから父の固い椅子
妻僕を信じて弁当箱洗う
弁当にうめぼしがある日の安堵
うまい茶を入れて母にもある話
落書きもいたずらも好き子が育つ
カットバンころんだ訳は言わぬまま
母さんが来てすり傷が痛くなり
大の字に寝て空白の時といる
コップ酒まだ正論が生きている
正直に話してめしがうまくなり
主義主張　私にもある豆の蔓
みんな元気で丸い地球に住んでいる
結局は僕の白髪が増えただけ
頑固さも亡父に似て来た道歩く

堺市

楊井二南

金星を褒めると肩で息をする
制服で無ければ威儀を正せない
謙遜の裏に自信を潜ませる
ステッキで知るリハビリのもどかしさ
譲られた席で年寄り顔をする
犬連れて歩く同士が縁になり
風当り強く正座を崩せない
守れないルールは棚に上げて置く
恰好な絵はがきで出す旅便り
せめてもの土産は駅で買えば良い
忙しい素振りが客を逃がさない
家庭でもセルフサービスして欲しい
鐘響く方へ歩けば迷わない
お互いの眼鏡比べて見たくなる
聞き慣れた声が味方をしてくれる

米子市

八木千代

われは雁　月の真上を渡るなり
今はたましいの時間で月の下
わたくしの枕に三日月の匂
まどろめば桃はるかより流れ来る
流れるものを見ている拾えないでいる
書きすぎぬように大事なひとへ書く
どの木だってまいにち手紙書いている
わたくしの中を通って咲く椿
今嘘を書けば昨日も嘘になる
いざとなればうしろの藁に火をつける
大屋根は女主人を信じない
空を一枚めくっても何枚もの天
神もわたしを探し続けていられよう
今は目の前の老いたる樹を信ず
切々と空は手紙を降らすなり

東大阪市

安永暁子

無口なる肝臓検査もの申す
病院のなんと眠たい時間まち
よっこらしょ十七音字に日が暮れて
コスモスは命のかぎり風に舞い
奉仕日を草ぼうぼうと待っている
のんびりと田を鋤く牛はもうみえず
恥ずかしそうに月下美人の揺れをみる
周到の予報にとても邪魔な傘
姥桜　無味無臭にはなりませぬ
若向きに賽の目に切るニューサラダ
父の脛細うなってもたくましい
桃の節句　母は蛤買うて来る
申告をすませ買物籠に花束も
足ばやのホームにうどん屋が匂う
老いらくはひらがなのようこころがけ

静岡市

安本晃授

年金の妻よ嘆くな米はある
乾杯に敵も味方もない地酒
小春日へあてどなく翔ぶシャボン玉
不束な鞠が噂の街で跳ね
浅はかな知恵に微熱の続く夜
老残の美学に迷う土踏まず
夫婦ごっこまだまだ続く虹を織る
金婚日　家族でうたう数え歌
成り行きで敵の椅子にも座る妻
座り胼胝母におんなの芯がある
正論の袂に溜まる自閉症
愛と言う言葉に軽い紙コップ
造反か蛇口に溜まる水の音
諍いへ和解地図描く父の遺書
安らぎを欲しくてひとり花野ゆく

大阪府

八十田洞庵

離婚二度みくじはいつも吉と出る
柵越しに線路が見える町に住む
男臭くなった息子のズボン買う
苦手とはまっかな嘘のマイク持つ
青年に助言も含め刑猶予
この人が味方だったか左遷の日
木と紙と畳に住んで老い静か
親が子を子が親を刺す世のあわれ
限界を知る街道は焦らない
耕運機手さばきうまい嫁が来る
前歴を黙して守衛筆見事
どん底に若木が二本育ってる
親たちの理想を背負うランドセル
群衆の熱気の中にさめた人
バス来ない古寺にあるわびとさび

岡山県

矢内寿恵子

紬糸　女のドラマ織りつづけ
生きざまの風はそれぞれ彩を持つ
爪に灯が点る昭和史の中に
昭和史の美学に散った花の数
寮の灯が消えて瞼に母が来る
逆縁の骨壺　天は土砂降りに
何の刑ならんひとりの飯茶碗
同じ道歩く母娘の苦労性
福袋の中に我が家の二男二女
ホタル翔ぶ里へ不義理は出来ませぬ
青春へ国境のない地図を持つ
歳月や似た者同士の数え歌
古き良き時代を手繰る糸車
聞いてほし聞かんでほしい独り言
灯明がゆれて命をふと思い

今治市

矢野佳雲

世間体　円満ごっこしています
気にいらぬこと言うたかと妻に聞き
妻のいるうちは頑固がなおらない
会いたいというメモがくる雪しきり
目に毒な挿絵のとこをさきに読み
動かないでと言うて女が虫を聞く
体重計　娘は乳房抱いて乗る
金持って死ねぬが無いと哀れなり
死にたいと口は思わぬことも言い
古里と親は選べず秋桜
密告者が暗闇にいるタバコの火
落ち椿　髪に飾ってヒミコかな
妻は乙女　無声映画の中にいる
バナナの黄もう生き方は変らぬか
きっと来る幸せを待つ鍵の穴

竹原市

山内房子

さよならと言ってるように枯葉舞う
コスモスを供えお墓も秋の彩
お仏飯も秋の味覚の栗ごはん
シャッターを切る瞬間を亡夫といる
とんちんかんばかりしてますお亡父さん
つっかい棒はずれてからの不整脈
幾度の試練を抜けた冬帽子
おふくろに心配事は聞かさない
福寿草一つの愛を温める
私だって自然治癒力持ってます
間違い電話一度かかっただけの今日
木漏れ陽のひとりが好きな藪椿
老いの坂言葉だけでも嬉しいよ
春の風笑い袋をそっとくれ
生き生きと大根　白菜　ホーレン草

東京都

山口新子

かなぐり捨て翔べよ理性の紙ふうせん
髪切って逢いに行く日はむらさき
かみしめた唇置いて行かないで
ネクタイに似合う顔してくれるか父よ
母逝きし秋桜の頃だったとは
芋を煮てゆっくり私の角をとる
お百度を踏もう私にできること
ひまわりが高く咲いてるよその家
引越の肩に追い風向い風
ストッキングの伸びで見分ける長女次女
手術待つ娘に大空の真っ四角
くすり指のゆびわ浮足立っている
君の背にまわした腕の余りたり
紅落とすかりそめの朱の一日の
いつか翔ぶ雀ほどの羽でよし

和歌山市

山口三千子

子育てが終ってさがす道しるべ
折り返し点から時が加速する
華やいでみせて心に時雨する
桜三回咲かねば息子帰国せず
やっと荷を一つ下ろした蟬しぐれ
シグナルは赤　深呼吸しておこう
結論が出たので降りる縄梯子
縦横の線をはっきり引き直す
残された時間出発点にする
終着へもう急がない時刻表
終焉を飾る構図はまだ描けぬ
冬の絵の中で雪解け待っている
残り火を燃やし続ける夢芝居
人生の午後　黄昏も遠からず
父と子の尺度が違う川の幅

伊丹市

山﨑君子

春一番　合図に花も動き出す
花言葉　返事代りに書いてある
別れても爽やかでした花時計
独りごち亡夫の好きな百合飾る
充ちたりた顔になります里の秋
赤トンボ新幹線に追い越され
舞扇　艶の一字のありったけ
卒業式　老婆も終る孫の守り
庵主様お風邪か今朝の鐘さえぬ
木守りは落ちた仲間を見つめてる
嫁道具　覚悟も一つ加えられ
自己紹介　今年はみんな年男
紅一点どこに座ろかみんなの目
露歯菩薩ただ一人だけ笑み給う
懸空寺　三蔵法師の雲走る

八尾市

山下美津留

よくはずむ毬親切の輪を広げ
陽のあたるビルだが温み伝わらぬ
墨痕あざやか破門と書いてくる
酒も毒　煙草も毒で生きている
月煌煌　男の弱さ浮き立たせ
色褪せた服で味方に馳せ参じ
参謀にしたい男が敵に居る
妖精の群に混じってスイミング
ときどきは岩戸へ消える妻と住む
災害は先ず善人を薙ぎ倒し
妻の酌一ぱい注ぐと愚痴一つ
五重の塔守る鎌映ゆ斑鳩路
村祭り力石には近寄らぬ
腎臓に居ついた石が出て行かぬ
雲行は悪いが旗は降ろさない

香川県

山地マツヱ

どん底ではかりに掛けている人情
ホツホツと桜咲く音風が待つ
肩の荷をおろしてからの転びぐせ
初出勤　靴光らせて光らせて
絆また切れそう茶わん買い替える
三ツ指をつく悪妻で憎めない
どの窓も幸せごっこの灯がともる
真直ぐに帰れば妻が不審がる
頂上の椅子へ野心が渦を巻く
背伸びして青い果実を摘みたがる
紫の似合う女が抱く嫉妬
スタートはたしかに妻が従いて来た
口紅はうす目に恋はゆっくりと
娘の春を待つたとう紙のしつけ糸
れんげ摘む孫と会話が弾み出す

和歌山市

山田高夫

悪人になろうと今朝も靴を履く
逆らわぬ妻に手綱を握られる
欲のない汗は水晶だと思う
巨師偲ぶ影をとどめる福寿草
来る来ない来る花ビラが嘘をつく
火だるまの男匿う女傘
異文化を繋ぎ合わせた駱駝の背
電話でもしろと電話で子を叱り
先生と呼ぶと振り向く二三人
枝わかれしてから遠くなる絆
解凍をするのに手間のいる男
無抵抗主義を理由にして無策
忘れ物思い出すから惚けてない
夜が明けて夜がまた来て病み続く
回転の速い男と噛み合わぬ

鳥取県

山根八重

不器用な女が通る七曲り
この坂を越えたらきっと春になる
道草を許してくれた鍵ひとつ
何となく車中の人と視線合い
照れながら一礼をした美少年
丸刈りの少年だから頼もしい
反対をしたら憎まれ役になる
水溜り心許した事がない
感情は心にしまい丸く見せ
捨て石も生れながらの意地で生き
傷口をやさしくするとよく喋る
髪染めて若い笑顔になりました
命ある限りに燃える紅椿
逢いたくて指輪嵌めたり外したり
姑さんと嫁とでなしに出合いたい

吹田市

山本希久子

初めての街で似た景色に出会う
風景はひとつ心は二つある
とある日綱引きしてる善と悪
結び目をまたも確かめたい女
変らない愛などはないレモンの黄
繰り返す愚も女なりバラの朱
あんたには一番ふさわしい私
焼えつきて女の髪が白くなり
一枚ずつ私の冬を脱ぎ捨てる
正客へ枯山水は真正面
森羅万象声あり山は紅葉す
伴走の妻を時どき見失う
生涯を一本調子父の唄
髪白き母に待つことばかりなり
咲くままに私の桜散るままに

岡山県

山本玉恵

抜けがらの乳房で海の音をきく
その先は問えぬえらんだ道ならば
雑兵で生きた素直な顔が寄り
水割りのグラスに解けてゆく迷い
燃え尽きるまでを捧げて絵ろうそく
引きぎわの美学に酔いしかたつむり
よそおえば愛の形に風が舞う
捻子少しゆるめ人間らしく居る
深追いをする度尻尾引っかかり
吊橋の途中ですがる手を信じ
木洩れ陽の情けにもろい冬苺
汲みあげる愛一杓のこの重さ
モチーフをつなぎ合せて女道
程々に呆けて居るので生き易い
理屈など抜きで逢うてる花の下

守口市

結城君子

明日の予定　咳に気づかれないように
神さまは天にましますものと決め
本心はそっと触れずにおくロマン
母の目はもう知っている娘の鼓動
チャップリン未来を読んでいた名画
三面鏡　夫の顔はまだ知らぬ
おやつにも湯気立つものが欲しくなり
引算をしながらお世辞きいている
うしろ暗いこころを見抜くあおばずく
クランケが気の毒そうに嘘をきく
その上をその上を行く登山靴
学歴のない一言が身に滲みる
肌合わぬ人視野にあり饒舌に
通り抜けの中に一本散り急ぐ
終着駅この寂寥と落着きと

岡山県

横山一声

一寸ずつ積んだ塔が崩れない
長生きの秘訣を語る歯がきれい
好きだとは言わず静かに目をつむり
人生の坂道後押す妻があり
漬物の石が沈んで春となり
腹立ててしめた障子で指をつめ
雪の里　人情だけは暖かい
退院へ別れを惜しむ人ができ
草の種モンペの尻で運ばれる
嗜みという白粉の濃い過ぎる
人情に厚く儲けはうすくなり
落人の里に伝わる粉ひき唄
牛と馬歩幅あわせて五十年
職人の道に出口のない修業
六十年　職一筋に喜寿迎え

出雲市　吉岡　きみえ

ひょうたんの駒を出そうとあせってる
岩田帯こころ静かに潮が満つ
旅先で転んだことは話さない
自画像は酒に溺れた影をつれ
トンネルをいくつも越えて来たリンゴ
役立たぬ指はつめだけよくのびる
花言葉あげてもあなた振り向かぬ
春一番腕立て伏せを十回も
風鈴の音がかすかであさきゆめ
アレルギー人の噂に病んでいる
自問自答つまり私を殺さねば
四苦八苦　人間らしく生きている
甲乙の兄は甲種で行ったきり
酒のみにチクワの穴が大きくて
雪しんしんサービスシール貼ってます

藤井寺市

吉岡美房

政治家を逆さにすれば飴が出る
叱ってる孫ににっこり笑われる
戦友が来る同じ話をするために
喪服着て妻がいそいそ出て行った
ようもった夫婦茶碗を拭いている
病室に入る笑顔を整える
治ったら行く約束を抱いて逝き
ちぐはぐな話も聞こう父じゃもの
猛暑来　犬が寝てても腹が立ち
蟋蟀よひとりぼっちになりました
父の忌に西へ西へととぶ蜻蛉
うどん屋へ駆け込む雨の十二月
迷うから会えた仏の慈悲だろう
冗談にしてしまわねば恋になる
吹雪く夜は君の呪縛に委ねよう

豊中市

吉田あずき

魔女が杖振ったか春の野の緑
星の無き七夕せめて賢治の詩
捨てて来た故郷の天気予報聞く
敵にした方がよっぽど楽な人
たぎる湯をそそぐ自分の脈拍で
そむかれて一人手毬をつくばかり
子の本の栞の位置を読み返す
孤独感　南京豆がやめられず
万一のために右手はあけてある
土地高騰　一本足で立つポスト
別姓のままで二次会三次会
沈黙の分だけ父の濃い心
沙羅双樹落ちてかすかな息遣い
どの色も引き立てながら白光る
冬の実が幸せそうに赤うなる

宝塚市

吉田笑女

緑の日好きなお庭の土いじり

友の行方やっと見付けた古葉書

ビールの味とうに忘れたひとり旅

言葉尻拾って孫に嫌われる

あの方もお達者らしい風だより

ひそやかに海老根咲いてた花の陰

先立った亡夫へ朝夕経をあげ

強引な相手に根負けしてしまう

逢う度におんなじ愚痴をくり返す

浅瀬なら母もひとりで渡れそう

ふり出しにもう戻れない八十路前

ふっくらと豆煮えて来た落しぶた

今一度飲んで見ようか酒　煙草

その先の事にはふれず菜をきざむ

下積みの暮しそろそろ嫌気差す

八尾市

吉村一風

浮き沈み耐えて仏の顔に似る

耐えられぬ時には母を呼んでみる

回り道したなあ妻とうまい酒

信じれば信じた答え持ってくる

悲しみへ花は明るい声をくれ

節くれた父の指見て酌をする

花便り雪解け道を踏んでくる

金の力借りるとどこか漏れてくる

横糸の隠れた命往きかえり

妻の漬けた梅酒の味見ちょっと過ぎ

真実は声を落してそっとくる

ストレスも包んでゴミの日に捨てる

いい考えをくれそうじっと雲を見る

吹けばとぶ男に義理を返される

飲む時の時計ひとりで走り出す

奈良市

米田恭昌

一坪の庭にたたずむ似非詩人
花手桶　仏にわびることばかり
脈をとるナースが辛い嘘を言う
思い出は出張と言う旅ばかり
日本の母と言われて子をとられ
電話口　息吹きかえす友の檄
漫画より絵本が似合う桃太郎
花音痴　妻に教わりつつ歩く
新しい小さい机にでかい夢
父の日に翔んだ娘のプレゼント
動くもの何でも嬉し退院日
五歳児の何で何でが追いつめる
外人の隣の席は空いたまま
おお怖い妻は怒りも泣きもせず
ぼんやりはお互いさまで良い夫婦

鳥取市

両川洋々

天の声なるほど賄賂効くもんだ
過労死へつづくラッパと知らず舞う
不景気は大臣だけの罪ですか
米どろぼうおっと死語ではござんせん
権力の番犬だけにゃなるまいぞ
散りぎわの花が本音をふともらす
なあお前三途もペアで渡ろうか
奈落まで影よ黙ってついて来い
墓石の下だ仮面はもう脱ぎな
渡り鳥　母国のいくさ知ってるか
紙おむつしててもやはり女です
森が病む夕陽の中で与作死ぬ
札束へ神よあんたもよろめくな
ＰＫＯまた英霊をつくる気か
アイシャドー付けた敵だが手強いぞ

大阪市

渡部さと美

赤を着て五十の坂へ活を入れ
太陽と約束があり早寝する
回転ドア二人を引裂くかも知れぬ
犬は犬の高さで見ていた行き違い
太極拳まさに悠久大河だな
ゆらゆらと花野へ降りる春の鐘
おばたりあん連れ立ち恐いものはない
ふる里のとんぼ覚えていてくれる
賞味期限というのがあっておそろしや
巻き戻しテープのように酔うている
立つだけのポーズに素人との違い
いつからか息子の視野にいるらしい
このように忘れなさいと花が散り
父に勲章きっと来るはず酒屋から
鶴の舞　恋をするならあのように

倉吉市

渡辺独歩

政界に新党出来て渦を生す
血圧をなだめるための演歌聞く
億の金　人の心も餌に見る
草を焼く野火は女を甘く見る
夫婦別姓　我が家に舵が二つある
着たっきりで出番なかなか出ぬ案山子
ヘソクリを数える声もひそやかに
中年を過ぎたら白髪染めがいる
黒髪にフッと匂った椿の油
茶柱が立って願いをこめて飲む
虹が立ち幸せ掴む橋かかる
義理チョコの中にほかほか組もある
メリハリをつけた法螺には負かされる
蛍呼ぶコッチの水は甘いぞ
三姉妹　中の娘が謀反する

富田林市

和田維久子

川柳文化の花咲く園に鶴が舞う
自己愛人　見事桜の炎にて
一鍬の土の恵みに心結ぶ
大豆蒔いているなと鳩の眼がにくい
朝シャンの匂　幸運追いかける
両手に花　胸さわぎする片えくぼ
喜びを結ぶリボンの色をよる
宅急便にドラマ詰め込む若さかな
美しい虹を姿見からもらう
梅のささやき他人の頬の温さとも
切り札のなぞが解けそう花の宴
捨てる神拾う神あり青い星
裏通り平気で通る札の束
人生の吹雪押したり押されたり
さまざまな出逢いと別れ傘寿の旅

神戸市

青木公輔

渡る世間には鬼と仏と恋人と
白いカラスを売り歩く馬鹿な保険屋
聖書繰る風のやすらぎ聴くために
街灯が口止料をくれと言う
一線を越えたあたりの冬景色
古時計の棯子巻く芋が煮えている
揺れない吊橋女の体臭だけ匂う
好きな言葉を静かに溶かす四月馬鹿
びっくり箱の底で嗤っている女
敷金の差額夕陽と引換えに
ほどほどの貧しさ銭湯など愛し
義理チョコ三枚どれから口説こうかと思う
住所不定の仏に握手されました
嘘を輪切りにそろそろ少年期が終る
賞罰ナシの顔　男湯と女湯に

岡山県

赤木 蔦

思い出は過去　あるは今ばかり
今日生きて明日を思う蔦かずら
光陰は矢　明日は今日を昨日にす
老いるほど時の惜しさがましてくる
百歳を生きるときめてプラン立て
散ってなお花を咲かせる老いを乞う
枯草に抱かれたように春息吹く
うす白む夜明桜の花あかり
花見なら九十の足もかるくなり
人声のきこえるよう秋の山
立話心配一つ捨ててくる
充電をしなくちゃいけぬ誤字ばかり
犬の毛にリボンつけたり散る紅葉
自分史の終章かざる孫の婚
掃除終えテレビの前のよい時間

静岡市

浅子まつゑ

逢いたいと言う追伸を抱きしめる
風邪の子をあやす童話の種が尽き
瀬戸内の亡き姉思う夢の橋
花の名は知らないけれど好きな花
機械なら耐用年数過ぎている
好きですと言うのはとてもいる勇気
ハンガーにぐったり掛る夏の服
追伸の二字に書き足す胸の内
欲求不満　隣のつるが伸びてくる
頑固さが取柄と言うが困りもの
買いたいな金で若さが買えるなら
子に母の心伝わる握る飯
のし袋心も共に入れて置く
真実もうそも知ってる茶封筒
愛の輪をころがしながらボランティア

松戸市

浅田扇啄坊

いろんな旗で貨車の入れ替え
絵ごころの視野に足りない虹の彩
ふるさとは俺を見捨てた柿が熟れ
台本のメモからアドリブを貰う
ひょっとこは浮かれ上手な足の裏
保健所の犬に敵意がまだ残り
旱魃の眼に雨乞いがあるばかり
民宿の廊下で踏んだご飯粒
おなじ酔う酒にも米と芋の味
B面の現代版は歌手を変え
生涯の脇役母の灯を消さず
かみさんもちゃんと座れば負けてない
呼べばすぐ来る頼りない御曹司
仲直りしましょ水割り濃くしましょ
別れ道どっちの嘘も手を振って

羽曳野市

麻野幽玄

汲み上げてまた地へ返す農作業
打ち明けし想いのたけや星の冴え
母さんと一期の別れ声にして
世話をした分だけ花は咲いて見せ
食欲が無くなるほどでもないが恋
本物を手にしてからの迷いです
宮詣り富多かれと雪給う
川下の石は揉まれて来た丸み
視野無限　考える葦に空がある
神仏へ合わす掌　内助へも合わせ
満ち足りた心を抜ける風を知る
寝不足も癒して風邪の床を上げ
安住の地を得て苔をまとう石
緊張度違う世代と聞く戦記
うつせみの五常へ叶う言葉選る

羽曳野市

芦田絢子

決心のついたコーヒー苦くする
鏡にはうつらぬ嘘を持っている
旭屋で待つ約束で気を許す
鰯雲おからを炊いてみようかな
花手桶けんか相手に逢いに行く
パズル解けて終着駅が近くなる
のど仏　孫が他人の顔になる
きんぴら牛蒡買うて堕ちたなと思う
握手した日を記念日にしておこう
シルバーシートの前には立たぬことにする
心まで涸らしていないまだ泣ける
茜雲　なぐさめはただ煩わし
アンテナが揺れる誰かが呼んでいる
ひとりよがりが過ぎるくちなしの白
味方ではないな返事が軽すぎる

高槻市

芦田静江

喜寿の宴シルバージャンプ朱にもえる

茶の心　雨の水無瀬の献茶祭

黄八丈　子守きれいに春を舞う

四天王　鬼と極楽契り合う

太郎冠者追うと舞台に春がくる

麦秋に青春生きる智衆の絵

味方みな雲に走った歎異鈔

タイムカプセル蓋は輪廻の風を知る

銀河無数にひときわ光る夫の星

篆刻の誘い朱の海に生きる

初春輝いてモネの睡蓮酒に乗る

水中花あなたと恋におぼれよう

一張羅また着てゆけず御招待

赤ベコに牧場の土がよう笑う

曲水の庭華やかに白拍子

藤井寺市

東　史朗

兎に角も飲んだら効いた試薬品
保険屋が近火お見舞い真っ先に
党割って出ればけじめと言う論理
紙一重ほどの差もない名勝負
ラッシュ時の車内にボタン落ちたまま
世渡りの上手な人は負けて勝ち
師の影を遊び心で踏むヤング
ひとり酒任地で偲ぶ故里の秋
ゆっくりと構えていたら嫁き遅れ
矛先をとぼけてかわす苦労人
政変の日本気象まで異変
梵鐘を諸業不況と聞く師走
災難の友に我が身の明日思い
煙草屋に娘は要らぬ販売機
日本へ米売る国の高笑い

徳島県

安宅美代子

泣き顔はいやよさぶさぶ顔洗う
母ひとり残した村に星が降る
ありったけの絵具を溶いてみる余生
リモコンの位置には何時も妻がいる
何ごともなかったように皿洗う
正直に生きる昨日の手を洗う
どん底で神に貰ったにぎりめし
この人に何時まで添える鍵の音
つらい時笑い転げる種を蒔く
本当の馬鹿になり切る策がない
消しゴムに贈る私の感謝状
四面楚歌　今日は七人ではすまぬ
種無しにされたブドウの黙秘権
百点の妻に逝かれた俄か雨
騙される判に茶も出し菓子も出し

和歌山県

井神昌子

突き当たる壁にも愛の灯が点る
やがて来る別れに愛を積み上げる
花植えて花を咲かせて知る素直
顔知らぬ柳友の句に支えられ
残り火を抱きしめて立つ風の道
美しい心を燃やし続けたい
夫唱婦随　似合いのドラマ演じ切る
有り過ぎる色に心が迷い出す
さりげなく余韻残して風は去る
雑踏の中に涙を捨てに行く
病む夫の計画叶う日を信じ
世の中を上手に渡る橋がない
たとう紙に女の未練封じ込み
片時も忘れたことのない立場
一人芝居　上手になっていく孤独

堺市

以倉菜々

五十路より私の夢は開きます
待つよりもプラス志向で歩きます
留守番で一人芝居がうまくなる
葬式で知った近所の偉い人
音痴でも愛の賛歌はうたいます
帳尻が合ってかえってばれる嘘
問いつめず泳がせておく妻の余裕
逃げ道を少し残してとっちめる
うきうきがいらいらになる花時計
伸びる芽を過保護の水で腐らせる
わが家での巨頭会談ボーナス日
出合いからわくわくさせる青りんご
天動説唱えてからの四面楚歌
何回も白紙に戻し透けてくる
草魂とたたかいながら庭手入れ

米子市

池尾保子

深々と頭垂れてる初舞台
太陽の笑顔に花もふくらんだ
父母の欠点みんなわたしが持っている
ドラマのような夫婦ごっこがしてみたい
よく視れば猿にもボスと臆病が
疑い深い耳が今夜も疼きだす
金持たぬ子がいちばん孝行してくれる
明日は売られる雌牛牛舎を離れない
百年の風雪屋根は知っている
笛吹いて五百羅漢を起こそうよ
手のひらに母の感触まだ残す
跡継ぎがじっと眺める父の山
手旗信号向う岸から父が振る
神さまのノートは順番が書いてある
達磨よだるまあんたも手足欲しかろう

貝塚市

池田寿美子

大空へ一番機見る新空港
あの世には落し穴などきっとない
いい人と思い込むのは早過ぎる
別れがあるたびかしこくなって行く
美しい夕陽にあすの捻子を巻く
駅弁の紐ゆっくりとほどく窓
千羽鶴翔べぬ重さよ終戦日
しあわせと虚しさ春の夜のひとり
抵抗を少し感じて踏切ろう
あるときはドンキホーテになりたくて
ぼたん一つはずして友と許し合う
軽い靴頼れぬものの無いままに
逢えるかもルージュすこうし濃ゆくする
シャネル5で鬼を迷わすことにする
現実と夢の接点にさわがれる

大阪市

池田登志子

七草粥　第六感は冴えぬまま

他人めく挨拶をして仲直り

なまけ癖わたしを叱る春炬燵

花おぼろ許すつもりの鍵ひとつ

お調子に乗った風船つつかれる

噛み合わぬ話のままでちぎれ雲

なるべくは夫看てからと胸のうち

慎しみのタガがはずれて捨てぜりふ

てんまりの行き場を捜す好奇心

うちの鬼　友達いっぱいいる不思議

原因はわたしと悟る不燃ゴミ

雨の日に自分探しの迷い箸

お粗末ですが無理をした顔もせず

気安くは仲間と言えず同じ席

ぼかされて疑いの目動き出す

岸和田市

井齋一齋

金借りてハンコばかりが威張ってる

子の寝顔　別れ話が切り出せぬ

金儲け誰にもヒント教えない

無罪だと叫び続ける針むしろ

ハシゴ車の届かぬくらしちと不安

お見舞の花一輪で咲いた恋

買物客しつこく迫って逃げられる

脳ミソの中まで細るダイエット

お目出度い話し半ばで酒にする

片思いでしたと祝辞笑わせる

ウインドの季節早目にやって来る

時効でも神の手入れがきっと有る

直感の妻が走って取る電話

お人好し都合よろしく使われる

戻らない善意の傘が泣いている

福岡市

一宮志のぶ

血の通う言葉を追うと母の笛
きまぐれな旅に駅弁二つ購う
ふる里にまだ指切りの橋がある
傘の雫切らねば未練従いてくる
火に挑む父亡きあとの鬼瓦
這い上がる手に一本の藁がある
地の果ての平和を希う空の碧
五線譜は読めない父の子守唄
山吹きの花ほろほろと愛終る
春の絵が余りに温い茣蓙の上
閨閥の門華やかに灯を点す
記念日は朝から白いパンを焼く
どんぐりの夢が落葉の中にある
決断の男に朝の寒卵
風船で翔んだ男を呼んだとて

名古屋市

伊藤翠庵

大器にはなれない石をまだ磨く
嫁の座が不動で鍋がよく光る
どたん場で人のこころが見えてくる
夢売りが来そうで波がくる渚
酔眼に妻がおんなに見えてくる
淋しくて辞書にわたしの字を探す
にんげんの決めた掟に縛られる
気まぐれな風から貰う果し状
正直に生きても当る流れ弾
あすなろの樹のてっぺんで生あくび
神様の手落ちの顔が変えられず
ボロボロの聖書を抱いて変えぬ主義
弥陀の掌に触れる写経の墨をする
期待せぬ老眼鏡がよく見える
目立たない釘で出番なく老いる

岐阜県

伊藤とみお

風除けの石積み上げて島貧し
夕映えの森が最後の砦かも
殻ぬけるとき渾身の爪を立て
分け売りの酒買う遠い夕景色
銃の要るアメリカもまた病める国
冷害をうまい品種がもろに受け
順番が来ても軍歌のほか知らず
千年を生きて樹勢の衰えず
被写体はここにもあった野を歩き
彫り深く江戸へ百里の道しるべ
農ごよみ恵那山系の雪が消え
リハビリをほめるとすぐに涙ぐみ
清貧の姿勢崩さず柿吊す
効率化ばかり追いかけ米不作
赴任した村が日増しに好きになり

兵庫県

伊藤万次良

鯉のぼり泳がす竿が見つからぬ
改築の柱に孫の背が残る
謝辞つくり娘の晴姿待っている
中庸でタクト振っている人生
妥協してくれた真意がわからない
まだ燃える余力を残す埋み火よ
土壇場の言葉一つが首つなぐ
わからない事の一つに明日がある
ゲレンデを孫と滑れる夢叶い
切張りをしながら亡母を思い出す
定位置で子等の帰りを待つ灯台
四人目の末子が墓をみると言う
屋台骨守った腕が休めない
張り替える襖に亡母の字を見つけ
沸騰点やがて渇きを知るだろう

名古屋市

稲垣正穂

功成って男勝りをうとまれる
雰囲気も酒器も忖度せぬ酒豪
愛情を買う嬉しさの植木市
道訊けば由来もそえて城下町
クラス会名簿こいつは引越魔
落葉百態　神の恵みの地に還る
誤字脱字ほほかむりして同人誌
そこら中がたがたという久し振り
欲言えば緑がほしいマイホーム
象の目も子の目も神を疑わず
花嫁の挙手投足は見つめられ
反対があるから闘志湧いてくる
殺し合い人が余った訳でなし
だんだんと頼もしくなる団子鼻
サンプルは盛りが良かったレストラン

八尾市

井上しのぶ

顔なんか見たくもないが2DK
ショールーム同じ間取りと思えない
献立は部屋のにおいですぐわかる
市のマーク正しく描けぬ市民達
寄付をしておかず一品減りました
仲間だと呼ばれるまでの冬景色
平凡な顔が私の自慢です
許されてからは立場が逆転し
母のことわかった頃にくる寿命
ものわかり一番悪いのは主人
朝っぱらから何やと受話器置いてから
顔写真　自分良ければすべて良し
雑草に間違えられてのび悩む
仲のいい二人は少し離れてる
人生を支えてくれるのはB面

犬山市

井上多加江

熱燗が売れて夜桜もり上がる
メロドロマひとりの歌手の育つまで
足どりも老いたピエロの背を笑う
半丁でひとりの昼の冷やっこ
だんまりと微笑で馬鹿な風をよけ
何もかも知ってすずしい地獄耳
椅子よせて話もつれている受話器
アルバムに山の思い出花しおり
裏表読むのが下手で踊らされ
田を売ってボタンひとつの家を建て
ひょっとこの面で気弱が三味に乗り
ふる里へやっと帰って来た辞令
大阪の趣味と溶けあう空の下
家風にも慣れて女の愛を積む
世辞すこし余命大事に生きている

京都市

井上信子

逆立ちをするとこの世も美しい
人生いろいろ縞馬の縞のごと
羽ばたけるうちにあの風こんな風
大正ロマンとろとろ生かしつづけよう
自画像の帽子と靴は赤にしょう
母に似ぬ私はわたし水かがみ
枯れたくない枯れたくないと水を飲む
丸い嘘いくつ重ねて妻で居る
髪洗う忘れるために消すために
孤には孤の生き方があり花の首
背開きの魚のように悟れるか
終章は寂然と在り竹の花
死ぬ話しているうちが花だろう
歯車がコトンと止まるまで女
抱きしめてくださいますか仏さま

島根県

今川三津江

菊人形人の吐息を聞いて立つ
焚き火から芋の匂のするも秋
物忘れ茗荷のせいにしておこう
自己流の体操をして今日終る
麦畑消えて雲雀が絵にならぬ
寺の鐘　仕事残して鍬洗う
転勤の無い地下足袋を今日も履く
若いっていいな少年Aですむ
スナップ写真腰を伸ばせと風笑う
雨雲が走る私も走らねば
みの虫になって嬉しい寝正月
花手桶　柴栗一つ拾う道
岩清水苔も緑の笹柄杓
菊一輪　野仏様へする供養
春の山カチカチ山にせぬように

大阪市

今西静子

遠き日の君と聞きたい蓄音機
夏バテを少しずつ剝ぐ秋の雲
愛される小鳥がとんでゆくデート
宝石を持つと神経質になる
寝ておれと叱るが何もしてくれず
酔うて帰る辻がいくつかわからない
火事見舞　辛口一本さげてくる
家出した鼓動を知っている切符
たて前の裏でぼやいてる本音
結局は有志にされて金一封
なかなかのやり手　表と裏の顔
同居して罪のない嘘聞いてやる
無理をした手切金です恋終る
字詰りを塗り消してる看板屋
接点がひとつあるから夫婦です

唐津市

入江喜久亭

キープしたボトルが切れた夜のバー
夢に見た亡妻恋しくて寺詣り
下駄箱にそっと納めたちびた靴
ベレー帽隠す白髪がちらと見え
カラオケで女が唄う男船
沈丁花匂に亡妻を思い出し
パチンコで負けた悔しさコップ酒
いらいらが日毎につのる夫婦仲
梯子酒別れた友とまた出合い
酔い醒めに食べたにぎりのさびが効き
過去ばかり思い浮べる古希の初春
共稼ぎ帰宅時間に妻は出る
サロンパス匂う和服のいい女
使い捨てカイロが心も温める
朧夜の恋路に影が付きまとい

熊本県

岩切康子

健診を気楽に受ける自信体
勤続表彰　仕事の鬼の曲り角
予定表一寸覗いて今朝を出る
自信過剰ミスは他人の故にして
夫病気　頭の中が倍になる
日曜日　決心ついて動き出し
省略の多い夫婦で相通じ
星座などわからず星の美しさ
照れば照り降れば降ったで用回し
目標へ一直線の生直面目さ
室内プール老若男女睦まじく
テレビより一菜もらう夕支度
曼珠沙華　摘まれ易いとこに咲き
悪口は言いたくないが悩みごと
念入れて白髪をかくす髪を梳く

鳥取県

岩崎みさ江

母の絵にツノを描いた日を悔いる
母の背で追いかけていたお月さま
生れたり死んだり星も生きている
あの人もやがては星になるだろう
シグナルを送りつづけている地球
しあわせの壷満たされてくる不安
愛詰める保温の瓶が欲しくなる
夫を待つ思いが鍋で煮えている
音沙汰がないから安堵していますどんな絵を描こう余白がまだ少し
後継ぎはないがわたしの今がある
残照へそろそろ思う仲直り
今日よりも明日はすこし沖を漕ぐ
母の海はかりしれない青を抱く
ひかえめに香れと祈り娘を送る

島根県

岩田三和

いざなみの好んだブドウ美容食
百歳へめしと鰯とわかめ汁
二千年つづく牛飼い笹食わす
昼寝から覚めて三時の茶の香り
テレビ殿　食い道楽のすすめ過ぎ
朝になるとせんじ薬が効いていた
一滴のときは宝石だった水
地下水に水神おわすわさび花
ふるさとをはしゃぎ回ってよもぎ踏む
原子の灯消して平成喪に服す
ストレスを溜めております松のコブ
村長の娘に声をかける牛
千人のコーラスここに春迎え
時間表なくて便利な渡し舟
おしゃべりに雀が三羽来てくれた

大阪市

上江洌　勝子

コスモスの背く姿のない如く
年賀状書いて思いの深くなる
登りつめて私の夢は何だった
一言の温みに開く花の芯
北風や老いの涙にわけはない
蝸牛　橋の長さを知ってから
冬木立じっと我慢の子になろう
美しく老いる手だての回り道
酒談義　嫁も少しはいける口
ブレンド米　父が黙って食べて居る
薬草が長い話にしてくれる
老醜を許し合うてる茶が旨い
美辞麗句　心を風が吹き抜ける
淋しさは春を忘れた土踏まず
四面楚歌　蛇口の水が止まらない

鳥取市

植田一京

花びらの流れる川を汚せない
読んでみるつもりの本を買ってくる
笑顔する笑顔かえして欲しいから
夏祭り信じたくない噂聞く
鬼瓦お星様とは仲がよい
沖ばかり見ている男の飯を炊く
届かない位置に真赤な実が熟れる
蹴つまずく石が浮世に置いてある
岸まではみんな味方に見えていた
軍服の兄の遺影よ若過ぎる
てっぺんに届く笛なら吹いてみる
私にも全部は見えていぬわたし
気まぐれな風に方角間違える
スタートで躓く癖がなおらない
神様の過労死なさる日が怖い

香川県

植田チカエ

人生を自分好みの柄に織り
蔭日向なき人柄にある笑顔

子育てを済んでからする薄化粧
夢に会う亡夫の笑顔若いまま

哺乳ビンみるみる空にする元気
きびしさの中にチョッピリ愛がある

天国へあの人幸せ持ってゆき
やわらかい布団に老いを包みこみ

ひまわりの種の一つが生むドラマ
母の手は何時さわっても温かい

年輪の姿やさしい宮の松
嫁ぐ娘の寝顔も今夜だけとなり

桜咲く便りに金もとんでゆき
花の種　隣の庭でいばってる

積重ねあって人柄認められ

豊中市

上野泰枝

明日が来る案内人もいないのに
裏門は開いてますよと黄金虫
生活に疲れた蜂が人を刺す
観光の宿に痛みを置いて来る
打ち込んだ心算の釘がはね返る
投げ込んだ石の行方が気にかかる
木もれ陽に憩い求める痩せ雀
蝸牛　凌雲の夢捨てきれず
無力者　臨終の母唯見つめ
魂の抜けた骨壷抱きしめる
葬の列　石より重い歩を運ぶ
ピアノ弾く陶酔の顔芸の顔
潔く散って寄りそう花筏
緞帳は降りた自由な絵を画くゾ
一行に窮してここで筆遊ぶ

高砂市

牛尾敏子

目の前のドミノ崩して星座射る
北斗星　見上げて泣いて半世紀
筋書もきまらぬ明日の虹を待つ
爪先でそっと歩いて行くドラマ
吐き捨てた言葉に張り付く砂時計
毒という名の香水がよく売れる
踏みしめて生きた証のはかなさよ
それからと考えないで生きてみる
耕運機　食い合う大地氷雨降る
三岐路で選んだ視野をひた走り
まといつく澱を沈めてリンゴむく
三岐路で夕映え迫り迷路行く
許してとあやまらないで傍にいる
重き信ころがして嘲う一人旅
松涛の音なつかしと茶一服

泉佐野市

内田倫子

雨の日は明るい色の紅をひく
春の風　乙女ごころもふくらます
池の水汚れても蓮の白
回り道　優しい庭と巡り合う
窓枠が額縁となるローカル線
何もかもひっくり返し孫帰る
見栄張った小さな嘘にしばられる
ある筈の私の影を探してる
忙しい時の時計はよく進む
叱られた子供が犬と話してる
善人を演じ続ける嫁姑
何取りに来たのか忘れにが笑い
借金をローンと呼んで気が軽し
つまみより話し相手の欲しい酒
神様の仕掛けた通りに生きている

豊中市

内田房子

合の手を入れて空気が横を向く
笹舟に行方任せて眠る蝶
風さわぐ波打際にある小舟
百面相の心　鏡にのぞかれる
結び目を握りしめてる細い指
欲望の崩れた夜の雪あかり
過去形にしたくない人皿に描く
消え残る火種が愁い抱いている
沈黙のあとのことばは何色に
残り火を踏み消した日の終電車
小石投げその水紋に運命問う
誘われて心傾く洗い髪
百分の一の未練か下駄の雪
あの背中私の涙で龍を画く
秘め事を入れた器も色あせる

松江市

浦辺静江

スケジュールこなし夕日へ逢いに行く
あの山の向こうに好きな指定席
大空の赤信号は見えなくて
時忘れ老いを忘れて踊りの輪
お互いに個性を出して花を生け
水草を一輪さして客を待つ
マネキンへ一足早い秋の風
思い出をしみじみ語る足の裏
どう見ても顔に頑固と書いてない
障子好き障子嫌いな夫婦です
役付になってネクタイ締めなおす
母に似て衿足だけが取得です
日溜りへ新芽見つけた竹箒
吊皮は女性の腕に触れたがる
山越えて和む空気に逢いに行く

唐津市

江川青琴

初恋の人も品良く老いている
美しく老いてゆきたい少しでも
長雨に暑中見舞の出番なし
インタビューでっかい力士の細い声
落ちこぼれと言われた男家を建て
孫帰り後からでてくる探しもの
愛犬も亭主も過保護にしてしまい
真心がかくし味かな嫁の店
物忘れ番組だけはよく覚え
吉野ヶ里近くにありてまだゆけず
同窓会　補聴器つけて歯の自慢
煙草屋の主　禁煙すすめてる
口喧嘩しながら世話をやいてます
正義感強くて敵が多過ぎる
義理の中　嘘も大事な事もある

高槻市

江原秀夫

逃げ道はあけて大人の話合い

去る人は去り川底は澄んでくる

度の合わぬ眼鏡まわりを丸くする

針のない餌などあろう筈がない

潮時に消えて拍手が幕を引く

土壇場で味方にてのひら返される

栄転を繰り返してなお平社員

無作為が作為に見えるアンケート

警戒の垣根にパレード見えかくれ

湯上りの髪の香りに雨の音

隅の席カクテルで本を読む女

ＯＬのおんなは五時を過ぎてから

家計簿が他人の顔で指図する

妻の持つ紐を時々引いて見る

五十年掘っては埋めた溝の跡

寝屋川市

江見頓坊

舞い扇　大和撫子垣間見る
金婚式縁の糸は赤かった
妾より先に死んでと婆ほざき
もう酔ったかと相棒先に酔い
感激も忘却の彼方君の名は
いつまでも回っておくれ夫婦独楽
楽隠居もつれた紐を解く役目
うっかりと出た電話口仮病の日
初恋はだまって消しゴムくれたひと
よく聞くが見たことはない億の金
アロハシャツ妻の好みに着せられる
お洒落して何処に行くのと児に訊かれ
逆境に手を差しのべる真の友
親蟹を真似て子蟹は穴を掘り
ブランコに仲間外れの児がひとり

西宮市

大岩しづ

俄か雨　猫の素足に追いつけず

くそババと呼ぶ子にもやるお年玉

買う方も店主も馴れた消費税

一匹の蛍に訪われ和む宵

行くみやげ帰るみやげの盆の月

夏祭のたった一夜へ縫う浴衣

喪が続き日記に白が目立つ暮

人知れずポツンと落ちる藪椿

花便りまだ貼ってある無人駅

世の移り二浪の果ての職さがし

久しぶり握った筆に背かれる

十人が十色のりぼん選っている

ボタン穴かがると母が見えてくる

思い出が心に残る娘のりぼん

論文を書くペン先にある未来

大阪市

大河未佐子

お手玉を落として出来た島二つ
地の中にどんな仕掛けか花の色
ベテランは肩で色気を出している
跡取りを養子にやった覚えなし
大茶盛り茶筅の泡もビッグです
困ります勝手に夢に出てきては
遠くより放ったほうが的を射て
天国を好きに走れと首輪とる
成り行きに任せる勇気ちょっと出来
二次会にお面を取った顔とかお
生みし娘がまた命生む清し朝
ひな飾り結納飾るこの弥生
もう知らんと言うているのは背中だけ
佳き人に男冥利のお六櫛
幾重にも紐掛けました羽の箱

山形市

大木一枝

懺悔した文字で埋める私小説
ライダーで心の闇を照らせるか
憎まれぬ人になろうと爪を切る
手のひらの火種と明日を語り合う
老いまいと喜劇の種を蒔いて置く
きらめくときっと素敵な人となる
まだ野心燃やす火種が風に舞う
伏せ文字で不満があった日のノート
カルチャーで調子がついた余命表
生きざまに一つ覚えの歌がある
破れない壁が私を笑ってる
ボケまいとまた新しく織るドラマ
母の振るタクトで今日も演じ切る
根性で生きる濡れ衣干してある
どの子にも火種絶やさぬ母の壷

和歌山市

大越利治

ほどほどに過ごす人生賞罰なし
泥水も飲んで支える三代目
嫁ぐ娘に無口の父が肩で泣き
瀬戸際に立って根性試される
その椅子に座れば椅子の顔になり
雰囲気を見てスピーチに一句入れ
勝機見て火中の栗も拾てみる
仏にも鬼にもなって耐えた過去
青春のページ埋めた銃と剣
ぬくぬくと座る女が手綱とる
一陣の追い風待って羽繕い
滔々と茶の間の妻が世相斬る
出囃子に楽屋の風が張り詰める
天下取る手相のままで職を去り
山一つ越えて仏の風に逢い

竹原市

大下規代

紅つける倖せくれる夫がいて
朝露が大好き今朝も踏んでいる
投げやりになって女は強くなる
四万十の川面に映す遍路傘
お迎えへ孫は両手を上げてくる
線香花火まるく輪になる孫がいる
無罪放免なかなか孫はしてくれぬ
襟足が可愛い孫の洗い髪
老い二人お節の残りだけで足る
素通りを許してくれる無人駅
土の香も母の手にあり草だんご
前向きに生きると決めて乾杯す
亡友の墓　乱れて咲くかコスモスよ
老いらくの恋は微熱で終りそう
遠い昔　夜汽車はみんな知っている

寝屋川市

太田とし子

祝電に体裁のよい逃げっぷり
去年の坂　今年は息の切れる坂
恵みの雨　二日続けばもう要らぬ
枕が二ツ相性悪いと言いながら
長生きもえらいこっちゃとも思う
冷え切った文字が厚手の封筒に
スパイスを効かして行っていらっしゃい
売れ残るカーネーションのひとり言
神のるす賽銭箱はちゃんとある
好い天気のこのこ姑が来る予感
宝石の指にかぁーるくハイライト
スマートな自己紹介で顔を売り
艶話　猫がとなりで顔洗う
メメつぶれる母が拾った米の粒
うまくない口で本気の体当り

愛知県

太田まもる

孫の酌ぐお膳でうまい新春の酒
豆まいて撒いて福から拾わせる
草笛が好きな少女の片思い
逢い別れいろいろあって春の雨
菜の花にれんげ団地のお庭番
さみだれの細くばほそく物思う
離されず付かず子の独楽父の独楽
代々の家風と見えてよく笑い
秋の絵図どの一枚も人を恋う
杭打てど打てど情けに抜きとられ
呼び捨てでないとむかしが帰らない
秋灯下書いては消して辞書に聴く
バラ色の老後に孫の絵具皿
泣きたくて泣かせてくれる駅がある
よごれなく予定が変わる雨の午後

柏原市

大槻一屯

瑞兆の雪のひとひら掌にうける
ゆっくりとされどずぶずぶ陽が沈む
夕焼けが素的いつしか手を繋ぐ
楚々とした花がキッスにうなだれる
夏風邪に油断召されぬようかしこ
薯掘って母なる大地だと思う
逃げてゆく蛸八本がみな多忙
にんげんを非情とおもうどじょう鍋
ヤングから来たマル文字の果し状
レントゲンすこし度胸も痩せてきた
寝つかれぬ夜は脱獄のプラン練る
会議難航　地球は自転しつづける
地獄絵にボクとよく似た鬼がいる
幻夢かな五百羅漢が盆踊り
色即是空　静かに墨をすっている

島根県

大野蒼流

ある日ふと童顔鬼面とつけかえる
合掌のくらしに鬼が逃げてゆく
雪ななめ眼鏡がくもる入試の日
古本屋ボクの昔を売っている
廃止線　明日へつなぐ詩がない
本心を遠くに置いて美辞麗句
ちぎり絵の海にわたしの愛が病む
巣立つ子の反旗へ逃げる父の海
大ジョッキ黄色い声が空に散る
酸欠の地球で夏を飲むはたち
ひのき舞台　涙沈めて舞うピエロ
終点に読経の声が置いてある
自分史を書けばもつれる赤い糸
言いにくいことを奥歯は堪えている
核もたぬ子等の童話に和む虹

鹿児島県

大山　舞烏影

早く咲けいやこのままと娘に思う
ファンだからあんな声まで出せるのか
赤紙を知らぬ幸せいつまでか
幸先よし注射のうまいナースだぞ
見せ場などあっては困る消防車
人生の青写真まで親まかせ
リーダーの下山の決意九合目
自由金利　気にする程の金がない
汚れた手かくす手袋白すぎる
海外援助　トップに渡り闇に消え
子は虫歯　母は体重　菓子無念
本物の喜劇役者は笑わない
年毎に階段のびる初詣で
成人式　少年Aとならぬまま
一年生　ランドセルから足が生え

加古川市

岡田秋月

向い風　今日の鼓動を呼び起こす
記憶力呼び起こす日へ花を買う
左手も働かせたい話好き
お返しの人生追って生き生きと
播いたのはどうやら恋の花の種
一本の藁にもあった自己主張
夏の風　同じ立場でものを言う
幾とせを曲りつづけて老の坂
風軽く人甘くなり花を買う
ねたきりへ飾らぬ言葉普段着で
老いの身も踊らされるか孫の笛
人間性問えば努力の欠如とか
結論を待ってはくれぬ発車ベル
初生りの紫紺の茄子に生かされる
回り道して自分史を積んで行く

高知市

岡林京子

いい返事したのに雨の日曜日
射程距離ここでチャンスを待ってみる
韓国に詫びた歴史がうれしくて
運転へ運もしっかり乗せて行く
立ち直れそうな峠の風に会い
土佐弁の温さも知って住み慣れる
束ね髪見ながら育つたくましさ
謀反でも起こすつもりの主婦の旅
春の膳　楤の芽の友　蕗の友
つっぱった分だけやさし親思い
北国の便りに雪が乗って来た
真珠婚まだ続いてる泣き笑い
たずな放した子等の東京物語
小説をまさか地で行くとも知らず
再婚を迷わず決めた米作り

宿毛市

岡村千鳥

そよ風に出会っておくれ子の巣立ち
几帳面過ぎて出世に遠くいる
共に在るしあわせ軽い寝息聞く
胃に触る言葉がすぐに消化せず
ワイングラス小さな嘘が溶けてゆく
安らぎをくれる子が居る孫が居る
百歳までの夢ならとうに積んである
そのチャンスあれば炎にまだなれる
贅沢でしょうか夫と喫茶店
主婦の紐切れぬ程度に翔んでいる
突き刺さる言葉やんわり抜いておく
父を越す背丈ですねをまだ齧り
けなしたり褒めたり甘い夫婦です
影法師お前も齢か背を丸め
平和だな夫婦で熱い茶をすする

大阪市

岡本久峰

初セリのねじり鉢巻活気づき
伝統の重さに耐えているひさし
過労死が怖い励ましほどほどに
都合悪いところをかばい合う仲間
終点でつまみ出される花見酒
ラッシュアワー傍迷惑な大袋
リモコンを避けて息抜く縄ノレン
合言葉先に読まれていたいくさ
童謡で記憶の戻る痴呆症
対岸の火災と言えぬロス地震
相続税ドッサリ遺産送っても
セールスの甘い言葉を見抜く祖母
家庭不和ズッシリ抑えきかぬ父
本心を言葉尻から覗かれる
ラーゲルの大空雁の飛ぶ故国

明石市

小川酔月

ほめられてその気になってる床の花
玄関で妻は背中をポンと打ち
ネクタイをそっと直してくれる妻
距離一歩おいて話を聞いてやり
居酒屋の酒で天下をとっている
二次会をそっと抜け出し屋台酒
酔うた振りするのを処世術と知り
気配りがここにもあった靴光る
それなりの顔で女はルージュ引く
緞帳の降りる余韻がまだ残り
礼服を脱いでとにかく茶漬にし
孫たちにリンゴの唄を聞かせてる
思案してあるく歩道の枯れ落葉
愛してるなんて今更言えぬ歳
思い出すたびにアルバムぬれている

和歌山市

小川百合子

子のために自由自在になる尺度
白鳥になれるだろうかアヒルの子
子を諭す台詞は母のくれたもの
まだ父母が生きていそうな床柱
口喧嘩姑を呆けさせてはならぬ
やさしさがうるさくなった倦怠期
私は私であると言う自尊
本当の私誰にも見せられぬ
丁寧にお辞儀返して負けられぬ
本気なら男に勝てるはずがない
磨かねば曇るガラスの靴を履く
旅半ばまだ行先のない切符
私を生かす保険はかけてある
行く末は一人と決めてたじろがぬ
明日こそは跳ぼう助走をくり返す

大阪市

奥田良子

柱時計　亡父が見てると皆信じ
あの頃の点取り虫も惚けはじめ
肉筆はただ一枚の軍事便
姑ははや仏となるか夢に出ず
古戦場　川は歴史を忘れない
思い出と愛を流した雛の川
老女二人高野にのぼる小さい旅
逝く秋の慕情せつなく奥信濃
石段をおりて見返る通夜の寺
一本の熱燗たのし老女二人
懐石の箸置　今宵ももの花
突然に明日が消えた空の事故
街灯もみどりに光る御堂筋
今一度めぐり会いたい遠い人
人生の終わりの如く夕日落つ

犬山市

奥村和代

カレンダー趣味の印が弾みだす
梅まつり野点の席でかしこまり
習慣がすっかり狂う風邪の熱
決断へ些細なことが気にかかり
母の忌にビデオ元気な頃の笑み
満月に兎の夢をいつまでも
フルムーンあの萩の間に通されて
夢だから買ってみる気にさせたくじ
呑みすぎをささえる人も千鳥足
読めぬけど頼りたくなるこの梵字
許せても忘れられない事もあり
一杯でこぶし聞かせる父の唄
捨てるには未練の靴をまた洗い
二日目はもうあきている雨の午後
あの頃を思えばなんの米不足

伊丹市

小熊江美

笑わして泣かして役者冥利なり

浜に立ち明日があるぞと叫んでる

さよならが画鋲でとめてある別れ

一杯のビール極楽にしてくれる

ごはん粒こぼす私を孫見てる

里の秋　土蔵に熟柿映えている

戦時中　新婚旅行に来た有馬

肩書を捨てて愉快に生きてます

インスタント慣らされていく老夫婦

ああ言えばこう言う孫が頼もしい

こんにちは声が掛けたい一人ぼっち

内緒事そっとかくしたお針箱

ふまれても野性の強さ持つ雑草

中流でホカホカ弁当食べている

がらくたを溜め込む母は戦中派

泉佐野市

小笹錬太

バーゲンに予算の倍も買わされる
建国日反対しながら休んでる
田植えでもやってくれそな白だすき
古代史を筆の穂先で洗い出す
どこからか目が光ってる無礼講
介抱の上にタクシー持たされる
夕刊の訃報にあわてる営業部
王手かけまずはビールを引き寄せる
ご近所の手づくりトマトにしゅんの味
勲章のように肌やけ競う娘ら
一張羅ふだん着におろす定年前
人事部も手の届かない閥があり
旅に出る前からなやむ課の土産
セミナーで仕入れたネタを部下に垂れ
意にそわぬ書類は判も横をむく

和歌山県

尾田綾子

本物の情けは母の乳房から
わら二本綯うて二人の愛結ぶ
走り抜かれた父のバトンをしかと受け
手柄には届かぬ善を積む素顔
折れる業磨いて丸い人生譜
納得のできぬ拳は持ち帰る
計画の彩をときどき陽に晒す
水少し漏らせておこう座が和む
どん底へ意地の炎が身を躾す
峰極め途中の涙埋めておく
子を背負い母の重さを推し量る
歳月と母はわたしに味方する
人生を描いて尽きぬ老母の画布
火の輪水の輪亡母の歳時記知る名残り
掃き寄せた落葉輪廻の春を待つ

今治市

越智青園

手を合わすあなたの嘘にひっかかり
伝言板　貴方を待って日がくれる
瞑想に煮こぼれてます電話ベル
なめくじのゴールは鉢の裏だった
人間の欲が出てくる銭の音
結び目がかたくて約束裏切れぬ
実印を押せば重たくなる書類
掘ればみなつながっているゼネ汚職
耳にセミ飼って老化へまっしぐら
バカ千回言うても虫が治まらぬ
ソプラノがころころころぶ春の風
ハチローの世界へひたるサンマ焼く
北帰行　鶴はひとさし舞うて立つ
かけ違いのボタンで終るああ夫婦
冗談のように本音が口を洩れ

高槻市

乙倉武史

神様は無口シナリオ出来ている
仮の世に未練を晒す竹を踏む
人間も賞味期間のある焦り
雑草に学ぶしぶとさ逞ましさ
へつらわぬ猫の孤高を学びたい
戦記繰る一時若さ蘇る
運の良い奴だと思い生きている
道草もまた良し人生振り返る
節くれた指に自分史書いてある
豊かさの中で何かが欠けてゆく
熱き胸伝える術もなく老いる
妻なればこそ内心で手を合せ
夫婦して明日へ漕ぎ出す筏組む
鈍行で余白を埋めるフルムーン
心から笑える幸がある余生

津市

乙部幸次郎

泥んこになってまともに人を観る
泥かぶる男に男ほれている
飛ばされた傷もどうにか癒えて飲み
青葉から甘い誘いの風が来る
父の日に父の背中の歌を聞く
毒のある会話にのった浅ましさ
百歳を波乱に生きたい笑顔
運命の出会いを想う天守閣
運だけでつかんだ椅子の下り坂
窓際に座ると人がよくわかる
からくりの人の心を読みそこね
朝が来た昨日の風はもう吹かぬ
ポケットにわがままだった過去がある
流氷へ男の無念乗せている
有終の美を飾る絵が軽すぎる

岡山市

小野 真備雄

定年の自転車さてさてどこへ行く
テトラポットだって野心は持っている
鳩ほどにずうずうしくはなれません
十年も眼無しだるまを置いてある
僕を見ているのか星がまたたいた
子のいない呑気といえば嘘になる
なに祈る妻長いこと掌を合わせ
風邪妻に勤務評定されている
人妻と妻を較べてどうする気
幸せは旨いうまいと食べている
健康に感謝ビールがあふれます
酒一本余分に飲んだだけの乱
寂しさに酒飲むぐらい許されよ
考えてどうなることか飲んで寝る
明日はあす今へ乾杯花吹雪

室戸市

小野康子

予告なく来ても嬉しい好きな人
悲しさをまぎらす笑いだってある
生きがいがまだ見つからぬ生あくび
聞き役で居よう言いたい人ばかり
善人の目は真直ぐにものを言い
本当の誘いは地図もかいてくれ
たわいなく喋って食べて足る女
帰り道まだ不本意な多数決
見栄捨てた時から女老い始め
ほんとうの孤独を知った仏間の灯
おしゃべりが帰ると急に寒くなる
無器用な編み目へ愛を埋めてゆく
耐え抜いてもう人形でない女
結局は自分一人で越える壁
沈黙の膝で震えているこぶし

尼崎市

尾宮弘治

俎でみじんに刻む消費税
人情が映る鏡を娘に渡す
居て喧嘩居らねば淋し夫婦独楽
嫁ぐ娘の挨拶怖い程嬉し
言い過ぎて暫くとけぬ角砂糖
弁当のパンが淋しい母の風邪
喪服脱ぐ度に幸せ噛みしめる
裁縫の出来ぬ英語の上手い嫁
鋏より母が自信の糸切り歯
節穴を通して姑の良さを知る
話題ふと切れて空気が恐くなる
妻が来てカーテン替える任地の灯
達筆の父が生きてる硯箱
黒潮を乗り切り父の貌になる
賽銭を大きな財布から探す

奈良市

貝原博次

すべて過去水洗弁をつよく押す
焼いたのは手紙くすぶるのは心
シーソーに乗る売り言葉に買い言葉
でたらめな証拠くつ下うらを履く
もがり笛あれはひとりの夜に鳴る
式次第とどこおりなく灰になる
くびを切られた男が首を持て余す
言葉では言えぬ言葉を顔に出す
風の街泳いで流れ矢を避ける
声のない声で地球が泣いている
血だらけの新聞今朝もよく喋る
独りぼっちの男を抱きに来た入り陽
峰打ちの答じっくりかみしめる
終電の仮面あちこち落ちている
運命線のところどころにある狼煙

神戸市

香川水聲

振り向けばまだ手を振っている女
芽柳の町で妊婦のひと休み
織田作に会えそう夜の法善寺
春宵一刻　女と歩くだけでよい
少女新鮮コーヒ盆に乗せて来る
女と会う夜の噴水は彩をもつ
好き嫌い花を毟っているおんな
隠亡の部屋に寝酒が置いてある
帰化人の墓倒れても海に向き
行商の母が挫けぬ風の町
木枯のように男がノックする
酌婦になって誰も知らない北の町
まいまい風に女は裾に気を遣い
島無月　河童が女に化けて来る
橋向うの姉に会いたい町灯り

鳥取県

鹿児島　節子

母さんは起床ラッパの捻子を巻く
雲のヒントで今夜は鰯汁にする
炙り出す裏の仕掛けを信じよう
出しゃばりの赤い小袖が濡れている
サッポロを見学試飲して戻る
ガム踏んだ靴でレストランに入る
街に出て猿も猶もずるくなる
巻尺が時どき撥ねて謀反する
ふる里にまだ義理という脈がある
壱万円刻んで今日の糧にする
憧れの勿忘草も老いたもう
灯を消して影も一緒に休ませる
弱音ではないけど髪は染めている
幸せに出逢うまでこの道を行く
新畳敷いてあなたと畏まる

米子市

鹿島

蘭

名案がでないとしゃぶるハッカ飴
万歩計が春の足どりになってきた
春がきて唐突なこと考える
お天気な振りをするのに努力する
紫の雨でとろける程ねむい
もう一度錆をおとして出直そう
城からは何も貰った覚えない
目に角をたてて権利を主張する
石垣に睨まれながら逢っている
踏ん切りをどうつけるかの交差点
とてもとても茶の間の鈴はやかましい
人柄に真綿をきせてつれまわる
この坂を一息ついたらまた登る
好きな酒一息でのむことはない
ぼんやりと月をみている失意の日

松江市

柏井日出子

買い急ぎしませんコメのかくれんぼ
春のふみ記念に残すものばかり
亡父母恋えば墓の樹木芽の父母香る
花手桶わたしを慕う風が吹く
身ぎれいにこころ澄ませて花手桶
記念樹を囲み校歌の声弾む
終章を急がずペンを立てている
眞子さまに風船吹いておばあちゃま
夕陽から引き出す人の思いなど
こんもりと仏飯だけは盛りましょう
花売りのかごから夢の花揺れる
日々満開しあわせごっこしています
拾う神いつも名産しょって来る
善人の靴がパカンとあいている
どの窓をあけても父母の星がある

東大阪市

片岡湖風

美しく散るなら欲を捨てなさい
晩年にそなえて善を積んでおく
本が読みたくて仲間に背を向ける
夏やせをしない図太い女たち
罪いくつ重ねて父を超えてゆく
美田など持たず気軽に生きている
下剋上　殺気は背中から迫る
猿芝居みんな主役をやりたがる
セミしぐれいつかひとりの花手桶
怨念の深さで月が欠けてくる
純情で涙もろくて貧しくて
語り部のまなうらにある白い絵よ
不器用で愛想笑いがまだ出来ぬ
ポケットの石がだんだん丸くなる
幕を引く時は己で見極める

富山県

片岸佳子

初めてのイソップ童話眼をまるめ
鶴と亀　童に夢を托しつつ
時は今　平成という名で語り継ぐ
夢おぼろ春風の中に彼の影
鶴亀の愛むつまじき世を探す
恋猫の声すさまじく部屋の中
祝い節一つそこらで輝いて
春の陽の夢巡り来てつくしの芽
待ちぼうけ夏のセーラーが泣いている
せせらぎの流れる川へ身を任せ
陽炎の如くありたしわが人生
一つこと終止符打ってやすらかに
ほうせんか咲く野仏に手を合す
何となく我に負けそうナムアミダ仏
荒れに荒れる政治我も一凡夫

竹原市

勝武夏喜

にぎりめし瑞穂の国の米の味

八十歳大地に立って生きぬかん

喜寿傘寿うまく越えたり初日の出

山越えて越えてはるかな地平線

大空に老いても負けぬ夢伸ばす

おかげさま七度巡る俺が春

夢追うて生きるも欲かやじろべえ

今更にすぎた亡妻なりいとおしむ

ある時は風も嵐もみな味方

手を握りみんな仲良く渡る橋

作句十年いまだ色紙の句にならぬ

長生きも芸の内とかありがたや

永平寺　孫に記念の念珠買う

果てしない夢追いつづけ生きつづけ

ふるさとの雨の墓参になりにけり

米子市

門脇晶子

梅咲いて春の絆をうたがわず
今までに落としたものをさがす旅
晴れた日は味方もそばにいてくれる
五歩行けば五歩をふりむくことにする
一匹の金魚　池から逃げられぬ
机の傷は長い間のデモである
ゆずられた梯子なかなかのぼれない
礫の音をすこし離れてきいてみる
結び目にたまった垢がとれかねる
山の上　僕も他人も変わるだろう
炊きたてのご飯がうまい働ける
漱石の猫は今でも生きている
雑木林を抜けても芝居終わらない
ふところに終着駅を持っている
生きたしるしに椿一樹を植えておく

池田市

金崎峰子

一本気よくも悪くも親ゆずり
お節介　人の決心にぶらせる
好きな色また同じよな服を買う
杯は受けたが心の内知られ
雨宿り誰も知らない人ばかり
待ち合わせあきらめた頃やっと会い
温泉の良さは和室に浴衣がけ
ミニもよし振袖もよし若い人
春爛漫　桜通りになった川
雨上がり春の光がまぶしくて
旅支度できた鞄を又あけて
はいはいと話どこまでわかってる
うさぎ　鳥　みなリボンつけ子供の絵
街の風　二階五階の鯉のぼり
舶来の鍋で大豆や芋を煮る

犬山市

金子美千代

その先が書けぬ手紙の二三日
ひと呼吸おいて待ってた電話とる
こすもすのゆれて人恋う風になる
訳もなくすねてみたい日秋の空
お誘いがかからないかな雨あがり
受けとめる言葉へ溶ける角砂糖
スケッチをしてから活けてもらう花
白鳥になって翔びたいシクラメン
たとえばの話私が主人公
春の陽を全部ほしくて磨く窓
親の目でつい見てしまう甲子園
二次会を抜けだし私翔べぬ鳥
けんかする度にお鍋がピッカピカ
ふりまいた笑顔きのうの事は伏せ
思い出をいくつ秘めてやイヤリング

高知県

上北恒子

わらぶきの母と暮した冬の音
風の色変って冬がしのびよる
仏壇の前のお経は孫のもの
井戸端へ老母の知恵をかりにゆく
駅裏へ涙で終り告げにゆく
まだ来ない発車のベルが鳴りひびく
通帳のわずかな利子へ夢をかけ
野の草と暮らした日々が遠くなり
大切な命を守るナース達
嬉しいがあなたの好意受けられぬ
秘書として固くとびらを閉じたまま
先立たれ人生航路の岐路に立ち
甘味料ひかえ健康ダイエット
バルセロナ最後の旗が空を染め
太い足あわない靴でがまんする

西宮市

亀岡哲子

スクランブルエッグに朝の風まぜる
宇宙からサインありそな秋の空
アンテナの一つが風に横をむく
紫のいろ紙で折る鬼の面
風強し男の傘を借りて行く
石打って仏を出すも邪を出すも
揚げ花火に一つの流れ星落ちた
楊貴妃のつもりぼたんの花の中
駄菓子屋の少し遅れたぼんぼん時計
くやしい時いつも磨いてきたお鍋
こころもち顎を上げたら青い空
再会のストローすこしかじる癖
渋滞の高速下りて曼珠沙華
ためし算　幸せの数一つ増え
キッチンに愛のこころを計る匙

藤井寺市

鴨谷瑠美子

大空の純粋な青心色
無位無冠　その一言の父が好き
初恋よ夜店に並ぶりんご飴
この窓と虹を見ました夕焼も
どきどきと一本の矢を待ち佗びる
街角でふと腕組んでみたい人
灰皿に煙残してレジに立つ
ネクタイの一本にある晴がまし
無防備な美女のあくびは対向車
踏切りで金木犀が遠くなり
痛い歯に舌がそろりとさわっている
島の娘は紅椿より強く生き
島の唄　切なく聞いた右の耳
牡丹雪ひたひた亡母と重なりて
世の中に何があろうと雪の白

東京都

河井正之

雪解けの水は小躍りして流れ
紅一点　椅子にかけてるだけの役
もう後へ退けぬ手締めの中に立ち
応援ヘルールも知らず駆り出され
余程いい電話食事も抜いて出る
満開の下でリハビリ足を止め
トラックが来ては昼寝をする木陰
つながれて犬にも酷な夏の午後
休日をこまめに動く半ズボン
共稼ぎ子供に詫びること多し
節約を説くには年が離れすぎ
マンガ読む横で洗濯機は回り
古時計　威厳を見せたまま止まり
待たされた顔へ女子行員の笑み
編み物を始めたひまな年の暮れ

犬山市

川口多代子

浮世絵の女と違う目鼻だち
冷蔵庫あらこんな物まだあった
久々のミシン雑巾縫っている
温泉に三度浸かって宿を出る
星空も一軒宿のおもてなし
食べたことないなんてまあところ天
どしゃ降りに傘さしたまま軒借りる
大包みさげてお帰り裾模様
とびとびに読んでごまかす碑のいわれ
修身の偉人の像に落葉散る
若かった明治の母の細い縞
変わらない友の聞き役しゃべり役
鯛焼きは先にしっ尾を折って食べ
須磨明石　昔を偲ぶとはいかず
間に合った手編みセーター午前二時

大阪市

川原章久

よく堪えて小さい小さい妻の肩
水温むおたまじゃくしは生き上手
やれば出来るすっくと今朝は靴が履け
旅に出てきつねうどんのうまさ知る
今日からは二十歳の顔で見る鏡
簡単に恋と言う字は二で割れぬ
日本の顔を映している田圃
春風が野崎へ吹いて駕籠と舟
お布施にも談合してる檀家衆
クリスマス神はなさらぬ依怙贔屓
窓際の椅子がゆっくり書く楷書
食べあきたとカニに言いたい負け惜しみ
一ドルで買えぬ日本の物が増え
厄除けは一寸地下鉄あびこまで
火の上を素足が歩く厄払い

伊予三島市

河端美佐恵

カルテなどどうあれひたすら生きるのみ
縦横の糸のバランス良い夫婦
縦糸が切れて淋しい私です
愛してる証拠今でも君偲ぶ
今朝もまた達者でうまい深呼吸
嫁ぎ行く娘の手に光る愛の珠
笑みたえぬ嫁は我家の福の神
丸く住む秘訣は一つ信じ合い
いさかいは止そうよ心濁るだけ
腹一杯毒舌吐いてサヨーナラ
ヘアカット女の意地を捨てました
泥舟と知りつつ友のために乗り
一人者猫の添寝でつつがなし
大臣も妻には脆い唯の人
泣く奴があるかと父も泣いている

犬山市

河村照代

包丁を磨きおさめて除夜の鐘
試飲して世辞の一つも言ってくる
縄のれんばかに気の合う京なまり
すれ違う人ほんのりと香を引き
Jリーグ好きでカカシにユニホーム
ひと声ですぐに集まる飲み仲間
草とりも友の便りで小休止
ビアホール女も多くなったもの
居心地のよい図書館でついねむり
梅の香に酔うて二月の梅の旅
つり好きの主人につくるにぎり飯
ほめる人けなす人いて今日暮れる
菊の鉢みやげに持たす秋日和
頼まれた品また一つ買い忘れ
うっかりで芋味噌汁の中でとけ

堺市

神原文

想い出のコーヒー館が消えている
モナリザの顔して試着室を出る
あの笑い余程淋しいお人だな
アマリリス咲き点滴は終らない
かすみ草になりたくはない色を着る
余所の酒たまには飲んで来てごらん
ステーキをカードで奢る心地良さ
とっときの九谷で薬飲んでいる
コンタクトレンズを嫌うわたしの眼
優勝杯ハンデの事は口にせず
葉刈りしてこんなとこにも陽の光
女ひとり乗れるやさしい波もある
達筆でどうだどうだと来る手紙
絵日記の或る日を見たし忘れたし
一吠えをしたらすっきりするだろう

西宮市

菊池トミエ

古寺に膝いたわりつ法話聞く
夜の雨　若葉マークが帰らない
紫陽花を見ているけれど人を待ち
燕来て山ほど話すことがある
子の話今日は聞き役ソーダ水
初物を供えて添えるひとり言
青空に父と子の凧語り合い
いそいそと蜆を洗う朝の味
鳳仙花　小さな庭で爆ぜている
受けた恩まだ返せなく写経する
敬老日　嫁にもあげる感謝状
梅漬けてみんな元気で居るように
飛び立って心残すか渡り鳥
筋一本通したひとの背が孤独
さりげなく話題をかえてリンゴむく

伊予三島市　岸　万伯

欲一つずつ捨て登る涅槃坂
十指みな動いて欲が捨てられず
泣いて始まり泣かれて終る人の旅
真実のみにくさ嘘の美しさ
虚飾捨て真を探す水墨画
肩書という人間の包装紙
真直ぐに歩いて人にぶち当り
金の世は真心さえも値踏みされ
鈎のない餌などくれる訳がない
平凡を幸せと知るまでの道
不意不測　地獄ドスンと落ちてくる
我慢して我慢のできぬ子に育て
親子凧この子もいつか糸を切る
燃えつきて姿くずさぬ縄の意地
命ある限りは蒔こう花の種

神戸市

木曽史朗

ふる里の朝が一番耳に好い
エッセイの朗読がありお茶にする
誰からかあててごらんと言う手紙
夫婦だけの話があって外食に
定年につまずきたおした靴仕舞う
欲出しなはれやと背中たたかれる
深呼吸して心にも空気やる
柔らかに言う姉が来てまかせとく
やんわりと姉が尋ねてやってくる
話ついたか後ろ手が呼んでいる
立ち話　子供が足に乗ってくる
寄附はせぬ断っとくが金でない
きっかけを聞くとにっこりお父さん
妻と握手必ずして去ぬ友が来る
現実は独り合点で生きている

大阪市　喜多佐津乃

人間の本音疑う好奇心
偏食に追いうちのかかる核家族
姑になって自分の座を探す
余所の愚痴聞いて言うまい家の愚痴
子の人生　親は儀式を見届ける
子に送る言葉は要らぬ目の合図
母の株　少し上げたか米不足
鉢植が行ったり来たり初夏の庭
許すならついでに外す此のページ
明日と言う二文字に賭ける二年草
片方に寄らないように妥協する
暮し向き話して帰る診察日
ドクターと重ねて見てるニュースキャスター
トロッコに乗って見たいから一人旅
トロッコもトンネルの中速度だす

吹田市　吉川　渉

ほどほどに澄んで澱んで角立てず
我慢して時が味方になるを待つ
会者定離　愛の一言だけ残る
奥底の澄んでる人は騙せない
究極の頼りは妻と病んで知る
丁寧に顔から順に墓を拭く
読み過ぎて裏ばかりみる苦労性
損な役みんな誰かを当てにする
希望退職　惜しい人から辞めて行く
親ゆずりこの子も生き方下手のよう
長話疲れた耳を揉んでやる
風邪の床　花前線の息吹待つ
若者のいる街角は生きている
やさしい嘘　薔薇も一輪添えてある
小春日和　海は平和の音色敷く

吹田市

吉川道子

五十坂好きなお人となら踊る
えぷろんをはずし女の小正月
嫁ぐ娘に教訓一つ言えぬまま
母の年こえて紫好きなる
夕闇に愛たしかめたときもある
出発にいつも遅れる人がいる
とりあえず一風呂浴びて考える
クラシック聞かせて蘭の花咲かす
東京に住んでいまだに京訛り
美人記者作家先生悩ませる
のぞみ開通もう急がない六十路こえ
伝来の休耕田に佇ちつくす
死にたいと言うてしっかり薬のむ
靴音が追いかけて来る来る夜道
脚光を浴びた頃から窮屈だ

摂津市

木下道子

冷静に驚いている受賞談
マスゲーム列を崩してみたくなる
クライマックス次の台詞が出てこない
一応は余白だらけの手帳繰る
ふるさとの雪を見せたい人を連れ
名もない花とはあなたが知らぬだけのこと
赤んぼの写真が無沙汰詫びてくる
博物館ガラスの向うにある昔
郵便屋さんが素通りをした長い午後
本嫌いのために書かれた読書論
若者は破調を好む盆踊り
カーネーション今日はあなたが主役です
見下ろせばこんなにゆるい坂なのに
非常口の灯　自信がなさそうな
湯豆腐を掬うあしたの夢掬う

和歌山市

木村初子

朝茜しばし宇宙をひとりじめ
火の章を越えて残り火抱いている
風雪に耐えて摑んだこのゆとり
一服の新茶で午後のティータイム
愛犬と目線合わせて犬になる
こおろぎよ許せ　ねぐらの草を焼く
手を添えて矯めて巣立ちを送る母
乱気流一か八かで突破する
未知数を追う人生もまた楽し
妻がいて御飯があって猪口もある
日めくりに喜怒哀楽を捨てて朝
満足な答出ぬまま椿落つ
ジョーカーを引いて出鼻をくじかれる
闘志満々スタートライン火花散る
終章は掌に一杯の充実詩

藤井寺市　楠　昭子

自分の名忘れて老母の子守歌
核家族　無縁仏になる戸籍
また朗報笑い袋が破れそう
賑やかな音いっぱいにして孤独
華やかに舞う息切れを悟られず
六感を信じキャンセルした切符
残されて男結びもして生きる
ひとしずく自然に落ちる芸である
余る程ないから知恵が湧いてくる
鉛筆で書くと信じて貰えない
ふるさとの軒は絵になるつるし柿
母なのになぜに合わない肝移植
目立たぬが鈍く光っている魅力
似たくらし煮豆が往き来する隣
二度の職　敵の無いのもちと淋し

和歌山市

楠見章子

初耳の顔をしてやる思いやり
社交派のまっ赤な手帳よく喋る
お茶碗のひびを模様と思うとく
紙切りへ子供ごころになる鋏
点滴の速さに息がつまりそう
妻逝った日から進まぬカレンダー
ライオンの巣立ち谷底知っている
純白のカーテン紫煙よせつけず
偉ぶった態度に隙が見えかくれ
矯められ枝は謀叛を企てる
鏡拭くだます相手が居る限り
新緑へさらりと春を脱ぎ捨てる
どちらへもまあまあまあと顔を立て
評判の悪さに猫も及び腰
ブランドを拾い集めて顔がない

岡山市

国定姫代

重ね着が脱げないままに風は春
女生徒の腕も眩しい衣替え
群生の中　孤も匂う彼岸花
秋物に冬物も足し老い独り
吐く息の白さ托鉢僧の眉
老い独り七草粥のこととこと
寺の隅無縁仏の寄り添うて
寺巡り小さな旅はまだ続く
花岳寺の像は語らず人頷く
無言のふたり再びの姫路城
曲線を描いて消えたい老いの恋
慕情ふつふつ絵葉書の一二桁
残り火の自然発火を待つことに
柿をむくわが手の皺をいとおしむ
次の世も女でよいと夕日みる

鳥取県

国森武子

孫の如露　夏の陽受けて虹をかく
仏よりまだ善い姑とペアを組み
ふんぎりを越せば判った姑となり
骨までと心に誓い五十坂
骨壷に小さくなるか此の想い
忙しさとれば死魚にも似る想い
足跡で足跡を消す初詣で
霜に会い甘さ累ねた葱を抜く
大切な軸ひとり居て一人みる
父眠る小さな峰に会釈する
年老いて人の生きざま批判せず
星空の広さ思いを一つ耐え
メモ癖は息絶えるまで続いてた
うすき肩して地に帰りゆく翁
午前様あの足音はもう聞けぬ

高知市

久保内　あつ子

物まねで終る一生かも知れず
善人の書くシナリオに嘘がない
開通へどの眺望も神のもの
どうせ独りそしてあの世もまたひとり
どん底のその真ん中に置くコント
死ぬまでは枕の中身見せられぬ
雪つばき地獄の沙汰が早すぎる
女にはおんなの戦足袋を履く
騙し絵の中で通せんぼが旨い
朽ち果てた絆を捜す返し針
いい世界見たい小さい母の欲
裏側は見せないように掌を洗う
移り住むことの佗びしさ戸を磨く
他人には見えぬ梯子を掛けておく
すぐ響く余韻の中で眠くなり

西宮市

久保　まさお

鎮魂の広島の鐘今朝も鳴る

借り物のいのち八月また巡る

風起り砂丘も動くそのいのち

冬空の月が欠けてる通夜帰り

地に墜ちたモラルが仰ぐ青い空

落下傘　見よ絢爛の天下り

米不足　君等餡パン食い給え

新聞を手本にしたい休肝日

六十路越えTシャツ派手になりたがる

鏡には映らぬ尻尾下げて生き

手品師よ帽子の中に消えてみな

宇宙船　蛙呆れる忙しさ

ホールインワン予感大事に保険かけ

白球の行方も告げて水の音

人生を一気通貫　悔いはなし

伊予三島市

久保昌代

働いて汗した金が手に重い
感謝することしか出来ぬ恩返し
こん畜生と思う男と夜の宴
今逢わねばならぬ危篤へ雪斜め
父のない子に肩車眩しすぎ
「食べてみるか」熱の日夫が炊いた粥
写経百遍まだ筆先に業燃える
同じ年の子がうちに居る車椅子
「おまえアホか」と言って手を貸す夫がいる
肩の広さへふっと甘えが出てしまう
おむすびころりん穴に落ちても夢がある
逝ってから身を焦がすほど募る思慕
同居ふと湯呑みの茶にも波がたち
拗ねた子が調子外れの笛を吹く
情に触れ非情にも触れ貧の底

福島県

熊田巽

父の骨　子の骨砂漠白くなる
昭和史の硯に白い箱がある
鍋底を磨くかすかに反戦歌
「国の鎮め」もう聞くこともない烏貝
泪涸れて砂漠の砂が濡れてくる
乱戦の渦で踏まれる影法師
終着の駅に大志の骸捨てる
ためらいの足に流れが深くなる
北風の残した地図がまだ読めぬ
御仏の声が座禅の膝に降る
小心で線香花火しか買えぬ
所在なく伸びる無職の脆い爪
こうまでも哀しいものか木偶の舞
裏返しすると哀しくなる神話
地獄絵に私の首が二つある

兵庫県

倉垣恵美

何事もなかったように陽が昇り
砂浜を駆けて来たのは未来だな
思いつきお手玉を縫う外は雪
母さんがまだ来ぬボクの参観日
野に咲いた花が会釈をしてくれる
点滴がすめばメロンをいただこう
紫陽花の丸い顔にはすこし負け
花嫁の母で口紅つけられる
青虫が一生懸命逃げて出た
蛍光をそっとぬくめている孤独
辛抱の勲章白のままがよい
乾し草の匂が甘く亡夫を恋う
くつろぎのポーズで大の字になろう
困ったらきっとおいでと言うたきり
このままであした天気にしておくれ

鳥取市

倉益光子

仏と鬼が胸で綱引きして疲れ
一病を背負って強く強く生き
欲と夢あるから肩が凝ってくる
笑い茸不景気だから食べてみる
脳に充電したが漏電して困る
母　女　妻　今日はどの面つけようか
雪しんしん亡父が熱燗飲みに来る
チョコ一つ　五十男がくすぐられ
ふらありふらり生きてみたいな風のまま
胸に住む夜叉にしておく頬被り
涙した数だけやさし女です
愛のバラ百本届く夢に酔う
ごめんねの一言のどにつめたまま
女は時に花にもなれば蛇にもなる
日本海　核がどんどん来る怖さ

豊中市

栗原富子

わがルーツてんてん手毬のヒゲ奴
鐘の音に大地は呼吸をととのえる
梵鐘が眠気を誘う花くもり
紅梅が待っててくれた散歩道
一坪の土いじりして気が和む
世は変る偲ぶはいつも夫の影
石段で見つけた母のちびた靴
八十路すぎ人の思惑気にかけず
ぐずだからきつく一本締めてやろう
詮ないが棹尾のプラン立てている
いざというときの絆は取っておく
この先も丸く生きたし恙なく
終章はわたしの彩で染め上げる
ラストには礼をのべたい人あまた
わが夫は心のすみにしかと住む

桐生市

栗原善子

人生の終点までも子を案じ
嫁ぐ朝　滋味の心を言い含め
他人と子に尽す亭主は妻疎外
妻の爪　愛と嫉妬も丸く切る
味見する箸と小皿と便利な手
亡き父母の声が聞こえる実家の跡
初孫が一徹老いの骨を抜き
我が城はローンの攻めに耐えている
幹事受け落度さされて自腹切る
寄り道も無駄ではないと子を庇い
電話では無口な人もしゃべり出す
雨上がり十二単の虹が出る
莫迦な妻言ってはみても支えられ
娘の料理　家族みんなで迷い箸
競馬場　騎士は戦国武士の顔

和歌山市

栗本不空

老いてなお残したきもの燃えたぎる

柚風呂の湯気のただよう走馬燈

号砲一発みんな先頭切る積り

富士山はあんなものかとつい油断

石蹴って転がる石は只一つ

風下にさらりと流す首の垢

苦も楽も包み収める微笑仏

ガタビシの中古に住んで佗茶喫む

慕い合う蝶も夢幻の森求め

泥んこと鯉とたわむる紅葉池

撫で肩の大根一本貰いけり

温い母の本音に酔う地酒

恩師とて老い給う帽阿弥陀して

骨壷がかたこと灯消えそうな

夢楽し違い観音微笑んだ

加古川市　九留宮　明女

自宅通学　子の青春はガラス張り
歳重ねお洒落心に火を点す
お雛さま今年は飾るのと問われ
面倒見のよさ見込まれて無理をする
構いすぎ二十一だと叫ばれる
この齢で学べることをかみしめる
ワープロに夫とられているひとり
それぞれの顔が輝く朝の駅
行楽に出かけて風邪を置いてくる
もう少し親子ごっこをしていたい
十八の心に春がすべり込む
ひたひたと合否発表近づきぬ
夢に見る付かず離れず夫婦船
何思い鏡に向い髪を梳く
桜待つ心のように生きている

熊本市

黒田緑

こだわりを捨てた心の軽い羽根
浮草の自由構図にとらわれず

目に見えぬものが見えないままに老い
デジタルの過去も未来もない数字

ストレスを避けて心を遊ばせる
秒針も折らず怯懦な懐ろ手

イントロの余音に若い日が戻る
人生に二版があれば校生を

紫を憎む朱色を胸の奥
歳のせいメメント・モリに突き当る

メビウスの環に似る人生の裏表
逃げ水の果ての幸せ追いつづけ

まほろばに住みたし四苦八苦を超えて
トラックの後塵へ舞うビラの彩

若い日の残り香にあるペシミズム

久留米市

古賀健次

初孫を大将にした祝い謡
飴持った肘が張り出す紙芝居
手に負えぬ愚痴は止そうぜホームバー
跡取りの兄貴の肩へ田が重い
一門の遺産へ遠い顔が寄る
肩パット外しジョークを彼に注ぐ
母からの近況厚い封を切る
長欠の児へ温かいベル鳴らす
半世紀経ってお詫びの歯が疼く
喜怒哀楽コラムを綴る裏通り
大空に吐く正論へ風が押す
糸底が馴染み睦みて酌む屋台
優秀映画の余韻に帰路のメガネ拭く
半世紀　牛追うた田に家を植え
初歩的なミスで浄土へ案内され

金沢市

越村智彦

正論を吐くたび吐息漏れてくる
引き潮が男の未練消してゆく
秋の空　心に響く孤独感
触れる手は酸いも甘いも知り尽くし
極まるか影はあくまで影で死ぬ
石橋を叩けば笑う影法師
逆流に耐える野心の杭ひとつ
忍従のかたちで耐える竹の節
筮竹にわたしの運命裁かれる
うしろ指　女の甲羅痛み出す
運命線わが手のひらは迷い道
暗闇を裁く法衣が見つからぬ
戦列を弾き出された土踏まず
地吹雪が五臓六腑を裏がえす
還暦に仕切り直しの螺子を巻く

大東市

児玉蛙

凡凡の日々を重ねてまた桜
水盗み合って仲良く生きている
部下の死を最初に泣いた鬼部長
菊を着てなんと華麗なお岩さま
銀行振込　袋の重み忘れさせ
盆栽に置けば一景つくる石
買いたての新聞かぶるにわか雨
大吉と風邪もろてくる初詣
同じ手にまた叩かれるカルタ取り
したい事して極楽へ雲がくれ
日の丸は黙って胸に揚げておく
満員車車掌は軽く片手挙げ
灰皿の裸婦四方から火攻めにす
嗚呼さくら世間の善悪つつみ込み
うれしそうに薬の山を抱いてくる

東京都

小寺九

居酒屋でいろんなポスト拝命し
ぞろぞろと定期異動で蟹が這う
身に覚えない功績で送られる
窓際は家で新聞読まぬ人
止まり木に同じ姿が並んでる
公園の鳩の仲間になる予定
雀逃げよ大事に生きて夢摑め
思春期の子供の揺れにお付き合い
俺も親　踏み台ほどの役に立つ
久かたの母とのデートは棘抜き地蔵
負けてやるはずの相撲の子の強さ
夏木立ここらでちょっと立ち小便
料亭で奴焼き茄子所望する
評判がことわりもなく先を行く
匿名でおそるおそるの時事川柳

堺市

小西小雪

春の七草　秋の七草　母思う

浮きうきと只今化けているところ

満月をひとり見るのは寂しいね

背伸びして肩を並べているつもり

噴水の見える孤独な指定席

面白いはなしの種を蒔きにゆく

泥舟に巧い話を積んでいる

弟と別れた駅に来てしまう

跡継ぎのない仏壇が大きすぎ

ちょっぴりの殺意エンピツ尖らせる

無駄のない人と暮している疲れ

石橋をそおっと叩く音がする

正装の夫婦　離れて歩いている

薄衣を素肌にまとう白日夢

ひとつひとつの土鈴と旅のはなしする

堺市

小西夏子

窓の灯の一つ一つにある世界
あの雲はわたしが捨てた影法師
ドングリよジャンプもせずに落ちるのか
よく見える眼鏡が邪魔になってくる
母が待つ唯それだけで汽車に乗る
八方美人　憎まれ役もこなせます
乳房よりほとばしる愛限りなし
無駄がない代りストレス溜めている
堅い芽も愛の温みに綻びる
走っては出会えぬスミレタンポポに
人生の岐路迫力で押し切ろう
余りにもうまく騙され憎めない
どの糸をたぐり寄せても母がいる
回転ドア　一瞬人を閉じ込める
さあ何に化けてやろうか春の月

豊中市

古西美貴子

苛々するくらい他人事の夕焼け
外は春だんだん無口になる私
悲しいことにも笑ってみる強情
石鹸で洗い流せるかこの想い
はやる心を冷蔵庫にしまう
ごめんねと真顔で言う君嘘もやさしさ
告白を煙草のけむりにはばまれる
細い月が助けてと言う
泣いてても知らん顔の青空
てのひらをすりぬけてゆく風船の君
苦しい気持を珈琲で流しこむ
疑いの水面に小石を投げる
次に逢う約束のない淋しい助手席
無欲の笑顔に心奪われる
偶然に触れたてのひら想い出になる

高槻市　小林一閑

約束を忘れたことも忘れてる
傘持って老化を防ぐ杖にする
長い足　夏美しく誇らしく
意地張って買ったピアノが欠伸する
乗り換えの駅が気になり眠られず
携えて元気で生きる欲を持ち
妻の掌の上で威張っている亭主
賄賂とは書いてないけど判る筈
まだ杖になってくれるか古稀の妻
人を刺す言葉は胸に納めとく
短冊も色紙も買って句ができず
生きすぎていると思うが医者へ行く
難聴の兄との話ファックスで
肩書きを忘れられない人と飲む
山道の下りで歳がバレました

高槻市

小林紀美子

野良猫に見られてしまった花泥棒
友からの電話何よりもくすり
新品のミシンで当分遊べます
納豆も食べていますと初便り
麦の穂がまっすぐ天をついている
蟬しぐれ駅まで音のシャワーかな
暑さなどそしらぬ顔して爽竹桃
知らぬ間に祈ってあげたい人になる
この旅で子離れしようと胸に決め
責任を持ってメダカを飼ってます
自慢する程のことなく共白髪
通夜の席見守るように赤い月
針のんで針はいて夫婦かな
私の終着駅はどんな駅
あの世へは雪片みたいに着きたいな

豊中市

小村陸奥美

春色の風に出合った花粉症
花びらの重なるままに落ち椿
真夏日の川に沈めた水中花
こすもすがゆれる私もゆれている
雪が降る視野にあなたが居ない日に
偽りの隅からくずれた砂の城
鉛筆の芯尖らせて不登校
負け犬の背中を時雨が追いかける
うらぶれて霧が包んだ泣きっ面
窓たたく雨が心の傷に沁む
鈍行列車で野末の虹に逢いに行く
フルムーン砂から覗く顔ふたつ
水の性百の器に逆らわず
庭の隅埋めてかくした罪ひとつ
池に石投げて波紋の騒ぎきく

鳥取市

近藤秋星

恒例の施設の花見酒がない
春の山　春の川にもある匂
春うらら春の女神が欠伸する
逢いに行く背を南の風が押す
恋捨てた日から男のたくましく
故里もだんだん知った人が減り
移り気の多き女よ紫陽花よ
零歳の瞳にじっと見詰められ
赤い靴履かせた人はもう居ない
目に見えぬ風が教えてくれた秋
風紋を見たいばかりに来た砂丘
霊鷲山にてまた会える日を信じ
洗濯機で時計洗ってから狂い
空白を埋める枕を縫っている
おれも馬鹿　馬鹿でいいんだ蒼い空

石川県

紺矢　肇

百年の松　豪邸を小さくする
喜びの裏でソロバン弾いている
新しい年だと三日だけ思う
急がねば社のロボットに叱られる
ここだけの話ここから飛んでいる
駄馬でいて黒子の役に徹しきる
ああ言えばこう言う妻といて疲れ
デパートへふる里の味買いに行く
お茶でもとそれから続く長話
腕によりかけてみたとて父の味
罪のない鯛がめでたく焼かれてる
華やかな舞台支える楽屋裏
来賓が席を外すと酔うてくる
もう言葉いらない好きになったひと
いい出逢い別れの序曲かも知れぬ

寝屋川市

後藤黎之助

停年で延長戦の初打席
ドクターより看護婦さんに叱られる
逆境の勇気に風も味方する
艶ばなしひとつ枕の下にある
それぞれの生命を抱いて蟻の列
孫の手を引いてるうちに引張られ
職退いて妻の歩幅ですすむ日日
味噌汁の味も薄めの二人旅
抽選で当った墓地に会いにゆく
失点も得点も多し次男坊
母の匂　子のかげ残る家に住み
損をした顔にビールをついでやる
狭い家喜劇役者が揃ってる
二次会で昔の俺が騒いでる
飽食の時代を偲びたくはない

鳥取県

権代康女

戌の日に安産あやかる帯をする
ハードルを越えて二人の愛つつむ
木を切れば地球が叫ぶ温暖化
どたん場で女心がゆれ動く
夫が居るただそれだけで気が和む
スタートの時には亡母も居てくれた
いつの日も心に亡母の歌があり
父さんが明日はきっと鯛を釣る
どうしても意地を張りたい鬼が住み
ネクタイが妻の機嫌を知っている
気持良く乗って仕舞った口車
幸せになれよと肩をたたかれる
台風にけられて雹にたたかれた
頑固だが仏さまとは仲が良い
太陽のような笑顔の母で有り

羽曳野市　酒井一壺

喜寿を過ぎわからぬ事が多くなり
髪を染め中途半端な顔になり
道草は夢を育てる待ち時間
ヘアー剃った看護婦さんに会釈する
別れ際握られた指大事にし
こだわりをビールで流すカウンター
角かくしその日ばかりの角かくし
わが家では進んでいるのは時計だけ
苦労してやっとつかんだ課長補佐
旅の味テレビで食べて腹が鳴り
二次会は上司が部下に管理され
犬よりも危険な人が中に住み
カンガルー袋の中は別天地
暗証の数字は彼の誕生日
一言をそこで言っとくタイミング

倉敷市

坂井半升

欲の皮くすぐるように春の風
ポケットの小石　地蔵にあげて春
道草の続き見つけて躍る筆
正直に進む亀にも風の渦
かくれんぼ出来る時計を買いに行く
突然の回り階段立ち泳ぐ
円周の鏡　私を見失う
一瞬の眺望に酔う波頭
まだもえる指一本をかくしもつ
足の裏ここにも俺の顔がある
よろこんで戴いている毒茸
カミソリを走らせている喉仏
酒一杯　命一杯ヤジロベエ
写経する一枚の地図うきあがる
ひとつかみ塩を握って仕舞い風呂

寝屋川市

酒井勇太朗

手加減はしない勝負の恩返し
脱線も転覆もして今がある
進むしか手はない賽は投げられた
撤退の勇気　男のロマン捨て
飽食も飢餓も知ってる飯茶碗
過保護とは知らず石垣築く親
良き伴侶選んだ子等に感謝する
母を看る妻の背中に手を合わせ
一瞬の狼狽　妻は見逃さず
冤罪が晴れても青春戻らない
定年の花道ベンツで送られる
定年後　徐々に静かに妻変化
還暦を晩秋などと言わせない
米寿の母　還暦の子を諭してる
直情径行　功罪ありて幕おりぬ

大和郡山市

榊原彗心

返事まで決めていたのにもう逢えず
超ビキニわが子を叱り他人褒め
母と娘の絆に父は入れない
身のはてを思い煩い仲なおり
妻なのに母親だけの顔してる
旅立ちの知らせが一通歳の暮れ
いちびって母の気を引く次男坊
肝炎とチト厄介なお付き合い
体調は心配ないと酒が言う
血圧の高い低いで日が暮れる
しあわせの坂の途中で母が逝く
狛犬の阿吽に締まる初詣
阿弥陀仏やさしい顔に極まる美
城まつり亭主の杯を妻が干す
パレードの行く先々に母の顔

鳥取市

坂田和歌子

今の世は涙分け合う小袖無い
金の無い国なら私好かれます
大砂丘降る柄杓星波を汲む
更年期男の支え必要ね
七つ星あまりに母が遠過ぎる
肝っ玉せり出すほどの句が吐けぬ
温い風丑三つ時に吹くで無い
身籠ってお式が早くなりました
ダイエット五臓六腑が狂い出す
削られた乳房あの世に置いて有る
老人の笑顔来た道解ります
真実の紐を解けば嘘覗く
我が頭痛血管掃除しろと言い
老いて病む育ての親を持て余す
土砂降りに慌てた蜘蛛もエラーする

宝塚市　嵯峨根保子

水割りをこの世朧と飲んでいる
マニキュアをしながら妻は指図する
木犀の饒舌を聴くよるの庭
友達の傷は舐めない事にする
悪友が一人は欲しい雨の午後
真夜中に大きく咳いている孤独
金魚追う子の母親がやかましい
真夜中の他人顔した食器棚
野ざらしの壺で終らぬ面がまえ
水瓶の底に沈めた万華鏡
物言わぬ冷めた夫婦のつつく鍋
反故にした誓の束が攻めてくる
生きて行く明日への鈴を振りながら
力にもなれず受話機おく重さ
若者と暮して深夜ベルに馴れ

香川県

桜井学

五十年病む天刑か天恵か
病身の初春へこころの四股を踏む
来診の医師のポケットベルが鳴る
尊厳死望むわたしも見栄っ張り
枯葉散るわたしは生きる生かされる
終焉はかくぞと願う落ち椿
献体の話　夫婦で噛み合わず
二十年目の帰郷なつかし鬼瓦
底辺に生きて異なる主義主張
雨独りほとけと語る灯を点す
返せない恩を背負ったかたつむり
心意気捨てたらただの木偶となる
中の下と思う暮らしでこころ足る
舗装路で転び疑い深くなる
人を裁けばわたしも神に裁かれる

犬山市

佐藤一粒

失いし月日をおもう風だより
朝発てば夕べに逢える点と線
久に逢うむかしのままの糸切り歯
掌合せて想い二つより
一対のこけしになって同じ部屋
後れ毛や赤いピアスの似合う耳
藍染をまといしうなじ匂いける
後朝やおぼろな湖の時雨けん
白樺の湖に別れも右左
この次の指切りはなし風が舞い
振り向かぬ約束二人とも破り
桟橋を今出る汽笛君をのせ
船と汽車別れも野崎村に似て
贈られし鈴の音色のやさしかり
木偶に血が通う或る日の花言葉

愛知県

佐橋雀汀

白牡丹　心に白き刻流れ
逢うだけで僕の心にバラが咲き
無防備な笑顔に真綿からみつき
三ヶ日妻エプロンで心満つ
ビルの街四角な空に秋の月
打ち解けて話す人欲し切炬燵
臓腑まで灼けておわすか石仏
ユーモアが素敵　笑いの渦の中
最高の笑顔が映える金屏風
健康を預ける妻に釘ささ れ
いつからか心ひかれる人を待ち
世渡りに便利な母の玉手箱
一喝の余韻　父の座ゆるがない
母の日よなお忙しき母で暮れ
亡き父母の生涯偲ぶ粉摺機

東大阪市

澤村猪太郎

音符追う眼鏡はやさしくアベマリア
復讐の夜叉は良書の中にいる
やんわりの序曲にきっと罠がある
ハイカラな天女はパリで舞いたがる
裏腹なこころに反省猿がいる
実力テスト　ファミコン程の冴えがない
無口だが職人腕で物を言う
有頂天にならない傍に敗者いて
米粒の音　山頭火にあたたかい
モスクワの騒乱ホワイトハウスの真黒
正直に生きてしんどい風に合う
過信した一気はいつも墓穴掘る
苦労する母の予言に背を向ける
憔悴の背なを夕日が撫でている
一瞬を戸惑いながら生きている

高知市

沢村洋子

思い出の一つが生きる元にある
踊り子に遠慮して吹く秋の風
ドアチェーン人間を見る目が肥えてくる
風邪引きを今日は楽しむ主婦の床
指輪もない手に幸せが光ってる
五十代　拍車をかける夢づくり
一寸良い女になってクラス会
思い出をそっとささやくフルムーン
生きざまの中に私の顔がある
我が家にもやって来ました輸入米
近頃の子供も子供　親も親
生きざまを一寸くすぐる風に会い
長電話　キッチンで鍋おこりだす
バレンタインデー今日だけあなたと呼びましょう
十年も会わねば遠き風の人

今治市

塩路よしみ

弾まない毬が広場で濡れている
春うらら女を捨てて眠りたい
ほどほどの幸せでよい胡瓜もみ
遍路笠かぶり世の中疎くする
根っからの陽気家中灯がともる
こわれても笑顔が戻る水たまり
竜のごと黄河の流れ大地這う
火の川の流れと思う曼珠沙華
小さい小さい幸せでよい鈴を振る
約束のケーキが揺れる終電車
人間をやめる日までの米を研ぐ
山積みに呻く廃車の声がする
青春のまっただ中でジーンズ穿く
好きと書き嫌いと書いて拗ねている
しがらみを越える阿弥陀の手にすがる

米子市

塩谷八重子

いにしえは泥の中から学び取る
争いは明日の朝まで持ち越さぬ
塞ぐ日はジャンプ傘でも飛ばそうか
古い樹は村の歴史を識っている
馬耳東風　聞き流してる祖母の知恵
雑踏の灯影で夫を見失なう
春風に吹かれ絵心刺激する
霧の中消えて僧侶は絵になった
柔肌の骨までささってくる言葉
今日だけは貝になりたい癪だから
布団干し太陽抱いて取り入れる
ライバルの壁コーヒーに解けてくる
妹と話せば尽きぬ秋夜長
熱湯も飲み冷汗もかく女の譜
梨の礼も小さく添えた年賀状

高槻市

執行稲子

六段の調べ官女も夢ごこち
人知れず咲いてエリカは花むらさき
わたくしの宝さらった婿二人
究極の味はのどかな蕗の薹
負け犬の遠吠え生きる手段です
ワインレッドの瓶が誘惑して困る
公園で鳩と目が合う平和だね
シャネルの香　女がすこし揺らぎます
ほたる族　星座と仲良くなりました
自分史の錆がきりきり舞いをする
ロダン像さめざめ泣かす酸性雨
飯　汁　茶　そろそろ嫁の手に渡す
小粒でも私をレディーにする真珠
潮騒の味を聞かせるシーフード
落し蓋　家族の味が沁みている

東大阪市

重成春男

たれかれと友達になる船の旅
あの山を越えたらカチカチ山がある
大峰の頂上毎年遠くなる
フルムーン始めて乗ったグリーン席
古の文箱妻には見せられず
妻病んで唯ウロウロとするばかり
カードなど一枚もなし年金者
漸くに一年続いた日記帳
年賀葉書当っているのはみな五等
飴なめてみかんをたべてる休肝日
ベンチャラも言えず孤高を守りぬく
ワンマンが振り上げた手をおろしかね
何年前の扇子か今年も使ってる
座布団を外して座る下心
この先は神のみぞ知る浮き沈み

犬山市

島　翔竜

点滴を連れて面会談話室
寝たきりへ花も見頃と窓を開け
あす知れぬ病に無情花だより
夫婦箸だけが知ってる人生譜
驕らないそんな笑顔がとても好き
人柄が透けて見えそういい書体
せせらぎの音冷えびえと旅枕
宿ゆかた針千本のみやげ買い
時刻表余裕をもった老いの靴
ライターへ背中丸めて風ん中
春風が目から知らせる花粉症
頬杖の視野に垣根の揚羽蝶
灰皿を引き寄せてから思案練り
ほころびた夫婦の愛を縫い合わす
その先は言うなと妻の目が語る

富山市

島　ひかる

名が並ぶだけで嬉しい席がある
春風にのせて飛ばした愛のメモ
白い花生けてやさしい風を待つ
アマリリスわたしの愛のいろで咲く
針箱に仕舞い忘れたおとこ文
里帰り無口な父がよく笑う
娘に貰うカルメラ焼きはまつりの譜
笛吹きのやかんに返事飛んでゆく
風鈴に風のことばを教えられ
火吹き竹　亡母の仕草で火をおこす
不器用で夫のほころび縫えぬまま
赤い糸むすびそこねたキューピッド
傷心を癒してくれる海がある
真冬日にあなたと見てる蜃気楼
終焉に引くバラ色の幕がある

茨木市

島元ふみ

気楽さをとって向き合う二人ぽち
老いの愚痴言う閑もないスケジュール
五十年経っても夫クエスチョン
二度三度　幕降りかけて生きている
まだ少し期待もたせる化粧台
妻ですと居直る自負がなにもない
私から捨てたいものがたんとある
子に伴侶わが家の地図も広がりぬ
子供らと歓声あげる雪の朝
父さんの子供の頃を孫が聞く
おせちよりマクドナルドに孫を連れ
神様を信じたくなる今朝の空
空似でも声をかけたい人に会う
観光にない町角の国訛り
窓に灯がうれしあの人帰ってる

寝屋川市

下村権太

パートで知った男性社会の裏表
一思案欲しい話にお茶を替え
胃袋の隅まで滲みる祝い酒
言い分が屹度あるだろ変り雛
旅の宿老けた駒子に一寸惚れ
サボテンのルンバの踊り緋と燃ゆる
喜寿祝いああ亡き学友よ戦友よ
金婚に指輪の枷はもう要らぬ
千鳥足運転免許は持っている
平均寿命越えて始めた若作り
新時代　老妻が気を吐く政治論
医者の教訓胸に刻んで飲んでます
何よりも孫の土産の長寿箸
極楽はぶっちゃけ話の縄のれん
振り袖の孫に幸せ貰う春

高槻市

庄野澄子

趣味欄に無趣味と書いた達筆さ
若づくりピンクによけい目立つ老い
占う事ももはやなくなり昼炬燵
ローズマダー塗りたし赤い薔薇を買う
趣味多き人華やいで多弁なり
お雪さんという名で楚々としてみたい
人も桜もやがて散る日の絵をひとつ
三つ指もやがては立ったままとなり
長江に半生の荷を捨ててくる
何もかも捨てたい飢えの地獄かな
捨てるか捨てられるかのこと恋曼陀羅
成人式　ああ振袖の展示会
プレリュード華麗に弾いた若き日よ
かいま見る老い教え子も追いついて
師の影は踏まず飛びこえ走り去る

犬山市

城山道子

チョコレート二人あげたし二つ買う
香水を一滴　雨の街へ出る
別れる日　城の甍は雨に濡れ
言い切って涙をかくすサングラス
エンジンの音遠ざかりひとりの茶
傷心を閉じ込めそこにある始発
限界を守って恋は白きまま
一通の手紙石より重くなる
花の散る道で言わねばならぬこと
アジサイの心読む日の隙間風
いさかいはちっぽけなこと春の風
言い訳は無駄と悟ったレモンティー
花の香に酔うて来た夜の花疲れ
うれしい日　値段はとわぬ胡蝶蘭
明日こそは訪ねて見よう花曇り

青森県

諏訪明雄

浴衣地の縫い目ひとつに亡母がいる
旅空で財布忘れる妻の知恵
即席に時間の重石ちょっと載せ
城下町崩れた門にもある情緒
過疎の村　坂道だけは陽があたる
花婿が泣いて締まらぬ披露宴
野仏も衣替えする春日和
下張りの和紙がつぶやく昔いま
無理偏のブリッジ与党陽のかげり
ボロ裂れにも錦と呼ばれた自負がある
ゆったりの歩幅で男らしく生き
地吹雪へ地蔵凍死を覚悟する
長挨拶ビールのぼやき聞いてやる
呼びもせぬ貧乏神に指図される
古時計老父の歩幅で鐘が鳴る

青森県

諏訪夕香

寒牡丹　泪ぎっしりつめ込んで
花ざくろ失意の骨を埋めたまま
死に耐えて指輪淋しい芥子の花
坂道をゆっくり下る女の樹
騙し絵の隅に置かれた螺鈿帯
香合のふたカタカタと夢語る
真夜中のシャワー恋の演技する
火を騙し騙し続けて五十路坂
モンローが飛び出してくる古本屋
女人風呂入っているのは雄の蟬
湧き生ずる恋の目覚めか薄化粧
底辺で耐えているよに灯を点す
百花繚乱　あなたの胸で眠りたい
四面楚歌　化石になった縄人形
美辞麗句　化石に恋をしませんか

宮城県

菅井みよの

まな板の音から今日の幕があき
手内職肌で感じる金の価値
戦争を知らぬ子供の食べ残し
型で抜くオムスビ母の味がない
三世代散らかしている温かさ
母の振る鈴にひとつの無駄もない
振りようでいい音になる老いの鈴
遠い事忘れず昨日の事忘れ
限りある命を趣味の彩に染め
齢なりに働く母に無駄がない
笑う日も泣く日もかざす母の傘
修羅越えた涙は見せぬ母の章
慰安婦の涙日の丸踏み絵にし
玉音を思い出させる蟬しぐれ
米五キロの列で戦後の絵に浸る

鳥取市

杉本孝男

目が肥えて希望に叶う嫁がない
励ましの夜食を出せば寝てしまい
妻の愚痴静かに聴ける歳になり
炎天下花そよ風に会釈する
ゆったりと妻よ歩幅を合わそうか
これ程になる迄打つ手あった筈
サラリーの日はニコニコの妻でいる
世に拗ねていつもひとりの相撲とる
星空を見あげ宇宙の人となる
記念樹を見あげうれしい美酒に酔う
濡れてから庭石彩で招き入れ
鐘強くついて女の願いごと
湯豆腐が今日の寒さを慰める
リハビリへ犬も一役散歩連れ
耐えていた蕾も甘い声に咲き

和歌山県

杉山精子

なないろの鉛筆がまだ揃わない
添削のできぬ台詞の堰をきる
掌の中で満ちたりている君の愛
しあわせな音だけ聞いていたい耳
しまい湯で夫の軍手を洗う幸
茄子漬けの色褪せぬまに夫起こす
大空を向く哀しみを呑むために
夢はるか十指の透き間にある血潮
身の丈の夢に相槌くれる夫
B面は意外とシャイな男だね
生命の灯　獅子吼の如く燃え猛れ
ひらがなの便りも来ない母の老い
この人のドラマと呑んだ吹き溜り
歳月を満たす私の回顧録
雪しぐれ　そこはかとなく歩きたし

堺市

鈴木可愛

悔いの道こけつまろびつ来たわたし
ひとことで心通じる人と知る
私に使命があると聞く不思議
強がりを言えばころころ笑う君
やわらかにわたしを包む君の風
胸に問いわたしを許すドアチェーン
ふところにうち抱かれて泣き寝入る
まぶた閉じれば君の胸板君の声
君という危きものを支えとし
君とのこと思えば涙にじみ出る
愛されていると信じていいですか
さようなら　苦しまぎれに出た言葉
ひとことの波紋の恐さ身がすくむ
これからをどうしたものか積み木手に
賛美歌に今のわたしは遠くいる

山形市

鈴木玲於子

農耕の種族よ北の土根性
古墳たどれば米一粒の輝きよ
裏切りを知らぬ背骨の汗で活き
農政の構図に杭を強く打つ
米輸入永田の町にある踏絵
輸入米　飢餓るいるいとして屍臭
黙秘する農夫の愚痴が胃にたまる
農魂を騙して明日はしゃれこうべ
七彩の土のいのちは崩せない
農夫の掌　花一輪を野仏に
掌も足も切られて案山子佇つ枯野
輪廻転生　農夫が泥土這いあがる
こぶし咲く牛飼村の詩かなし
多情仏心　農夫は活きる花を撒く
愛深く命たぐればムンクの絵

鳥取県

高尾京

胃全摘　九年　暦を新たにす

夜遊びを怒る気力で生き抜いた

亡き父に見守られつつ渡る海

墓参り続けて健康とり戻す

つづら折　峠の道を連れ添うて

花の道　緩き流れにさからわず

我ままな酒に手料理あまい妻

身を案じいさかい果てて風を見る

気疲れて夜半に旅する紙と筆

何もかも包んでくれる屋根が無い

明日を知る術なくかえりみる肚もなし

遺句集は任せて生きた証とす

減税で足し算お差しの消費税

過ぎし日の試練いずみは語らない

和のレース祈り空しく戦火燃え

堺市

高田星子

我慢して打つ相槌もあるのです
頬を打つ風は素直に受け止める
良妻を演じつづけるのは易し
赦されてやさしさ倍にして返し
こだわりを捨てたら運がつきはじめ
お神水いただき汚れ薄めたい
拝んでも愛染さんは知らんぷり
優しさを求め転んでばかりいる
いちにち中あなたと居てもまだ不満
恋人がくると必ず吠える犬
共稼ぎわたししっかり貯めてます
踊る手のかたちでコスモスが揺れる
揺れ動くわたしを笑う秋の天
父が逝く駅は昔のままなのに
関の声なんども聞いた石畳

藤井寺市

高田美代子

呑んで候 酔って候 無罪なり
メトロノームが狂いまともに進めない
面倒なことが嫌いで逃げている
許し慣れてどうぞどうぞとまた笑う
花言葉を降らし銀河も眠くなる
天地無用と記すわたしのプライドに
ガラス張りの部屋で二行目をとちる
真冬の海に黄金の壺でも沈めんか
手の届く位置になんでもありすぎる
ありがとうだけでもスマートに言おう
風はひそかに昨日と今日を入れ替える
直球でくるからひょいと身をかわす
散るときの台詞を探す赤い薔薇
化石になったわたしに何時か逢うでしょう
此の次は奇麗な石に産まれよう

熊本県

高野宵草

元朝は基本どおりに歯をみがく
苦笑して僕を見ている神仏
異常ないという診察が頼りない
強情な眉にも白毛生えて来た
モナ・リザが笑ってみてる資金繰り
意のままに飛ぶ撒水で気が晴れる
これ以上言うまい蛇口にお湯が出る
働いてごらん寒さが逃げてゆく
男子厨房に立ち荒刻み
家中の時計気ままな針運び
靴脱げば素直な僕になる砂場
母さんが女になってダンスする
妻の叱言の中にいるやすらぎ
叱ってる父の過去にも同じ傷
籤はみなはずれ安心して眠り

八尾市

高橋夕花

三面鏡ひらくと鬼と私と

折れたペンのゆくえ見ているいわし雲

言い訳を諦めもせず雨季つづく

七いろに足りない虹を追いつづけ

胸板が薄くなっても父は父

吾も母なり母の手を引いて

背のびして愚かな妻をくりかえす

子の海の広さに祈ること多し

葉ざくらが脈うつ私も急がねば

若草をふむすこしためらいながら踏む

フルートの澄んだ音いろは片恋よ

雷が鳴ると可愛くなる女

許されてれんげ畑の中にいる

一つ捨て一つ拾って秋のみち

私にもどる机にもどる午後の雨

香川県

高橋宅

讃岐路に来れば一番うどん盛る
寅年で皮を求めて五十路なか
余興にはO型のおれ指定席
酌み交す酒より好きなコップ酒
旨い酒大風呂敷を連れて飲む
ひと言が言いたいために話聞く
みの虫があと一枚の葉を摑む
冬眠を家族揃ってしてみたい
ポトポトと母の点滴歳をつみ
フリージア株分けをして春を待つ
畑を鋤く汗にまみれて旬の歌
校庭にいもを作りし昭和あり
菜園のトマト自慢に昼の飯
子に勝る鉛筆削る業が冴え
故里の山の形を子に伝え

香川県

高橋たみ

松の木の曲った根っこ強そうだ
台風よ目を細くして通りゃんせ
昼までに買いに行きたや岩豆腐
どうしたのそこは道ではありません
枯れ草の指輪しばらくはめておく
二日たちやっとダルマになりました
色あせたカニサボテンと遊んでる
枕だけいっしょに並ぶ夏の夜
アマリリス　ポンポンダリア母の手に
きつね寿司ドロンドロンと消えて行く
雷は近くまできて引きかえす
空き瓶に愛をたくさん生けました
結ばれた糸を時々ふってみる
沿道にコスモス咲いてひと休み
鏡には今日は美人とありました

加古川市

高見豊泉

お節介　笑顔で受けて格を上げ

志は一つ男結びに念を入れ

仕残した昨日が責める朝の雨

馬の足耐えて主役の座を狙う

働いた汗を微風が褒めにくる

望郷の視野より消えた童唄

遅霜は春へ序曲の薄化粧

行間の苦悶へついてくる美学

家計簿の穴は笑顔の妻が埋め

木守柿一つ残った日の孤独

後輪の情け前輪走らせる

なごやかな羅漢が集う縄暖簾

出稼ぎの父より届く子のセーター

八月の軍手を妻の手へかえす

ハイテクの進歩に神も横を向く

竹原市

竹井ヤスエ

雨あがり祖先の墓は美しい
雑談の絶えぬ椅子なりぼけはせぬ
久し振り妹二人が来る電話
フェリーでの句会参加も味がある
羊の目　心静かに祈ります
この句なら三途の川が渡れそう
古都旧家レンガ通りが美しい
早植のナスに一輪咲きました
明けまして目出度めでたと老いてゆく
八十歳も和気あいあいのハイキング
病床の窓辺のトマト完熟よ
リハビリはそこそこにして昼寝する
名月を美しく見る四人部屋
ゲートボール在りし日の亡夫思い出す
好きな相撲　痛みこらえて見ています

松江市

竹内すみこ

褒められたことは一度もない毛虫
万緑につつまれひとりだと思う
竹藪でひそひそ話する四月
分校の閉鎖見ている桜の木
あたたかい言葉が欲しい夕茜
筍がまた竹になる竹林
脱け殻が今にも歩きそうな蟬
立秋や残暑酷しきもの忘れ
古傷がたくさんあって生きられる
野良犬の目に憧れている私
嘘乗せた電車が通りすぎて行く
ホイッパーいつも自分を見失う
いつか毀れる皿を真っすぐ積み上げる
ほどほどの倖せだろう仏さま
ゆっくりと歩きゆっくり蝶になる

高知市

竹内千恵子

カラフルに生きて孤独を抱く女
思い出へはっきり指紋捺してある
母が居て娘がいて寡婦を生きている
乾杯のグラスが軽い音を立て
ローカルの思い出画布ににじませる
ともすれば忘れな草に泣かされる
思い出の視野に父親の千鳥足
聞き上手忘れ上手なかすみ草
米を研ぐ事を忘れた独り者
せきとめた土砂が流した人生譜
脇役になってしまった玉子焼
無になれず起きたり寝たり座ったり
そう言えば御無沙汰してる針供養
幸せがあると信じた回り道
丸木橋上手に渡る術も知り

砂川市

武田正美

偏頭痛どこかでハーモニカが鳴る
世渡りの下手な夫婦でよく笑う
影武者でぬるいビールを飲まされる
人間に生まれ哀しい事ばかり
ゆっくりと泣かせてくれぬ霊柩車
さりげない労わり眠れないいのち
核廃絶続く祈りが深くなる
嘘百態絶える日柩背負てゆく
秋の夜はゆるり飴玉煮詰めてる
労って労られても二人切り
時どきは爪を内緒で研いでいる
泥沼の中で跼いている余憤
雪溶けの一滴ずつを地に還す
つぐないの輪廻の森の深い闇
黙示録　火縄に託す相聞歌

大阪市

竹田みずき

一つ事奥を極めた人の目だ
残業の夜食が生んだ恋でした
子の出来が良過ぎて社宅住み辛い
常勝の驕りを叱る負け試合
飽食に世直しファイト萎えてくる
こんな狭い土地だったのかビルの跡
中年のパートで知った外の味
すべらせた口に実像見えてくる
治るまで待ってくれないノルマ表
少し距離おいてソフトな嫁姑
時々は愚痴もこぼして輪の中に
一言で親しくなった国なまり
あくびして殺人見てるテレビ前
泳いでた浜にプールが出来ている
一喝に震え上がった父を看る

倉敷市

田中好啓

三の松　足袋の湿りが丁度よい
雨が降る今日は式部の箱開ける
戻る娘が一人　嫁く娘が一人かな
大き目の靴にチャップリンを偲ぶ
二ン月の扇子ははなし家のものか
高野山の近くで四人会うている
オッパイが大き過ぎても売れ残り
歯を入れる休みが十日ほど欲しい
草の匂よりも髪のにおいにむせ返る
元気なうちに行きたかったはスリランカ
トイレ改造トイレの時間長くなる
いかなごの釘煮四五匹酒に合い
代僧の無口に法事済まされる
小銭入れだけがふくらむ旅帰り
摩耶夫人の守りを信じ掌を合わす

八尾市

田中トシエ

七転び石のくらしに日があたり
教育ママ先ず学歴を口に出し
合格の返事で我が家の春となり
大ちゃんと名づけてシーズ部屋で飼い
眉を描き釣り合い取れた顔になる
白樺に樹氷なみだの花ひかる
月下美人しずかにひらく夜の刻
なぜ来ない時間すぎての待ちぼうけ
節約の家言を知らぬ三代目
シャッターへ孫が上手にポーズする
台風にまた邪魔されましたお月様
ばあちゃんも鏡に向い薄化粧
胃検査のオーケーも出てうまい酒
父の日に料理習った娘が作る
長雨で米の冷害嘆く里

香川県

田中なみ子

目ぶたには優し眼差し師の笑顔（迷観子追悼句）
天国で師匠が開く川柳会　（　〃　）
春が来て窓辺でうとうとおばあちゃん
暗闇で人の気配を感じとる
嫌なこと嫌だと言えず顔に出る
どうしても私読めないつなぎ文字
駅前の辻の向こうでハチが待つ
四つ辻を四人で分けて帰る道
値段見て隣の店にも顔を出す
あれこれと隣に目移りいい迷惑
無人島動植物のパラダイス
負けまいとこぶしで力突き上げる
波がしら浜辺を襲うヒョウのよう
波の音浜の子供の子守り唄
美容食食べても無駄なオバタリアン

香川県

田中ふみ

嬉しい日　鯛が主役の祝い酒
ハウス出て大空見たい春の花
平穏に暮らし大空見える幸
給料日家族で弾むレストラン
孫四人揃えば向かう敵は無い
肉よりも好きな魚で老いの幸
人生もたまには嘘の調味料
不況でも少し見栄はる熨斗袋
敵となり味方でもある夫婦です
梅雨の朝文句たらたら独り言
弾んでる積りで何時か胸を張り
幸せは綻び縫って返し止め
幾山河越えて夫婦の和む幸
子に従いて波風立てず行く余生
お荷物に成らぬようにと身に投資

宝塚市

谷岡福子

思いっ切り夢のボールを蹴り上げる
両の手の中に隠した忍と従
戯れに摘んだ十指が裁かれる
率直な答えを出して抱く孤独
懐に包めば石も丸くなる
ゴシップを詰めて風船軽く飛ぶ
すらすらと言えぬ真実だってある
逆縁にただ打ち鳴らす母の鐘
潮騒がグラスの中に見えかくれ
愛憎の振幅生きているあかし
人裁く心わたしを眠らせず
優しさにふれて花芯の燃えはじめ
前列で衰え見せぬ好奇心
十字路でもう足踏みはしておれぬ
テレビの中で追憶のワルツを踊る

和歌山市

谷口信子

菜畑へ入った少女蝶になる
花むしろ孫と童話の中にいる
満たされた風船じっとして居れず
うっかりへ七癖ひょいと顔を出し
わくわくの話包んだピンク色
突然の事故を捕えたカメラアイ
泥水を吸っても清い花が咲き
元気よく回る静かな独楽の芯
薄紙がはがれるように病癒え
仰がれていても寂しい鬼瓦
他人賞めて心晴れ行く秋の空
幸せは芝居の余韻溶かす風呂
愛の手をさし伸べる隙開けておこ
縮まった距離へ残り火燃やしてる
棒グラフ今一息が動かない

海南市

谷口義男

意地捨てて笛に踊って居るピエロ
苦労など知らぬ世代が口叩く
噛み合わぬ親子の会話年齢のズレ
民主主義　首相公選こそルール
善人に大金などは縁が無い
エビで鯛釣れる期待の贈り物
嘘うまい順に序列を付けて見る
公害も一緒に誘致するそうな
無理をして掛けた保険が役に立つ
今日生きるパンを漁った終戦時
あの頃に出せば良かった鼻薬
子に遠慮ばかりしている親である
ゴミ袋見れば世代が透けて見え
美しく生きる事だけ考える
ベートーベン聴かせ寝かせる若い母

鳥取県

谷野鉄雄

三高とまでは行かぬが玉の輿
四月馬鹿分からぬ人に叱られる
碁仇の小鼻ヒクヒク小憎らし
中元に値札そのまま付いている
百姓のプロです外米恐くない
ジーパンをはけば若さが戻るかも
美容院から帰った妻に馴染めない
その内にアメリカ国技買いにくる
五〇年のコンビ額に刻む皺
世渡りにプラス　マイナス使い分け
カタカナは読めるが意味が分からない
プライドが邪魔し善意の手を払う
無理かなとためらいながら一〇年日記買う
立食のグラスだんだん重くなり
僧兵の生活の香り独活を摘む

大洲市

田野栄子

出世コース蹴って独りの母を見る
包丁の錆を気にして共稼ぎ
一徹の真面目を母はもて余す
宇宙旅行の切符夢みる子の未来
真夏には厚着銀杏の素っ裸
又同じ失敗母も少し惚け
角砂糖溶けて妥協をする甘さ
完敗の悔しさバネに新記録
若夫婦に一歩譲って日々笑顔
孫が来て顔も財布も緩み出す
さりげない謙遜　気品匂う人
こだまする神楽太鼓へ寄る氏子
談合の祝儀母だけ足してくれ
雄弁で上手に投げる変化球
心地より疲れ大地を踏む素足

大阪市

玉置英子

日傘閉じ木陰に入る立話
お灯明せめては夢で逢いにきて
遠のいた夢もまだ夢一人呑む
この写真お腹にあなたがいたのです
口惜しいが犬の躾も負けている
呼び込んで今ぜんざいが煮えました
寝ていてもくる正月に忙しい
かえる娘と出掛ける母の立話
咲き切れば風の誘いにのる桜
お見舞に早よいこ退院してしまう
もう一本煙草喫うだけ待ってみる
散るまでは仰ぎ見られる位置にいる
滝つぼに落ちてしまえば只の水
バーゲンは半値も一つ買っておこ
しっかりと刺尖らせて枯れている

郡山市

玉木柳子

さくらはらはら今日が遙かな過去になる
地に還るさくらよ愛は満たせたか
山背吹く母に錠剤また増える
耳鳴りは私の枯れる音なのか
炎の底に燃えぬ眼玉が一つある
家計簿に妻よ水漏れしてないか
生も死もたった一文字だよ　卵
即答をさけてりんごを剝いている
鳥交るどこかで飯が焦げている
産卵の亀の涙を君見たか
どの橋で私は影を失くしたか
旅に出るのは風と話がしたいから
風船の軽さで死のう　なあ妻よ
花ごよみ私の咲く日書いてない
にんげんに汚れて風は野に還る

秋田県

田村三郎

喧嘩して負けるも勇気と子に教え
万歩計　主の体調知りつくし
笹舟に乗せる罪状多過ぎる
耐えている働き蟻の足のうら
神様へ楯ついた頃が懐かしい
猫に聞きサンマ焼いてるひとり者
爺ちゃんの怪談話に孫笑い
新採用　客でくらせる二、三日
夢に出る貴方やっぱり嫌な人
親父の背二の舞い踏むなと言っている
気にしてることを言う医者嫌われる
コンパスの範囲でくらす老い二人
親の夢見事に壊して子は育つ
煩悩をゆさぶり起す除夜の鐘
色即の是空に時間を掛け過ぎた

松山市

丹下美津子

華やかに鶴が飛び立つ北帰行
失った愛を求めて花遍路
口紅を忘れた妻の口答え
サヨナラのキッス見ていた花時計
旧姓にもどる謀反を抱いて寝る
情念は青い鬼火となって燃え
今夜こそゆっくり君の本音聞く
聞かぬが花　言わぬも花のおもいやり
そのことにふれぬ友情ありがたい
さり気ない気くばりさり気なく受ける
さくら貝の孤独さざ波なぐさめる
嫁菜つむ亡母の匂かぐように
うちへ来る福は寄り道ばかりする
後日談　逃げた魚が大きすぎ
終章への道はきれいにしておこう

高知県

近森功

理想論ならべて明日の無い男
楷書から草書にかわる父の酒
櫓は僕が妻が舵持つ宝船
子等の振る旗に合わせて綱を引き
広い空ジャンボが点になって消え
裏道を知らない父で平社員
軍神の妻の美名で宴婦は老い
母の日に父にも添えた二合瓶
洗濯機　罪を洗った花名刺
真直ぐに歩いて幸を取り逃がし
地下足袋の似合う男で走るだけ
定年の父の居場所が狭くなり
白い指　何が不足か赤い爪
叱られる孫をかばって叱られる
靴ずれをみやげに帰る父の旅

宮城県

千坂みつほ

今日の日を重ね明日の糧とする
帰る道あればあの世を覗きたい
夕焼けが地球の汚れぬりつぶし
両肩の荷物は寡婦に重過ぎる
又明日使う命を抱いて寝る
家計簿を洗えば酒のしみ残り
久かたの下駄にとまどう足の指
飽食の日本へ向ける世界の目
正直に書いて日記に鍵がいる
子らは降り二人になった縄電車
嫁ぐ娘の祝辞淋しい母の耳
老いの目に時の流れは読みとれぬ
追う夢があるから明日の米をとぐ
エリートを育てて老母ただ一人
フランスとだけなら読めるワイン飲む

和歌山県

千原淳太郎

めでたさは孫がも一人増えた初春
本当の事を言ったら笑われた
休日や爪の先まで休日や
サワリだけ習って趣味が又ふえる
飲みに来い手ぶらでこいとにくい友
ごめんねとその涙見て叱れない
記者の目は梅一輪を見のがさず
雑談の中で本音を匂わせる
曖昧な記憶平気な顔で言う
愛想よう言われて裏が読み切れず
下駄ばきの余生今さら何飾る
二次会のだれが敵やら味方やら
アタリ待つ竿に欠伸と赤トンボ
ライバルへ答えを二つもって待つ
九回の賭へ代打の背なを押す

寝屋川市

千葉雷音

明けまして平成維新の声がする
戦死者の五十回忌の多い年
ほくそ笑む株式会社公益社
仏壇にカラオケバーもあるマッチ
マンションの窓は働き蜂の家
粗大ゴミ朝出したのに夜帰る
完敗はしても内戦する余力
聖戦という名で歴史繰り返す
去年今年　税と汚職のことばかり
空爆をテレビゲームのように見る
天の声賄賂もらった人の声
円高や日本を叩く鞭の音
順調に今年も虎の負けっぷり
みどりの日　昭和も遠くなりにけり
はいチーズやがて遺影となるポーズ

島根県

槻谷仲子

キャンドルの幸せ感激溢れそう
夫の元気へわたしも長生きしたくなる
秋の旅に誘われる二つ三つ
秋夜長せめてテレビを見て笑う
意外にも嫁が栗めしたいてくれ
内孫がいなくて大人の話だけ
街角でいまだに呼んでる昔の名
ライバルと同じ悩みでお茶はずむ
忘年会手拍子だけの下戸でいる
人さまの病　気になる病持ち
気まぐれの友と背伸びの旅にいる
松江城ライトアップにある旅情
シクラメン愛されているお正月
冷静になって晴れの日を待とう
処世術　それなりに今持っている

香川県

辻　上　よしみ

倖せを噛みしめ拝む初日の出
出会いから忘れられない人となり
側に居るだけで温もり分かる人
味方だと思った息子嫁につき
二十年　私の名前オイですか
倖せの明日を信じて米を研ぐ
二人して築いた積木崩すまい
嘘ひとつ人を泣かせる罪づくり
逃げ道を少し残した母の愛
雲行きを読んで張ってる予防線
相談を受けて苦労を背負い込み
三文判軽い気持で押して泣く
許す気になって心の痛み消え
サングラス掛けて世間を軽く見る
あの空の果てに亡母さんキッと居る

香川県

堤　くに子

親ばなれしたいと弾むチギレ雲
秘め事も気配で判る母の勘
本心は見せぬピエロの厚化粧
初物を食うて季節を確かめる
辻一つ曲がると寺のある京都
神よりも最後は頼る妻が居る
窓際の机の風は冷めたすぎ
誕生日夫厨で加勢する
此の世には嘘があるから住み易い
倖せは八分位いが丁度よい
引っ込めた道理に無理がカラミ付く
変り身の早さを見せる風見鶏
母からの便り押し花添えてくる
甲子園ドラマ生み出す人文字
鍋洗い太公望の帰り待つ

大阪市

津村志華子

通りゃんせメロディを待つ白い杖
衝動買いした満足と後悔と
ストレスの心を洗う終い風呂
かしこぶる偉ぶる鈴は鳴らすまい
観音さまに逢う石段が高すぎる
独走の我意を如来に諭される
一日のあれこれ話す仏間の灯
挫折する心支える香ゆらぐ
独り住み人恋う電話長くなり
振り返る紆余曲折の寡婦の坂
経を読む今日恙ない日の感謝
夫の墓地ただそれだけの地主です
消えそうな種火で生きる寡婦の日々
ご近所もうちもさんまの焼く煙
まな板のリズムに乗った春野菜

鳥取市

津村静枝

国破れ引き揚げて見た博多港
二人共口に出さぬが記念の日
真知子巻綾なす恋と唄に酔い
夫逝きて道しるべ出来　張りも出来
二重橋　戦中戦後知っている
幾山河　七転八起老いの坂
残り火を集めて燃やそ今一度
もう飲まぬ約束昨日したばかり
ガス灯で城下の畔レトロ調
三猿を飾っていても姦しい
目の老化もはやこれまでハンドルを
忘れるのが一番という薬飲む
ホールインワンで戌年すべり出し
口癖は呆けちゃいないよ貴女誰
古希半ば雛の代理にこけし様

岡山市

寺尾俊平

消えた国家がまだある古い世界地図
雨の道牛が歩いていたりけり
パリ祭やワインに少し酔う妻よ
春秋左伝の中の孤独を銜えている
砂漠でも海でも進むほかはなし
夜の電話悲しきことも告ぐるなり
人が消えて蝶のみが翔ぶされど春
亡命や黴の匂を民話の中へ
秋ざくら崑崙へ飛ぶ風よ吹け
魑魅魍魎夫婦で風をうつし合い
宦官司馬遷よ私もそれに似て老ゆる
放心や神話の魚ものをいう
人力車に揺れた母の膝の記憶
雪の灯よ戯作者のような湖よ
五体投地わが渇仰はまだ遙か

兵庫県

東狐　恭仁子

流れたい花せき止める杭いくつ
輪廻とや蟬の柩を担ぐ蟻
胸襟を開き過ぎたか風邪を引く
向日葵の一途支える首の意地
労って父を無口にしてしまう
何の罰か毒味ばかりの半世紀
突っ込んだその手を壺に試される
うたかたや米研ぐことも花摘むも
心にも空き部屋のこし子は巣立ち
消せぬもの抱いて私の花遍路
いつからか妻が鵜匠になっていた
羞じらいを忘れて久しこぼれ萩
寝息きくいつかひとりの日を思う
花ひととき人ひと盛り枯野原
起伏遙か許されて今ここに立つ

和歌山市

土岐照

神の鈴鳴らし初心を顧みる
初孫を呑み込みそうな鯉のぼり
ピストンの勤めに今日も汗流す
皮ジャンの下で暮らしが泣いている
叱られたことも話題になる法事
聞くよりも機転の良さを盗みとる
微笑みの裏半分で泣いている
遠くても親もほどけぬ固い仲
苦労した妻もお鍋も底光り
気丈でも折に可愛い妻となる
過去の道捨てた女の出発だ
隅に寝る癖がついてる居候
斬られ役たまには斬ってみたくなる
身は胞子　恋しい人と風でとぶ
一服のお茶で汲みとる和の心

岡山県

土居　ひでの

春風に命をたたむ鯉のぼり
ジェスチャーが上手になったフラミンゴ
嫁がせて苦労の向きを変えただけ
耳もとのナイショが温い七五三
二人三脚結び直して老いの坂
女と妻　行ったり来たりする私
母の鈴まろくなれよの音で鳴る
菜の花の真中にある母の顔
青空と仲良しだった老母の鍬
一歩一歩磨いて水晶に近づこう
手間暇を掛けぬにやさし野のすみれ
手鏡が笑うて老母と瓜二つ
還暦の駅　鈍行に乗り変える
子午線を父娘で駆ける歌ごよみ
思いきり眠ってみたいねむり草

羽曳野市

徳山みつこ

いいことに逢いそう今朝の青い空
弁当を作り続けた自負一つ
先生を見る目生きてるランドセル
絶やすまじ通天閣の平和の灯
もう返事くる頃郵便受けのぞく
タクシーに並んでバスが先に来る
嘘みんな知ってた母の大きい傘
骨董ががらくたになる代替り
エンドマーク今しばらくはこのままに
美しいスワンなんですワルツ舞う
八方ふさがりブルースをきく秋の夜
天王寺さんポカポカとザワザワと
寅さんに紹介たのむ町おこし
一斉にノーこだました福祉税
キャンセルをして肩の荷がおりました

岡山県

富坂志重

不況風　首を回せば音がする
子育てに折れず曲らず大根足
聞き役に回り右耳左耳
里芋の葉に雲の涙がたまってる
紙袋開けばニッコリ桃の顔
いいチャンス一寸ゆさぶり掛けて見る
まだ逝かぬと約束をする墓掃除
円満を盛り分けている母の箸
祖母の背で音痴の歌に寝息たて
足元にいるのが見えぬ青い鳥
もう暮れるとても楽しい今日なのに
ご機嫌の日は鬼の面を置き忘れ
八十路から旅は仏と語りつつ
ここで手をかせば自立の芽がのびぬ
毒草の芽も青々とわるびれず

豊中市

富永敞子

立ち読みで星回りみる初暦
鶴の一声久しく聞かず冬ごもり
医者呼びに走った夜もこんな月
臘梅の香に出会いたり今朝の運
父の役　兄が果して披露宴
聞き役で腹のふくれる立話
尾骶骨こつんと感じ着陸す
牛鍋の煮えるを待っている寡黙
ようお飲みやしたな貴方万灯会
借ることも貸すこともなく菊作り
今が旬　嫁に出すのが惜しくなり
騙し舟　三歳の児に試される
友情を指で誓った若い頃
掃除機が小犬のようについて来る
羽織解く亡母の縫い目は美しく

寝屋川市

冨山ルイ子

花吹雪の中に立ち別れ思う
真夜中の思案　時間を止めたまま
今日も元気一行だけを書く日記
全快に大空を又はばたける
さわやかな笑顔鏡に写す朝
温か味残る電話をそっと切る
お別れの握手を影は離さない
秋霖に女の思慕を深くする
春風駘蕩　古里の友皆やさし
十指越す友に余生を救われる
ありがとう丸い心を抱いて寝る
野地蔵と話し心を和ませる
人を恋い途中下車した風の駅
一期一会　いのちを思う年になる
結果どうあれ懸命に今生きる

寝屋川市

豊福路子

スキンシップが少なくなった主の歎き
たくましく伸びよと松のメッセージ
どの花もひとを優しくする色素
タンポポの葉書にかけぬ憂いごと
お浄土のひとの数ほど曼珠沙華
人形のドレスの袖が付けにくい
極楽へ推薦したいひとが居る
亡母さんの袂のかげの半生記
織っている布が短い恩がえし
良寛の筆に託している迷い
煮つまった鰯が鯛になっていた
健脚にお礼を言うたことがない
自我の根を抜けば未練がのこる娑婆
自画像を完成してはなりません
青空の大きな傘を信じてる

芦屋市

鳥本泰

脇役のままで手頃な橋渡る
トタン屋根雨は正直すぎないか
雪止めの屋根を支える娶り唄
グラビアをめくると風が吹いている
文化祭おでんがすこし売れ残る
作り笑いもすこうし馴れてきた生活
中年の吹き矢はいつも跳ね返る
くるぶしが浸る小川を子と渡る
そろばんをはじいて兵を補充する
恋人の膝でまあるく拗ねている
闇市に人間の耳落ちている
暗示の中で少女は鳥になって翔ぶ
小鳥の死ひととき話す気になって
賭ける賭けないそこに女の堀がある
忍従の重さに竹の割れる音

大東市

内藤摩耶

偶然に逢えて捜して逢えぬ街
ローマの休日見てもヤングに戻れない
出る幕のないファイトです渦を巻き
ふわふわと闇を彩り舞う蛍
天と地を汚して人よなに偲ぶ
大の字になって隅などないお城
島と島　串刺しにして瀬戸を行く
農政が稲穂に頭垂れなはれ
二世まで責任もたぬ美容外科
前向きと答えて嘘が通過する
白い目を注ぐ心の貧しさよ
こぼれ陽を浴びてロダンに似たベンチ
どんくさい指で雨戸に詰められる
手になじむ器で愚痴のきき役で
ワイン添えやっと母の日らしくする

伊丹市

中井大八

無人駅赤字という名の客が乗る
土匂う祖母の両手の安堵感
減反に小屋で鼾の耕運機
ゴヤが言う聖職達のこの偽善
故郷の空にシャガール舞い上がる
ミステリー写楽は謎に包まれる
声哀し野麦峠に雪が降る
白虎碑に会津士魂の声を聞く
オアシスを求めて旅人都市砂漠
縄文杉の下で神代の風に逢う
笠智衆に父親像をダブらせる
モスクワのニュースの横に資本論
コミュニスト敗れてレーニン人となる
昆虫館　蝶がゆっくり人を観る
風紋が過去という字を消している

豊中市

中井智代

花びらを水に浮かしてこれも愛
待ち合せ押された肩があったかい
水しぶき騒いでいます人魚達
愛称で呼ばれてバラを買いました
花が好き笑顔の種を持っている
夜は更けてその他そのほか二人です
ミロのビーナス背中丸めて休みたい
霧が峰　赤毛のアンを読み終える
クロールで人魚に会いに行くのです
網引きを見てるヒマワリ汗をかく
幻想の中の向日葵風化する
モナリザが僕を視つめる僕だけを
脳裏から青いレモンが消えません
母が逝きバラの海へと沈みゆく
亡き義母の前かけの色継ぎの色

城陽市

中井三重子

馬の眼が今スタートを告げている
スピードは青春競う息子あり
神経を一本休め春うらら
気が付けば時計忘れたシンデレラ
ふいに鳴る目覚し時計嬉しい日
目の前の宝石遠い憧れよ
遙かなる夢に向いて続く窓
初恋はとてもきれいな泡となり
遠い日の記憶たどるもまた楽し
白梅の小枝に結ぶ吉の札
はち切れる想いへ長い長い橋
透き通る裸体にまとう湯の煙
一枚の絵ハガキ抱いて胸踊る
亡父の手の大きさ知った夜店の灯
無意識にこだまが遠い亡母を呼び

和歌山県

中後清史

ふる里の小川へ邪心捨ててくる
剪定の我流へ庭の木が怯え
ふと押してみたいスリルの非常ベル
この辺で盃伏せる手が欲しい
もう御免若さでやれた綱渡り
細腕で薄い福祉の壁を塗る
変化球混ぜてわが子の舵を取る
やすらかな妻の寝顔に責められる
一喝が欲しくてわざと背を向ける
言行のギャップが崩す信用度
直線を歩み続ける難かしさ
さきがけをして橋のない川に出る
究極の修羅へ仮面を脱ぎ捨てる
九条を守りたい人邪魔な人
舗装され寒い大地の都市砂漠

広島市

中木未香

積雪の白より白き亡母の声
暮れなずむひと日静かに手のひらに
水仙の吐息を聞いた春の湖
言い足りぬ言葉は伏せて落椿
幕間の演技で終わる春おぼろ
揺れ動く心へ今日が繕えぬ
それは慈雨軽いジョークと微笑みと
カトレアの微笑みに会う愛に会う
亡父からの答が青い海にある
頷けばうなずき返す流れ雲
この道を行こうあの日の絵の中に
裸木のうたに聞き入る冬の天
千年の古木に愛と書いてある
終章を飾る絵皿は白と決め
露きらりこのひとときへ炎えている

砂川市

中里つね一

ひな祭り狂いの雪に厚着して
豪雪もやよいとなりて鉾おさめ
山なみの浮きいだしたる茜雲
稜線の赤く走るや夕ぐれて
爽やかに恵みの長寿楽しもう
しんし針踊らせている母のわざ
赤穂義士熟年だけで勢ぞろい
ぬくめたふとん幼心に母の恩
餌台がからになるもうすぐ春だ
なが生きはここらまでとは健常者
新開地ドアの向こうは鎖国なみ
老人会まぶしい指環に座がしらけ
酒が入り協議事項をむしかえし
集魚灯撒餌のしたに修羅をみる
ねんごろになった二人の露天風呂

尼崎市

中澤向西

やむなくも河童踊りの隠し芸
仲人はとても素的な人と言う
良寛に残してくれた窓の月
写真より素顔がよいとお世辞言う
孫が来て親の言う事皆しゃべる
山下りるとたんに匂う焼芋屋
大物が煙の中にいる噂
爽やかな朝市どっさり買ってくる
赴任地の朝を知らせる鳩時計
ゆっくりと仏法を聞く右の耳
よい仲間輪の中に居て茶が旨い
砂浜に蟹の足跡見て回る
何くわぬ顔で香水匂わせる
ささやかな野心が覗く可愛い娘
仲間から出ると一人の曲り角

名古屋市

中島一声

ひとり言犬がきょとんと聞いている
帰るたび小さくなったくにの母
人情のまちです低い屋根ばかり
大の字に寝てふる里はありがたい
若い気がシルバーシートへ誘われる
足あとのひとつひとつがなつかしい
守衛室ちょっと早目のひるを食べ
いま置いたメガネの場所をもう忘れ
ため池のメダカも野心もっている
振り向けばどの足あとも悔いばかり
夕焼けのむこうを想うハーモニカ
モーニングコーヒーに寄る万歩計
草抜いたひょうしにぎっくり腰になる
山門の仁王とくらす鳩になる
血圧のくすりのむことよう忘れ

相生市

中塚礎石

貧乏はどこからなのか冷や奴
人間の命が競りでたたかれる
天秤の前が重たい二等兵
手を合わせ一本道を右ひだり
足跡はぴったり合うた父のもの
泣く時間あたえてくれた母は留守
おおしまに着替えてからも忙しい
本当のこと聞きたがる地獄耳
振りすぎた尻尾が赤く腫れている
幸せになれよと指に言い聞かす
七人の敵はこころでつないでる
枯葉舞う表になると信じきる
ああ軍歌　男ばかりの花見酒
環境破壊七つの海を視る魚眼
どこまでも土筆がつづく散歩道

鳥取県

中西智恵子

ネギ刻む包丁の音妻の朝
出会いにも別れた日にも春の雨
花が好き自然が好きで花作る
棘のあるバラをいまだに愛してる
鯛よりも雑魚食べたい時もある
日やけ止めぬり太陽に会いに行く
買っちゃったおだてにのった春の服
無器用な夫と照る日も曇る日も
籠の鳥まだまだ恋をしています
ながい夜黙っていてもそこに夫
良縁を盗んでいった秋の風
秋だなあ空気がうまい散歩道
太郎にも渡したくない鍵がある
敬老の日は若づくりしてやろう
泣き顔を見せたくないから笑う

大阪市

中村叡子

初孫の胎動を告ぐ嫁いとし
孫よりも四十過ぎたる子を案じ
何程の馳走もないのに母の味
海に来て足も入れずに孫の守り
居心地は如何とあの世覗きたい
不況風　青田刈ったは何時の事
穴場とて尋ねて来ればラッシュアワー
清らかな山菜なのに灰汁強し
眼鏡かけルーペかざして辞書を引く
秘めた恋つつかれ不倫暴れ出し
多才ねと三日坊主を褒めておく
とっときのブランデー飲ませ愚痴られて
へそ曲り晦日にうどん食べている
柔肌もここまで脱げばいと淋し
浄瑠璃のない政局に人形師

犬山市

永井さかゑ

田の隅を老婆一人で植えている
わが老後いい隣人に恵まれて
マイペースで歩いていますこの老後
幸せは笑顔の方へやってくる
苔むした水車にロマン過疎の村
紅葉の過程と似たる人の路
春と秋だけだといいな老いの四季
無人駅コスモスガゆれ温かい
夢はまだ持っております凛と立ち
学ぶ事ばかり多くて老けられぬ
日向ぼこしながら愚痴も聞いてやる
無駄骨とわかっていても夢に生き
街角のデイジー私を待っている
花活けて聞えて来ます花の私語
雪降る夜思い出話したくなり

米子市

永井三津子

春の風眠るおんなを揺り起こす
また友が人生の幕先に引く
人生の初心者マーク外せない
心病み戻った里に椅子が無い
震える手コップの酒はこぼさない
見舞い客医者のごとくに経過問う
吐き出した言葉の軽さ重く知る
名声を博してミスを恐れだす
雲一つ背負う荷馬車が峠越す
不景気が父から職を奪い取る
孤独から抜け出せそうな愛に会う
今年こそ売約済みと貼れるかな
学歴と言ってた社会崩れだす
好きなのに会えば無口になっている
一人酒疲れた顔が猪口に居る

岡山県

長尾恒心

三代目　分家の方が蔵を建て
田植水　パチンコ店の灯が映り
神様のくれるチャンスに音がせず
金持ちになった従兄弟が嫌われる
俵万智　田辺聖子と古川柳
好きだから無理を聞いてる目が笑う
どさくさの渦に日の丸　君が代も
ファックスでラブレターがスウーッと来る
キャッシュカードに乗って翔んでいるヤング
目礼のきれいな女の名を忘れ
ついに来た大人のオムツ買いに行き
明日のいのちわからないから歯を磨く
愛孫の髪を蝶々にして遊ぶ
日の丸を高二の孫と渡り合い
新しい頁を埋めて今日も無事

東大阪市

長尾高尚

ギャル担ぐみこしに道真苦笑する
高飛車に出て来た妻にある本音
物売りの声がしていたぬくい道
時々の代打に素振り欠かさない
ナースの目やわい笑顔に救われる
バツイチ同士　過去は問わない事にする
定年間近　妻の寡黙にある怖さ
辛口のコラムに痛い耳がある
現場百回　刑事の靴がちびている
悲しみは半分に喜びは倍にする絆
片道の切符で学徒が出た港
出無精の地図はゴロ寝の夢にある
結局は両家のエゴにある破談
詰襟に両親の期待を背負わされ
偲ぶ里帰省ラッシュもいとわない

宝塚市

永田暁風

妻逝きて何光年を隔てたる
指櫛や妻を亡くしてからの癖
声嗄れて枯野の妻と呼び交わす
妻を亡くした雀もきっといるだろう
亡き妻を尋ね山姥いるあたり
俗名のままでしっかり亡妻を抱く
砂糖壺にさとうと書いて妻はいない
逢いに来てくれぬ夜中の死者を呼ぶ
生えているのは亡妻の白髪か枯野一面
妻逝きて遺る夫婦の慣わしや
抱くものを亡くして何を抱く秋ぞ
少しあと追う他人のそら似だとしても
妻ひとり待ってる彼岸かも知れぬ
亡妻が待つ雪化粧した墓で待つ
女々しさの限りを尽くし亡妻記

尼崎市

長浜澄子

遠い日の転がって来るラムネ玉
風の子はいない　ブランコは揺れて
やがて娘は育つ　私に戻らねば
アップルパイを焼く　平凡な母の顔で
よく目立つボタンをつけて淋しがり
ためらっては居れぬ　シグナルは黄色
秒針に似て愚かさを繰り返す
くったくの無い日　アンパン買って来る
許そうか　テネシーワルツ聞きながら
まん中にいて淋しさが跳ね返る
オブラートに包む欲望のかたまり
触れないでおこう　私と同じ傷
淋しさに負ける　蛇口を開けて　ひとり
五感濡らす音符　こころに灯が点る
香煙がゆらぐ　一人のドラマを閉じる

広島市

流

奈美子

行き交うて風の綾なす早春譜
蒼深む思惟の海へとたゆたえり
亡父憶う亡母憶うてのひらの残雪
涙腺がほどけてしまう風の愛
花開く音へ切手を買い急ぐ
ふみ一書こころ浸して湖浄む
波の花愛の葛藤かも知れぬ
平穏に飽きた小石が描く波紋
エンピツの芯が折れてる程の乱
母の樹を揺する私の在りかなど
雲疾る未完ばかりをてのひらに
晩鐘の余韻嫋嫋胸に抱く
影細くほそく落暉へ流れゆく
季いくど巡りて白き花たわわ
海は無言で輪廻ひたすら凝視する

鳥取県

灘尾民子

一病を抱いた女のマイペース
頂上を目指す背筋はシャンとする
眠りたい時もあろうに鳩時計
あの曲がわたしの過去を連れてくる
荒波にテトラポットの強い自負
味方だと思った風にだまされる
再会に暫し楽しい森に入る
人生の終着駅は始発駅
おとなしい女涙を武器にする
真心にほろりと泣ける海がある
イメージを変えてドライな風になる
老化です医師さりげなく片付ける
未知数の命に炎える老い蛍
花吹雪そんなドラマでくくりたい
炎えた日もあった日記の一ページ

大府市

名波勝

滲み出るぬくもりこの人と歩く
旅の終りに駅弁を一つ買う
目に残す姿は一つだけでよい
味噌汁が一杯あれば朝がすむ
ひたむきな思いの雪を踏んで行く
うなどんが好きで春夏痩せている
植え終えた田んぼ蛙の声で寝る
星の名は知らないけれど腕を組み
思いつめ思いつめまだ生きている
五十年連れ添い短気知り尽くし
旅先の情け百草丸貰う
ＳＬの汽笛が過去を呼び戻す
野仏へ小さな祈り花を上げ
味方かも知れぬ言葉を耳にする
五十年二人で歩く先が見え

広島市

新山胤一

老兵の義手巡り来る半世紀
神々も人気を競う初詣
鈍行のリズムが心地よい帰省
繁栄を競うモラルが宙に浮き
行きつけの部屋で落ち着く田舎宿
金と地位　人の値打を決めたがり
ニキビ面の孫年玉を取りに来る
住職の袈裟端正な襟の白
切株の年輪　父が植えた山
天を突く杉が教える父の遺志
いい友が増えて余生を趣味で埋め
偶然がとりもつ縁で共白髪
楽しみを教える嘘の無い花壇
つっぱりの背なにも妻の老いを見る
中流が増えて人間小さくなり

吹田市　西岡　豊

教え子がお若いですとおべんちゃら
教え子の近況を聞くシャンデリア
教え子の還暦という幼顔
教師の子教師になって物足りず
館長の音痴の唄に人気あり
厄介なヒスをなだめる議長席
ワンバンド　ゼスチャー満点始球式
世話やきのレッテルはって路地に立つ
プライドに酒ぶっかけて無礼講
甘えたり拗ねたり愛の七変化
夜桜に部下引き連れて屋台酒
家元の流派を仕込む師匠の瞳
発表が間近に迫る師匠の目
積み上げて末は楽しい晴れ舞台
明日という舞台へ燃やす舞扇

兵庫県

西川一粲

酒あれば月が出ようと出よまいと
純愛が続き蕾の開きゆく
二人して植えた桜だ折らないで
どん底の苦しさに耐え今日の幸
妻の留守そっと財布を覗き見る
招かざる客悠々と長き風呂
飽き性の男に娘そっぽ向き
気休めを言うな言葉に刺がある
言葉では言えぬ心は燃えている
共白髪破れし夢を語り合う
舞い降りるまでが命か春の雪
拗ねた嫁里で迎えを待っている
人肌の燗にストレスほぐれ出す
ていねいな言葉で過去の傷に触れ
たくあんの味が自慢の総入歯

豊中市

西田寿子

そよ風が花の雫と戯れて
菜の花のニュース画面に目の保養
裏庭の日差し恋しいやつれ花
花びらが雨に打たれて崩れ泣き
その他から思わぬ知恵が湧き出して
石頭白旗出せば許せるに
便乗し思わぬ溝にはまり込み
未来ある若芽希望の靴を履く
命綱いらなくなった広い肩
何気ない言葉で消せぬ傷をつけ
旗色悪く群がる蟻もあとずさり
投げ出せば縺れた糸が和みだす
求め合う心に時が空回り
追うように風が袂を通りすぎ
どんな色重ねて見ても晴れぬ胸

東大阪市

西村哲夫

封筒に糊づけできぬ訳がある
米不足どこふく風と太ってる
どなりつけ いんだらさびしい孫三人
春風に忘れられてる舟一漕
わた帽子かぶった地蔵一人居る
ほっとしてこれからの悩み置き忘れ
みやげより小遣い待ってる子に育ち
男一人 女房無しでも子を育て
かたづけにシチョウくずしの喝を入れ
せっかくのチャンスに身体震えてる
世話のかかる人と女房下着出し
昼寝しようとすると子供行進す
別れしないつもの癖出るお大事に
晩年は酒で直して酒で死に
今日もまた我はあきずにめしを食う

橿原市

西本保夫

四人部屋ベッドに寝たきりわたしだけ
方角がわからぬままに居るベッド
気が付けば食事が違う四人部屋
文字盤で好きなナースに話しかけ
名前で無くお父さんと呼ぶナース
面会のベッド必ず妻が来る
病院へ妻がわかしたウーロン茶
通帳も株のありかも妻に言う
病名がわからぬままに一ヶ月
献身的ナース美人に見えてくる
有難う好きなナースに握手する
ここへまた来てはダメよとナース言う
リハビリのスタート　ナースの肩が好き
診察待つ不安のカルテまだ白い
レンズから見える世相は汚れきり

八尾市

二瓶道子

一本の紅梅愛し休耕田
草餅の緑を誉めて信貴の茶屋
大和路のあせび我が家の庭に揺れ
都市の川暗渠となって名を残し
若葉マークゆっくり出たり入ったり
勤労の主が休めぬ感謝の日
希望湧く麻痺した手にも箸が持て
竹踏みで二百数える風呂上り
想い出の椿たわわに花開き
蟬しぐれ短い恋に命がけ
音無しの構えで迫る孫の網
生垣に空缶の花二の句出ず
偽札は見え隠れして未だ消えず
西の京春の吹雪にあせび揺れ
呆け防止苦楽往き来の趣味の道

尼崎市

西　康之

老妻といい日旅立ちフルムーン
孫四人どれが一とは決められぬ
雨の散歩　犬がこの頃サボリ出し
友の訃に今日の散歩は止めにする
近頃の家長一番風呂嫌い
お茶漬けもステーキも好き元気です
みおつくし鐘が鳴ったら帰ろうか
不景気に風邪も仲々治らない
西暦にとんとなじめぬ戦中派
好みではないがカードは便利です
紙屑がきしめんになるシュレッダー
戦争に負けて自由が手に入り
病院の受付やさし花飾り
最後まで自由気儘に生きた人
再会という喫茶店今はなく

尼崎市　故

西　光子

元旦や犬も祝いの膳につく
妹もはや還暦か酉の初春
孫の賀状　夏が過ぎても貼ってある
孫のイス一寸お尻をのせてみる
孫の初恋聞く日がきっと来るだろう
風に乗って世界の空に翔べ孫よ
おじいちゃん孫より赤いスキー帽
ウォーキングではない私散歩です
犬も長生き猫も長生きする平和
友の訃に一人で栗の皮をむく
飾らない言葉の裏の思いやり
お茶漬けの音まで粋なお師匠さん
氷水一気に飲んで「さて」とくる
花時計　神戸の街によく似合い
神戸帰港　浮世が近くなる景色

津島市

丹羽麦舟

深刻な会議　笑顔はまだ見せず
不意に鳴る電話へ別な用がわき
山芋をすって珍客むかえられ
あちら語の名前を仮名で書き残し
幾山河妻も老いたり年笑う
週あけて父の仕事がまだ残り
年寄りをだまらせている四月馬鹿
逝く順がくるって父のまだ元気
八起き目の夢が当った父達者
自画自讃口には出さず丸く生き
眠り癖取れず元気を取り返し
偽りのない看板を見よと言い
極楽を見てきたような妻の夢
女形　似合う男の細面
筆ペンで書いた写経へ気が晴れる

宿毛市

能津道子

どん底の親を励ます子の寝顔
パチンコへ楽と苦労の顔がより
花売の娘の汗を買うてやり
やわらかい言葉の中にある妬み
仲直りつづけて悔いのない夫婦
根が他人そんな日もある嫁姑
父の声　母の涙で意見され
敵味方なくて孤独の過疎に足る
使い捨て着捨ての文化なげく老い
物価高負けてはおれぬ共稼ぎ
虫干の羽織　家紋も年をとり
水着にも個性カラーがあってよい
土佐弁を聞きかえされた和歌の浦
沼を埋め山をけずって土地ブーム
妻の愚痴聞かぬふりして靴をはく

豊中市

野島満寿巳

ふところの喜劇としばし旅に出る
片方は真面目に歩く僕の靴
丸い輪をひとりが抜けて入る風
息子にも私の壺は覗かせぬ
葉脈を残して消えた仲間たち
木枯らしに遇うた時から消えた音
深い穴　私のペンが掘っている
意のままにならない白をもてあます
手のひらの小舟が雨季を待っている
一枚の栞と遭うて出る百鬼
条件をのんだペンから折れてゆく
結論を斜塔の影に迫られる
どの夢も遠のく中の冬蛍
崩れた土塀越えて酔わせるピアノの音
流される人を救えぬ橋だった

尼崎市

野瀬昌子

旅人となって故郷を訪れる
この塀の向うが見たいカタツムリ
子は三人どれも甲乙つけがたし
寝に帰るだけの息子が一人いる
みな我が子秤りになんぞかけられぬ
ドア叩く音でどの子とわかる母
歴史にはのらぬ夫婦の五十年
歳月に母は起伏の襞たたむ
おまわりが手相見の愚痴聞いている
手摑みに蟬とりながら里の道
押し出され成り行き見てるトコロテン
一番の敵が私の傍におり
風の愚痴黙って聞いてる野の仏
仏様そちら戦はないですか
死の灰を忘れはしない千羽鶴

和歌山市

野々圭子

娘の街へ駈けゆく風と仲よしに
子に添ったレールはここで幕を引く
淋しい日の胸で崩れる砂の城
わたし今日ポストの中で待ってます
夜の海くらく沈んだ壺がある
鏡視るわたしの絵巻悔いばかり
ソラニンの毒にわが身をつつまんか
忘れたい過去を繋いでひた走る
ひとふさの淋しい葡萄まだ熟れず
サフランの芯に染まってゆく迷い
藤棚へ春の憂いを置きにゆく
百かぞえ百かぞえ娘の雪を抱き
八つ手の葉　親の手に似たやすらぎが
ひっそりと花子の椅子にちちとはは
語り部を喪い昔遠くなる

今治市

野村清美

菜の花にとまった蝶が見つからぬ
へその緒へ違う父母の名見たショック
落日のようなお人の喪に服す
雑踏の流れ素直について行く
水飲んで平常心を取り戻す
母さんは知っていながらかつがれる
双眼鏡　輝く海が横たわる
来客へ笑顔振りまく扇風機
鍵っ子が見た公園の親子連れ
見ない振りでじっと見ている昼の月
針穴にからかわれてる日暮れ時
待つ事に慣れて保温の炊飯器
生甲斐を趣味に苦楽を友にする
雨だれのリズム孤独が好きになる
ゴッホの絵　元はおんなじ白い画布

鳥取県

橋谷静江

宴会へ招待されてから悩む
句集読むゆとりへお茶の旨いこと
色どりへつい食べすぎていたサラダ
故郷の山は子供の声が好き
ライバルと出掛ける時は厚化粧
主婦の座を卒業したい寒い朝
不景気へ宝くじ買う列にいる
ライバルに誘われ今日もカルチャーへ
鍵だけは持っても中身のない金庫
外孫へやっと慣れた日帰る日だ
風呂上がりミカンジュースに上機嫌
良い種をまいて後世に花さかす
おしゃれして今日のデートは遅刻かな
新聞をゆっくり見たい日がほしい
嘘も混ぜ話を丸くするお人

鳥取県

橋本孝原

炎天にミニの素足が目にとまる
梅雨に善人寄ってもめてる他人事
父という誇りに今日をあまんずる
ひとりになるとライバルを回顧する
愛情を催促されて決意する
俄雨やむまで猫とたわむれる
妻の愚痴聞いて血圧上下する
嘘にうそボーナス袋ほつれだす
二十一世紀　誰が天下の星になる
からいソースですこし悪女になりました
痛い腹さぐる味方にある怖さ
ふるさとに私へなじむお茶がある
ちぐはぐな夫婦ポーズも一つの絵
火傷する覚悟で美人抱いている
入院中エンジョイさせた金魚鉢

堺市　長谷川　彰

飢餓のくに飽食のくに均したい
飼い犬に人間並みの生活費
辞書破り煙草を巻いた日を思う
もう一度あの日盛りたい白い皿
待つ子等が居て父ちゃんは頑張れる
芽の出ない子に年寄りが水をやる
子に残る整形前の母の顔
住みたいなせめて急行停まる町
ややこしい事情があって延期する
懲りもせず世間の鬼と渡り合い
党や派が多過ぎ議会まとまらず
この男半端じゃないと引き合わす
いきさつは知らねが女拗ねている
着順を赤鉛筆が決めている
待ったなしその順番はいつか来る

犬山市　長谷川　宇情

孫誘う散歩は小銭持って出る
遠い日の夢を手繰った凧の糸
見送りの駅に残した手のぬくみ
女の子夢へ人形抱いて行く
雑巾で顔も拭かれる泥遊び
聴診器外して医師の太鼓判
悟ることないが眉毛は白くなり
元旦の雨に落ち着く置炬燵
潮騒は右か左か島の宿
大虎が朝は君子の顔で起き
五月病過ぎてスーツも板につき
笑うから抱き上げ嫁に叱られる
客筋のよさ看板に箔がつき
苛立ちへオンザロックの氷鳴る
寝姿を見せない母を見て育ち

守口市

長谷川　司

米不足　糖尿病の薬です
健康が我が家の宝　共白髪
耐え抜きて夢が実った妻よ春
指定席もうゆずります朝の席
孫の目は確か信号赤と言う
旅に出るカモ　ジェット機で送ろうか
洗剤で米とぐ子供にだれがした
吹雪舞う三味に酔ってるおお津軽
外米に二度人生で助けられ
花の精飛び出しそうな夜桜よ
あぜ道で母が唄ったナツメロだ
逃げ道は祖母のふところ温いのか
真直ぐに生きて小金もない暮し
この白髪　妻の愛うけ六十路
人生の下り坂だよ福の神

岸和田市

長谷川　呂万

病床に心しみじみ故郷の川
憧れの南十字をいつの日か
一秒に賭けた鈴鹿の排気音
桃源郷真ん中もない隅もない
挑んだがカスリもしない直木賞
中年と老年使い分ける齢
まだ奥に人が住むのかかずら橋
敵味方サッと握手のノーサイド
善いことをしてもマスコミ騒がない
一騒ぎ後の静けさ孫帰る
先祖から続いた屋号カナになる
ひたすらに今日を生き抜く蟬しぐれ
紅顔で南の空に散った友
舌肥えてグルメの旅ももの足らず
プロポーズすんなり言えた月の道

米子市

服部朗子

わたくしに皮の表紙をつけてみる
菜の花にいつでもなれる茹玉子
お早うと美しく言う少女の目
一列にそら豆の愛こぼれます
笹掻きの言葉で午蒡削られる
悪びれず幸福駅の切符買う
現役の風が漂う本棚だ
不勉強　森の課題へ眠られぬ
古鏡生きた責任問いたくて
爪切って平常心を呼び戻す
バイブルを闇の峠で授かった
鳩が啼くふとなつかしいものに逢う
天の恵み静かに熟れる果実あり
受け継いだ塩の言葉が身にしみる
一椀の飯はわが身の供え物

愛知県

早川盛夫

子づくりのおさらい出来て嫁に行き
腕白は背丈ばかりが怒られる
信号機どちらも青の事故でした
ラッシュから美女は澄まして降りて行き
満員はあなただけではありません
好きだよと言って集めたチョコの数で勝ち
成績で負けてもチョコレート
バーゲンの行く先々に同じ顔
酒飲むと他人の靴で帰る癖
朝市へひやかしだけのつまみ食い
犬のいる家を除いて招待状
米ほどで騒ぐな戦後生きてきて
子のみやげペットにあって親になし
ワイドショー見て寄り合いの顔となり
いつまでも居て欲しいけど適齢期

犬山市　林　嗣子

さくらんぼ甘いと言った顔で売れ
老いの意地だいてボケから遠ざかり
そら春だ歩けあるけとスニーカー
リズミカル体ほぐして陽を浴びる
適当に散らして和む灯がやさし
切なさは秘めて別れの日を迎え
嫌われぬうちにやめよう老婆心
売れ切れになるかも知れぬ順を待つ
工作のような新築家が建つ
ほおずきの思い出優し母の顔
裏読んでいる賛成の手は重い
コントロールできる若さの小さい窓
万国旗明日の天気を祈るだけ
美しいマニキュアの手に目が走り
気立ていい子が踏み出した茨道

奈良県

林　正浩

大空へビルのロケット美しい
声一つ私用ビジネス分けている
任したよ夢の中にもプロジェクト
過疎地から家あげますと誘いの手
窓越しのキスを残して今井逝く
数合わせ曲げるも平気主義主張
集金の足洗う日を夢みつつ
人生のトーナメントを勝ちあがり
まほろばを犬養節のマイク行く
初詣　みくじの樹氷美しい
デマが飛び売りが売り呼ぶ株の街
売り買いの回転とまり浜雀
上げ相場場立ちの声が春を呼ぶ
亀山が走る阪神夢つなぐ
人情でチームの浮沈かけてみる

出雲市

原　章峰

ぬくぬくと軒の雀は番かな
トイレにも馴染んでくれる黄水仙
心もち浅めに守る二度の職
守りに入った銀は横から攻められる
赤とんぼわたしを抜こうとはしない
よわいひとがバス停でバスを待つ
赤い靴　明るい嫁になりそうな
疲れてるものが盥によく浸る
深いところで約束をする不動尊
内助という含み資産をもってます
飢えた樹から紅葉が始まりぬ
よその子の受験発表桃が咲く
他人の家のかなしい墨を磨っている
お寺さんが足を崩してくださらぬ
主のない鍬の楔を抜いてやる

神戸市

原　宣子

忙しさの中でほのぼの福寿草
日曜画家春から冬になるタッチ
水たまりみんなではねるランドセル
泣く真似も上手に水になれてくる
おぼろ月忘れた紅をさしてみる
火も水も包みホープになってゆく
雑談の中でキャリアの目が光る
引っ越しに詫びつつ捨てた祖父の家具
騒がせてひとりぼっちでないと知る
母さんの遊びと辞書を繰っている
声かけて下さい声を忘れそう
わがままかも知れぬ個性が光りだす
セールスマンの熱意きくだけきいている
咲き誇る花がうるさくなってくる
にっこりと監視カメラにごあいさつ

赤穂市

春名恵子

弱点を見せず男が自転する
かび臭い染色体を母と言う
いろいろの出会いに利子がついてくる
均一の値札で愛は育つまい
仕付け糸取れば二十歳の朝となる
ゴムまりは弾み健忘症になる
純情な子が爆弾になりやすい
捕虜という純金張りの部屋がある
預金ゼロ没頭できる物がある
大道で向き合っている歩兵駒
水田を渡る安定志向です
悩み事減らすサービス券がある
足切りに会う提灯の薄明かり
明日からは守りに入る朧月
絵日記に違う目で見る夏を知る

泉佐野市

備後一歩

死の別れ軍馬いななく戦エゴ

菊日和　小唄が洩れる松手入れ

国の為これがこわいよ母が泣く

出稼ぎにハイ中国へ二十一世紀

歩き初め出来た出来たと抱き上げる

ようお参りと子に福渡す戎さん

同窓会　渾名飛び交い今に生き

カラフルなカバンのジャンケン弾む道

さあテスト親が必死の幼稚園

映画はね泣いた顔顔照れ笑い

良く出来た一言ほしい教師像

戦友会苦労話も今の内

形見分け忘れた旅を語り草

数珠二つ老いの坂ゆく犬鳴路

古希喜寿へ二丁櫓の船出夢のせて

阪南市　深日白光子

世渡りの機微へある日を馬鹿となり
考えた揚句の一手から崩れ
フイの金フイに出てゆくことがわき
早退のなにか忘れたような帰路
子育てに自問自答の日がつづき
灰皿に私の嘘を押しつぶす
背信の友を許した歩が軽し
遅咲きの夫婦で円く世を渡り
エビでタイそんな匂のする話
つんぼ桟敷に忘れられてる年の功
快方に向うて欲が動き出し
売れ残る屋台がきしむ明けの冷え
伝統に生きほそぼそと紙を漉き
愛情のさめて冷たき皿の白
俎の音こだわりがあからさま

和歌山市

福井菜摘

川柳塔さらなる飛躍米寿へと

定年へ妻手づくりの感謝状

定年後犬と散歩の辞令受け

万華鏡覗けばそこに童歌

赤い羽根幸せ運ぶ風物詩

何ひとつ秘密がなくて馬鹿がつき

大吉と出て願いごと一つふえ

紆余曲折　無事乗り越えた手の厚み

下積みで台詞まわしが巧くなる

鍵っ子に愛いっぱいの日曜日

自転車に乗れば聞こえる風の唄

魚河岸にゴム手の威勢闇を裂き

婿どのもエプロン姿板につき

売れずとも平気な顔の時間給

我慢して胸でくすぶるしゃくの種

茨木市

福井富美子

会者定離　挨拶重ね歳重ね
善人に化けてその気になってくる
人生の終りに騎士はきっと来る
ブレーキを上手にかけて生きている
大空を翔ぶ夢シャガールのポーズ
生きている実感　木犀が匂う
花が好き人間が好き旅が好き
花に水やれば私も潤され
優しさと出会った花の返り咲き
パンジーが顔を並べてドレミファソ
種播いた花の答を待っている
道くさの程よい場所にあるベンチ
思い出は千人針の糸の色
再会の時計いっきに逆戻り
ラストダンスやっぱり妻と手をつなぐ

和歌山県

福田和子

まっとうに生きて無冠の石を積む
生き抜いた亡母の猫背にそむけない
念入りに塞いでおこう隙間風
悪さする焚火は風に乗りたがる
悩み聞く耳と心は大きめに
アウトドア美味い空気のかくし味
純粋な心見抜いた神の慈悲
朗報に千羽の鶴が空へ飛ぶ
親の夢盛った縮図を子に託す
風の彩読んで迷路を切り抜ける
信念があって風雨も厭わない
不揃いの宅急便にある温み
辛抱と言う字が消えた与え過ぎ
逆ろうてみても鎖の範囲内
玉の汗しみたお金は掌で囲う

羽曳野市

福田満州

あたたかい大きな文字で来た手紙
うっかりを赦し合うてるお付合い
ほめるとこさがして友がほめてくれ
遠出する誘いにゆれる膝頭
明日は留守しっかりおでん煮込んどこ
線香よりタバコが似合う父の墓
釣前夜なにを言うても上機嫌
釣竿にあんたの守りを頼んどこ
退職金リュックで背負てみたかった
値に妥協したばっかりに着ず終い
だんまりの意地いちにちも続かない
阿呆あほと言えば暗示にかかりそう
なんでやろ空気吸うても太りそう
よく口が回るまだまだ元気です
明るさは運命ひらく鍵となり

島根県

福間博利

散歩みち森に入ると手をつなぎ
うなぎの目いきなり刺されわが目閉ず
終列車　聞きたいことも乗せて去に
肩書きは人並でよし風車
いのち綱しっかり握る妻がいて
風ヒュルル岐路のわたしの背にふく
背開きのいわし掟を犯したか
あわてものエンマの前でうろたえる
客降ろし二人となった縄電車
もやもやをもやもやと聞くまねき猫
雪しきりパンジー育てる妻が居て
父の日を二人の息子覚えてた
般若の面捨てた時から強くなり
早朝の散歩ピーマンの艶匂う
冷酒を猫が横目でにらんでた

名古屋市

藤井高子

一陽来復　一つ寝返りして初春に
去年今年　猫の解脱を見習おう
小鳥チチと春の序曲を唄いだす
春の絵筆は春の蕾とねんごろに
ひとり咲くことにも慣れた花あざみ
野の草に我が生き様を問われけり
一に一たして二でないのも答
玉手箱に満ちる昭和のうすけむり
鶴折ってくれて他人も温かし
ヒト科とはこんなに芯の揺れるもの
嘘のない花です　野菊咲いてます
しなやかにおんな老いたし秋桜
秋風が時々齢の話する
風花のかすむ彼方に祖母の唄
時々は笑うてくださる弥陀如来

和歌山県

藤井春子

七彩の風よみ分ける母の海
時々は手綱を加減するゆとり
シャボン玉　嘘を隠して戯れる
紀の川の流れに沿って娘は嫁ぎ
浮雲をはらって心に月が澄む
荒波へ急に漕ぎ出す父の意地
浮き沈み二十世紀の靴の音
先走る知恵が時々叩かれる
夢一つ温めて明日の野心作
枯れた芽が又起き上がる雑草の意地
選んでる言葉に本音隠してる
愚痴いっぱい溜めて不満の中にいる
雑詠へ残しておこう母の愛
老いて今妻が女神に見えて来る
歳月が教えてくれた変化球

綾部市

藤田芳郎

骨壺に入るくらいの嘘にする
活け造り地獄へ堕ちるかもしれぬ
木偶に目が入ると昔語りする
また的を外すわたしのキューピッド
禁断の木の実コロコロよく笑う
炎の色に打ち損った句読点
智恵の輪の一つが解けて風が止む
華の宴一生続く探しもの
そのことに触れると止まる古時計
昇天の煙確かに星になる
児が含む乳房百鬼を黙らせる
カンナの朱　母を騙したことがある
菩提寺へ母のその後を聞きに行く
迷わずに着いたか亡母に鐘ひとつ
父よ母よ相討ちならば許されよ

兵庫県

藤原久子

米作り只それだけのへそまがり

小さくとも虹を消さないシャボン玉

大黒柱磨けば先祖の祝い唄

寒風に堪える老梅亡母偲ぶ

干大根堪えた寒さは語らない

明治には忍一筋がよう似合い

ふる里はいつ来て見てもすみれ色

悠々自適バラの芯にて眠りたし

趣味多忙　写経の墨がまだすれぬ

生きるって素晴しいこと老い忘れ

戦いを知らない子等と風化する

古き良き時代を宮島能舞台

二度とないチャンスへ心の窓も開け

紙芝居自作自演の農の唄

約束もドラマの果の遍路笠

高知県

冨士田　三郎

決勝のヒットで街が動き出し
腕力で打順が決る草野球
雨足がパチンコ屋から帰さない
星空を味方に入れてプロポーズ
踊っても所詮は妻の手の囲い
寝返りも立つも記念日最初の子
カードまた人情までも薄くなり
故郷の友へ仮面は通じない
風向きに合せて動く焚火の輪
それぞれのコケシの顔にある訛り
着飾って親が主役の七五三
リハビリが進み明日が手にふれる
捨て切れぬ想いは遠い郷の空
声援が走る吾子の後を押す
帰る度　風化してゆく母の味

岐阜県

古池孤月

骨埋める覚悟の過疎へダムの杭
ダムの杭発止とぼくの胸に来る
国策といってもやはり墳墓の地
このハンコ押すと故郷がもぎ取られ
ふる里を追われて何の金の嵩
ダム無情地図から村の名が消える
ダムになる村へフィルムまた替える
ダムひしひし今日は隣の灯も消える
お別れの猪口へ酔えない酒を盛り
ふる里を捨てる日氷雨までが泣き
さよならを叫べどこだまなきままに
はね上がる地価へ立ち退き料の幅
移転地の風は老いにはきびし過ぎ
郷愁は頭で画く日日に耐え
移転地にぽつねんと汲む昼の酒

吹田市

古川喜美子

戒名の方を親しむ三回忌
身にあまたまつわる紐をほどかねば
飼い犬に咬まれた傷だ洗っちゃお
遅参した椅子が大きい音たてる
月曜日本当の大工さんやってくる
二歳児が転んで終る立話
この紐の向うを持っているは誰
瓢々として生臭いこと願い
謙譲の美徳というは損ばかり
口々に鯉もつぶやく南無阿弥陀
雪積る夜は寒くてあたたかい
かすみ草　分相応に競うてる
あきらめたように電話のベルが止む
誓い破った口紅だけど美しい
顔の幅だけ窓あけて返事する

西宮市

古谷ひろ子

意地悪をするには空が青すぎる
献血車ならぶ少女の紅いほほ
見た顔だとにかく頭下げておく
幼い目に見られて止まる赤信号
ライバルが投げた浮輪にうろたえる
隅に居るから社会の動きよく見える
先生をやめると人の輪がぬくい
和紙人形もの言いたげなおちょぼ口
春の膳ほどほどにあり笑い声
疲れたと素直に告げる嫁が好き
父までがぶら下ってる母の首
わてもまだ女でっせと喜寿の母
寝たきりの母を見舞いに来る雀
手袋を片方はめて待つ返事
虹の向うにあなたの町がゆれている

鳥取県

細谷仙岳

おにぎりころり老いの胃袋いたわりぬ
花冷えも良し日がくれて酒になる
利くまでは打たねばならぬ釘である
酔いが身にまわりかねてる思案酒
踏みしめて歩けと老いを叱る足
挫けまいきっと出口のある迷路
古米古古米たっぷりあったはずなのに
七転び八起きの人生八十の春
どの色が効くか知らずにくすり飲む
嘘つけぬたちで苦心の目のやり場
卒業し紺の背広が部屋で待つ
結論は悪がやられることになる
雨また雨　着替えも底をつく田植え
かやぶきの屋根から俺の一代記
この先がみえぬ人生だから好き

枚方市

前　たもつ

初孫に作る玩具の木がぬくい
本当の悪はなかなか捕まらぬ
無位無冠　酒のせいにはしたくない
六十はやる気出しても知れたもの
お寺さんの数珠は時々ものを言う
不登校　子ども言い分溜めている
余生とは心に花を持つゆとり
伝統美　留学生を弟子にする
酌み交わす息子が一人欲しくなり
エゴと欲捨てれば頭空になる
人間よやさしくなれよと雪が降る
一泊の妻の旅から指示が来る
生きざまをそっくり背負いゴールイン
試される厳しさならば受けて立つ
肩書がとれてゆっくり旅に出る

豊中市

前田昭子

友情の狭間でゆれる誓約書
碁敵は待っているよと言っただけ
てっちりの雑炊煮えて姑が来る
色あせても散るにちれない造り花
待たせたの一言欲しい人を待つ
長生きの母に似て来て母思う
掃き捨てた筈の未練が又揺れる
遅い芽に大器晩成信じてる
叱られて秋田犬急にかしこまる
ああこれが旬の香か自家菜園
先ず菊が迎えてくれる故郷の駅
投げ入れにキッチンの笊も顔を出し
尾長鳥のように懸崖飾られる
かじかんだ手に甘酒の初詣
初雪のはやさらさらと樋伝う

豊中市

牧田渓鈴

貯えを転ばぬ先の杖にする
起き上がるだるまを手本にして学ぶ
へそくりを袖に隠して衣替え
放流の稚魚が戸惑う水の味
身構えた毒蛇に暗示をかけてみる
天秤に夫婦情けをかけて見る
不手際を包み隠して化粧する
身のほども知らずに夢を追いたがる
着飾った女の魅力に酔わされる
果樹園の渋いりんごは青二歳
瀬戸際で死んだふりする虫の知恵
身構えて一心不乱で舞い踊る
葉を食べて男を騙す虫になる
木の葉舟流れのままに行く旅路
医療設備よすぎて命永らえる

岡山県

牧野秀香

愚痴聞いて上げればいそいそして帰る

惜しまれて逝くのも人生花の道

亡き友の顔が並んで眠れぬ夜

世は無情　隣り合せで葬と冠

友訪えば木犀の香に案内され

居ながらに日本の春の花絵巻

八十を越え五十肩まだ若い

湯の花で我が家の温泉安上がり

水溜り満月またいで万歩計

束の間を暗にまぎれて恋う蛍

雨蛙今日の旅立ち気遣うて

孫娘　牡丹の花に重ねて見

憚からずお寺の屋根に鳥不浄

かたつむり相続権付家をもち

友逝きてゆっくりかまえて居れぬ気が

西宮市

牧渕富喜子

雨男に明日の空を聞いている
しみじみと運が八分と言うお酒
奥深いところで探す父の鍵
故郷が実感出来る墓の道
ぶらり出て甘栗買って帰る父
もう一品に何時も豆腐を買っている
少しずつ時間持ち寄るバースデー
母の極楽　肩トントンで足りている
めがねでは見えないものを聞いている
亡母の櫛　忍の形に減っている
掌で囲むくらいの欲はある
天才は一人も居ない金平糖
母さんの前ではいつもひとりの子
饒舌が止むと山茶花咲いていた
身を守る屋根だと思うことにする

八代市

増田一乗

趣味講座　老人多忙と言う元気
鬼籍入り考えながら欲も出し
嬉しさは引越し手伝い多過ぎる
キタキツネ驚きもせずバス眺め
運よくも全容見せた摩周湖
ライラック庭木の中に楚楚と咲く
子を連れて帰る家あり初日の出
パパママの知らぬ指切り孫とする
子等寄って傘寿祝った金波楼
ハイチーズ隣もよそ行き顔でおり
曽孫の笑顔にゆるむ深い皺
戦争の影引きずって孤児帰る
熱帯林消えて日本の段ボール
少しずつ身の上あかす趣味の友
目に見えぬ鎖が絡む義理人情

大阪市

松永会美

別姓で暮らしていても妻は妻
亡くなった人は今頃遠い空
主のない時計が二つ置いてある
心のうちわからぬ儘に去った人
亡き人と同じ煙草が匂って来
湯けむりの雲仙今は遠い人
陸の涯はまなす赤く母の故郷
道楽と趣味との境決めかねる
夢を見て唄うシャンソン六十路から
定年は遠い昔にすぎてます
初出勤晴れ着姿見なおして
一本の傘で新婚出迎える
手術後に残りし乳房あたたかく
手土産が一つ増えてる障子うら
想い出のつまった瀬戸を空から見

久留米市

的場俊子

葉桜の或る日迷いがふっと切れ
歯車が一つこぼれた父の貨車
自分の矢探しに崖に立つ父よ
人生の暦は顔に刻み込む
二枚舌切れても嘘をつく男
じゃんけんに負けた男の背が丸い
相討ちで決心がつく印を捺す
甘い誘いやっぱりあった落し穴
母の手の節くれ苦労にじみでる
夫婦道迷わず喜寿を共白髪
明日を生き抜く母の黄色いヘルメット
十字架へざんげ肩の荷軽くする
混浴を少し気にして露天風呂
蝶々の一人芝居に酔う座席
柳坂画布に郷愁溢れだし

尼崎市

的場十四郎

磨り減った靴のかかとにある苦労
おもちゃ屋で座り込んでる野球帽
遅刻して謝っている蝶ネクタイ
盃が男の嘘を聞いている
倖せな母の姿に言いそびれ
健やかな五体に明日の地図がある
肩書はないが自由な朝がある
走っても若さ還らぬ戻り道
風雪の枯葉叙勲の声を聞く
境目をしっかり縫った母の針
海鳴りのリズムで愛の深さしる
人情の流れのなかに居て平和
穏やかな湖面に投げた石の罪
春寝言　女盛りが燃えている
老い暮し妻の達者は価千金

岡山県

豆原千代女

泣き上戸もう飲ますなと影で言い
親思い長生さしてと運動着
塩漬けの桜のお茶に浮く吉野
良く耐えた足腰近頃曲りかけ
風船に母子の夢が重たすぎ
ゲートボールしている返事に娘の安心
春の野につくし出てます待ってます
母として常盤御前の詩に泣ける
金払うバスにも礼を言うて下り
金魚鉢古い火鉢で間に合わせ
お参りはまだかとなぜ牛背がかゆい
水温みはや鯉幟泳ぎ初め
早うでておいでおいでと畑が待つ
重箱を見れば昔がなつかしい
十八も芽ばえ鏡と首ったけ

大阪市

三浦千津子

肩書きで仕切る男に情がない
巻き戻し出来ぬ明日へ書く日記
土壇場で女の腰が座っている
饒舌な人に会釈をして過ごし
隠し味程度の毒は持ち合せ
花活けて姑となる日を整える
里帰り此処は素直に雨やどり
遠い日の慕情に触れる秋桜
空砲を撃ちつつ軽くなる父権
口数の少ない男の持つ強さ
終生の脇役あえて逆らわず
浅瀬ばかり追う人生は味けない
通行証みたいにくれるミニティッシュ
今日も一日幸せな割烹着
四面楚歌　一本の藁が流れつき

芦屋市

水田民平

春の息かじかんだ手がほぐれゆく
夏冷えの蟬は必死で重く鳴く
小春日和　家庭床屋で舟を漕ぐ
皺の手が寒さ防ぎに重ねくる
散歩でもしてよ出無精掃き出され
髪の色変えて妻の座忘れかけ
成熟の大人で離婚考える
四月馬鹿別れ話に触れてみる
老母達者　一番風呂の湯気に居る
白足袋の汚れに母の苦労見る
夏祭り母の奢りはみぞれだけ
長生きの種蒔く庭が欲しい夢
電話でもするか碁仇欲しい午後
冗談が手で払われて軽く済み
敵ながら天晴れ逃げ道開けてくれ

愛媛県

水野貞子

春一番　楽しい噂連れて来る

好きだよとすんなり言えぬ恋もある

溺れたと気付いた時は藁もない

燃える思い伝えてほしい秋の雲

ハンガーに恋の抜け殻掛けてある

本心が言えず女のヒステリー

里帰りストレス全部丸洗い

つまずいて故郷でいやす深い傷

今ここで口を切ったら惨めすぎ

掟など守って居れぬ恋もある

未練と言う言葉に弱い女です

逃避行　幸福駅はまだ遠い

恋捨てる度に女は強く生き

ダイヤルへ未練の指が又触れる

惚けるまで女でいたい紅を引く

桜井市

御園孝子

三代の温みが今もある時計
ごまかしの音を出せない母の笛
核家族の義理は乾いた音がする
さみしがりやの河童が赤い帽子買う
絵の中を歩いて母に逢いに行く
合鍵を作る数だけもつ野心
言いわけができないままの水たまり
残り火を燃やしてくれるいい仲間
一本の藁からもらうあしたの絵
可愛さがすぎて飛べない鳥にする
合言葉忘れてしまう冬の鍵
まだ巻けるネジあり父の意地っ張り
蹲いた石から貰う天の声
カタカナで育った母に海がある
竹の葉の雫に澄んだ愛がある

和歌山市

三谷周三

打ち上げの花火が消えて驚かせ
米なけりゃ外で食べるとまあのどか
夢ばかり追って心の若さ知り
犬さまの付き添いらしい散歩する
骨折った挙句叱られ苦笑い
はねのけになるから戦もう言わぬ
何かいいことがありそう桃源郷
遠足は歩かないものバスばかり
花散れば初恋の人胸に浮く
前線は弾の飛ばない花便り
冷凍で日本の寿司が輸入され
輪切りしたレモンしわ寄りやっと捨て
一連の話眉唾ものらしい
連綿と続く恋の火もう病
平常のどけちが旅で金使い

豊中市

三谷翔

燃えてカローシゆとりシンドローム
箱入り娘が玄関先でつまずいた
追い放す子別れの朝キタキツネ
鳳仙花はじける朝の独りごと
ちょっといい旅する朝の木の芽和え
ワタシイチバン其の他はいない小学校
文楽や花の舞台の黒衣たち
限りなき右傾社党消えるとき
アメリカにネジを巻かれてコメ開放
死に体の首相演じる空元気
パトカーに乗って触り魔やって来た
苔むした地の骨　軍靴はいたまま
口ぐせの無事に死ねたか友　神風
ダイ・インのヒロシマの刻鐘が鳴る
天平の奴隷の塔に日がのぼる

和歌山市

光定信子

跡継ぎにかかわり無しのレール敷く
身から出た錆に謝りつきまとう
掘り下げた要の基礎は揺るがない
足跡の乱れを埋めて子に託す
重ねてる我慢で絆深くする
お互いの相槌傷を温め合う
黙秘権握る自然が恐ろしい
額にする雨情の筆は思慕の中
シナリオの滾る旅路にある実り
荷を下ろしやがて一人の隙間風
皺の手に生命線も狂い出す
磨り減った靴ほどドラマたんとある
切れ味のよい返答が親しめず
人間の襟正させる天の声
一人でも平気リズムを崩さない

兵庫県

光山芳子

政界はどう揺れようと今日は立春
予報官　真面目に三月先を言い
新築へ金出さぬ息子が出す意見
庭付きの家で仲良く雑草と住む
責められぬ娘の仕草我が姿
訪販にうっかり乗った寡婦の午後
愚痴も有り自慢も有ってクラス会
宝物私に子が居る孫が居る
白髪でもいいの自然のままが好き
屑ばかり集め一人の膳飾る
表札も読んでゆっくり歩こう会
里若葉　口笛吹いて見たくなる
書道展　読めない字だからほめておく
家中が息をひそめて聞く初音
落葉焼く煙に愚痴を持たせとく

尼崎市　湊　修水

ドン微罪どんな薬が効いたやら
時の人も一尾の蟹も二十万
豪邸の柿は日毎に青くなり
コスモスに何を囁く秋の風
減反のたんぼへ米を売りにくる
何もかも不足　核だけありあまり
一円で一億なるほどすごい税
病院の花見今日だけですよ缶ビール
たれよりも主治医はやはり妻でした
足ならし市場に顔をおぼえられ
作法などいらぬ三時の茶がうまい
よく見ればずるいのもいる蟻の列
ひとめぼれ秋田小町も痩せる秋
よう動く舌が神さま売りにくる
不景気やそうですナーとお役人

宮崎市

三原永久志

かりそめの恋がずるずる墓場まで
生者必滅　地球回転するかぎり
重病人の爪が伸びてる悲しいなぁ
人間に爽やかな死があるものか
神が投げた一本の藁を奪い合う
千手観音さてどのお手にすがろうか
どう駆けてみたとて釈迦のたなごころ
人死ねばみな釈迦牟尼の掌に眠る
みおしえをたんと与えて釈迦眠る
妻に死に遅れて負けたなと思う
わが社にもああ忠臣がひと握り
善と悪みな神仏の子と言うに
死を競う時代に戻してはならぬ
落ち武者のように団体着く宿屋
祝電を打ちまた負けたなと思う

八尾市

宮崎弘直

古都の秋カンナの花の枯れたまま
エプロンにからむ子猫が春を呼ぶ
酒汲めばさてもものうき昼の月
早乙女の笠覗きこむ若葉風
水浴びる雀おまえも暑うてか
人徳のひとつに頭禿げている
希み持ってあしたの風に吹かれよう
もがり笛　雪がまいこむ地蔵堂
子河童が流されている月あかり
遠雷にビールの泡がはじけてる
振りあげた握りこぶしをどうしよう
ホロホロと鳩が啼いてる閻魔堂
甘えてはおれぬ八十路の春化粧
山門へ真一文字の男坂
一と刷毛の雲が明日香を春にする

堺市

宮本かりん

ちぐはぐな夫婦茶碗で恙無し
つきつめて行けばだんだんくい違い
中心をずらすとやさしさが見える
じんわりと重石きかせて安堵する
ひと言を足してわたしの負けとなり
簡単な計算だけど割り切れず
叩いたら案外脆い壁だった
コップ透かして心のしみを見ています
髪染めて無駄な抵抗しています
換気扇　妻の毒気を抜いている
馬鹿正直に生きてるうしろ姿だな
影ぼうし他人の顔でついてくる
振り返る歩み小さな弧を描き
あくせくとして夕映えに辿りつく
天国はきっと裸足で集うとこ

宇治市

向田桜羊子

パートタイムおいしい時間だけたべる
墓穴を万倫の愛で掘っている
出る杭を無口が打つと効いてくる
廃校の壁しみついたわらべ唄
もう離婚すると噂は決めている
一枚は誰かを誘いたがる切符
惚れるのは勝手迷惑かけないで
恐怖症　女のこわさ知ってから
決め球は妻がにぎっていて平和
規則にも裏木戸がある但し書き
急に歳とったバッジのない背広
安らぎの森を見つけた美術館
言い過ぎた喉の乾きを喫茶店
邪魔者にされた定年後のタイヤ
年よりは老け込んでいる男運

岐阜市

武藤敏子

ゼロからの出発愛はふんだんに
内助とやその場しのぎの傘もさす
名も告げぬ人の親切借りておく
宮参りこの子に戦ないように
鯛焼きの温みと帰る風の街
靴を履く夫に愛を着せかける
子離れに句点を打とう春の駅
やさしさに飢えふる里に来てしまう
逝く夏は思慕をぽつんと置き去りに
思い出と虚ろに踊る欠け茶碗
冬には冬の花を飾って住むひとり
いい友になれそう好きな傘を貸す
部分開放ああ農を継ぐ意志も揺れ
目指すものあり晩学の灯が消せぬ
この地球もしも丸ごと洗えたら

今治市

村上久美子

脇役の母は目立たぬように舞い
流れつく果ては一緒のちぎれ雲
生きるとは罪を消したり重ねたり
寝そびれていくつも答え出て迷い
はすかいに見れば世間はみな喜劇
散り際がきれいだなどと他人ごと
思いきり泣くと笑える顔になる
打つほどのことはあるまい冬の蠅
胸に棲む鬼一匹をもて余す
切り札を溜めて女の城守る
窓開けて冬の澱みを入れ替える
私だけのあなたになってもの足りず
誤算とはお互いさまのああ夫婦
大笑いして充電ができました
魚屋のハエがもみ手をして迎え

八尾市

村上剛治

腕組みの中に思案の種がある
考えて迷いは晴れぬものらしい
スタートでもうライバルになる予感
友が逝きひとり手酌の夜が更ける
隅っこの席で手酌の旨い酒
ひとり旅　人の情けと酒の味
もう帰ろもう帰らなと話好き
凡人は凡人なりの絵を描く
母の日は心配させた悔いばかり
草萌える大地の愛は裏切らぬ
茶柱が立つまで入れるテストの日
大望を抱いてた頃の古机
冗談に紛らし釘を利かしとく
円い輪の中から温い気を貰う
瀬戸内の水軍の血がさわぎだす

八尾市

村上ミツ子

妻の持つ刺はこっそり折っておく
腹時計いつも主人に合わせてる
札びらのようにカードをちらつかせ
四面楚歌　追いうちかける冬の雨
川柳が治してくれた今日の鬱
腕組んで進めば荒野も道になる
厄介なことは明日に順送り
大空に雲ひとつなく落ちつかぬ
かくれんぼうっかり鬼に返事する
人の好い母にイライラしてしまう
成人の娘に酒を酌む夢を汲む
盆梅にガラス戸越しの陽の光
薬師寺の修二会私は蝶になる
能く切れるように私を研いでおく
幸せを鬼にも少しお裾分け

高知市

村上俊一

今日だけはお父様です屠蘇の順
成人の日に実印を子へ祝う
高砂を聞く親の席なぜ遠い
領海も気にせず鯨潮を吹く
ライバルと思った時は負けている
勝つよりも心を解いた玉の海
踊ってはくれぬ人にも笛を吹く
波静か水平線を丸く見せ
医師よりも友として言う酒たばこ
パリの秋偲んで話すベレー帽
来世も問えばまさかと笑う妻
親を看る子も年金と言う時世
ふる里の味がギフトで空を飛ぶ
病む母の米寿を祝う淡い紅
俺だって櫛を使った頃もある

砂川市

本山哲朗

人間に戻りたい日の紙おむつ
寝たきりが米寿卒寿と生きのびる
ちっぽけな芽にも大地を割る力
無職にも馴れて無職の顔ができ
善人の善意うっとうしく受ける
政治不信妻は黙って飯を炊く
いい汗をいたわり合ってボランティア
成金が金を卑しくしてしまう
車椅子　日本一の妻が押す
学閥の傍流死後に名を知られ
一輌の鈍行に手を振ってやる
カタカナで書くヒロシマは意味をもち
意にそまぬ表現も読むナレーター
愛してる妻に本音はもらさない
直木賞それから先生と呼ばれ

高知県

百田快風

問いかえす度に小さくなる魚
無気味さは妻に切り札あるやなし
落書にそうだそうだと思うこと
手を叩く役で汚職に遠い椅子
栄転と言うには遠い北の果て
居酒屋で総理にしたい人に会い
仏様聞いていますか遺産分け
釣天狗　今日は黙って通り過ぎ
飛石に迷う歩幅に老いを知り
着せられて塗られて少女初詣
東大を滑り友達らしくなり
よい父であったろうかと自問する
父さんを見習いなさいとも言えず
桑の実に口染めし日よクラス会
中流の意識が並ぶ駐車場

高知県

百田幸

両方が欲しく両方あきらめる
空き腹で食べたあの味戻らない
母子家庭　子の明るさに救われる
忘れたいこと忘られず物忘れ
菜の花の黄色　心が温くなる
決断へ取越苦労ばかりする
しあわせと思えばそんな気にもなり
泥に生き泥に染まらぬ蓮の花
誰とでも仲良くなれるかすみ草
野心など持っていませんこまねずみ
本心にしばらく鍵をかけておく
言うなれば楷書のようなあの御人
性格も私は流行遅れです
約束は必ず果たす茄子の花
物忘れ此の頃夫婦良い勝負

竹原市

森井一枝

点滴の針生きよ生きよと呼びかける
精一杯生きた枯葉に風が問う
皿二つふたりの好きな彩を溶く
明日という明るいページあけておく
足の裏とてもやさしい土にあう
古い話がとっても好きなおじいちゃん
灯をひとつ仏と分かち秋深む
真っ先に芽吹いておくれ僕の種
ひらがなのやさしい女小さい秋
枯葉いちまいやさしい彩のスカーフに
椿にも訳あり一つずつ落ちる
伸びのびと育っておくれ若い芽よ
好きだから眼鏡を変えて逢いに行く
若者のお喋りが好き喫茶店
生きている手応えもらう街あかり

和歌山市

森口恵子

接点を見つけあなたに近くなる
飽き性で例外なのはあなただけ
口先で言うから響くものがない
血圧はあなたと居ると丁度よい
思いきり捩じ伏せたくて樹を揺する
一喝が効き過ぎている蟠り
ソプラノで叱って息が続かない
悔しさに耐えた涙を溜めておく
大胆に生きて指輪が嵌まらない
三十の焦りがずっと続く冬
垂直に降りそな恋で怖くなる
脳味噌が破裂しそうな十二月
酸欠の道で喘いでいる私
もう一度輝きたくて拭く鏡
一抜けて笑い袋が消えて行く

高槻市

守先伸子

冬の花どれも明治の母に似て
にぎりめし母の手塩が最高だ
浄土でも割烹着ですかお亡母さん
夕やけ小やけ子供はみんな塾へ行く
幼な児は味方の膝を知っている
迷ったら落ち葉のやさしさ踏みにゆく
コーヒーで始まった恋終わった恋
疲れたらのぞいてごらん万華鏡
姿見に良い顔ばかり見せている
卒業の涙　花粉の所為にして
少年の蒼さが日ごと褪せて行く
ふる里にまるいポストが有る安堵
厄介な話を酒でまるくする
うかつにも雛に聞かれた裏話
白壁に向かってウソが言えますか

福岡市　森　志げる

なまなかの年季でいかぬ壺の肌
自信満々　霧が次第に深くなる
散り際の多くを花弁語らない
花ピンク人は斜めに老いていく
猿も木を落ちるがすぐに登りだす
捨て犬の首輪についた血統書
求愛の鶴に大きな嘘はない
奇術師が徒党を組んで鳩を消す
湧き水の滾々として村は過疎
かなしみの夜を静かに森は抱く
散歩する　こんな自由も今だから
捨てきらぬ無駄と一緒に生き延びる
生きる知恵　頭を妻に下げておく
ちぐはぐな夫婦二つの秋暮れる
男らしく切手まっすぐ貼りなおす

福岡市

森　園　かな女

ひょっとこは泣かないことに決めている
俗名で不遜でカラス逞しい
人ひとり救う嘘だと覚悟する
まだ未練　羽衣をまた仕舞い込む
戻り橋　仏に遇えば仏斬る
一人しか知らぬ男を例に出す
せめて撫の実を森には借りがある
手花火の闇にやさしく包まれる
ほめ言葉素直に受けて老いている
鳥獣戯画の処どころにいる私
ジャンケンポン　ジャンケンポンと捨子花
神の意に叶う　路傍の石さえも
空っぽの掌にこそ無限大がある
何処までも淋しさだけが従いてくる
恥という文化が消えてゆく日本

犬山市　森　正

金婚を芋で育てた子が祝い
ごろり横役者は芸になっている
良い品をくさしくさして手に入れる
チャルメラのあつあつ出来た順に食べ
減らず口たたく妻にもある一理
冬至の日輸入の南瓜少し買い
嫁が来て肩の荷どっと降ろされる
孫からの長生きしてをぼーと見る
降り初め数えるように窓に立つ
建て増しへ去年のつばめ家なき子
今日もまた気楽にけんか佗び住い
なんじゃこりゃ旅先からのわが便り
地に還る思いはないが掌を合わす
天と地の罰とも知らぬ米騒ぎ
吾は喜寿おろかを生きて納得す

鳥取市

森田華子

若き日のドラマを惜しむハーモニカ
ひまわりに似た母が居て家和む
ほどほどの人生でよい陽が昇る
もう本音知っていそうな眼の動き
子守唄母のうちわの風に乗る
這うように舞うて祭の獅子稼ぐ
五連休　金と疲れが出て終る
亡父を呼ぶ山が空しくはねかえり
雨しとしと旅に出ようかかたつむり
しなやかな母の意見にある温み
鶴でさえ恩を返すに不孝者
人生の残り火燃やすカレンダー
母探す蝶々森に迷い込む
正直にルール守った亡父の靴
仏師まだ弥陀の心になり切れぬ

鳴門市

八木芳水

支度等いらぬ人柄買われ嫁く
招かない客が起こした乱気流
福の神　陽気が好きと居てくれる
老いて子の荷物になって軽く生き
贈られて品に値札がそのまんま
躓いた石に涙を見つけたよ
裏面をも見せる男の人情味
追い風に乗った男の頑張り屋
海が死ぬぞと警告のゴミが浮く
一人でも育てていける男です
お願いはないが入れたい人がいる
ポケベルに僕の自由を犯される
生きている証へ滲む汗が好き
ただ一途前向き進む趣味の道
進んでも折に退く術悟る

米子市

矢野満子

虚と実の谷間で宴くり返す
命の根つまずく度に深くなる
思い当る罰もこないで春になる
煽てにもたまには乗ってみておんな
臆病で母の森から出られない
褒められるとすぐ仕合せになる私
妥協せぬ鏡に妥協せぬわたし
失われたものを探しに暮れの街
満月の街でなぞなぞまだ解けぬ
通りゃんせ何か摑んで戻りゃんせ
生真面目に生きて微熱が治まらぬ
いつも何かを洗って生きている
明日は明日メロンは宵のうちに食う
柊の花が今年も咲きました
沢山の人に許され生きてます

唐津市

山口ふさ子

長生きは生物学的エリートだ
欠陥は完全よりも美しい
寒いから多少の嘘は信じよう
夢多き女には赤がよく似合う
女です綺麗でいたいと化粧する
口紅を引くと外出したくなり
好きな色染めて逝きたい老い独り
ぶえん寿司作れば亡母が側にいる
あれやこれ聞きたいと思う亡母偲ぶ
平常心になる迄両手胸に置く
生きている証いい事たまにあり
わたしにも虹の架け橋渡れそう
嫁姑やり繰り上手でうまが合い
無器用は無器用にしか生きられず
プライドが小指の先に溜ってる

福岡市

山崎すまこ

お捻りの菓子を喜ぶ二度童子
生きてきた系図に箸も老いている
縦糸の枯れて詮なく秋の絵に
母と飲めば静脈しずか私小説
陽の真下　父の真顔な予定表
髪染めてひとり戸籍の座を温め
逆縁の空虚な視野に曼珠沙華
飢人地蔵　施餓鬼にははの貌を見た
眠る父の弱い鼾がさみしいな
意地通すたびにさもしい翳り抱く
青春はもう空蟬のごと秋の貌
娘曼陀羅　嫁に行く日の寒い戯画
水平線の向う見たくて船出する
沖縄の悲憤なだめる仏桑花
父の背に人生訓のある温み

犬山市

山田たみゑ

指切りを明日へつなぐ野路の風
夕星に背の児が眠る花づかれ
片言の児が良く喋る糸電話
この町が好きで覚えた尾張弁
まだ泣ける幸せと住む日暮れ坂
腹空かす子の口笛が高く鳴り
躓いた路傍の石も話好き
幸せの隣が見えぬ遠眼鏡
あと戻りしてまで母の小世話好き
廃屋の目立つ村にも笛流れ
口下手は親父ゆずりの子に負われ
母の日は父が精出す割烹着
好きな酒なだめ通した闘病記
ライバルの祝辞に酔える歳となり
冷やかしの客にも開く自動ドア

犬山市

山田津多江

のびのびとあそびつづける子にみとれ
まるむしを手に図鑑繰る子のひとみ
子を育てやっと大地に足がつき
そらんじて祖母の身振りは堂に入り
立身を姉と誓った丘に立ち
全うの自負　慰労の辞直く受け
藁屋根が熟柿をそっと抱え受け
ぴったりの呼吸　祭りの木偶が生き
連綿の家系裾野の花を愛で
道ならぬ恋とぎすます美しさ
いっぱいの陽が降り注ぐ設計図
セーヌ河パリに恋うてる木曽の水
試されているとは知らず丸いさが
うめ合わせ無理難題と知りつつも
難問をかかえ船出に応援歌

八戸市

山田十九子

句誌の友語れば昔そこに有る

ランドセル　ジャンケンしては持ち変わり

鼻先に掲げた見栄がこぼれ落ち

ままごとの父さん役はガキ大将

名曲を聞いて疲れを泡にする

興味無い時　価値億でも人にくれ

「もういいよ」の声聞かずに探し出す

何も無い幸せですと記しおく

マンネリにチクリ針先ようく利く

味守る腕は微妙なさじ加減

百聞を一見にしての心地良さ

歴史館　御先祖の声聞こえます

花吹雪トンネル先で舞い上がり

連休で久し振りの顔揃い

冷静になれば普通に物が言え

長岡京市

山田葉子

露ほどの邪心もないかかすみ草
まんじゅしゃげ燃えつきずにはいられない
コスモスの背丈でゆれる幼い日
しつけ糸といて世間の風と会う
面倒を避けた別居に日が長い
巣立つ日のための助走が長すぎる
戸が閉まる音だけきいていた別れ
運も実力男強気に舟をこぐ
円周に出発点がたんとある
練り上げた粉の固さに妥協する
砂時計そんなに慌てることはない
女一人蛇も一匹飼うてます
いるだけでいいと言われる親となり
渡された手のぬくもりを伝えとく
席少し譲られ朝の心満つ

鳥取市

山田楊芝

減反だ緩和だ耳が怒りだす
発破かけられてから恋燃えてくる
響いてくる春をテーマのコンサート
満干の潮に我が身を乗せて生き
ボロ船を流れに乗せる舵を取る
証券屋が遠慮しながらやって来る
能面の裏は化物かも知れぬ
吹きさらしの屋根は一徹者である
道しるべ辿ると涅槃宿につく
振り向けば自己嫌悪だけ残ってる
手も家も金も貸さない青い天
嫌なものは嫌です犬も尾を振らぬ
農政の測る枡には穴がある
砂絵から破れた恋がよみがえる
残生をゆったり舞って扇閉ず

唐津市

山門幸夫

知覧基地　今年も桜競い咲き
茜雲　瞼に残る戦友の機が
飛行雲その先端に戦友がいる
お母さん開聞岳よいざさらば
何故征った今ならみんな逃げたろに
陽が昇るああ桜島桜島
城山の窓に百号桜島
持ち時間足して割りたい連れがあり
古希の妻ああ有難や有難や
老妻よ先に発つなと念を押し
進学の孫を指折る老い二人
落葉焚く煙にふっと亡父がいる
ほどほどに役立つ頃は嫁に出し
台風は一坪の花壇見逃さず
曳山があるから俺は故里帰り

唐津市

山門タミ

大空は懐深いお母さん
福は内雪が降ってる鬼も内
裏通り喜怒哀楽の顔を見せ
夏休み帰るからねと雪の夜
口こみの旨いパン屋に人の列
アヒルたち平たい足で坂上る
褒賞を胸の夫と晴れ姿
あの人やこの人に似て石仏
半世紀逢えば二十歳が甦り
譲られた娘さんにも席が空き
この辺にサーカス小屋の馬がいた
岸に立つ人が手を振る川下り
それぞれに一物秘めて並ぶ顔
水族館魚が見ている人の列
黒猫が今日は紅鮭持って来た

豊中市

山本和子

霧雨の遠くに見える釣天狗
深海の貝殻そっとふれて見る
旅の宿見知らぬ人が会釈する
けられてる小石が理由聞いている
初孫を見ている方も百面相
神棚で重荷しょってる宝くじ
代償は求めぬ親の名の辛さ
三高に箸の持ち方教えてる
子の肩に目線合せて母帰る
突き放す大きな愛を子は読めぬ
取られたと同じ思いの祝辞聞く
禁煙をすすめる医者が煙草吸う
不精者車洗えば雨が降り
幾度かサジを投げたがまだ夫婦
飽食の奥に焦土が透けて見え

堺市

山本半銭

ええ日和　瓜もなすびも花をつけ
絵ごころに菠薐草が光ってる
しみの手に一カラットの煩悩よ
どんぐりの転がる中にいる自分
片方の乳房子離れしたがらず
残るのは命だろうか預金帳
粥うましいずれ一人の時がくる
はしゃいでいる沈んでいる　愛しいわたし
冬の波諦め切れぬことばかり
いとおしい限りの後ろ姿かな
豆の蔓浄土の風に震えてる
木枯しがくるぞあかあか点そうよ
五体投地ゆるし乞うこと許りなり
残照に夢駆り立てて生き急ぐ
息子には聖書一冊だけ残す

大阪市

山本憲太郎

渡り鳥みなと港の灯に迷う
人生の岐路に迷うて賽を振る
宵宮によりを戻した女と逢う
引き際の美学ベテラン心得る
逆立ちをすれば世間がよく見える
ゴミ溜の街でひそかに咲く野菊
懸崖の菊で祝った父の喜寿
裏切った写真を剝がす爪の跡
遍歴を涙でつづる撥さばき
残留婦人の涙傷跡まだ疼く
スタイルに惚れたが荒い金遣い
ストレスが溜ると娘赤ずくめ
社長室ときどき粋な電話くる
フィアンセ仕事の鬼はいやどすえ
癖のないお方どすえと切捨てる

尼崎市

山本すみ

小遣を残して帰る老母の旅
部屋に鍵かけて始まる子の脱皮
叛いてもやがては戻る母の海
仮面脱ぎ寛ぐ家の灯が温い
出発までの何と楽しい旅仕度
失せ物へ紙屑籠が疑われ
ある決意　女が髪を切りに行く
野良猫にいちべつされる裏通り
口惜しさを噛みしめる歯は残ってる
あの人に傘傾けるわけがある
追求が深くて城が崩れ出し
霜柱やさしい日差しに脆くなる
遍歴の毬は弾んで行ったまま
言い訳はよそう惨めになるばかり
旅仲間次の約束して別れ

羽曳野市

山本たけし

長老と言われ無冠で去る職場
クラス会配る名刺に座が白け
オクターブ落して話す席順位
お値打ちとソフトな声に乗せられる
千歳飴持って主役の泣き黒子
入学の門へ桜が花を添え
止められているから旨い盗み酒
あんた誰　老母に聞かれて出る涙
菩薩にも夜叉にもなって妻達者
アマチュアの私の作は非売品
塾の靴少し行儀も教えたり
野次馬もさくらもいます叩き売り
定年が晴れてスタートした絵筆
雑学を仕入れた父の軽い酔い
書に飽きて心を癒す古希の鉢

大阪市

山本久子

起こされぬ先に目覚めるゴルフの日
仲直りして仲裁が邪魔になり
球児には汗と涙がよく似合う
三億の時効の金が気にかかる
篝火にマリオネットの鵜飼舟
夏バテは知らぬご飯のてんこもり
飛ぶ鳥を落とした父も日向ぼこ
お風邪など召さぬようにと末筆に
飛驒路来て鐘が聞こえる露天風呂
街角で世相見ているサンドイッチマン
二日旅　三日前から支度する
ハイカラに皮靴履いた竜馬像
晴着の娘おばさん達が値踏みする
孫帰り疲れた肩をほぐし合う
子にだけはパパは会社で偉い人

西宮市

山本義子

紙風船　色とりどりの風が吹く
朝市でごぼうつかむと里の影
つなぎ目ない夢信じまた夢をみる
春だから自分の手綱ゆるくする
妹の絵　屋根より高いチューリップ
よしきりの声に和してる手こぎ舟
井戸の闇のぞくなと月いうている
引越しに自分の錆は捨てていく
森に入ると誰かにわたし許される
ほのぼのと花びら餅は春を呼ぶ
笑い地蔵もらい笑いする良いお顔
にげ道があれば優しくなれそうで
花占い嫌いでおわる遠い空
色鉛筆使いきれないまだ六十路
抜け駆けも背のびもせずにきて余白

豊中市

湯浅馬洗

野を走り夜空に吠えよ僕の干支
飼い主にそこまで似たか無愛想
寝正月福が逃げると初詣
振り向けば飛び石伝い俺の運
夫婦歴よくよく見れば子供歴
妻と娘の矛先かわす咳払い
待ち合わせ小さな咳で固さ解く
胸の中感情という波もある
お隣と差を意識する立ち話
慈善鍋記憶の中に積る雪
輸入米試食の列は飢え知らず
街並みが桜の花で見直され
花疲れいやすも桜通り抜け
夏祭り右往左往の京浪華
高いビル多くて仁徳困り果て

和歌山県

横垣忠翁

こっそりと覗き追われた神もいた
ときたまにいけず楽しむ天女たち
水を得た魚の笑顔にほっとする
無学だが女泣かせたことは無い
立飲みで男わびしく酒くらう
有頂天　男に一度有れば良い
本棚の裏でうたまろ寝てござる
ぼちぼちと化かし楽しむ古狸
人並に風邪もひきます恋もする
惜しげなく減らしすかっとして老いる
ごんたくれ叱るなお前来た道じゃ
人それぞれ味はとろ火の染み加減
大失敗　覆面ないか穴ないか
知らんけど偉い人だろ礼しとけ
退屈な隠居になったらかもてんか

宿毛市

横山白水

聞こえなき素振り裏切りかも知れず
肚割ってなどと言いたい事を言い
乗せられたふりで踊ってやるゆとり
片方だけ聞けば成る程なと思い
反故にする気の指切りがこそばゆい
拗ねたふり女は愛を確かめる
この次ぎはお一人でねと靴すべり
ある予感　女に戻る羽繕い
花束を持てば優しい女に見え
あっさりと嫁るには惜しい娘に育ち
関白の威信を保つ肩が凝り
老骨に鞭打つなどと我を枉げず
企みが無いからずばり物が言え
エリートに仮面を外す暇がない
新聞で日を確かめる軽い惚け

鳥取県

吉田孔美子

見ぬ振りをした母の眼はこわかった
梅雨も良し　恋はおかまいなく進む
本物の笑顔は一度しかしない
向日葵の影の深さよ恋を捨て
おんなだから眠気ざましに産んで見た
母の海で胎児は時をまっている
メスの先端にまで神さまおいでです
こんなに小っちゃな献体をしてあなたあなた
胸までも有るジーパンを干している
ちょい書きのノートばかりを残される
水虫まで憶えぬ父に似てるとか
引き続き猫それぞれの事情聞く
寒椿　今年は早く手が荒れる
国宝と裏側の欠け器を貰う
助手席で夢の続きはまだ見える

可児市

吉田哲夫

庭石に戸籍と顔のある序列
黄昏になってまろやか妻のあじ
テレビ好き万歩計から叱られる
いつまでも眼鏡拭いてる几帳面
歯ぎしりの数満載の車いす
寄付金の議題腕ぐみとけぬまま
列島をはげ山にしてゴルフ帽
客の来ぬ日も一日の光熱費
人に似ていつか地へ行く雪だるま
高僧の軸読めもせずありがたや
洋らんの命ながらえうすぼこり
茶柱の嘘つき今日もまたこけた
ご機嫌の悪い割箸横に裂け
錠剤の色それぞれにある主張
良縁と決めているのは親ばかり

犬山市

吉田とも

盆栽と共にほめとく良い余生
あの時の我慢が生きている暮し
電線に親子か恋か二羽語る
干し物をまた慌てさす夏の雲
分かる時くる日へ嫁に折れておく
星空よ亡母に会いたい語りたい
ばあちゃんの護衛で走る三輪車
若い気の服おだてられ冷かされ
かすり傷ママの顔見て派手に泣き
宿題が日焼けの肌を急きたてる
うらやんでみても才能ない私
背を向けたふる里なれど雪を恋う
ふくらんだ噂になって元へ着き
傷口はふれまいやっと会えた人
チラシ手に百名様の列に立ち

大山市

吉田みち子

旅づかれいやしてくれる城が見え
人生の切れ目をつなぐ曲り坂
手帳からはみ出る程のスケジュール
スピーチで少しロマンも披露され
衣がえ女は胸を広く開け
もの言わぬ花にほほえむ旅の風
あの人がさすが都会の波にのり
自分史へ書いておきたい夢の跡
脇役で上手に余生を暮す母
人生の余白へ描く春の夢
飴一つなめて老人話好き
外人に通訳出来ぬ禅の味
愚痴みんな聞いて下さいおぼろ月
灯がつくと昼とは違う街の顔
贅沢を言わぬ二膳の箸でくれ

犬山市

吉田幸子

ひと呼吸おいて絡んだ糸を解く
歯車が合わぬと悟る日は静か
愛してるたまには言ってと古女房
入学へ夢はちきれんほどに萌え
かまわへん　やって駄目なら出直そう
反省の色は何色　反抗期
ストレスをはでにはらした後仕末
子の想い受ける器量を母は持ち
即興に踊る園児のリズム感
諺でさらりと諭す母の知恵
襟元がスッキリすだれ風の中
引き出しの秘密二十歳の梅香る
胸のうち秘めてジョークのとぶ機転
病名を明かせぬ窓の冬木立
チクタクと今も形見の腕時計

松任市

吉本君枝

ある予感こころが腕立て伏せをする
感性でまわす頭のかざぐるま
群れ合って陽気な笛を吹く余白
自己暗示かけて一羽の鶴を折る
墨の色一気に竹が動悸する
脈拍の乱れを伏せて咲く椿
告白はしない蕾のままの恋
星屑が散っても何もない二人
空しさをくるくる剝いているナイフ
悪妻のポーズで肩の荷がおりる
泥仕合群れから逃げて来た雀
傾斜面　五臓六腑が不安定
胃袋をあやしストレス嚙み砕く
矢印が三途の川で消えていた
そのうちに神から届く判決文

八尾市

與田　明

内地米　暗い場所にてあくびする
大人げない軽い冗談仇になり
隣まで話筒抜け場所を変え
不況風どこを向いても人べらし
禿げたとこ選んで孫手で叩く
相傘で濡れて悦ぶ阿保男
市の作業人　仕事六分であと休憩
字を書けばじわじわ横にずれて行く
掃除機に千円札を吸いこまれ
税務署の近くの王将うまかった
並木道　桜満開春らんまん
いびるなら河内弁にはかなわない
口下手でも唄えば上手な喉してる
電気治療　年に一度火傷する
公園でホカ弁食べる老夫婦

富田林市　欄　智久

切札を持たぬ男の負け戦
あれ以来きれいな花には距離を置く
顔の利く店で有志の三次会
千羽鶴折る少女の瞳がきれい
秋深く置薬屋が回って来
それからの話聞きたい回り道
オンザロック恋の告白聞いている
手に汗を握るドラマへ宅急便
放課後の教室　鍵っ子宿題す
通用門　寿司屋の出前通される
手刀で心と書いて勝名乗り
お喋りが万札拾ってから無口
ジャルの旅関西弁とすれ違い
鳥籠の中の平和を乱すまい
修養の足りない私の八つ当り

芦屋市

若谷哲夫

留守に帰りまた出ていったらしい跡
肩幅が父に似ているだけ哀れ
同舟の嫁と嫁とが華やかに
徹夜して充実感に深く寝る
孫離れしてから若さ取り戻す
遠ざけた酒なんやけど通夜に酔う
千本の菊はいらぬと亡友の顔
喪服にも女の過去がちらり見え
よいしょ上手よいしょをされるのも好きで
悔やむまい歳で馬鹿さは直せない
俯いたままで言うから背が寒い
腰低い美人官吏に見た民卑
慣れていぬお世辞言うのは気の弱り
本能がひょいと後ろを振り向かせ
不意討ちにネクタイとてもいいと言う

鳥取市

若林一止

言い訳をせずに男の辞表かく
極楽を念じ写経の墨をする
地味だった母へ手向けの野水仙
過半数充たず正論否決され
穏やかに口説くは金のない男
指切りをして来世のペア誓う
毛筆の離縁状なら別れます
雨あがりたたんだ傘が邪魔になり
良心の呵責時効もなく続き
凶作も知らず古米のあるゆとり
鳶一羽音もせず来て朝を舞う
九官鳥汚職は聞かぬことにする
ＰＫＯ金で済まない義理もある
連休に帰れと見合い急きたてる
かき捨てのつもりの恥が汽車で逃げ

愛媛県

若松博文

阿片などわたし知らないケシの花
教え子に嘘をついてる披露宴
鍵にぎる秘書は素面で嘘もつき
我慢せよ相手に勇み足もある
梅干はウグイスの夢花の夢
大過なく生きる秘訣は引く勇気
戻らない緯に未練がからみつき
かげろうの燃えてはかない夏の宵
乳牛の自尊は人の子を育て
陳列の舶来時計時差で鳴り
多分だよ切符のいらぬ貴賓席
天井へあげたくもなり立行司
飛んでいる運に届かぬ手が憎い
待つ身には時計の針は動かない
厚化粧拭きとる手間は考えぬ

高知県

和田憲一

土手登る亀に大雨の兆し知る
枯草を覗けばそこに春が萌え
跡継ぎに野良着の似合う嫁がない
日雇のローン気になる日の焦り
細腕に見た昇格の淡い夢
青信号安全だとは限らない
海汚れ亀の甲羅に艶がない
太陽に背いて塀を高くする
足腰が車文化にもろくなり
選挙への蛍の数を読みに来る
借金のない貧乏で茶が旨い
長雨に善意の傘が還らない
捨石が相手の読みを確かめる
例えばの話で僕が叱られる
カルストに古代のロマン生き続け

和歌山市

和田美寿子

不老橋　思い出秘めて動けない
喜びも悲しみの日も酒主役
姥盛り手帳たよりに翔んでいる
赤とんぼ曲を聞きつつごみを出す
婆ちゃんと呼ぶ煙草屋でもう買わぬ
ものぐさで目ざす成功はかどらず
公害は一本綱でさばかれず
ひと騒動起したあとの平行線
今日の日を無駄にはしない夕明り
もっと元気な顔をしろという鏡
未だ燃える色の夢見て生きる日日
偉い人一緒に歩く連れがない
篝火に映えて演能夏祭り
命でも油断と交換する破目に
影法師　文句言わずについてくる

京都市

渡辺圭坊

傘すぼめ人すれちがう先斗町
梅雨明けて祇園祭の笛袋
また顔を見たくて傘を借りに寄る
ネクタイを解いて自分の顔になり
キューピッド暇が無いのか来てくれぬ
脛に傷持った女の冬の旅
入札の価格が漏れる奥座敷
蘇州夢幻　一夫を偲ぶ支那の夜
習うより慣れて子育てうまい妻
チャチな城守って近所ともめている
ジューン・ブライド愛のドラマのジ・エンド
肝心な時に諭吉が居てくれぬ
用の無い品をすすめるコマーシャル
食細い母を気遣う土用入り
風雪に耐えて聳える古寺の塔

倉吉市

渡辺菩句

何してもひとりは無言劇である
独身貴族じつは独居ご老人
蚰蜒とどんどんふえるおとしより
囃し出すと席を立つ幽霊がいる
指が怒りそうで手袋はめておく
あいつはどこの馬の骨だと聞きに来る
寒いから彼も掌を擦る足を擦る
木魚がボクボクやはり男の子
目の前をももんがの貌して燕
傷痕を見せて話を本当にする
散歩してこの世の外をみて来ます
この人も仙人になりたい　ひとり
詩を食って生きてる僕の中の莫迦
決心をすれば男はシュポッポ
鏡の中に父母の傑作品の僕

東京都

渡辺良輔

病む母へせめて蠅追う私がこころ
方言の急追標準語の孤立
拍手するだけの句会に来ています
差配より古い店子が住んでいる
服部の前で江戸っ子会のビラ
あれがアノ古い目にある春団治
九里丸の芸もたのしいものでした
あの頃の塊人さんにはお世話様
知ってますグリコおん大水府さん
ああそうだビックリぜんざいぶったまげ
安堂寺ばしからボート中之島
すんまへん道頓堀はくさかった
出雲屋のまむしそう東京ではうなぎ
どなたにも下げる頭を持ち合せ
人去りて草は静かに立ちなおり

堺市

綿野春香

幕が開くこのときめきと静けさと
集まって人の温みを重ね合い
憧れてもの足りなくて好い夫婦
二人でも座り直しておめでとう
沢庵も利休も踏んだ石だたみ
ふる里は肩を並べて歩く所
しなやかに揺れる柳のもどかしさ
苦しみの深さは愛の深さかも
並んでる二つの星は父と母
消えるからみんな花火が好きなんだ
惜しみない愛にけじめは流される
にぎりめしサンドイッチに負けられぬ
絵の中に図書館がある中之島
まぼろしの行方に石を積んでいる
ふり向いて見る倖せも齢のせい

村上ミツ子…… 623
村上　俊一…… 624
本山　哲朗…… 625
百田　快風…… 626
百田　　幸…… 627
森井　一枝…… 628
森口　恵子…… 629
守先　伸子…… 630
森　志げる…… 631
森園かな女…… 632
森　　正…… 633
森田　華子…… 634

〔や～よ〕

八木　芳水…… 635
矢野　満子…… 636
山口ふさ子…… 637
山崎すま子…… 638
山田たみゑ…… 639
山田津多江…… 640
山田十九子…… 641
山田　葉子…… 642
山田　楊芝…… 643
山門　幸夫…… 644
山門　タミ…… 645
山本　和子…… 646
山本　半銭…… 647
山本憲太郎…… 648
山本　すみ…… 649
山本たけし…… 650
山本　久子…… 651
山本　義子…… 652
湯浅　馬洗…… 653
横垣　忠雄…… 654
横山　白水…… 655
吉田孔美子…… 656
吉田　哲夫…… 657
吉田　とも…… 658
吉田みち子…… 659
吉田　幸子…… 660
吉本　君枝…… 661
與田　　明…… 662

〔ら～ろ〕

欄　　智久…… 663

〔わ～を〕

若谷　哲夫…… 664
若林　一止…… 665
若松　博文…… 666
和田　憲一…… 667
和田美寿子…… 668
渡辺　圭坊…… 669
渡辺　菩句…… 670
渡辺　良輔…… 671
綿野　春香…… 672

氏名の50音順は原則としてパソコンの整列によって行いました。

二瓶　道子…… 559
西　康之…… 560
西　光子…… 561
丹羽　麦舟…… 562
能津　道子…… 563
野島満寿巳…… 564
野瀬　昌子…… 565
野々　圭子…… 566
野村　清美…… 567

〔は～ほ〕

橋谷　静江…… 568
橋本　孝原…… 569
長谷川　彰…… 570
長谷川宇情…… 571
長谷川　司…… 572
長谷川呂万…… 573
服部　朗子…… 574
早川　盛夫…… 575
林　嗣子…… 576
林　正浩…… 577
原　章峰…… 578
原　宣子…… 579
春名　恵子…… 580
備後　一歩…… 581
深日白光子…… 582
福井　菜摘…… 583
福井富美子…… 584
福田　和子…… 585
福田　満州…… 586
福間　博利…… 587
藤井　高子…… 588
藤井　春子…… 589
藤田　芳郎…… 590
藤原　久子…… 591
冨士田三郎…… 592
古池　孤月…… 593
古川喜美子…… 594
古谷ひろ子…… 595
細谷　仙岳…… 596

〔ま～も〕

前　たもつ…… 597
前田　昭子…… 598
牧田　渓鈴…… 599
牧野　秀香…… 600
牧渕富喜子…… 601
増田　一乗…… 602
松永　会美…… 603
的場　俊子…… 604
的場十四郎…… 605
豆原千代女…… 606
三浦千津子…… 607
水田　民平…… 608
水野　貞子…… 609
御園　孝子…… 610
三谷　周三…… 611
三谷　翔…… 612
光定　信子…… 613
光山　芳子…… 614
湊　修水…… 615
三原永久志…… 616
宮崎　弘直…… 617
宮本かりん…… 618
向田桜羊子…… 619
武藤　敏子…… 620
村上久美子…… 621
村上　剛治…… 622

高橋　たみ…… 493
高見　豊泉…… 494
竹井ヤスエ…… 495
竹内すみこ…… 496
竹内千恵子…… 497
武田　正美…… 498
竹田みずき…… 499
田中　好啓…… 500
田中トシエ…… 501
田中なみ子…… 502
田中　ふみ…… 503
谷岡　福子…… 504
谷口　信子…… 505
谷口　義男…… 506
谷野　鉄雄…… 507
田野　栄子…… 508
玉置　英子…… 509
玉木　柳子…… 510
田村　三郎…… 511
丹下美津子…… 512
近森　功…… 513
千坂みつほ…… 514
千原淳太郎…… 515
千葉　雷音…… 516
槻谷　仲子…… 517
辻上よしみ…… 518
堤　くに子…… 519
津村志華子…… 520
津村　静枝…… 521
寺尾　俊平…… 522
東狐恭仁子…… 523
土岐　照…… 524
土居ひでの…… 525
徳山みつこ…… 526
富坂　志重…… 527
富永　敞子…… 528
冨山ルイ子…… 529
豊福　路子…… 530
鳥本　泰…… 531

〔な～の〕

内藤　摩耶…… 532
中井　大八…… 533
中井　智代…… 534
中井三重子…… 535
中後　清史…… 536
中木　未香…… 537
中里つね一…… 538
中澤　向西…… 539
中島　一声…… 540
中塚　礎石…… 541
中西智恵子…… 542
中村　叡子…… 543
永井さかゑ…… 544
永井三津子…… 545
長尾　恒心…… 546
長尾　高尚…… 547
永田　暁風…… 548
長浜　澄子…… 549
流　奈美子…… 550
灘尾　民子…… 551
名波　勝…… 552
新山　胤一…… 553
西岡　豊…… 554
西川　一粲…… 555
西田　寿子…… 556
西村　哲夫…… 557
西本　保夫…… 558

木村　初子…… 429
楠　昭子…… 430
楠見　章子…… 431
国定　姫代…… 432
国森　武子…… 433
久保内あつ子 …… 434
久保まさお…… 435
久保　昌代…… 436
熊田　巽…… 437
倉垣　恵美…… 438
倉益　光子…… 439
栗原　富子…… 440
栗原　善子…… 441
栗本　不空…… 442
久留宮明女…… 443
黒田　緑…… 444
古賀　健次…… 445
越村　智彦…… 446
児玉　蛙…… 447
小寺　九…… 448
小西　小雪…… 449
小西　夏子…… 450
古西美貴子…… 451
小林　一閑…… 452
小林紀美子…… 453
小村陸奥美…… 454
近藤　秋星…… 455
紺矢　肇…… 456
後藤黎之助…… 457
権代　康女…… 458

〔さ～そ〕

酒井　一壺…… 459
坂井　半升…… 460
酒井勇太朗…… 461
榊原　彗心…… 462
坂田和歌子…… 463
嵯峨根保子…… 464
桜井　学…… 465
佐藤　一粒…… 466
佐橋　雀汀…… 467
澤村猪太郎…… 468
沢村　洋子…… 469
塩路よしみ…… 470
塩谷八重子…… 471
執行　稲子…… 472
重成　春男…… 473
島　翔竜…… 474
島　ひかる…… 475
島元　ふみ…… 476
下村　権太…… 477
庄野　澄子…… 478
城山　道子…… 479
諏訪　明雄…… 480
諏訪　夕香…… 481
菅井みよの…… 482
杉本　孝男…… 483
杉山　精子…… 484
鈴木　可愛…… 485
鈴木玲於子…… 486

〔た～と〕

高尾　京…… 487
高田　星子…… 488
高田美代子…… 489
高野　宵草…… 490
高橋　夕花…… 491
高橋　宅…… 492

岩田　三和…… 363
上江洌勝子…… 364
植田　一京…… 365
植田チカエ…… 366
上野　泰枝…… 367
牛尾　敏子…… 368
内田　倫子…… 369
内田　房子…… 370
浦辺　静江…… 371
江川　青琴…… 372
江原　秀夫…… 373
江見　頓坊…… 374
大岩　しづ…… 375
大河未佐子…… 376
大木　一枝…… 377
大越　利治…… 378
大下　規代…… 379
太田とし子…… 380
太田まもる…… 381
大槻　一屯…… 382
大野　蒼流…… 383
大山舞烏影…… 384
岡田　秋月…… 385
岡林　京子…… 386
岡村　千鳥…… 387
岡本　久峰…… 388
小川　酔月…… 389
小川百合子…… 390
奥田　良子…… 391
奥村　和代…… 392
小熊　江美…… 393
小笹　錬太…… 394
尾田　綾子…… 395
越智　青園…… 396
乙倉　武史…… 397
乙部幸次郎…… 398
小野真備雄…… 399
小野　康子…… 400
尾宮　弘治…… 401

〔か～こ〕

貝原　博次…… 402
香川　水聲…… 403
鹿児島節子…… 404
鹿島　繭…… 405
柏井日出子…… 406
片岡　湖風…… 407
片岸　佳子…… 408
勝武　夏喜…… 409
門脇　晶子…… 410
金崎　峰子…… 411
金子美千代…… 412
上北　恒子…… 413
亀岡　哲子…… 414
鴨谷瑠美子…… 415
河井　正之…… 416
川口多代子…… 417
川原　章久…… 418
河端美佐恵…… 419
河村　照代…… 420
神原　文…… 421
菊池トミエ…… 422
岸　万伯…… 423
木曽　史朗…… 424
喜多佐津乃…… 425
吉川　渉…… 426
吉川　道子…… 427
木下　道子…… 428

山内　房子…… 313
山口　新子…… 314
山口三千子…… 315
山崎　君子…… 316
山下美津留…… 317
山地マツエ…… 318
山田　高夫…… 319
山根　八重…… 320
山本希久子…… 321
山本　玉恵…… 322
結城　君子…… 323
横山　一声…… 324
吉岡きみえ…… 325
吉岡　美房…… 326
吉田あずき…… 327
吉田　笑女…… 328
吉村　一風…… 329
米田　恭昌…… 330

〔ら～ろ〕

両川　洋々…… 331

〔わ～を〕

渡部さと美…… 332
渡辺　独歩…… 333
和田維久子…… 334

一　般

〔あ～お〕

青木　公輔…… 335
赤木　蔦…… 336
浅子まつゑ…… 337
浅田扇啄坊…… 338
麻野　幽玄…… 339
芦田　絢子…… 340
芦田　静江…… 341
東　史郎…… 342
安宅美代子…… 343
井神　昌子…… 344
以倉　菜々…… 345
池尾　保子…… 346
池田寿美子…… 347
池田登志子…… 348
井齊　一齊…… 349
一宮志のぶ…… 350
伊藤　翠庵…… 351
伊藤とみお…… 352
伊藤万次良…… 353
稲垣　正穂…… 354
井上しのぶ…… 355
井上多加江…… 356
井上　信子…… 357
今川三津江…… 358
今西　静子…… 359
入江喜久亭…… 360
岩切　康子…… 361
岩崎みさ江…… 362

福浦　勝晴…… 249
福本　英子…… 250
福元みのる…… 251
藤井一二三…… 252
藤井　正雄…… 253
藤井　明朗…… 254
藤田頂留子…… 255
藤村　〆女…… 256
舟木与根一…… 257
古野　ひで…… 258
古谷　節夫…… 259
芳地　狸村…… 260
細川　稚代…… 261
堀江　正朗…… 262
堀江　芳子…… 263
堀江　光子…… 264
堀端　三男…… 265
堀　良江…… 266
本田恵二朗…… 267
本間満津子…… 268
坊農　柳弘…… 269

〔ま～も〕

前田　一枝…… 270
槇田　英詩…… 271
蒔苗　果林…… 272
政岡日枝子…… 273
桝本　露児…… 274
町田　達子…… 275
松井かなめ…… 276
松尾柳右子…… 277
松川　杜的…… 278
松川　芳子…… 279
松下たつみ…… 280
松永すすむ…… 281
松本今日子…… 282
松本ただし…… 283
松本　忠三…… 284
松本　文子…… 285
丸山よし津…… 286
水粉　千翁…… 287
光井　玲子…… 288
宮尾みのり…… 289
宮口　笛生…… 290
三宅つえ子…… 291
三宅　保州…… 292
宮崎シマ子…… 293
宮西　弥生…… 294
宮園射月芳…… 295
三輪　通彦…… 296
村田　善保…… 297
籾山　隆…… 298
茂見よ志子…… 299
森井　菁居…… 300
森川まさお…… 301
森下　愛論…… 302
森田　文…… 303
茂理　高代…… 304
森田　熊生…… 305

〔や～よ〕

楊井　二南…… 306
八木　千代…… 307
安永　暁子…… 308
安本　晃授…… 309
八十田洞庵…… 310
矢内寿恵子…… 311
矢野　佳雲…… 312

津村八重子…… 186
津守　柳伸…… 187
寺井　東雲…… 188
寺沢みど里…… 189
寺田　甚一…… 190
天正　千梢…… 191
藤解　静風…… 192
遠山　可住…… 193
時広　一路…… 194
都倉　求芽…… 195
富田　蘭水…… 196
土橋　　螢…… 197
土橋　睦子…… 198
土橋はるお…… 199

〔な～の〕

中井　ゆき…… 200
中島　志洋…… 201
中田　純次…… 202
中塚　遊峰…… 203
中野　欅子…… 204
中原　汲香…… 205
中原　諷人…… 206
中原みさ子…… 207
中原比呂志…… 208
中山　雅城…… 209
永田　俊子…… 210
柳楽　鶴丸…… 211
成重　放任…… 212
西尾　　栞…… 5
西川　和子…… 213
西口いわを…… 214
西田柳宏子…… 215
西出　楓楽…… 216
西原　艶子…… 217
西村　早苗…… 218
西村　黙光…… 219
二宗　吟平…… 220
仁部　四郎…… 221
野坂　なみ…… 222
野田素身郎…… 223
野村　京子…… 224
野村　静雄…… 225
野村太茂津…… 226

〔は～ほ〕

長谷川春蘭…… 227
波多野五楽庵 …… 228
羽津川公乃…… 229
八田　　敏…… 230
浜野　奇童…… 231
浜本　義美…… 232
浜本　ちよ…… 233
林　　荒介…… 234
林　瑞枝…… 235
林　はつ絵…… 236
林　　露杖…… 237
林野　甦光…… 238
原　さよ子…… 239
春城武庫坊…… 240
春城　年代…… 241
春木圭一郎…… 242
菱田　満秋…… 243
人見　翠記…… 244
平田　実男…… 245
平松かすみ…… 246
弘津　柳慶…… 247
福井　桂香…… 248

小林　一夫…… 122
小林トメ子…… 123
小林由多香…… 124

〔さ～そ〕

斉藤　劦…… 125
酒井　輝…… 126
榊原　秀子…… 127
桜井　千秀…… 128
佐々木鳳笙…… 129
佐治千加子…… 130
澤田　千春…… 131
山海　友熙…… 132
椎江　清芳…… 133
塩満　敏…… 134
柴田英壬子…… 135
島崎冨士子…… 136
清水　絹子…… 137
清水　利武…… 138
白石　春嶺…… 139
白根　ふみ…… 140
新川マサエ…… 141
新家　完司…… 142
菅井とも子…… 143
鈴木　公弘…… 144
鈴木　節子…… 145
住谷　石舟…… 146
瀬尾六郎太…… 147
瀬戸まさよ…… 148
相馬　一花…… 149
薗田　獏沓…… 150
園山多賀子…… 151

〔た～と〕

高杉　鬼遊…… 152
高杉　千歩…… 153
高須賀金太…… 154
高橋千万子…… 155
滝北　博史…… 156
田口　虹汀…… 157
竹内　紫錆…… 158
竹治ちかし…… 159
武田　帆雀…… 160
田中　亜弥…… 161
田中　薫…… 162
田中　笑風…… 163
田中　正坊…… 164
田中　輝子…… 165
田中　透太…… 166
田中　文時…… 167
田中　みね…… 168
田辺　灸六…… 169
谷垣　史好…… 170
谷口　次男…… 171
谷　真風…… 172
玉置　重人…… 173
玉置　当代…… 174
田村きみ子…… 175
田村　新造…… 176
垂井千寿子…… 177
丁坪サワ子…… 178
月原　宵明…… 179
對馬　一閃…… 180
辻川　慶子…… 181
辻　白溪子…… 182
筒井　朴竜…… 183
恒松　叮紅…… 184
坪田　紅葉…… 185

海老池　洋…… 56
太田　幸枝…… 57
大塚　節子…… 58
大野　武太…… 59
大橋　政良…… 60
大原　葉香…… 61
大矢　十郎…… 62
岡井やすお…… 63
岡本　花匠…… 64
岡本　清水…… 65
荻野鮫虎狼…… 66
奥谷　弘朗…… 67
奥田みつ子…… 68
小倉　アサ…… 69
小澤　幸泉…… 70
越智　一水…… 71
小野　克枝…… 72

〔か～こ〕

柿花紀美女…… 73
笠原　吸江…… 74
樫谷　寿馬…… 75
嘉数兆代賀…… 76
片上　英一…… 77
門谷たず子…… 78
金井　文秋…… 79
金村　青湖…… 80
河合　茂雄…… 81
河内　天笑…… 82
河内　月子…… 83
河井　庸佑…… 84
川上より子…… 85
川崎ひかり…… 86
川島諷云児…… 87
川竹　松風…… 88
川端　柳子…… 89
川村　映輝…… 90
岸　桂子…… 91
岸野あやめ…… 92
北　勝美…… 93
北川　竹萌…… 94
北田　一笑…… 95
北野　久子…… 96
北山　悟郎…… 97
吉川　寿美…… 98
橘高　薫風…… 99
木村あきら…… 100
木村貴代子…… 101
木本　朱夏…… 102
行天　千代…… 103
工藤　吟笑…… 104
工藤　甲吉…… 105
久保　正剣…… 106
久谷まこと…… 107
久家代仕男…… 108
栗谷　春子…… 109
黒川　紫香…… 110
黒田　真砂…… 111
黒田　能子…… 112
小池しげお…… 113
小出　智子…… 114
幸家　単車…… 115
小白金房子…… 116
児島与呂志…… 117
小島　蘭幸…… 118
小谷美ッ千…… 119
小玉　満江…… 120
小西　雄々…… 121

索　　引　（50音順）　数字は掲載ページを示す

同　人

〔あ～お〕

青枝　鉄治……　6
青戸　田鶴……　7
赤川　菊野……　8
秋元　てる……　9
浅野　房子……　10
新　　正子……　11
渥美　弧秀……　12
阿部　　進……　13
阿萬　萬的……　14
安藤寿美子……　15
安平次弘道……　16
池内かおり……　17
池永　正雄……　18
石尾かつ乃……　19
石川侃流洞……　20
石垣　花子……　21
石倉芙佐子……　22
石谷美恵子……　23
石原　淑子……　24
板垣　草丘……　25
一戸　ツネ……　26
伊藤　寿美……　27
伊藤　　武……　28
稲葉　冬葉……　29
稲本　凡子……　30
乾　喜与志……　31
乾　　隆風……　32
井上　照子……　33
井上　直次……　34
井上　白峰……　35
井上柳五郎……　36
指宿千枝子……　37
岩佐ダン吉……　38
岩津ようじ……　39
岩道　博友……　40
岩原　喬水……　41
岩本　笑子……　42
岩本美智子……　43
上田　佳秋……　44
上田　俊路……　45
上田登志実……　46
上田登美子……　47
牛尾　緑良……　48
有働　芳仙……　49
梅田　宣司……　50
江口有一朗……　51
江口　明光……　52
江口　　度……　53
榎本　吐来……　54
江原とみお……　55

あとがき

麻生路郎先生三十回忌の今年、一月には川柳塔誌齢八百号の記念川柳大会を盛大に開催し、ご命日に合わせた七月、四冊目の合同句集『川柳塔』を出版できました。同人・誌友ならびに参加者の皆さんと喜びを共に致したいと思います。

今年はまさに平成大変の年で、政界は自社連立政権の樹立により、「日本にとって破滅的な出来事」とまで論評され、経済界は長期の不況に加えての急激な円高で、戦後初めての一ドル百円割れを記録しました。

かように混沌とした諸情勢と同様、柳界もまた危機に直面しているのではないでしょうか。川柳愛好家の増加を見ながら、それ故のマイナス面が随所に出来している現状に目をそむけることはできません。

この時期、この句集が出版されたことに私は大

きな意義を感じています。この集大成を精読吟味して、明日の川柳を見据えたいものです。

「人生は学校だ。そこでは幸福より不幸の方がよい教師である。」との名言通り、混乱期こそ川柳性（うがち、ユーモア、軽み、十七音字の定型）再確認の好機と思われます。

田辺聖子先生の

二十一世紀は川柳の時代になる

とのお言葉を実現するためにも、われわれ一人一人の更なる研鑽の糧と致したく願うものです。

ご参加下さった皆さんに心からのお礼を申し上げます。

平成六年七月

橘高薫風

●**担当**　橘高薫風／田中正坊／西出楓楽
奥田みつ子／田中　薫

平成６年７月27日発行

誌寿古希記念句集　川柳塔

発行所　川　柳　塔　社

〒545　大阪市阿倍野区三明町2－10－16
ウエムラ第２ビル202号室

電話／FAX　(06)　６２９－６９１４

振替口座　００９８０－５－３３３６８